

# 二ツ梨東山古窯跡・矢田野向山古窯跡

二ツ梨東山古窯跡・矢田野向山古窯跡発掘調査報告書

1990年3月

石川県小松市教育委員会



# 二ッ梨東山古窯跡・矢田野向山古窯跡

二ッ梨東山古窯跡・矢田野向山古窯跡発掘調査報告書

1990年3月

石川県小松市教育委員会



# 序 文

小松市は現在でも焼き物の生産が盛んな地域として知られていますが、小松市での焼き物の歴史は古く、今から1,500年前にはもうすでに登り窯を使った専門職人による土器作りが行われていたと聞きます。主にその生産地は小松市の南西部から加賀市の北西部にかけて広がる丘陵地帯にありますが、ここに存在する南加賀古窯跡群は古墳時代から室町時代までの約800年の間操業が続けられ、今までわかつている窯跡の数は200基以上と聞いています。また、その間に作られた製品には須恵器、土師器、加賀古陶をはじめとして、古墳に供えられた埴輪や古代寺院に使われた瓦・水煙など貴重なものが多く、その規模は日本海側でも最大級の窯跡群と言われています。

この貴重な窯跡群も近年の土砂採取工事やゴルフ場造成などによって、その多くが発掘調査された後破壊され、200基以上あったと思われる窯跡も現在ではその半数以上が姿を消しています。しかしその反面、これまでの発掘調査によって得られた資料や成果も龐大なもので、小松の歴史を語るにはなくてならないものとなっています。

今回報告の運びとなりました二ッ梨東山古窯跡や矢田野向山古窯跡は、南加賀古窯跡群の一つですが、二ッ梨東山古窯跡は現在確認される最も古い窯跡として知られ、南加賀古窯跡の出現の様子を知る絶好の資料と言えますし、矢田野向山古窯跡は奈良時代の窯跡の良好な資料と言え、当時の多様な食器構成を教えてくれています。このような貴重な資料が当時の社会生活を知るうえでの手がかりとなるものと確信するとともに、この報告書によって郷土文化に対する一層の理解を持たれ、ひろく地域文化研究に活用して戴くことを念願するものであります。

最後になりましたが、この発掘調査報告書の刊行にあたり、御指導を戴いた小松市埋蔵文化財調査委員会並びに石川県教育委員会文化課、石川県立埋蔵文化財センターの諸先生方、または、発掘調査に御協力戴いた地区住民の方々並びに関係各位の皆様に、改めて心から感謝を捧げます。

平成2年3月

小松市教育委員会

教育長 木下健次

# 例　　言

1. 本書は、石川県小松市二ッ梨町及び矢田野町に存在する、二ッ梨東山古窯跡、矢田野向山古窯跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、二ッ梨東山古窯跡、矢田野向山古窯跡ともに土砂採取工事に伴って実施したものだが、二ッ梨東山古窯跡は昭和59年8月30日から10月15日にかけて、市単独事業として実施し、矢田野向山古窯跡は昭和61年6月3日から8月31日にかけて、文化庁国庫補助金を受けて、実施した。いずれも小松市教育委員会が調査主体となって行った。また、報告書の作成及びそれに伴う整理作業については、平成元年度市単独事業として実施した。
3. 発掘調査は、宮下幸夫が担当して行ったが、荒木和浩、櫻田誠、望月精司、宮田佐和子、江野直子の協力を得た。
4. 出土品整理及び報告書作成は宮下・望月が担当し、下記各氏の協力を得た。

<遺物の洗浄・記名・復元>打田外喜代、玉尾真佐子、荒木和浩

<遺物の実測・トレス>宮田佐和子、江野直子

<遺物の拓本>打田外喜代

<遺構のレース>宮田佐和子、江野直子

5. 報告書の編集及び執筆

本書の編集は、小村茂の指導のもとに、宮下、望月が担当した。

執筆は、第Ⅰ章、第Ⅱ章第3節、第Ⅲ章第3節、第Ⅳ章を望月が、第Ⅱ章第1・2節、第Ⅲ章第1・2節を宮下が担当した。

6. 本書で示す方位は総て磁北である。尚、第2図の南加賀古窯跡群窯跡分布図及び第83図の古墳時代須恵器窯跡分布図には国土地理院発行25,000分の1地形図（昭和62年発行「小松」、「動橋」）を、第3図の窯跡群周辺の遺跡には国土地理院発行50,000分の1地形図（昭和58年発行「小松」、「大聖寺」）を、第4図二ッ梨東山古窯跡・矢田野向山古窯跡位置図には小松市発行2,500分の1国土基本図（昭和59年度修正「二ッ梨」）を引用した。

7. 本書須恵器実測図に示した「→」や「↓」はヘラ削りの方向とその範囲を示す。

8. 須恵器窯跡の考古地磁気測定は、富山大学理学部教授廣岡公夫氏に依頼して実施した。

9. 調査の実施及び報告書の作成にあたっては、以下の方々、機関、団体から御協力と御指導を賜わった。御芳名を記し、感謝の意を表したい。（敬称略 50音順）

上野与一、宇野隆夫、加納他家男、北野勝次、北野博司、木立雅朗、小坂清俊、斎藤孝正、田嶋明人、近間強、橋本澄夫、浜岡賢太郎、福島正実、久田正弘、平口哲夫、谷内尾晋司、石川県立埋蔵文化財センター、石川考古学研究会、辰口町立博物館、寺井町歴史民俗資料館、北陸古代土器研究会

## 目 次

第Ⅰ章 地形と周辺の遺跡 .....	1
第1節 地形 .....	1
第2節 周辺の遺跡 .....	1
(1) 南加賀古窯跡 .....	2
(2) 窯跡群周辺の遺跡 .....	2
第Ⅱ章 ニッ梨東山古窯跡 .....	6
第1節 調査に至る経緯と調査概要 .....	6
1. 調査に至る経緯 .....	6
2. 調査概要 .....	6
第2節 造 構 .....	8
1. 1号窯跡 .....	8
2. 2号窯跡 .....	8
3. 3号窯跡 .....	12
4. 4号窯跡 .....	12
5. 5号窯跡 .....	12
第3節 出土遺物 .....	18
第1項 古墳時代の遺物 .....	18
1. 4号窯跡 .....	18
2. 1号窯跡 .....	29
3. 5号窯跡 .....	37
第2項 奈良時代の遺物（2号窯跡出土遺物） .....	50
1. 各器種の検討 .....	50
2. 編年的検討 .....	54
第Ⅲ章 矢田野向山古窯跡 .....	61
第1節 調査に至る経緯と調査概要 .....	61
1. 調査に至る経緯 .....	61
2. 調査概要 .....	61
第2節 造 構 .....	62
1. 1号窯跡 .....	62
2. 土器集積地 .....	69
3. 土 坑 .....	70
4. 灰 原 .....	71
5. 考古地磁気 .....	71
第3節 出土遺物 .....	76
第1項 各出土地の遺物検討 .....	76

1. II次窯構築時の排水溝出土遺物	76
2. 土器集積地出土遺物	78
3. II次窯床面出土遺物	81
4. III次窯床面出土遺物	83
5. III次窯覆土出土遺物	88
6. III次窯舟底状ピット出土遺物	91
7. 灰原出土遺物	91
第2項 矢田野向山1号窯跡の須恵器様相	111
1. I次窯の様相	111
2. II次窯の様相	114
3. III次窯の様相	114
第3項 まとめ	120
第IV章 考 察	126
1. はじめに	126
2. 型式分類	126
3. 編年区分	130
4. 他地域との編年対比と当地域の特徴	138
5. 南加賀古窯跡群成立期の窯跡分布と窯の動き	140
6. まとめ	143

## 挿 図 目 次

第1図 周辺の地形	1
第2図 南加賀古窯跡群窯跡分布図 (1/25,000)	3
第3図 窯跡群周辺の遺跡 (1/50,000)	4
第4図 ニッケ東山古窯跡・矢田野向山古窯跡位置図 (1/5,000)	4
第5図 各窯跡関連図 (1/200)	7
第6図 1号窯跡実測図 (1/60)	9
第7図 2号窯跡実測図 (1/60)	11
第8図 3号窯跡実測図 (1/60)	12
第9図 4号窯跡実測図 (1/60)	13
第10図 5号窯跡実測図① (1/60)	14
第11図 5号窯跡実測図② (1/60)	15
第12図 5号窯跡実測図③ (1/60)	16
第13図 4号窯跡I次床出土遺物 (1/4)	19
第14図 4号窯跡I次床甕胴部叩き文様 (1/2)	20
第15図 4号窯跡II次床出土遺物 (1/4)	22
第16図 4号窯跡II次床甕胴部叩き文様 (1/2)	24

第17図	4号窯跡Ⅲ次床覆土出土遺物(1/4)	26
第18図	4号窯跡蓋環法量分布図(上:口径・器高、下:口径・口縁高)	27
第19図	1号窯跡1次床出土遺物(1/4)	30
第20図	1号窯跡1次床出土遺物(1/4)	31
第21図	1号窯跡1次床甕胴部叩き文様(1/2)	33
第22図	1号窯跡1次床(上)・Ⅲ次床(中)・Ⅳ次床(下)出土遺物(1/4)	34
第23図	1号窯跡蓋環法量分布図	36
第24図	5号窯跡1次床(上)・Ⅱ次床(中)・Ⅲ次床(下)出土遺物(1/4)	38
第25図	5号窯跡Ⅳ次床(上)・V次床(下)出土遺物(1/4)	40
第26図	5号窯跡IV・V次床甕胴部叩き文様(1/2)	41
第27図	5号窯跡VI次床(上)・VII次床(中)・VIII次床(下)出土遺物(1/4)	43
第28図	5号窯跡VII次床甕胴部叩き文様(1/2)	45
第29図	5号窯跡蓋環法量分布図(1)	47
第30図	5号窯跡蓋環法量分布図(2)	48
第31図	2号窯跡出土遺物(1/4)	51
第32図	2号窯跡出土遺物(1/4)	52
第33図	2号窯跡出土遺物(1/4)	53
第34図	2号窯跡甕胴部叩き文様(1/2)	53
第35図	2号窯跡蓋環法量分布図	54
第36図	1号窯跡1次窯平面図(1/60)	62
第37図	矢田野向山古窯跡全測図(1/100)	63
第38図	1号窯跡平面図(1/60)	65
第39図	1号窯跡断面図(1/60)	67
第40図	1号窯跡窯体土層断面図(1/60)	68
第41図	土器集積地実測図(1/40)	70
第42図	土坑実測図(1/40)	71
第43図	灰原土層断面図(1/60)	72
第44図	灰原土層断面図Iライン(1/60)	73
第45図	灰原土層断面図IIライン(1/60)	74
第46図	灰原土層断面図IIIライン(1/60)	75
第47図	II次窯構築時排水溝出土遺物(1/4)	76
第48図	II次窯構築時排水溝出土遺物(1/4)	77
第49図	土器集積地出土遺物(1/4)	78
第50図	土器集積地出土遺物(1/4)	80
第51図	II次窯床面出土遺物(1/4)	82
第52図	III次窯床面出土遺物(1/4)	84
第53図	III次窯床面出土遺物(1/4)	85
第54図	III次窯床面出土遺物(1/4)	86
第55図	III次窯床面出土遺物(1/4)	87
第56図	III次窯覆土出土遺物(1/4)	89

第57図	Ⅲ次窯覆土出土遺物 (1/4)	90
第58図	Ⅲ次窯舟底状ピット出土遺物 (1/4)	92
第59図	灰原出土遺物 (1/4)	93
第60図	灰原出土遺物 (1/4)	95
第61図	灰原出土遺物 (1/4)	96
第62図	灰原出土遺物 (1/4)	97
第63図	灰原出土遺物 (1/4)	99
第64図	灰原出土遺物 (1/4)	100
第65図	灰原出土遺物 (1/4)	102
第66図	灰原出土遺物 (1/4)	103
第67図	矢田野向山1号窯跡編年図 (1) (1/5)	112
第68図	矢田野向山1号窯跡編年図 (2) (1/7)	113
第69図	矢田野向山1号窯跡須恵器食器具法量分布図	115
第70図	矢田野向山1号窯跡須恵器坏外輪度分布図	116
第71図	須恵器蓋脛部叩き文様 (1) (1~7はⅠ次窯、8~10はⅡ次窯、1/2)	117
第72図	須恵器蓋脛部叩き文様 (2) (11~17はⅢ次窯、1/2)	118
第73図	内面叩き文様の構成比率	118
第74図	奈良時代前半の南加賀古窯跡群須恵器編年	121
第75図	蓋坏分類図 (1/4)	127
第76図	無蓋高坏分類図 (1/4)	129
第77図	各窯跡ごとの蓋坏・高坏の変遷	129
第78図	I期の須恵器 (1/4)	131
第79図	南加賀古窯跡群古墳時代須恵器編年図 [1] (1/6)	132
第80図	二ッ梨豆岡山1号窯跡上から4枚目床面出土須恵器 (1/4)	134
第81図	須恵器蓋坏法量分布図 (上: 口径・器高、下: 口径・口縁高)	135
第82図	南加賀古窯跡群古墳時代須恵器編年図 [2] (1/6)	137
第83図	古墳時代須恵器窯跡分布図 (1/50,000)	142

## 表 目 次

第1表	遺跡地名表	5
第2表	二ッ梨東山古窯跡土器観察表	56
第3表	矢田野向山古窯跡土器観察表	104
第4表	出土地別器種構成表	119
第5表	奈良時代初頭～中頃の南加賀古窯跡群編年表	124

## 図版目次

- 写真図版1 ニッカ東山古窯跡遠景、1号窯跡IV次床  
写真図版2 ニッカ東山1号窯跡III次窯・I次床  
写真図版3 ニッカ東山2号窯跡全景・遺物出土状況  
写真図版4 ニッカ東山2号窯跡遺物出土状況、3号窯跡、4号窯跡  
写真図版5 ニッカ東山5号窯跡Ⅳ次床～I次床  
写真図版6 ニッカ東山4号窯跡I次床出土遺物  
写真図版7 ニッカ東山4号窯跡II次床出土遺物（蓋環・高环）  
写真図版8 ニッカ東山4号窯跡II次床・III次床出土遺物  
写真図版9 ニッカ東山1号窯跡I次床出土遺物（蓋環）  
写真図版10 ニッカ東山1号窯跡I次床出土遺物（蓋環・高环等）  
写真図版11 ニッカ東山1号窯跡I次床・IV次床出土遺物  
写真図版12 ニッカ東山5号窯跡I次床・II次床・III次床出土遺物  
写真図版13 ニッカ東山5号窯跡IV次床・VI次床出土遺物  
写真図版14 ニッカ東山5号窯跡VI次床・VII次床・VIII次床出土遺物  
写真図版15 ニッカ東山2号窯跡出土遺物（蓋環）  
写真図版16 ニッカ東山2号窯跡出土遺物（蓋環）  
写真図版17 ニッカ東山2号窯跡出土遺物（蓋環）  
写真図版18 矢田野向山古窯跡調査前全景・調査風景等  
写真図版19 矢田野向山1号窯跡III次窯全景・遺物出土状況等  
写真図版20 矢田野向山1号窯跡III次窯全景・遠景  
写真図版21 矢田野向山1号窯跡II次窯全景等  
写真図版22 矢田野向山1号窯跡II次窯床下排水溝全景等  
写真図版23 矢田野向山1号窯跡II次窯床下排水溝近景  
写真図版24 矢田野向山1号窯跡II次窯床下排水溝近景・完掘全景  
写真図版25 矢田野向山1号窯跡II次窯床下排水溝完掘近景  
写真図版26 矢田野向山古窯跡土器集積地・土坑、灰原  
写真図版27 矢田野向山古窯跡灰原・調査後全景  
写真図版28 矢田野向山1号窯跡II次窯排水溝出土遺物  
写真図版29 矢田野向山1号窯跡土器集積地出土遺物（蓋環）  
写真図版30 矢田野向山1号窯跡土器集積地出土遺物（無台环・盤）  
写真図版31 矢田野向山1号窯跡II次窯床面出土遺物  
写真図版32 矢田野向山1号窯跡III次窯床面出土遺物（蓋環）  
写真図版33 矢田野向山1号窯跡III次窯床面出土遺物（無台环・無台皿・有台皿）  
写真図版34 矢田野向山1号窯跡III次窯床面出土遺物（高环・盤・鍋・甕等）  
写真図版35 矢田野向山1号窯跡III次窯覆土・舟底状ビット出土遺物  
写真図版36 矢田野向山1号窯跡灰原出土遺物（蓋環）  
写真図版37 矢田野向山1号窯跡灰原出土遺物（蓋環・無台环・皿類）  
写真図版38 矢田野向山1号窯跡灰原出土遺物（煮沸具・焼台・壺蓋等）  
写真図版39 矢田野向山1号窯跡灰原出土遺物（壺・甕類）  
写真図版40 矢田野向山1号窯跡出土須恵器重ね焼瓶・ヘラ記号



# 第Ⅰ章 地形と周辺の遺跡

## 第1節 地 形

二ッ梨東山古窯跡は二ッ梨町の通称「ヒガシヤマ」、矢田野向山古窯跡は二ッ梨町の矢田野町飛び地にある通称「ムカイヤマ」に所在する窯跡で、広義の南加賀古窯跡群の一支群である。

南加賀古窯跡群は南加賀地方に存在するわけだが、この地方は西は日本海、東は白山前山地帯と海と山にはさまれた狭延な地域で、南西では江沼盆地、東北では能美平野が広がり、その中間に柴山潟、今江潟、木場潟からなる加賀三湖が存在する。南加賀古窯跡群はこの加賀三湖の南東側の白山前山地帯の一角、江沼盆地の東端に存在する動橋川と木場潟に注ぐ馬場川の開折によつて形成された、標高40~100mの低丘陵地帯に存在し、小松市林町から加賀市松山町まで東西1km、南北5kmの範囲に広がっている。この低丘陵地帯は、南西の動橋川、東北の馬場川によって形成された2つの大きな谷が入り込み、また、二ッ梨町から戸津町に東西にぬける通称戸津の「オオダニ」と二ッ梨町から那谷町に南北にぬける通称二ッ梨の「オオダニ」が北西から東と南北に二股に入り込んでいる。低丘陵地帯はこの3つの谷によって分断され、その谷から枝別れした小さな谷があり組んで入り込んでいる。

今回報告の両窯跡は北西から入り込む大きな谷に位置し、二ッ梨東山古窯跡は二ッ梨「オオダニ」の西側斜面、矢田野向山古窯跡はその西側斜面の山を越えた反対側の東側斜面に立地する。

## 第2節 周辺の遺跡

両窯跡が属する南加賀古窯跡群は、「小松丘陵窯跡群分布調査報告Ⅰ」(近間強 1988)などに



第1図 周辺の地形(近間氏 前記報告より転載)

よって詳細が述べられているため、ここではその概略を簡単に述べるにとどめ、南加賀古窯跡群の周辺に位置する遺跡について述べてみたい。

#### （1）南加賀古窯跡群

当窯跡群は現在確認されているもので、須恵器窯跡160基、土師器窯跡27基、中世陶器（加賀焼）窯跡23基を数える大窯跡群で、須恵器生産の出現から中世陶器生産の消滅まで、一部須恵器生産の消滅から中世陶器生産の開始までのブランクはあるものの、約9世紀の間連続とした生産を行っている。

この窯跡群の出現は、ほぼ6世紀初頭頃と考えられ、今回報告の二ッ梨東山4号窯跡I次床の一部がこの時期に相当すると考えられる。以後、生産を拡大していくが、最も栄える時期は8世紀の前半頃で窯場の拡大に伴って窯跡数が急増する。これ以後はやや減少するものの、戸津町周辺において存続し、9世紀の終わり頃にこの地域を中心として、生産が再興され、須恵器生産の消滅まで、活発な生産活動をしている。以後二世紀近くのブランクはあるものの、12世紀末には中世陶器の生産が開始され、窯場を馬場川流域に移しながら室町時代には生産規模を拡大し、14世紀まで生産を行っている。

#### （2）窯跡群周辺の遺跡

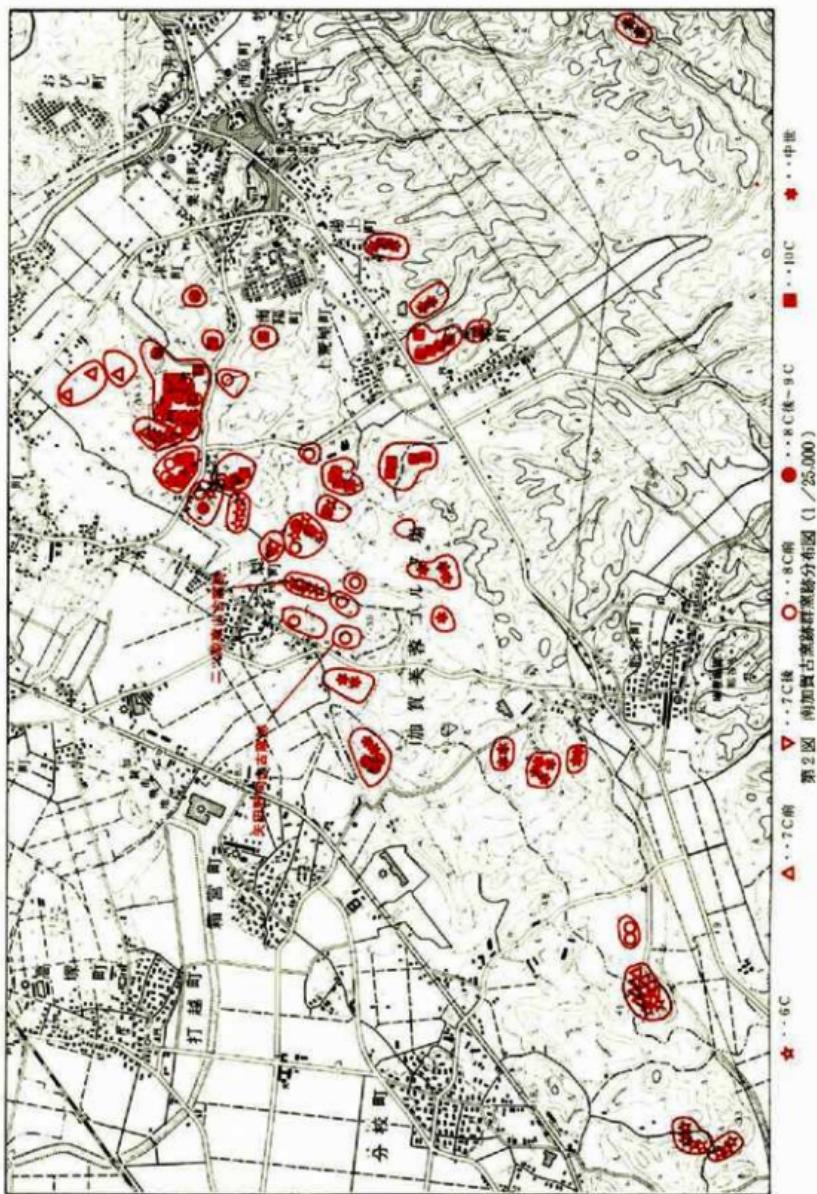
窯跡群の周辺には縄文時代前期の貝塚から中世の城跡に至るまで、幅広い時代の各種様々な遺跡が存在している。特に、古墳時代前期から後期に亘る時期の古墳群が多数存在し、興味深い。

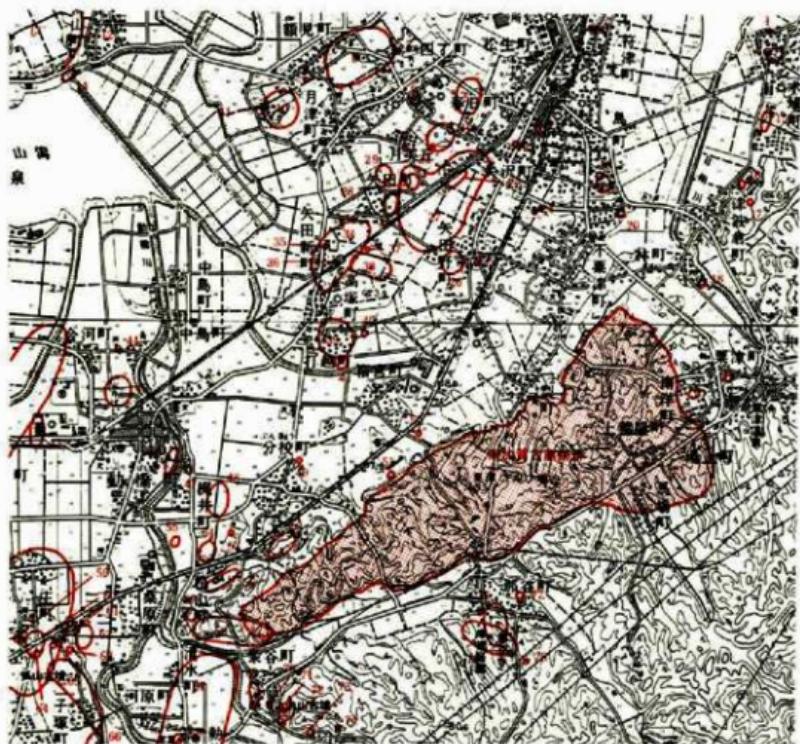
縄文時代の遺跡は、主に柴山潟周辺と木場潟周辺の台地上に存在し、前期に位置付けられる柴山水底貝塚遺跡や打越遺跡、中期に位置付けられる念佛林遺跡や大谷山貝塚など、著名な遺跡が多い。

弥生時代の遺跡は数少なく、縄文時代の遺跡と重複しているものが多い。立地は縄文時代と同様、潟（柴山潟）周辺の台地上に多く、後期のものばかりである。著名な遺跡に猫橋遺跡があり、北陸の弥生時代後期の「猫橋式」の標式遺跡となっている。

古墳時代はこの周辺が一番活気づく時期で、前期から終末期までの古墳群が多く存在する。地形的に加賀三湖に囲まれた三湖台地の南側と、南加賀古窯跡群の存在する低丘陵地帯の南西端、低丘陵地帯と動橋川を挟んだ西側の台地上の3つの地帯に分けられる。三湖台地には僧屋古墳群や符津石山古墳、蓑輪塚古墳、また、最近多くの人物埴輪が出土した矢田野エジリ古墳など、後期を中心とする時期の古墳群が多数存在し、南加賀古窯跡群からの須恵器の供給が確認されている。低丘陵地帯には分校古墳や松山古墳など前期から中期の古墳が多く、両側の台地上には中期の大規模古墳である孤山・二子塚古墳が存在している。また、動使町の谷を挟んだ両側の丘陵上には後期から終末期にかけての横穴古墳が多数存在する著名な法皇山横穴古墳や栄谷丸山横穴がある。

奈良・平安時代の遺跡は矢田野町、動橋町、桑原町周辺の微高地や台地上に点在しているが、調査が進んでおらず、詳細は不明である。また、7世紀後葉に位置付けられる津波倉廃寺が存在





第3図 宮跡群周辺の遺跡 (1/50,000)



第4図 二ツ梨東山古窩跡・二ツ梨西山古窩跡位置図 (1/5,000)

第1表 遺跡地名表

1. 木場古墳	古墳時代	41. 打越繩文遺跡	繩文時代前・後期
2. 池田城跡	時代不詳	42. 藤橋遺跡	繩文時代・弥生時代後期
3. 芙津遺跡	繩文時代	43. 都もどり地蔵道跡	時代不詳
4. 芙津石山古墳	古墳時代	44. 合河遺跡	時代不詳
5. 念仏林遺跡	繩文時代中期	45. 動橋遺跡	平安時代
6. 月津新遺跡	繩文時代	46. 動橋壁跡	室町時代
7. 日のぼる古墳	古墳時代	47. 衛生センター遺跡	奈良・平安時代
8. 頭見町遺跡	弥生時代～中世	48. 分校A遺跡	古墳時代
9. 左衛門殿古墳	古墳時代	49. 分校高山古墳	古墳時代
10. 茶臼山遺跡	繩文時代・奈良時代	50. 箱宮B遺跡	中世
11. 茶臼山古墳	古墳時代	51. 箱宮A遺跡	中世
12. 茶臼山神社遺跡	時代不詳	52. 分校カシ山古墳	古墳時代(19基)
13. 茶臼山城跡	中世	53. 分校王古墳	古墳時代
14. 柴山水底貝塚遺跡	繩文時代前期	54. 分校B遺跡	平安時代
15. 木場古墳群	古墳時代(4基)	55. 梶井遺跡	奈良・平安時代
16. 大谷山貝塚	繩文時代	56. 血草山古墳	古墳時代(18基)
17. 津波倉ホットジ遺跡	室町時代末期	57. 松山遺跡	古墳時代前期
18. 林八幡神社経塚	鎌倉時代後期	58. 松山古墳	古墳時代(12基)
19. 島遺跡	古墳時代・奈良時代	59. 西島建造物群	奈良・平安時代
20. 下栗津横穴	古墳時代	60. 津波倉庵寺	奈良時代
21. 薔薇塚古墳	古墳時代	61. 桑原遺跡	古墳時代
22. 矢田野エジリ古墳	古墳時代	62. 二子塚遺跡	古墳時代
23. 百人塚・矢田野古墳	古墳時代(3基)	63. 津波倉繩文遺跡	繩文時代
24. 鳥経塚	時代不詳	64. 二子塚小鐵冶跡	繩文時代
25. 中村古墳	古墳時代	65. 狐山古墳・二子塚古墳	古墳時代(34基)
26. 矢田野神社前遺跡	平安時代	66. 二子塚クマノミヤ遺跡	古墳時代後期
27. 矢田野遺跡	古墳時代後期	67. 勅使道跡	奈良・平安時代
28. 僧房古墳群	古墳時代(4基)	68. 勅使館跡	鎌倉・室町時代
29. 矢田A遺跡	繩文時代	69. 荣谷A遺跡	奈良・平安時代
30. 念仏塚古墳	古墳時代	70. 荣谷白山神社遺跡	奈良・平安時代
31. 念仏林南遺跡	繩文・古墳時代前期・後期	71. 荣谷丸山横穴	古墳時代後期(13基)
32. 念仏林古墳	古墳時代	72. 荣谷B遺跡	奈良・平安時代
33. 矢田B遺跡	古墳時代	73. 宇谷遺跡	奈良・平安時代
34. 矢田新遺跡	奈良時代後期	74. 温谷護法寺跡	時代不詳
35. 丸山古墳	古墳時代	75. 那谷城跡	室町時代
36. 無名古墳	古墳時代	76. 那谷寺遺跡	鎌倉時代中期
37. 狐森塚古墳	古墳時代	77. 西荒谷カマンダニ窯跡	鎌倉・室町時代(13基)
38. 刀何理古墳	古墳時代	78. 那谷タカラ跡	時代不詳
39. 打越城跡	安土桃山時代	79. 戸津製鉄跡	時代不詳
40. 打越弥生遺跡	弥生時代後期	80. 戸津本蓮寺跡	室町時代

するが、南加賀古窯跡群から瓦の供給は確認されていない。

中世は南加賀古窯跡群と位置を重複しながら、多くの製鉄跡が確認されている。その規模はかなり大きいものと予想され、一大鉄生産地であったことを忍ばせている。この他に、上荒屋ホウジョウヤマ遺跡からは埴輪群や経塚が、勅使館跡からは大型の建物が、そして、那谷城跡や戸津本蓮寺跡など豊富な種類の遺跡が存在する。また、室町時代には既に那谷寺が存在していたと思われ、この関係の遺跡が周辺に存在すると予想されている。

## 第Ⅱ章 二ッ梨東山古窯跡

### 第1節 調査に至る経緯と調査概要

#### 1. 調査に至る経緯

昭和58年7月11日、遺跡バトロール中に二ッ梨町地内において松本建設が実施していた土採取により、遺跡の一部が破壊されていることを発見した。急速、業者に工事を中止するよう申し入れた。9月11日、業者と現地協議を行い、工事範囲を指定した。遺跡については、昭和59年度調査対応の可能性を口頭で示した。

翌昭和59年度に入り、土採取の事前協議、埋蔵文化財の取り扱いの協議が始まった。遺跡が一部破壊され、窯体が露出したままとなっていること及び土採取途中であること等かなり緊急性を帯びていたため、本年度の調査対応として協議を進めた。6月10日付けで松本建設より埋蔵文化財発掘届の提出がなされ、同月26日付けで松本建設より発掘調査の依頼を受け、同28日に調査実施回答を行った。7月6日付で石川県教育委員会より発掘調査実施についての通知を受けた。

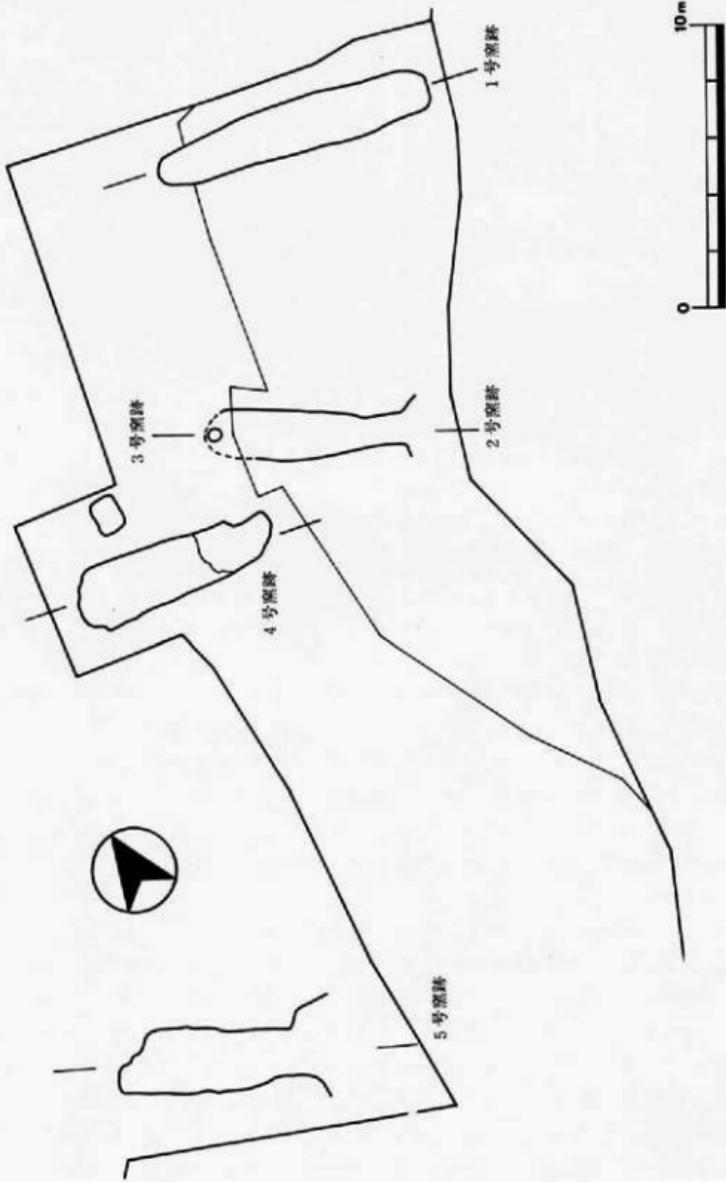
#### 2. 調査概要

調査は、昭和59年8月30日より開始した。まず、半壊されて露呈している2基の窯体及び煙道が露呈しているが残存状態の良好と考えられる窯体の確認作業より行った。

煙道が露呈している2号窯と半壊されている5号窯の平面プランを9月1日までに検出した。1号窯のプランは5日までに検出した。当初、半壊していると考えられたが焼成部の一部だけ欠失しているやや長大な窯体である。また、本日までに2号窯の上方（西）の崖断面に3・4号窯を確認、そのプランを検出した。5基の窯跡を検出し終えたのち、各窯体の掘り下げを開始した。11日までに1～4号窯跡の掘り下げを終了し、写真撮影を行った。後、図取りを行って、1号・4号窯の下部床の掘り下げを行った。5号窯は、最終床を26日までに掘り下げを終了し、写真・図取りの後、下部窯床の掘り下げを行った。なお、3号窯はほとんど削平されていた。

2号窯の作業はたちわりを含めて9月26日に終了した。4号窯は3枚の床面を検出し10月11日に終了した。1号窯は4枚の床面を検出、5号窯は補修も含めて10枚の床面を検出し、全ての作業を10月15日に終了した。

第5图 各断面构造图 ( $S=1/200$ )



## 第2節 遺構

本調査では、5基の須恵器窯跡が検出された（二ッ型東山1～5窯跡 第5図）。本窯跡の存在する通称東山地区では、他に数基の窯跡が存在している。

以下、本調査の1～5号窯跡について述べてゆきたい。

### 1. 1号窯跡（第6図）

本窯跡は、調査区の北側に検出されたもので、当初、半壊されていると考えられたが、焼成部の一部のみ消失していただけではほぼ全体規模がとらえられた。床面は4枚確認され、下より1次床～IV次床（最終床）と呼称した。主軸方位はN—69°—Wを測る。

I次床は、全長10.7m、焼成部最大幅は1.9mを測るやや細長い形態を示している。床面の傾斜は焚口部ではほぼ水平、後約15°で昇り始め、焼成部は約25°であった。

II～IV次床は、同じ平面プランを呈している。焚口部が一部削平されていたため現存長10.0mを測り、焼成部最大幅は2.2mを測る。長さは短くなったが、幅は逆に広くなっているためI次床よりやや丸みをもつプランとなっている。

II次床は、I次床を焚口部で20cm、その他で10～15cmかさ上げしている。床面の傾斜は焚口部よりやや下降し、後上昇に転じ、焼成部は約22°であった。このII次床は焼成部下方から燃焼部にかけて修復が認められた。

III次床は、II次床を10～15cmかさ上げしていた。床面の傾斜は焚口部ではほぼ水平で、後徐々に昇り焼成部で約20°であった。

IV次床は、III次床を焚口部で10cm、その他で約5cmかさ上げしていた。床面の傾斜はIII次床とほぼ同じであった。

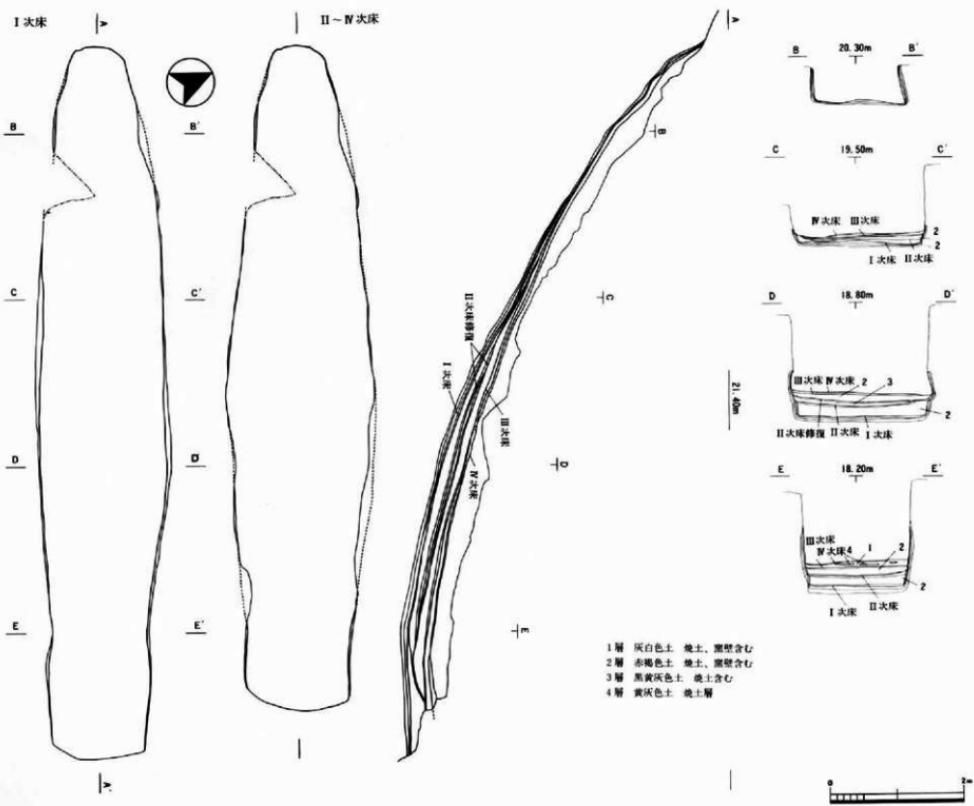
床面の関係は、窯尻より2.3mまではI～IV次床まで同じであり、この部分よりIV次床の下にIII次床・I次床が始まり、同3.2mの部分よりIII次床の下にII次床が始まっている。

床面の傾斜は焼成部までは前述したが、窯尻に近づくにつれ角度を増し、1.2m部分よりは40～45°となり、窯尻では60°であった。おそらくこのままの勾配で地上に至ったと考えられる。

### 2. 2号窯跡（第7図）

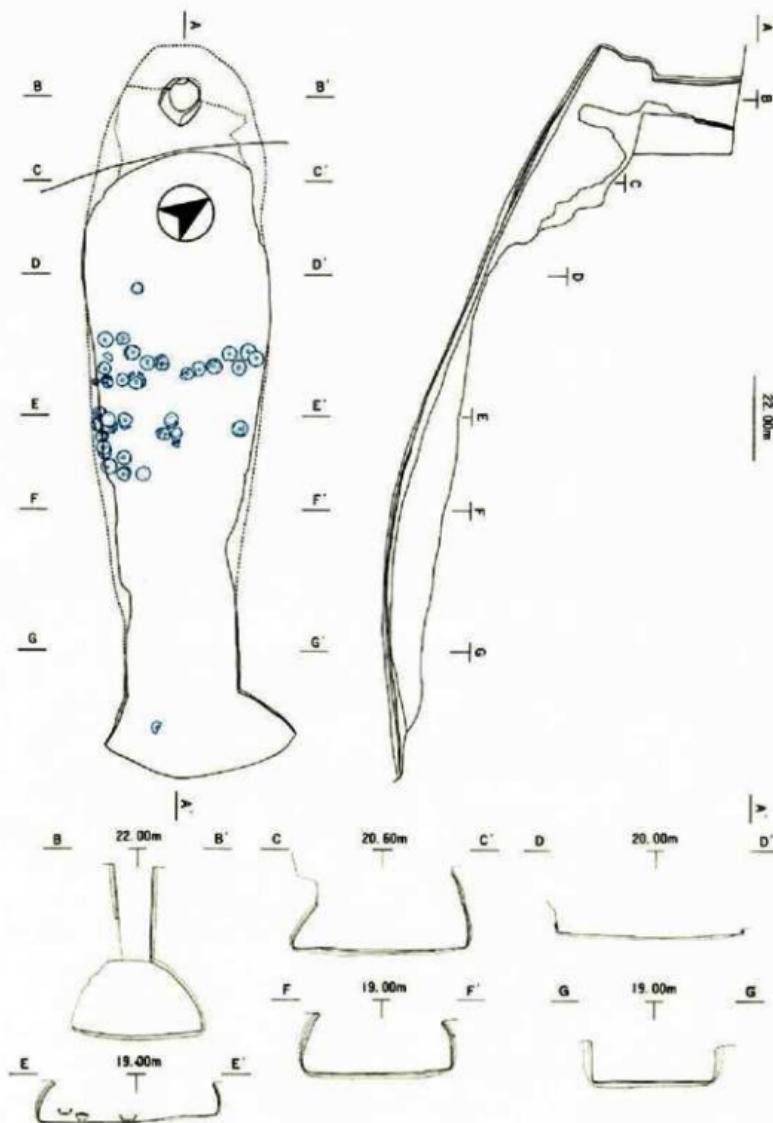
本窯跡は、煙道の上部が消失していただけで残存状態は良好な窯跡であった。全長7.8m、窯尻より2.4mの部分で最大幅となり2.0m、焚口部幅は1.2mを測る。煙道は、窯尻からやや焚口により前傾した状態で穿たれていた。床面より高さ0.8mから1.7mまで残存していて、上部で径約50cm、下部では径約35cmを測るややロート状を呈していた。焚口は外にハの字状に開いていた。床面は、焚口よりやや下降し、約2m部分（焚口から）より上昇に転じ、焼成部では22°の傾斜であった。主軸方位はN—52.5°—Wを測る。

遺物は、取り残しと考えられるものが焼成部中央床面に認められた。一部は浮いていたが、ほぼ現位置と考えられた。壺と蓋のセットで焼かれていたものが認められ、蓋のみの場合は床面に



第6図 1号窓跡実測図 ( $S = 1/60$ )





第7図 2号窓跡実測図 ( $S = 1/60$ )

ワラと考えられる炭化物が検出された。これは、床面との接着を防ぐため、あるいは内側の焼成のための温度を維持させる目的であった可能性も考えられる。

### 3. 3号窯跡（第8図）

本窯跡は、調査概要にも述べたが、ほとんど削平されていて、焼成部と考えられる部分が僅かに残存しているのみであった。残存部の幅は1.35mを測る。次に述べる4号窯跡の北に位置し、ほぼ並行して構築されていたものと考えられる。

### 4. 4号窯跡（第9図）

本窯跡は、焼成部中央以外はほとんど削平されていた。床面は3枚確認され、下よりⅠ次床～Ⅲ次床と呼称した。主軸方位はN-70°-Wを測る。

Ⅰ次床は、焚口部から燃焼部にかけての床面と焼成部上方・窯尻部が欠失していた。現存長6.2m、幅は最大2.4mを測る。床面の傾斜は焼成部で約25°を測る。

Ⅱ次床は、Ⅰ次床を約5～10cmかさ上げしていた。残存状態は焼成部のほぼ半分位であり、現存長4.3mを測る。幅はⅠ次床と同じであった。このⅡ次床は一部修復が認められた。

Ⅲ次床は、Ⅱ次床を焼成部中央で約30cm、下方では15cm焼土・焼壁ブロック混じりの黒灰色土をつめてかさ上げしていた。残存状態は更に悪く焼成部の一部のみであり、床面も大きく欠失していた。現存長3.7m、幅2.0mを測る。

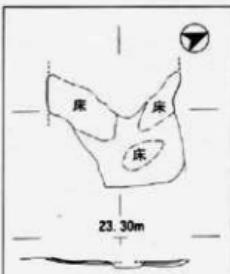
遺物は、Ⅰ次・Ⅱ次床面に甕片等が若干認められた。

### 5. 5号窯跡（第10～12図）

本窯跡は、調査区南端に位置していて、工事により破壊され露呈していたことより発見されたものである。調査を進めるに従い次々と床面が検出され、最終的には10枚検出された。内修復としてとらえたものもあり、下よりⅠ～Ⅹ次床と呼称した。主軸方位はN-55.5°-Wを測る。

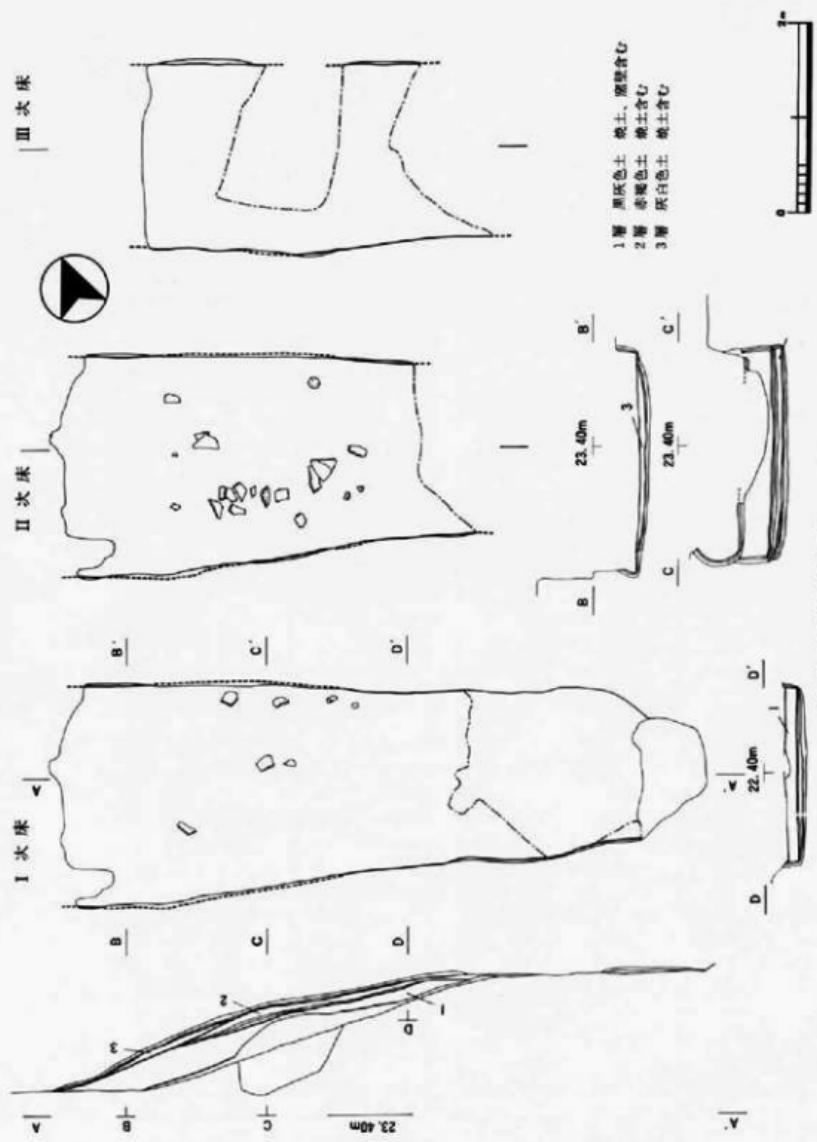
Ⅰ次床は、焼成部上方が削平されていたが、その他はほぼ残存していた。現存長7.2m、幅は焚口部で1.4m、燃焼部で1.6m、焼成部で最大2.4mを測る。床面の傾斜は、焚口部はほぼ水平で、燃焼部から焼成部下方にかけては約10°で昇り、徐々に勾配を増し焼成部上方では20～25°であった。焚口の外に長軸1.3m、短軸0.5mのやや楕円形の浅い落込みが認められた。

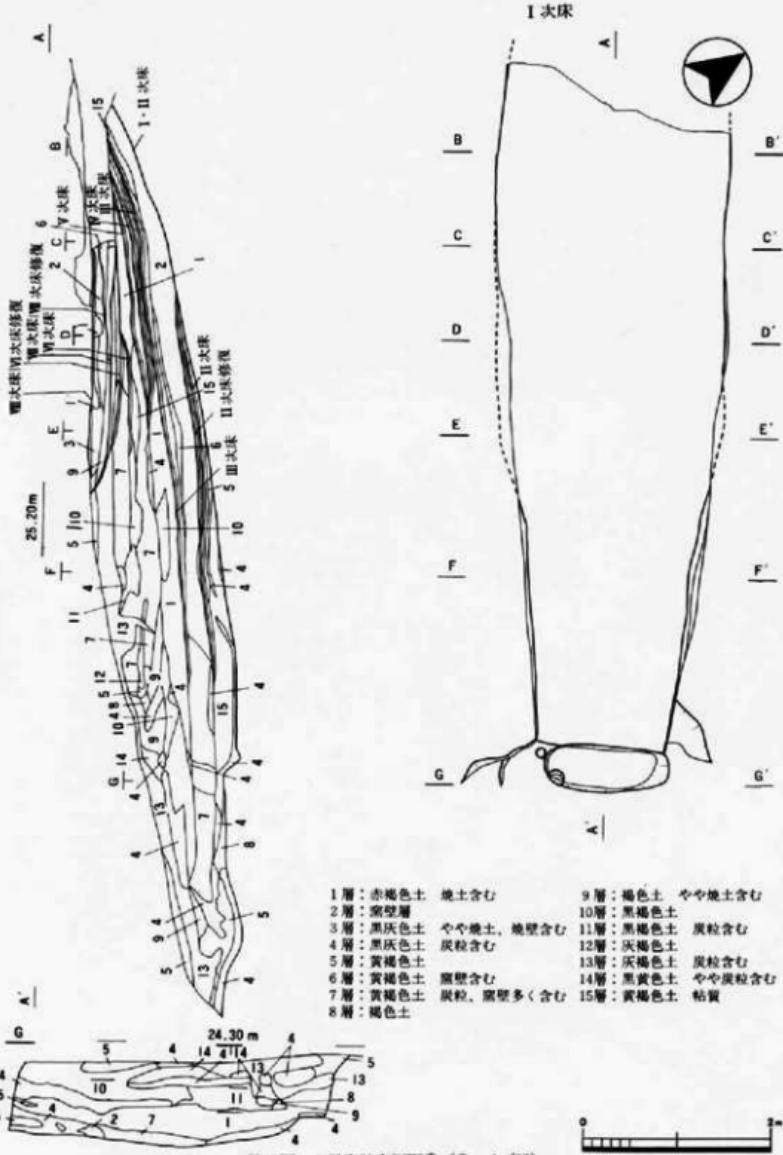
Ⅱ次床は、断面のB-B'ラインより中軸上で1m上方の点（以下、ここを基準のA点と呼称する。）より2.6mの地点まではⅠ次床と同じである。この部分より下方でかさ上げを行っていて、その厚さはF-F'ライン部分で25cmである。おもに粘質の黄褐色土が間層としてみられた。やはり焼成部上方は削平されていたが、その他は残存していた。残存長6.5m、幅は焚口部で1.6m、燃焼部で1.8m、焼成部で最大2.4mを測る。焚口はⅠ次床より70cm前（窯尻方向）に築かれていて、外にハの字状に開いていた。床面はやや凹凸があるが約10°の傾斜で昇っている。また、焼



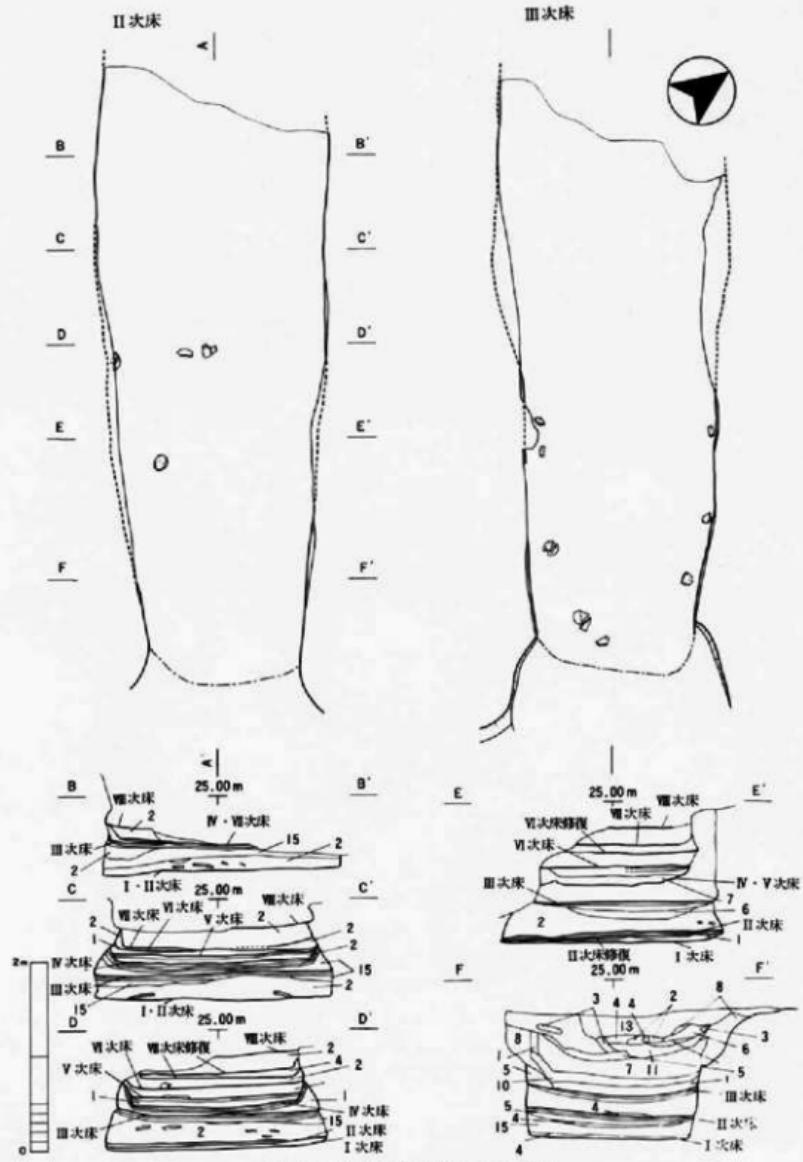
第8図 3号窯跡実測図  
(S=1/60)

第9圖 4號測量剖面 ( $S=1/60$ )

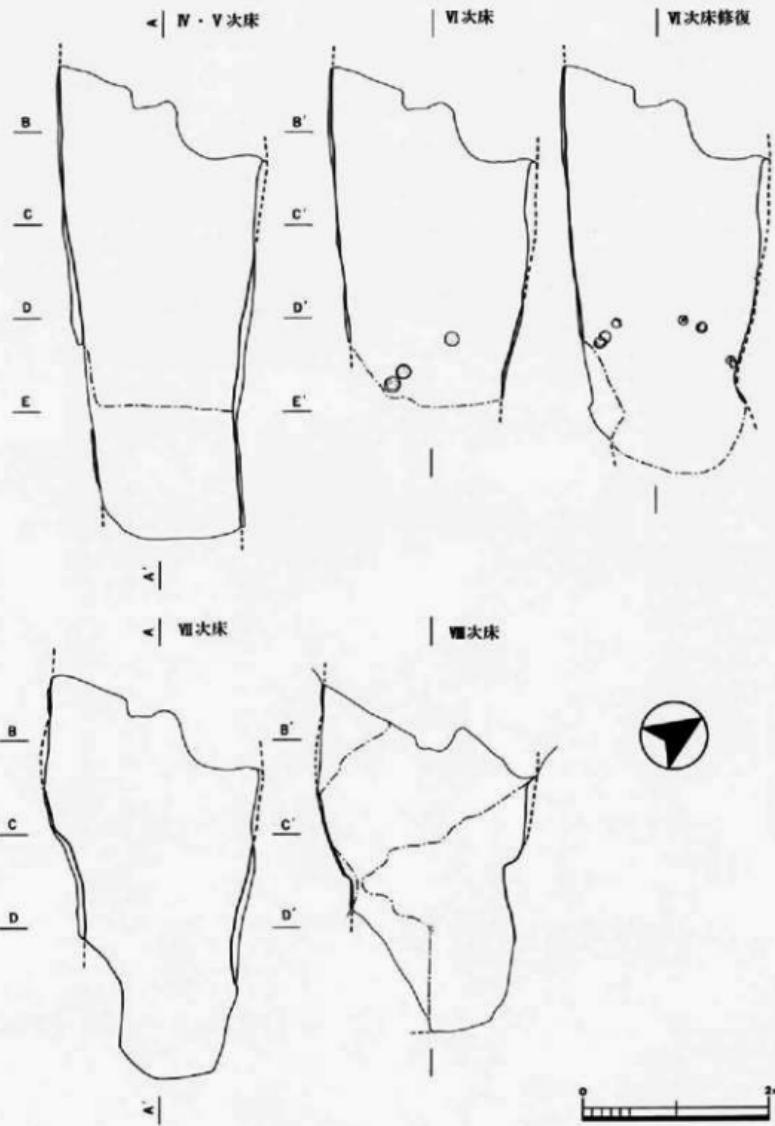




第10図 5号窯跡実測図① (S = 1/60)



第11圖 5号窯跡実測図② (S = 1/60)



第12図 5号窓歯実測図③ ( $S = 1/60$ )

成部下方の床は修復が認められた。

Ⅲ次床は、Ⅱ次床と焚口の位置は同じであるが、この部分で25cm、焼成部中央で30~35cmかさ上げして構築されていた。間層は主に窯壁片が詰まっていた。残存長6.3m、幅は焚口部で1.65m、燃焼部で1.9m、焼成部で最大2.5mを測る。焚口はやはり外に開いていた。床面の傾斜は、焚口部で5°で昇り始め、燃焼部から焼成部にかけては10°となり、削平されている部分付近では20°を測る。

IV・V次床は、焼成部上方及び燃焼部・焚口部を欠失している。A点より約4mまでは床面が確認されたが、壁の残存及び酸化した部分より測ると、現存長5.0m、幅は燃焼部で1.45m、焼成部で残存最大2.2mであった。IV次床はⅢ次床を燃焼部付近で約20cm焼成部で10cmかさ上げしていて、V次床はIV次床を約10cmかさ上げしていた。床面の傾斜はほぼ同じで、5~10°であった。

VI次床は更に残りが悪い。現存長3.6m、幅は焼成部で残存最大2.2mを測る。焼成部下方の残存端付近でV次床を20cm、焼成部中央付近では10cmかさ上げしていた。遺物は、壊蓋の完器が床面に認められた。VI次床修復としてとらえた床面は、A点より3mまでは同じ床面である。燃焼部付近で約20cmのかさ上げを行っている。この残存状態はVI次床より良く、焚口部付近まで検出された。現存長4.3m、幅は焚口で1.5m、焼成部で残存最大2.2mを測る。床面の傾斜は、焚口から約20°で下降し、燃焼部で水平になり焼成部では5°を測る。遺物は、床面に壊蓋及び提瓶の完器が認められた。

VII次床は、A点より2mまではVI次床修復の床と同じであった。また焚口部も一部欠失していたが、ほぼ同じ位置でとらえられた。D-D'ラインで一番厚く約10cmのかさ上げであった。現存長4.3m、幅は燃焼部で約1.6m、焼成部で残存最大2.4mを測る。床面の傾斜は、やはり焚口からやや下降し、後ほぼ水平であり、残存部端付近でやや上昇している。

VIII次床は、最終の床であり、当初より露呈していて、一番残りの良くない状態であった。残存長3.7m、幅は残存最大で2.4mを測る。VIII次床より約20cmのかさ上げが行われている。

以上、1~5号窯跡について記述してきたが、1・2号窯跡以外は工事による削平が激しく、窯体の規模をとらえられなかった。1・2号窯跡の灰原は調査区外に存在していると考えられる。

追記 考古地磁気を富山大学理学部教授 広岡公夫氏に測定を依頼し、その測定結果は理学部地球科学教室の広岡公夫・岡田宗・吉村勝之・井口滋存の各氏達名で報告を頂いた。

本窯跡では、残りの良い1号窯跡と2号窯跡を実施した。地磁気推定年代は1号窯跡でAD845+160年~70年、2号窯跡でAD705年±10年の結果ができた。

註 脱稿後、5号窯跡のセクション等を再検討した結果、床の修復としてとらえたものが、改造として考えた方が妥当という結論に達した。つまりVI次床修復と記述はしなかったがVIII次床修復(セクションのみ)は、それぞれ一枚の床と考える。本節の遺物の5号窯跡に関する記述(図面も含む)で、VI次床修復をVII次床、VIII次床をVIII次床、VIII次床修復をIX次床、VIII次床をX次床と読みかえるものとする。

### 第3節 出土遺物

#### 第1項 古墳時代の遺物

当窯跡で古墳時代に位置づけられる窯跡は1・3～5号窯跡の計4基である。3号窯跡については、第2節でも述べたとおり、床面から遺物が出土していない、覆土中の遺物も極端少であるため、時期を断定することはできないが、窯の傾斜や覆土中の遺物から考えて、古墳時代のものと思われる。この3号窯跡を除く3基の窯跡については、窯体内から豊富な遺物が得られている。以下に、一部重複するものの、古い順から4号・1号・5号窯跡について述べる。

##### 1. 4号窯跡

4号窯跡は窯体のみの調査であるが、床が3枚確認されており、各床面から遺物が出土している。1次床から順に説明を加える。

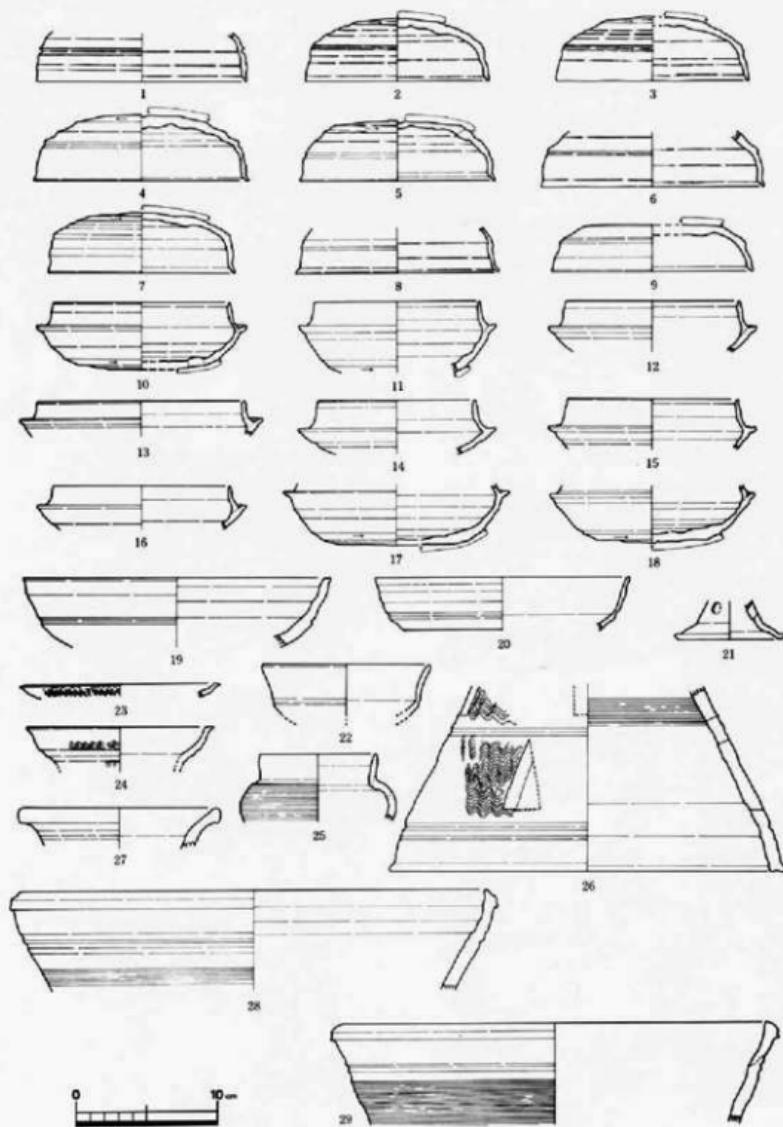
###### (1) 1次床(第13・14図、写真図版6)

1次床面からは蓋壺、鉢、高壺、甕、器台、壺、甕が出土している。これらの数量は個体識別法で算出した場合、蓋壺が60個体(蓋60、身22)、鉢2個体、高壺2個体、甕3個体、器台3個体、壺2個体、甕5個体(口縁部からは5個体であるが、胴部破片の数量から考えれば、この倍程度の数量は存在していたと考えたい)を数え、蓋壺が圧倒的な数量を占めるが、蓋壺には有蓋高壺も数量の中に含まれているため、これよりは若干割り引いて考える必要がある。

###### 蓋壺(1～18)

(蓋)口径12～16cmを測るもので、13～15cmに集中し、径高指數33前後に分布するものが多い。器形から天井部のやや丸いものと平たいものに分けられる。前者は口縁部がほぼ垂直に伸びるものが多く、口縁端部が明瞭に内傾する段を持ち、その中にやや凹面に近いものや外端の外反するものもある。口縁端部と天井部の境は明瞭で、深い沈線で稜を表現するもの(1・4)や浅い沈線で表現するもの(2・3・5・6)、ロクロ目状の稜線で表現するもの(7・8)がある。後者(9)は口縁端部に内傾する面をもつもので、口縁端部と天井部の境には浅い沈線状の稜が巡る。天井部の調整は2／3以上を回転ヘラ削りしているものが多いが、中央のみナデつけているものも見られる。

(身)口径11～12.5cmを測るのが大半であるが、14～15cm前後のものも数点見られる。径高指數は42前後のもので、口縁部高が1.5～2cmを測る。器形から底部が丸く深いものと底部がやや丸く平均的なもの、底部の偏平なものとに分けられる。口縁部器形は直立気味にやや内傾して立ち上がるもので、極端に内傾するものではなく、受部の端部が丸くなっている。前者のもの(11)は口縁部長の1.5～2cmの長めな口縁部で、口縁部に内傾する弱い段を持つ。真ん中のものは2cm以上の高い口縁部と1.5～2cmの口縁部、1.5cm以下の低い口縁部とに分けられ、それぞれ丸い口縁端部(15)、段をもつ口縁端部(10・12)、内傾する面をもつ口縁端部(13・16)を呈す。後者のもの(14)は2cm以上の高い口縁部、端部の丸いもので、前2者とは異なる器形を呈する。



第13图 4号窑址 1次床出土遗物 (S = 1/4)

底部調整はほぼ2／3以上に回転ヘラ削りを施す。

#### 鉢 (19・20)

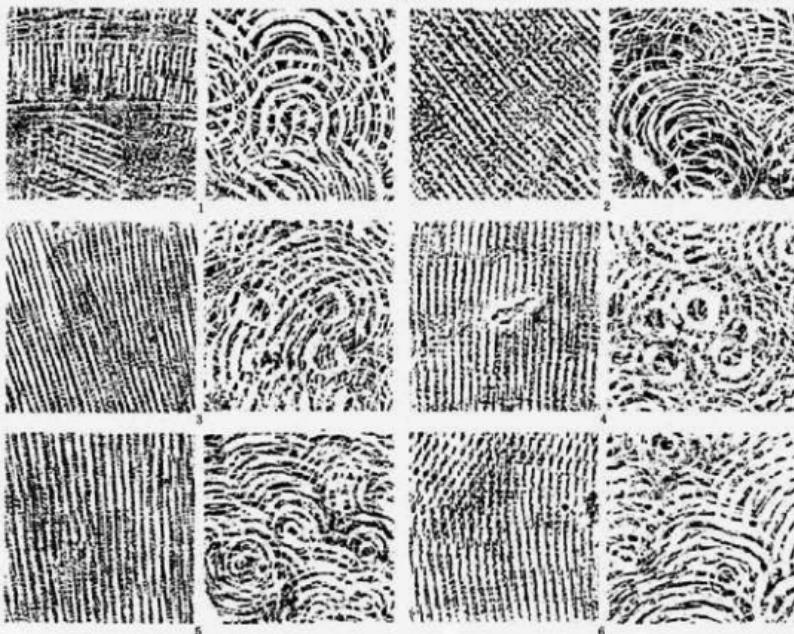
厚手で口径の大きい19と薄手でやや口径の小さい20がある。いずれも坏蓋をひっくりかえしたような器形で、口縁部と底部の境には沈線状の稜が巡る。口縁部は平坦な面を持つ19と丸い20とがあり、底部付近にカキ目状の調整を施すものもある。

#### 高坏 (21・22)

坏部破片の22と脚部破片の21の2個体のみで、いずれも無蓋のものと思われる。22は口径12cm程度もので、沈線状の稜をもった後、口縁部で外反する。21は脚底部が7・8cm程度の小型のもので、円孔スカシをもつ。両者は同一形態のものではなく、22には長脚1段長方形スカシのものが付き（無蓋高坏A類）、23はここから細長く脚が伸び、平底状の小型坏部が付くもの（無蓋高坏B類）と考えられる。

#### 躰 (23・24)

いずれも口縁部付近の破片で、23は焼き歪みでひしゃげている。口径は13～14cm程度のもので、口縁部外面に櫛描き波状文が施されている。口縁端部は平坦で、口縁部上方で段をもつ。口縁部



第14図 4号窯跡I次床裏脚部叩き文様 (S = 1/2)

器形のみでは判断に苦しいが、口径がさほど大きくなかったり口縁部の外反が強くないところから口頭部が長く伸びた胸の小型化する形態のものではないと思われる。

#### 壺 (25)

小型の壺で、口縁部は短く直立する。胸の形は球形を呈し、外面全体にカキ目調整を施す。

#### 壺台 (26)

脚径28cmを測る脚部破片である。脚部の文様は横走する沈線で区画した中を長方形や三角形のスカシと櫛書き波状文で構成している。

#### 壺 (27~29、第14図)

口径が14cm前後の小型の27と30cm以上の大型の28・29がある。小型のものは口縁部で外反し、端部の丸く肥厚する器形で、大型のものは外傾する口頭部から上方でやや内湾し、外面に突帯状の稜をもつ。後者の外面には沈線とカキ目が施されている。

胸の叩きは第14図のとおり、總て外面平行線文 (H a類)、内面同心円文 (D a類) で、外面にカキ目調整を施すものはきわめて少ない。D a類の種類から4つに分類できる。1類 (1・2) は中心円が径3cm程度に小さくぼむもので、溝が細く深い。2類 (3・4) は中心円が径7~8mm程度の円形で、その周りの溝が幅広となっている。3類 (5) は中心円径4mm程度で、溝の間隔が狭く浅い。4類 (6) は中心円径5cm程度で溝の間隔のやや広く深いものである。これらの主体は1・2類で、どちらも4割近くを占め、3・4類は3点しか確認されていない。

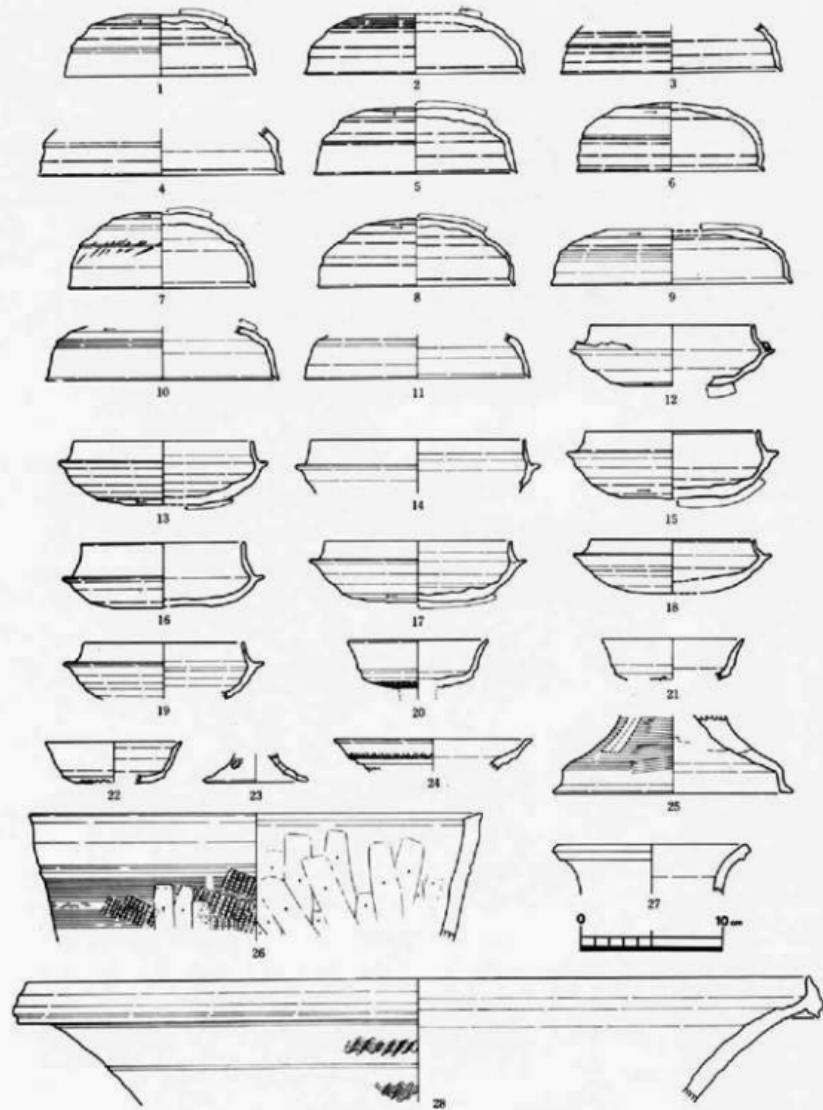
#### (2) II次床 (第15・16図、写真図版7・8)

II次床からは蓋壺、高壺、腰、壺、瓶?、壺が出土している。これらの出土量は個体識別法で算出した場合、蓋壺45個体 (壺45、身17)、高壺8個体、腰3個体、壺2個体、瓶?1個体、壺8個体で、I次床よりも若干高壺が目立つ。しかし、主体となるのはやはりI次床と同様蓋壺で、数量では壺の胸の破片が多い。

#### 蓋壺 (1~11)

(蓋) 口径13~17cmを測るもので、13~16cmではらつく傾向をもつ。天井部の器形は器高が高く丸いもの (6~8) とやや丸いもの (1~5)、やや偏平なもの (9~11) とがあり、口縁部器形はほぼ垂直に伸びるが、やや外傾する傾向にある。口縁端部は明瞭な内傾する段をもつものが主で、段のやや不明瞭となったものも一定量見られる。口縁部と天井部の境の稜は依然として明瞭なものが多く、主体となる浅い沈線状のものと、僅かにI次床でみられた深い沈線のもの (1) や沈線は入らないが、ロクロ目状の稜線によって表現するもの (2) がある。主体となる器形は天井部のやや丸いものであるが、やや偏平なものには口縁端部の段がやや不明瞭なものが多い。天井部の調整はI次床と同様ほぼ2/3以上を回転ヘラ削りする。

(身) 口径11~13.5cm程度のものが多く、径高指数37前後に分布する。口縁部高は1~2.5cmで、1.5cm前後に中心をもつ。口縁部器形は直立気味のものもあるが、やや内傾するものが目立ち、底部器形はやや丸い一般的なものとI次床でみられた偏平なもので高い口縁部の付くものがある。



第15図 4号窯跡Ⅱ次床出土遺物 ( $S = 1/4$ )

前者は口縁部の高さが1~2cmのやや高めのもので、1.5cm前後に分布し、いずれも口縁端部の丸い器形である。後者(16)は口縁部が2.4cmを測る高いもので、口縁端部の丸い器形を呈す。底部調整はほぼ2/3を回転ヘラ削り調整している。

#### 高坏(20~23)

いずれも無蓋高坏で、坏部と脚部とがあるが、同一形態の無蓋高坏B類である。坏部は口径10cm前後を測るもので、器形は平坦な底部から外傾して立ち上がる体部へと移行する。底部には脚基部付近に沈線が巡り、その外側を櫛(20・21)またはヘラ状工具(22)による連続刺突文が施される。脚部は裾部に3方の円孔スカシをもつ脚底径7.4cmの小型のもので、細長く棒状に伸びるもののが付くと思われる。

#### 壺(24)

口径14cm程度を測る口縁部破片で、口縁部外面に櫛描き波状文を施す。口縁部はやや丸みを帯び、口縁部上方で段を形成する。口縁部の外反は1次床のものよりも強く、やや厚手である。

#### 壺(25)

脚部のみの破片であるため、推定でしかないが、壺の脚と思われる。器形は7cm程度の基部から外反して広がるもので、裾で垂直に屈曲する。スカシは長方形のものが3方に穿たれ、外面にカキ目調整が施されている。

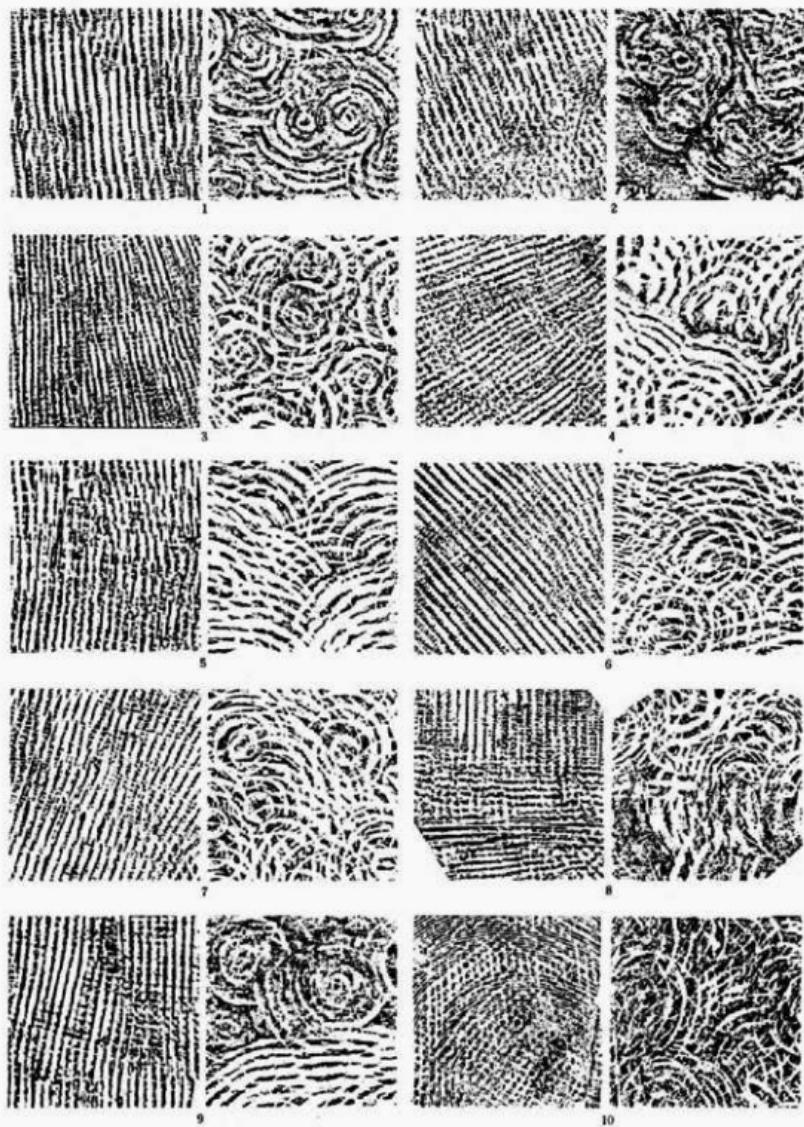
#### 壺?(26)

口径32cmを測るもので、まっすぐ外傾する器形である。外面は口縁部付近に太い沈線が巡り、その下を平行線文叩き(Ha類)後に縱方向のヘラ削り調整している。内面は縱方向のヘラ削りのみ見られる。破片であるため、器種の判断に苦しむが、接合できていない同一個体の破片も結合して考えれば、壺に近い器形である。

#### 壺(27・28、第16図)

口径13cm程度の小型の27と口径55cm程度の大型の28がある。小型のものは外反する口縁部で、口縁端部が複合口縁状に肥厚する。大型のものは外反する口縁部で、口縁端部が上下に突出する。外面には数段の沈線が巡り、その間に櫛描き波状文を施している。

胸部叩きは第16図のとおり縦に外面平行線文(Ha類)、内面同心円文(Da類)で、外面にカキ目調整の施すものは極めて少なく、一般的でない。また、内面には一部ナデによる擦り消しが施されるものもある。内面の同心円文の種類から4つに分類できる。1類(1・2)は1次床の3類とほぼ同様のものと思われ、一部ナデ調整の施されるものが目立つ。2類(3)は1次床の4類と共通するもので、1点しか確認されていない。3類(4・5)は中心円径6mm程度の溝の深く太いもの。4類(6~10)は中心円径が8mm程度の大きな円形で、溝の間隔が広く深い。10は4類の同心円文をもつが、外面には同心円のカキ目が見られ、特殊なものである。主体となる文様は4類で、全体の5割以上を占め、次いで、3類の3割、1類の1割半となる。総体的に、3・4類は厚手、1類は薄手のものに見られる。



第16図 4号窯跡II次床棊脚部叩き文様 ( $S = 1/2$ )

### (3) III次床(第17図、写真図版8)

床面からの遺物はなく、總て覆土中のものである。器種は蓋壺、鉢、すり鉢、甕、壺、甕が確認される。出土量は個体識別法で算出した場合、蓋壺が40個体(蓋40、身33)、鉢1個体、すり鉢1個体、甕2個体、壺1個体、甕13個体を数え、高壺は出土していない。

#### 蓋壺(1~21)

(蓋) 口径12~17cmを測るもので、14~15cm前後に中心をもち、径高指数28前後に分布するものが多い。器形は天井部の丸く深いものとやや丸いものがあり、口縁部の垂直に伸びるものは少なく、天井部から内湾してそのまま口縁端部に至るもののが立つ。口縁端部の段はやや不明瞭となっているものが主体で、内傾する面だけになっているもの(2・4・8)も見られる。口縁部と天井部の境の稜は浅い弦線状のものが多いが、ロクロ目状弦線のもの(7~9)、ロクロ目によって窪みをつけるが、境が不明瞭となるもの(12)など境の不明瞭となるものが多くなる。天井部の調整は依然として2/3近くを回転ヘラ削りを施すものが多い。

また、13は环蓋として載せたが、天井部の平坦部が未調整であることや口縁端部が外反して幅広の平坦面を形成すること、内面調整が極めて難であることなど、他の环蓋とはかなり異なっており、他の器種つまり鉢や焼台などの可能性を持つ。

(身) 口径11~13.5cmを測るもので、口縁部高は1.5cm前後に集中する。口縁部の器形は内傾するものが多く、直立気味のものは少ない。底部は丸く深いもの(16・18・20・21)、やや丸いもの(15・17・19)、やや偏平なもの(14)があり、前者は概して小型の法量を呈す。後者はI・II次床でみられた口縁部の高い器形の流れを汲むものであるが、I・II次床よりも口縁部高がやや低くなっている。口縁端部は締て丸いもので、口縁部高が全体的にII次床のものよりも低めとなっている。底部調整はII次床と大きな差はない。

#### 鉢(22)

口径26.4cmを測る大型のもので、やや丸い底部から底部と口縁部の境に稜をもって直立気味の口縁部に至る器形を呈す。底部には外面カキ目調整後ナデを施す。底部が欠損しているため、判断に苦しむが、器台の器受部である可能性ももつ。

#### 甕(23)

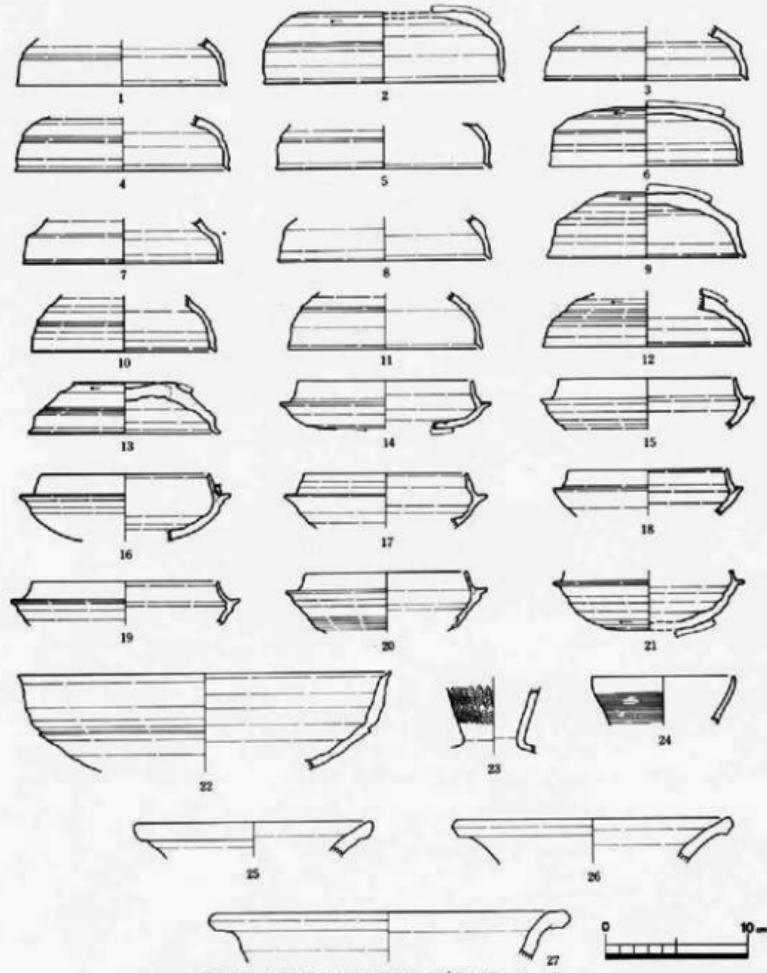
頸部付近の破片で、4.5cm程度の頸基部から外傾して立ち上がる。頸部には數段の櫛描き波状文が施されている。

#### 壺(24)

口径10cm程度を測る口頸部破片で、やや長めの頸部を呈し、外面にカキ目調整が施される。

#### 甕(25~27)

口径15~20cm程度の小型のもの(25・26)と25cm程度の中型のもの(27)とがある。前者のものは口縁部が外反し、端部で外側に肥厚するものである。後者はやや外傾する口縁部で、外端部に複合口縁状に突帯が巡る。肩部叩きについては比較的出土量が少なく、III次床以外の製品のま



第17図 4号窯跡Ⅲ次床覆土出土遺物 (S = 1/4)

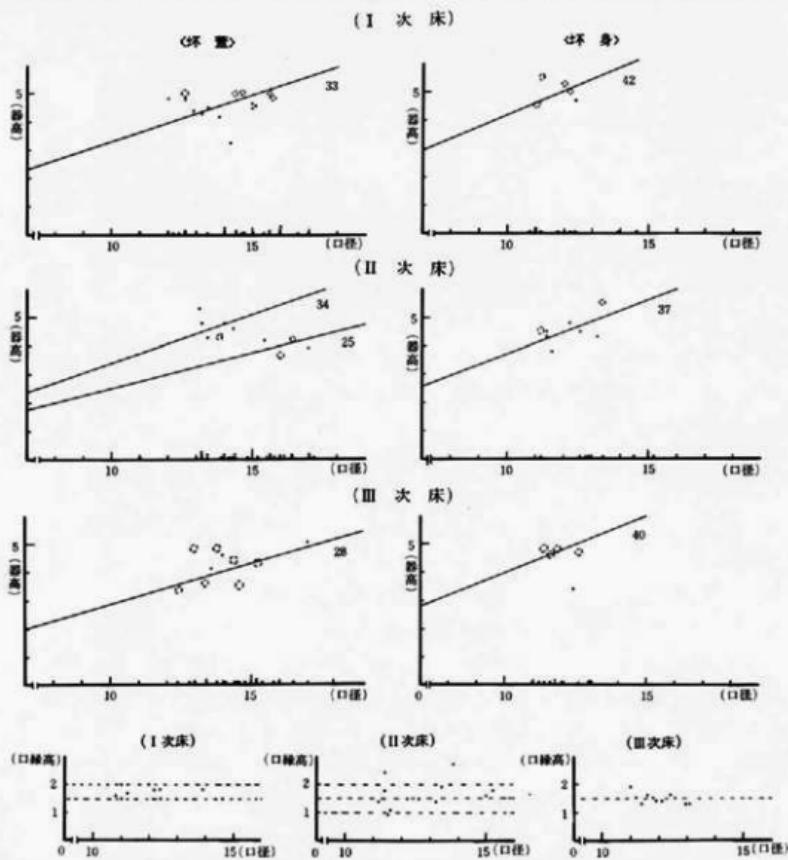
じりが多いようなので、ここでは取り扱わない。

#### (4) 4号窯跡須恵器様相

4号窯跡には3枚の床があり、I～III次床まで各器種に漸移的な変化がみられる。以下に各器種の変化を述べる。

**蓋坏** まず、蓋ついては全体を通して口縁端部に段をもつものが見られ、丸いものは見られない。

しかし、段の明瞭さによって、しっかりとしたものと不明瞭なものとに分けられ、I次床では、ほぼ総て前者の形態であったものが、II次床では後者が目立ち始め、III次床では前者も見られるが、後者が主体となって、段ではなく内傾する面のものも一定量見られるようになる。また、天井部と口縁部の境の稜はこの窓跡では貼り付け状のものはなくなっているが、I次床では深い沈線によって表現するものが3割程度見られ、比較的シャープなものとなっている。しかし、I次床でも主体となるのは深い沈線状のもので、沈線を伴わないロクロ目状稜線のものも若干存在する。II次床でも主体となるのは浅い沈線状であるが、深い沈線が減少し、ロクロ目状が3割程度に増加する。そして、III次床では浅い沈線状とロクロ目状が主体で、全体的に天井部と口縁部の



第18図 4号窓跡蓋坏法量分布図（上：口径・器高、下：口径・口縁高）

境が不明瞭になる。全体的な器形としては、一般的な器形で偏平になる傾向にあり、口縁部がⅠ次床では垂直に伸びていたものが徐々に外傾して口縁部高が低くなる傾向をもつ。

身については、4号窯跡では口縁端部に明瞭な段をもつものはないが、沈線状の弱い段を形成するものがⅠ次床で4割程度存在し、段は持たないが、内傾する面を形成するものも一定量見られる。しかし、Ⅱ次床以降では段をもつものは確認されず、面をもつものが若干存在する以外は絶て丸い形態である。口縁部は高いものが多いが、Ⅰ～Ⅲ次床まで徐々に低下していく傾向にある。つまり、Ⅰ次床では1.5cm以上に分布するが、Ⅱ次床では1.5cmを前後して分布するようになり、Ⅲ次床では1.5cm以下が主体となってくる。全体的な器形としては口縁部立ち上がりの直立気味のものが多いが、Ⅲ次床ではやや内傾するものが目立ってくる傾向にあり、径高指数も低下してくる。また、Ⅰ～Ⅲ次床を通して口縁部が高く底部の浅い形態が見られ、口縁部の高さは徐々に低くなっているが、一般的な器形のものとは異なる系譜のものが存在している。

調整については、蓋、身どちらも天井部、底部に丁寧な回転ヘラ削りを施しており、1/2以上の範囲まで及ぶものが多い。

**高坏** 高坏は無蓋のものしか確認できていなく、全体を通して出土量は少ない。形態はやや大きめの坏部が付く無蓋高坏A類と小型の坏部で棒状の脚が付く無蓋高坏B類があり、A類はⅠ次床で1点のみ確認されるだけで、Ⅱ次床では出土していない。B類はⅠ次床で脚部が出土しているが、確実に生産しているのはⅡ次床からで比較的出土量が多い。当窯跡からは長脚2段スカシのものは確認されていない。

**瓶** Ⅰ～Ⅲ次床で出土しているが、絶て口縁部破片であり、胴部は出土していない。Ⅰ次床からⅢ次床にかけて、口縁部の外反が強まり、頸部が長くなって細くなる傾向があると思われるが、推定でしかない。

**器台** この器種はⅠ次床で比較的多く見られるが、Ⅲ次床以降では殆どなくなっている。Ⅰ次床のものはスカシ、波状文をもつ装飾性の強い脚で、器肉の厚いしっかりとしたものである。

**壺** Ⅰ次床では小型で底部丸底の短頸壺が、Ⅱ次床では壺の胸部と思われる破片が、Ⅲ次床ではやや長い頸になると思われる壺が出土している。壺の出土する頻度は低く、Ⅲ次床で長頸状のものが存在していることが注目される（混入品の可能性もあり）。

**甕** 甕は口径の大きさにより、50cm台の大型、20～30cm台の中型、10cm台の小型に分けられる。大型は口縁部が外反し端部上下に突帯が付くもので、櫛描き波状文等が施される。中型は口頭部がやや直立気味に立ち上がり、端部で内湾する外面カキ目調整のものと口縁端部が複合口縁状に突帯の巡るものがある。概して文様をもつものは少ない。小型は口縁部が外反し端部外面の突帯が肥厚するもので文様はもたない。胴部の叩きは外面平行線文（H a類）、内面同心円文（D a類）で、H a類は細い条で目の細かいものが目立つ。外面のカキ目調整は例外的なもの以外は行っておらず、内面にナデ調整の一部及ぶものもみられる。内面D a類の種類によって幾つか分類しているが、Ⅰ次床とⅡ次床とで同じ文様が見られるものがあり、同一原体の可能性をもつ。

## 2. 1号墓跡

1号墓跡は窓体のみの調査で、灰原は区域外であるため調査していない。床は4枚確認されているが、遺物を伴っているのはⅠ次床の床面からが殆どで、僅かにⅢ次床から出土している。また、Ⅳ次床（最終床）の覆土からも少量出土しているが、混入品が多いようである。

### (1) Ⅰ次床（第19～22図、写真図版9～11）

1次床床面からは多数の遺物が出土しており、器種も蓋坏、高坏、腹、壺、横瓶、甕が確認できる。これらの出土量は個体識別法で算出した場合、蓋坏75個体（蓋75、身55）、高坏30個体（蓋3、身30）、腹2個体、壺7個体（蓋1、身7）、横瓶5個体、甕19個体で、高坏の量の増加と横瓶の一定量出土が目につく。

#### 蓋坏（1～33）

（蓋）口径13～18cmを測るもので、15～17cmに多く分布する。径高指数は20～27前後とやや低いものが目立ち、口径の大型化とも併せて、偏平な器形となっている。器形はやや平たい天井部からゆるやかにカーブして口縁部に至る壇のないものが主流であるが、口縁部下方にロクロ目状接線や段状の屈曲によって棱の面影を残すもの（1・2・6・9・11～13・18）も見られる。口縁端部は明瞭な内傾する段をもつもの（1～6・9～11）が多く、段の不明瞭なものと同じ程度を占めている。また、口縁端部の丸いもの（19）も少量ながら、一定量存在している。天井部の調整は回転ヘラ削りを施すが、周縁のみだけで中央部に回転ヘラ切り痕を残すものやラセン状に難に巡るものとなっている。また、少量ではあるが、回転ヘラ削りのまったく施さないものもあり、回転ヘラ切り未調整となっている。

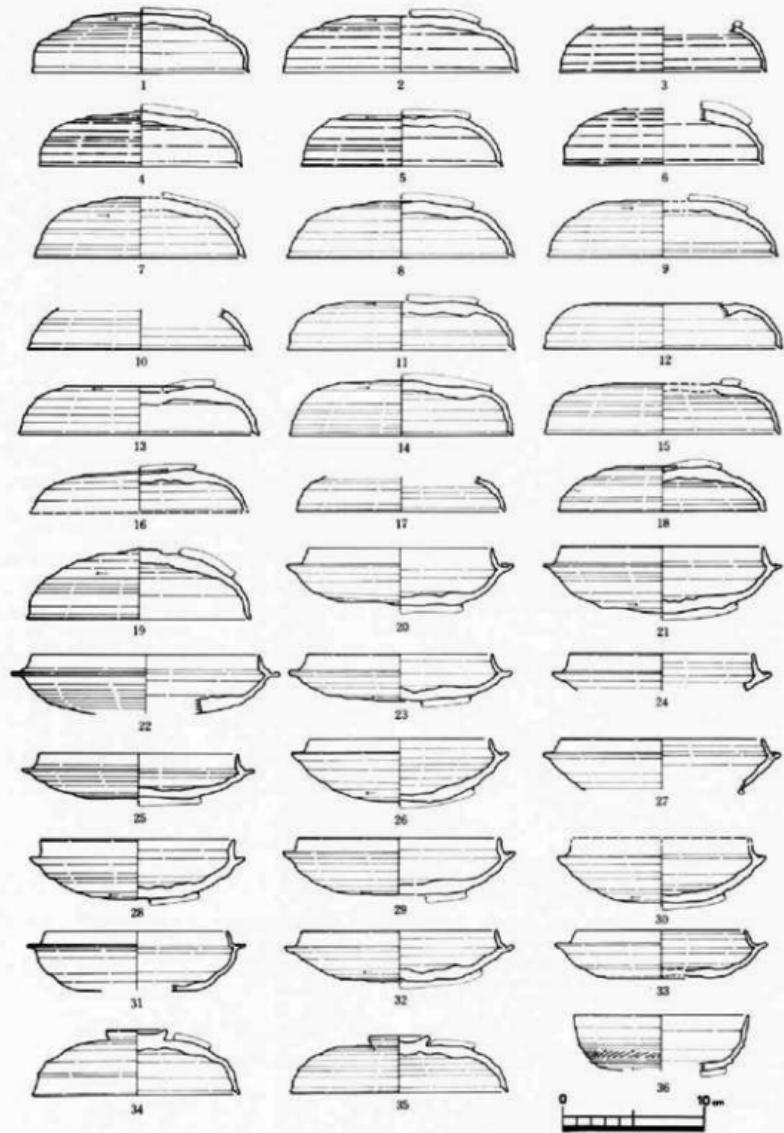
（身）口径12～17cm程度を測るもので、13～15cmに多く分布する。径高指数は24～34で、蓋と同様偏平な器形のものが目立つ。口縁部高は1～1.5cmに分布し、1.2cm以下に多い。底部の器形は平たいものと丸みを帯びるものがあり、前者が偏平器形となっている。口縁部の器形はただ内傾するものと内傾後やや直立気味に反るものとがあり、前者はやや薄手で均一な器内、後者は厚手の付け根から端部に向かって薄くなる器肉のものが多い。これらの7割近くは前者の形態であるが、後者の形態（21・22・25・28）も一定量見られる。底部調整は蓋天井部と同じ。

#### 高坏（34～45）

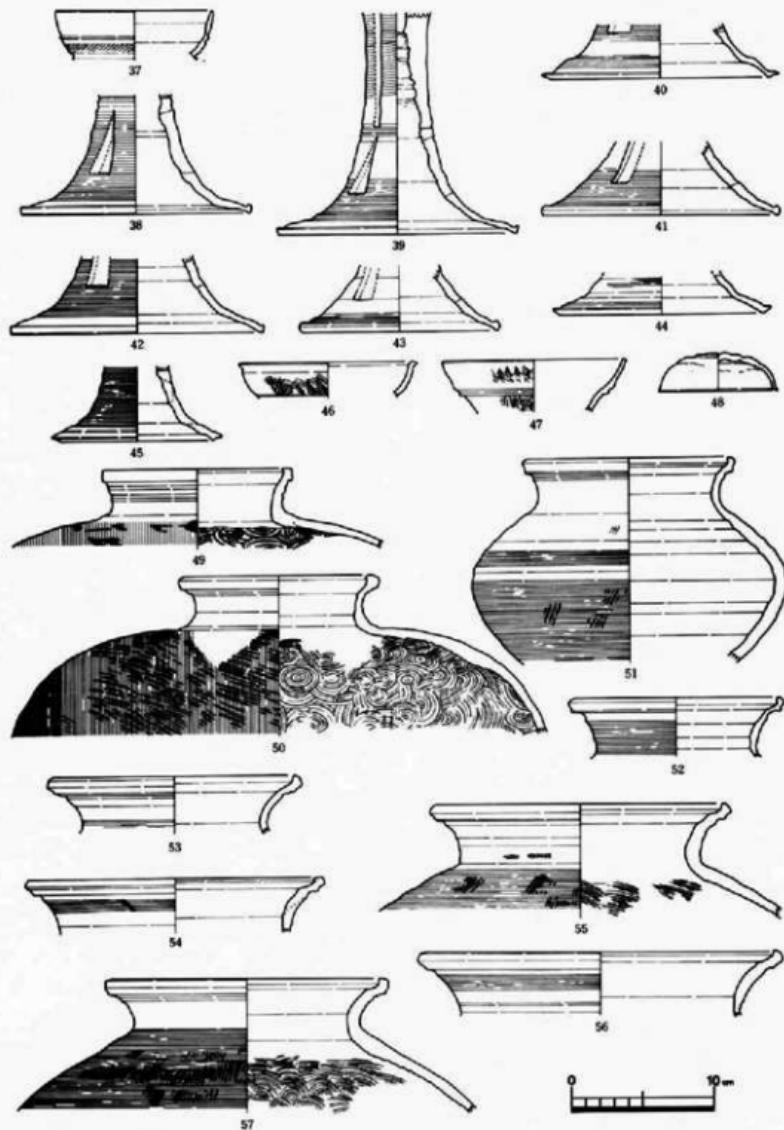
34・35は有蓋高坏の蓋で、口径14～15cmを測る。器形は坏蓋同様ゆるやかにカーブを描くもので、口縁端部にやや不明瞭な内傾する段をもっている。つまみは径4.5cm程度のやや大振りで偏平なものが付く。天井部調整は回転ヘラ削りを施す。

36・37は無蓋高坏の坏部で、坏蓋を逆転させたような器形をしている。体部中位と下端には棱線が2段施されており、その間を刷毛状工具による連続刺突文が施されている。

38～45は脚部破片で、大型でスカシをもつもの（38～44）と小型でスカシをもたないもの（45）に分けられる。前者のものは、脚底径14～17.5と大きなもので、裾部の外反が著しく、カキ目の施されるものが一般的である。脚の上方は筒状に伸びる器形で、径4～5cmとやや太めである。



第19図 1号窯跡1次床出土遺物 ( $S = 1/4$ )



第20圖 1号墓葬I次床出土遺物 (S = 1/4)

スカシは上下2段、3方に穿たれるもので、上が長方形、下が三角形か長方形となっており、三角形が目立つ。これらが、長脚2段スカシと言われるものだが、これらの幾つかは前述の無蓋高坏の脚部と思われ、この形態を無蓋高坏C類とする。後者は脚径が11cm程度のもので、裾部があり広がらず、外面カキ目調整となっている。スカシなしの短脚高坏の脚部かもしれない。

#### 壺 (46・47)

口径12~13cmを測る口頸部破片である。器形は口頸部の上方で1条の稜線を巡らし、その部分で弱く段状に屈曲している。段より上はやや幅広で、強くは外傾しない。口頸部には櫛描き波状文が施されている。

#### 壺 (48)

48は短頸壺の蓋と思われるもので、口径8.4cmを測る。器形は壺蓋と同じで、天井部が丸く、口縁端部に内傾する段をもつ。天井部はナデ調整である。この他にも壺の破片があり、底部付近にカキ目調整が施されている。

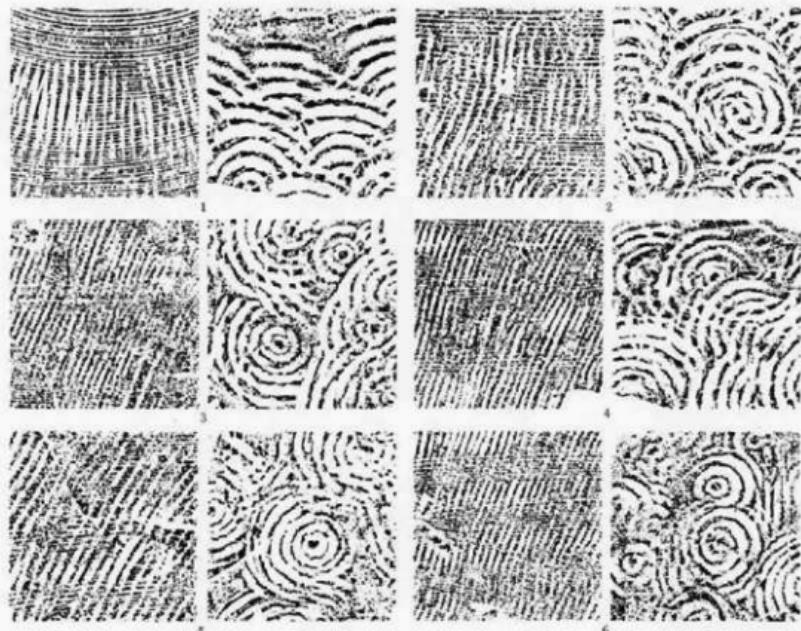
#### 壺瓶 (49・50)

口径13~14cmを測るもので、やや直立または外反する口縁部である。口縁端部はやや直立気味に立ち上がり肥厚する。胴部は長さ38cm程度で、外面に平行線文叩き(Ha類)後のカキ目調整、内面に同心円文叩き(Da-1類)が施されている。

#### 壺 (51~60、第21図)

口縁部は外反する器形だが、口縁端部の形態から端部が直立または内湾するものと上下端がやや突出し、端面が面を形成するものに分けられる。前者のものは小型、中型、大型がある。小型のもの(51・52)は口径14~15cm程度のもので、胴部中位に最大径をもち胴部の張った、壺に似た器形を呈す。調整は外面平行線文叩き、内面同心円文叩きと思われるが、外面カキ目、内面ナデ調整によって叩き目を消している。中型のもの(53~57)は口径17~20cm程度のもので、あまり肩の張らない器形をしている。胴部の調整は外面平行線文叩き後カキ目調整を入念に施すもので、叩きの大半を消している。内面は同心円文叩き(Da-1類が主)である。小型・中型ともに口縁部に文様はもたず、ナデかカキ目調整で仕上げている。大型のもの(58)は2段の横走する稜線で区画された間に擬波状文とでも言うような、カキ目の上に連続する「U」字状の沈線を施した文様を施している。また、図示していないが、大型のものには複合口縁状に肥厚した口縁部をもつもので、口縁部に櫛描き波状文を2段に施すものも見られる。後者のものは口径14cm程度の小型のもの(59)と口径22cm程度の中型のもの(60)とがあり、口縁部には文様をもたない。

胴部叩きについては外面平行線文叩き(Ha類)、内面同心円文叩き(Da類)のもので、外面叩き後には必ずカキ目調整を施している。Ha類は条が細く、木目の間隔の狭いものが主流で、木目が浅く不明瞭なものが目立つ。Da類の種類により3類に分類できる。1類(1・2)は中心円径3mmにくぼむもので、溝の幅が広い。2類(3・4)は中心円が径4mmの円形で、中心円外周の溝が浅く狭くなっている。3類(5・6)は中心円が径4mmの円形で、中心円外周の溝が



第21図 1号窯跡1次床甕胴部叩き文様 ( $S = 1/2$ )

幅広く中心が偏っている。1類の文様は全体の6割近くを占めるもので、小型・中型の甕や横瓶など薄手のものに多く見られる。また、1類の外面のカキ目調整は入念で、叩き目をかなり消している。2・3類は量は少ないが、厚手のものが多く、大型のものに使われていたようである。

#### (2) III次床(第22図中段)

III次床からは蓋坏、高坏、甕胴部破片が少量出土している。

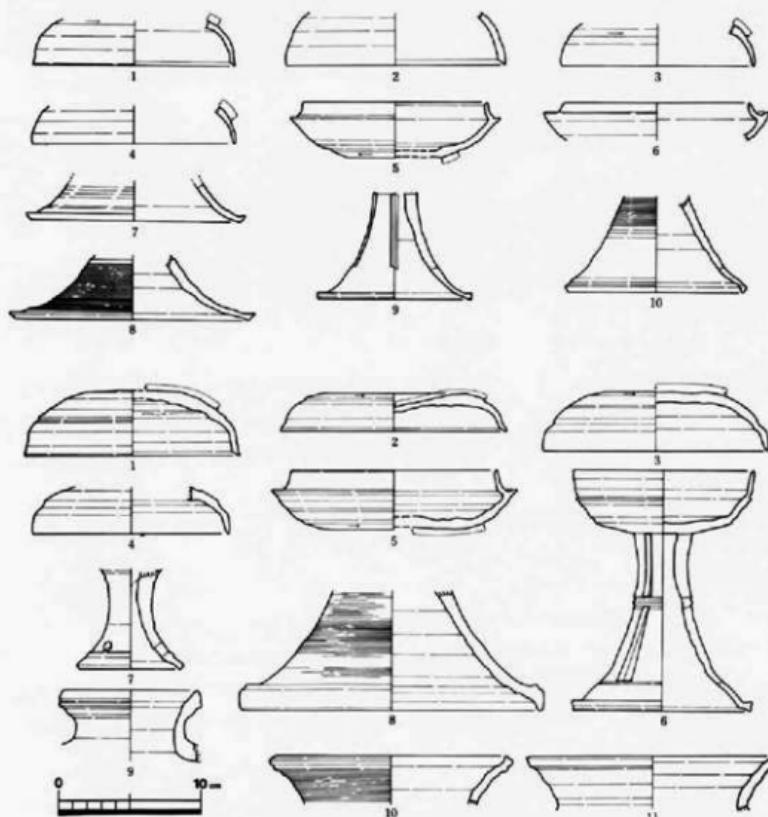
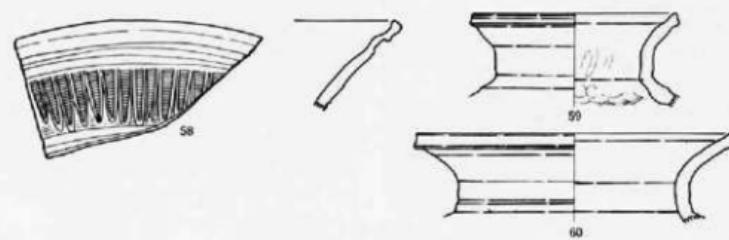
##### 蓋坏(1~6)

(蓋) 口径13.5~15.5cmを測るもので、天井部からゆるやかにカーブして口縁部に至る器形を呈する。口縁端部は不明瞭な段をもつもの(1・2)と段をもたない丸いもの(3・4)とがあり、後者が多い傾向をもつ。天井部には回転ヘラ削りを施すが、雜である。

(身) 口径13cm前後のもので、口縁部高0.9~1.3cm程度を測る。口縁部の器形は内傾後や直立気味に反るもので、器肉が付け根から端部に向かって薄くなるものが多く、薄手で均一な器肉のものは存在するが、少ない。

##### 高坏(7~10)

いずれもスカシをもつ脚部破片である。脚底径は12~16.5cmを測るもので、8のような裾広が



第22圖 1号窯跡Ⅰ次床(上)・Ⅲ次床(中)・Ⅳ次床覆土(下)出土遺物( $S = 1/4$ )

りのものもあるが、裾部で強く外反しないものが多いようである。スカシは2段3方のものが一般的とは思われるが、9のように4方に穿つものがある。9は裾のあまり広がらないもので、脚部上方は筒状に伸び、径3cm程度と細くなっている。

#### (4) IV次床（第22図下段、写真図版II）

IV次床は床面から遺物の出土ではなく、縦て覆土中のものである。遺物の量は少なくないが、IV次床が最終床ということもあって、混入品が多く含まれており、器種の数量や内容に信憑性がない。器種は蓋坏、高坏、腹、横瓶、甕が確認される。

#### 蓋坏（1～5）

（蓋）口径14～16cmを測るもので、天井部からゆるやかにカーブして口縁部に至る器形を呈す。口縁端部は弱い段をもつもの（2）と丸いもの（3・4）がある。天井部の調整は回転ヘラ削りを施すが、周縁のみで、中央はヘラ切り痕を残している。また、1のような天井部と口縁部の境を沈線で表現するものもあるが、器形・焼成から混入品と思われる。

（身）5は口径14.5cmを測る大振りでやや偏平なものであるが、口縁部高1.5cmを測る高いもので、I次床のものに似ている。

#### 高坏（6・7）

6は坏部が坏蓋の逆転したような器形で、体部中位と下端に稜線が2段施されている。脚部は長方形スカシを3方に2段穿たれており、裾部の外反はそんなに強くない。無蓋高坏C類に属するものであるが、I次床のものが坏部に刺突文をもち、脚部が裾広がりである点で異なっている。

7は裾部に3方の円孔スカシをもつ脚部破片で、無蓋高坏B類の脚部に似ている。しかし、これは脚の高さが7cm程度と短く、4号窯跡で出土しているようなものとはやや趣を異にしている

#### 横瓶（9）

口径9.6cmを測る小さいもので、短く強く外反する器形を呈す。これと接合はできないが、同一個体の脚部が出土しており、やや小型のものとなっている。脚部調整は摩滅が著しく不明。

#### 甕（10・11）

口径16～17cmを測る中型のもので、口縁部が外傾して立ち上がり、端部で内湾するもの（10）と端部で肥厚するもの（11）がある。また、図示していないが、大型のもので、口縁部に櫛描き波状文を施す破片がある。

#### (5) 1号窯跡須恵器様相

1号窯跡は4枚床が確認されているが、I次床とIII次床からしか床面出土の遺物はなく、しかもその大半はI次床である。よって、ここではI次床の須恵器の様相を中心として述べるが、III次床の須恵器への変化もできる限り述べてゆきたい。

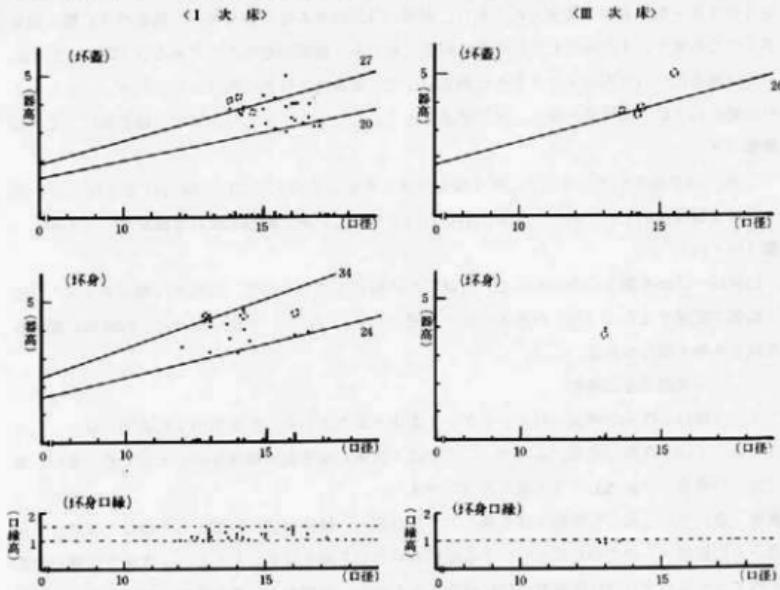
蓋坏 蓋については1号窯跡全体を通して、天井部と口縁部の境が明瞭なものはなくなり、天井部から口縁部へとゆるやかにカーブする器形のものが主流となる。しかし、I次床では稜の面影を残すようなロクロ目状稜線や段状に屈曲するものが一定量おり、III次床ではそれがなくなる傾

向が見られる。また、I次床では口径の大きなもので天井部の平たいものが目立ち、偏平な感じを受けるが、III次床では口径の大きなものではなく、天井部が丸くなっている。口縁端部では丸いものがこの段階から出現し、徐々に増加する傾向にあるようだが、主流となるのは内傾する段をもつもので、I次床では明瞭なものが多いが、この段階での一般的な形態は不明瞭なものと思われ、III次床では明瞭なものはなくなっている。

身については、蓋と同様、I次床で口径が大きく偏平なものが目立つが、III次床では確認できていない。口縁部高は1~1.5cmに分布し、I次床からIII次床へと低くなる傾向がみられる。口縁部形態は内傾形で厚さが薄手均一のものと内傾直立気味に反る器形で、付け根から端部に向かって薄くなるものがあり、前者が古い形態のものと思われるが、I次床では前者が主体であったものが、III次床では後者が主体になる傾向が見られる。

天井部、底部の調整については殆どが回転ヘラ削りを伴っているが、周縁部のみや雑なラセン状に施すもので、中央部に回転ヘラ切り痕を残すものが目立つ。

**高坏** 無蓋高坏はC類とした。坏蓋を逆転したような器形の坏部に長脚2段3または4方スカシの脚が付く器形のものが主流である。脚部はI次床で脚底径の大きく外反の著しいものが目立ち、三角形のスカシが見られる。III次床では脚底径がやや小さくなり外反が弱まる傾向にあり、スカシ形は方形のもののみとなり、4方に穿たれるものも見られる。



第23図 1号窓跡蓋坏法量分布図

有蓋高坏は出土していないが、蓋が出土しており、脚部片のいくつかは有蓋高坏に付くものと考えられる。

**甕** I次床からしか出土しておらず、全体としても僅少である。口径は4号窯跡のものと比べ、やや小さくなり、口頸部上方の段の屈曲が弱くなる。また、段から上の部分が幅広となっており、4号窯跡のものよりやや外傾度が弱まる。

**横瓶** I次床で一定量出土しており、中型甕と同じ種類の同心円文叩き（D a - 1類）が施されている。口縁部形態は口縁端部でやや内湾し肥厚する器形で、小型、中型甕の口縁部に類似する。

**甕** 口径の法量から小型、中型、大型に分けられる。器形は肩の張らない、撫で肩のもので、口縁部は外反して端部で内湾または直立するものが一般的である。小型・中型のものは口縁部無文のもので、カキ目を施されるものもある。調整は叩き後に外面カキ目を施すもので、カキ目を施さないものは僅少である。特に小型・中型のものはカキ目が入念で、叩き痕を消去するものが目立つ。

### 3. 5号窯跡

5号窯跡は窯体の上半が破壊されており、窯体の下半分と灰原を調査した。灰原からの遺物は僅少で、大半が窯体内からの出土である。床は8枚確認（修復を含めれば10枚）されており、各床面で遺物が出土している。I次床から順に説明する。

#### (1) I次床（第24図上段、写真図版12）

遺物は少なく、蓋坏16個体（蓋16、身4）、甕1個体確認できるだけである。

##### 蓋坏（1～4）

（蓋）口径13～17cm前後に分布し、やや偏平なものが目立つ。天井部と口縁部の境は不明瞭なもの（1～3）が多く、若干段状に屈曲するもの（4）がある。口縁端部は総て不明瞭な弱い内傾する段をもつもので、丸いものはない。天井部の回転ヘラ削りは施さないものも（3）あるが、殆どのものに施されている。

（身）口径15～16cmのもので、口縁部高が1cm以上を測る。口縁部は薄く内傾する。小破片のものばかりで、図示できていない。

#### (2) II次床（第24図中段、写真図版12）

この床は小規模な修復がされているが、修復前の床面からは遺物の出土がなく、総て修復後の床面からの出土である。遺物の量は比較的多く、器種も蓋坏、高坏、甕、壺、甕が確認されている。個体識別法で算出した場合の数量は、蓋坏50個体（蓋50、身21）、高坏1個体（蓋1、身1）、甕1個体、壺3個体（蓋2、身3）、甕1個体で、新しい器種として長頸壺の一定量出土が目につく。

##### 蓋坏（1～8）

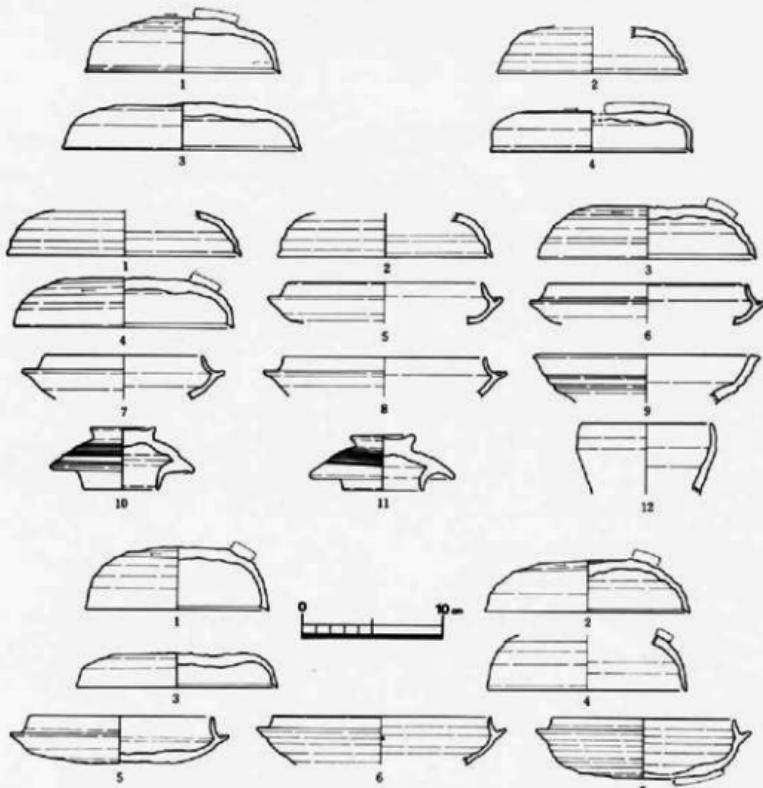
（蓋）口径は13～17.5cmを測るもので、15～17cmに多く分布する。器高はI次床と同様低いものが目立ち、偏平な感じを受ける。器形は天井部からゆるやかにカーブして口縁部に至るもののが多

く、境は不明瞭となっている。口縁端部は総て内傾する段をもつが、明確なもの（1）は少なく、不明瞭なものが殆どである。天井部の調整は回転ヘラ削りをするものが主体だが、その殆どは周縁のみとなっている。

（身）口径11～14.5cmを測るもので、14cm前後に多く分布する。口縁部高は1～1.5cmに分布し、均一の厚さで内傾または内反する器形である。器高は蓋と同様偏平なものが存在し、底部が平たくなっている。

#### 甕（9）

口径16cmを測るもので口縁部上方に2条の沈線を施し、その部分で屈曲して段を作っている。段は弱く、口縁部は無文である。



第24図 5号窯跡1次床（上）・2次床（中）・3次床（下）出土遺物（S=1/4）

### 壺（10～12）

10・11は長頸壺の蓋で、つまみをもち、口縁部にかえりを有する形態である。口径は5～6cm、受部径10cm前後を測り、つまみが径4.5cm程度の大振りな偏平器形となっている。天井部にはカキ目が施される。

12は長頸壺の口頸部破片と思われるもので、口縁部付近でやや内湾する。

その他図示していないが、壺の胴部破片が數点あり、外面平行線文叩き（Ha類）、内面同心円文叩き（Da類）が施されている。同心円文は1号窯跡1次床で見られた1類・2類と同種のものが出土している。

### （3）Ⅲ次床（第24図下段、写真図版12）

出土遺物は少なく、蓋環11個体（蓋11、身6）、高环1個体（蓋1、身1）が出土しているだけである。

### 蓋環（1～7）

（蓋）やや例外的な1を除けば、口径13.5～16.5cmに分布する。器形は天井部から口縁部にかけてゆるやかなカーブを描くもので、境は不明瞭である。口縁端部は段をもつものが主であるが、段は極めて弱く、内傾する面的なもの（2・3）となっている。また、少量ではあるが、口縁端部の丸いもの（4）も見られる。天井部の調整は周縁だけ回転ヘラ削りを施すもので、中央は回転ヘラ切り痕を残している。

（身）口径13～15.5cm前後を測るもので、口縁部高が1～1.5cmに分布する。口縁部器形は厚さの均一なもの（5）も見られるが、主体は太い付け根から端部に向かって細くなるもの（6・7）で、内傾する器形である。底部調節は蓋天井部と同じ。

### （4）Ⅳ次床（第25図上段、第26図上段、写真図版13）

比較的遺物の量が多く、蓋環、高环、罐、壺、壺の器種が確認できる。個体識別法で算出した場合の数量は、蓋環71個体（蓋71、身24）、高环1個体、罐3個体、壺2個体（蓋2、身1）壺2個体を数える。

### 蓋環（1～12）

（蓋）口径12.5～16.5cmを測るもので、14～16.5cmに多く分布する。器高はⅡ次床のものよりもやや高くなり、天井部の平たいものは少ない。器形は天井部から口縁部にかけてゆるやかにカーブするもので、少量ながら口縁部で段状に屈曲するもの（1）も見られる。口縁端部は段をもつものが主流だが、1のようなやや明瞭に内傾するものは少なく、殆どが不明瞭なもので、段というよりも内傾する面的なもの（2～4）となっている。また、丸い端部のもの（5～7）も一定量存在し、3割強を占める。天井部調整は殆ど回転ヘラ削りを施すが、雑なものである。

（身）口径12～15.5cmを測るもので、13～15cmに多く分布する。器高は比較的高く、底部が丸くなっている。口縁部高は0.8～1.5cmに分布し、口縁部形態は厚さが均一で内傾するもの（8～10）と、付け根から端部に向かって薄くなるもので、内傾後屈曲して直立する器形のもの（11・12）

とがある。概して、前者は口縁部高が高く、後者は低い傾向をもち、ほぼ同じ程度存在している。底部調整は蓋天井部と同様であるが、周縁のみヘラ削りを施すものは少ない。

#### 壺 (13~15)

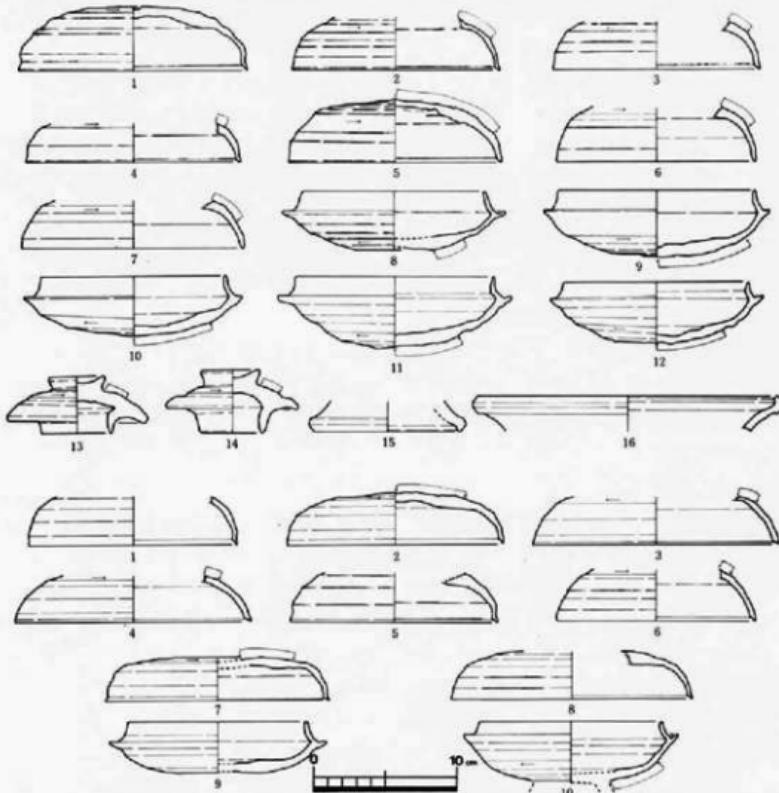
13・14は長頸壺の蓋で、口径4~5cmを測る径の小さなものである。口縁部は長いかえりをもつ。つまみは径4cm前後のもので、中央のくぼんだ偏平な器形を呈す。天井部には回転ヘラ削りが施される。

15は脚部のみの破片であるが、長頸壺の脚部である可能性が強い。

#### 甕 (16、第26図上段)

16は口径21cmを測る中型のもので、口縁端部で内湾する器形を呈す。

胴部叩きは總て外面平行線文叩き (H a類)、内面同心円文叩き (D a類) で、外面にはカキ



第25図 5号窯跡IV次床(上)・V次床(下)出土遺物 (S=1/4)

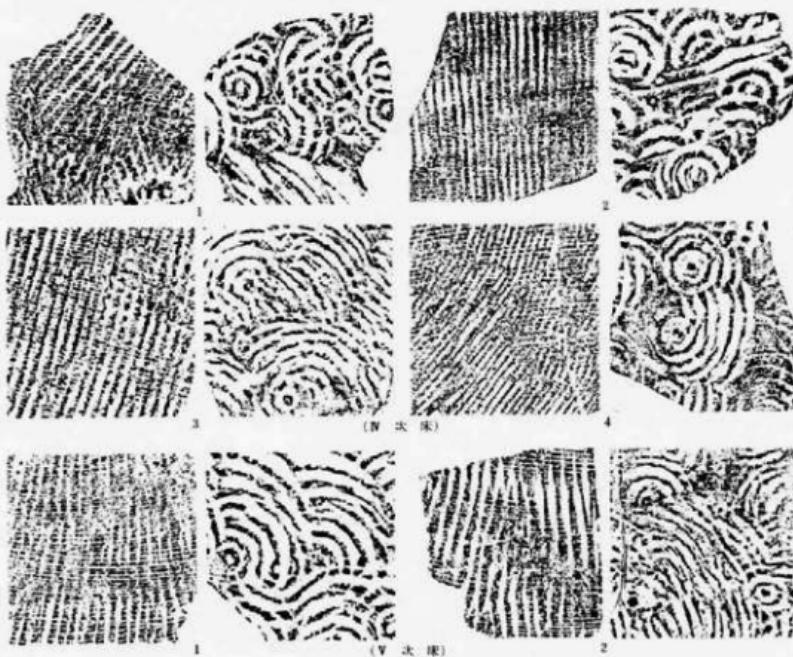
目調整が施される。Da類の種類によって3つに分けられる。1類(1・2)及び2類(4)はそれぞれ1号窓跡1次床の1類・2類叩きと同様のものである。3類(3)は中心円径が4mmのほぼ円形で、中心円の周りの溝が幅広となっている。1・2類の占める量は多く、全体の半数以上である。

(5) V次床(第25図下段、第26図下段)

V次床からの遺物は少なく、蓋坏38個体(蓋38、身5)、有蓋高坏1個体以外は少量の壺の破片が出土しているだけである。

蓋坏(1~9)

(蓋)口径14~18cmを測るもので、14~16cmに多く分布し、器高の低い天井部の平たい偏平なもの(7・8)が一定量存在する。器形は天井部からゆるやかにカーブして口縁部に至るもので、口縁部で段状に屈曲するもの(5・7)も少量見られる。口縁端部は不明瞭な内傾する段をもつものが多く、丸いものは2割程度である。天井部の調整は雑な回転ヘラ削りを施すものが多いが、回転ヘラ切り未調整のものも一定量見られる。



第26図 5号窓跡IV・V次床壺胴部叩き文様(S=1/2)

(身) 口径12.5~14.5cm程度を測るもので、口縁部高1.3cm前後に分布する。器形は底部の平たいや偏平なもの(9)があり、口縁部の厚さが均一で内傾する。9は内面底部に同心円文の押圧痕が見られる。

#### 高坏(10)

脚部を欠損する有蓋高坏で、坏部の形態は蓋坏の坏身と同様である。口径は13cm程度で、口縁部立ち上がりは厚さが均一で薄く内傾する。底部には回転ヘラ削りが施され、脚の基部径が5.5cmを測る。

#### 甕(第26図下段)

甕の胴部叩きは総て外面平行線文叩き(Ha類)、内面同心円文叩き(Da類)で、外面にはカキ目調整が施される。Da類の種類から3つに分類できる。1類(1)は1号窯跡I次床の1類叩きと同様のもので、傷の位置から同一原体が確認できる。2類は1号窯跡I次床の2類叩きと同様のものである。3類(2)は中心円径が4mmの円形で、中心が偏り中心円の周りの溝が途切れている。量は少なく、割合を出すまではいかないが、1・2類のが目立つ傾向にあり、3類の文様はあまり多くはない。

#### (6) VI次床(第27図上段、写真図版13)

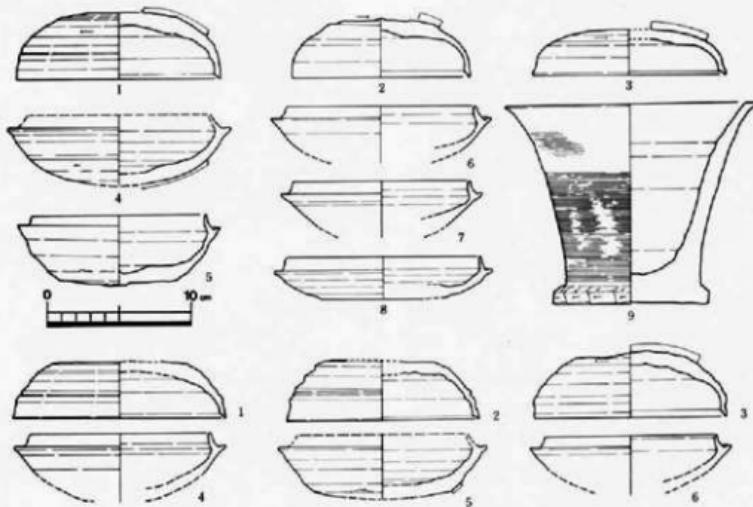
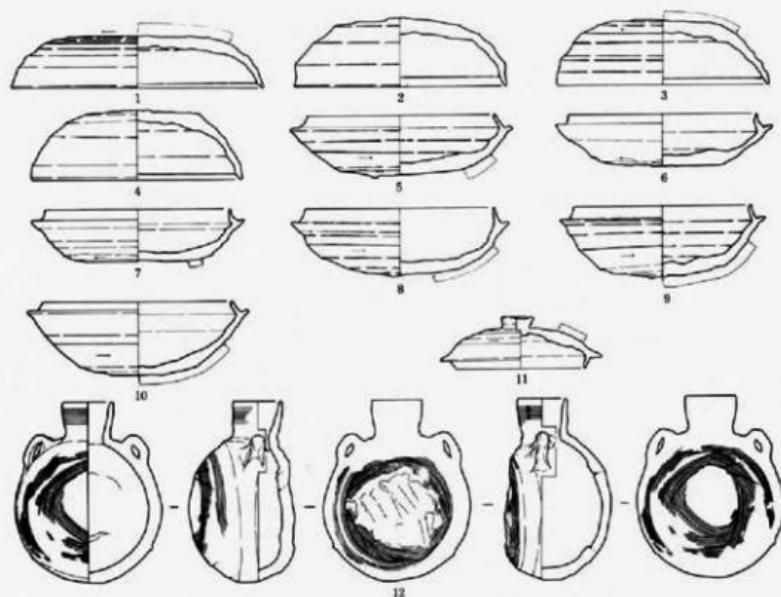
VI次床は小規模の修復が行われており、殆どが修復後の床面から出土している。修復前の床面からは図示した2・4・6の蓋坏が3個出土しているが、その他に遺物はなく、修復後の遺物と同様の法量、器形をしているため、まとめてVI次床の遺物として扱う。器種は蓋坏、すり鉢、壺、提瓶、甕で、蓋坏の23個体以外はそれぞれ1個体のみの出土である。

#### 蓋坏(1~10)

(蓋) 口径13~16.5cmを測るもののが殆どで、14~15cmに中心をもつ。器高は高く天井部の丸いもの(2~4)とやや低いものがあり、いずれも口縁部に向かってゆるやかにカーブする器形を呈す。口縁端部は厚手のものが目立ち、端部は丸いがやや内側に段をもつ形態のもの(2~4)が出てくる。また、口径が大きく天井部の平たい偏平なもの(1)も少量ながら存在するようである。天井部の調整は依然として回転ヘラ削りを施すものが大半であるが、ヘラ切り未調整のものも多く見られるようになる。

(身) 口径12~15.7cmを測るもので、13~13.5cm前後に集中する。口縁部高は1cm以下のものが殆どで、9mmぐらいに集中する。器形は器高が低く径高指数30前後に分布する底部の平たいものと器高が高く径高指数39前後に分布する底部の丸いものとに分けられる。前者(5~7)の器形は口縁部が内傾後直立気味に屈曲するものが多く、底部平坦部に回転ヘラ切り痕を残している。後者(8~10)の器形は口縁部が内傾するものが主体で、底部の1/2以上を回転ヘラ削りしている。これらの量比は同じ程度であり、この他にも坏蓋1に伴うような口径が大きく偏平な器形のものも少量ながら存在するようである。

#### 甕(11)



第27図 5号窯跡VI次床（上）・VII次床（中）・VIII次床（下）出土遺物（S=1/4）

長頸壺の蓋と思われるもので、口径9cmを測り、短いかえりをもつ。つまみは径2.3cmと小さく、天井部に回転ヘラ削りを施す。II次床やIV次床で出土している壺蓋と口径やかえりの形態で異なっており、別器種の可能性ももつ。

#### 提瓶(12)

口径3.5cm、器高12.8cmの小型のもので、肩に小さなしっかりとした2個の輪状把手がつく。胴部は片側が球状に出っ張り、片側が平坦となっている。調整は両面ともカキ目状に回る刷毛目が施されるが、出っ張った方の面はその中央をナデつけている。

#### (7) VII次床(第27図中段、第28図、写真図版14)

VII次床は比較的遺物の量が多く、蓋坏43個体(蓋43、身19)、高坏1個体、すり鉢1個体、壺1個体、甕2個体が確認できる。

#### 蓋坏(1~7)

(蓋) 口径は12.5~17.5cm前後にばらつくが、口径の大きなものはゆがみのものも含んでいる。器形は天井部からなだらかにカーブするものであるが、器高が高く丸いもの(1・2)と低く偏平なもの(3)に分けられ、器高の高いものに平たい天井部をもつものがみられる。口縁端部は厚手で丸く微弱な段をもつものが殆どを占める。天井部の調整は回転ヘラ削りを施すものが大半で、ヘラ切り未調整のものは依然として少ない。

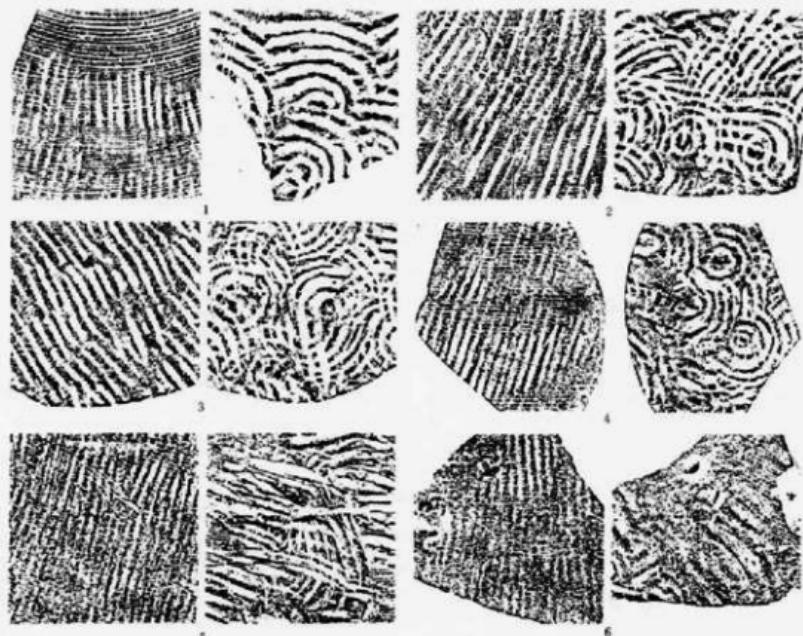
(身) 口径は12~13.5cm程度に分布する。口縁部は高さ1cm以下で、内傾の形態と内傾後直立気味に屈曲する形態のものが融合したような形態となる。器形は器高が高いものと器高が低いものに分けられ、前者のものには底部の丸い(4・7)ものと底部の平たいもの(6)があり、後者のもの(8)は底部の平たいものが多いようである。調整は底部の丸いものが底部1/2の範間に回転ヘラ削りが施され、底部の平たいものは底面ヘラ切り未調整で、その周縁に回転ヘラ削りが施される。

#### すり鉢(9)

口径17.6cm、底径11cm、器高14.1cmのもので、台状に厚くなかった底部から僅かに外傾して立ち上がり、口縁端部が平坦面をもつ器形である。体部外面はカキ目調整、底部は手持ちヘラ削りを施す。

#### 甕(第28図)

胸部叩きは外面が平行線文叩き(Ha類)、内面が同心円文叩き(Da類)で、外面にカキ目を施すものが比較的少ない。Da類の種類により3つに分けられる。1類(1)は1号窯跡I次床の1類と同様のもので、傷の位置から同一原体が確認される。出土量は少ないが、4点確認できる。2類(2~4)は中心円が径6.5mmの片側のやや角張った大きな円形で、溝が浅い。出土量はVII次床の中で最も多く、主に中型甕に多いようである。3類(5・6)は中心は不明だが、溝が太くやや深いものである。内面ナデ消しのものが多く見られ、大型甕のような厚手の器肉が多い。



第28図 5号窯跡VII次床甕胴部叩き文様 (S = 1/2)

(8) VII次床 (第27図下段、写真図版14)

床面からの遺物は極めて少量で、總て蓋坏である。また、最終床ということもあって若干混入品も含まれているかもしれない。

蓋坏 (1~5)

(蓋) 口径13.5~15cmと小振りなものが目立ち、器高が高くなっている。天井部は平坦面をもつもの(1・2)と丸いもの(3)があり、器形全体が丸みを帯びる。後者は天井部の1/3程度に回転ヘラ削りを施すが、前者は周縁に一周だけで平坦面にはヘラ切り後のナデが施される。口縁端部は厚手で極めて弱い内傾する段をもつもので、丸いものは確認されない。

(身) 口径12~13cmを測る小振りなもので、口縁部高が1cm以下になる。口縁部器形は内傾するもので、端部に向かって薄くなる。底部器形は深いものが多いと思われ、底部に平坦面をもつもの(5)も見られる。調整は蓋天井部と同様と思われる。

(9) 5号窯跡の須恵器様相

5号窯跡は床が8枚存在し、蓋坏を中心として順次器種変化している様子がみられる。器種ごとにその変化を述べて行きたい。

**蓋坏** 蓋坏の変化は比較的明瞭で、5号窯跡の中で4段階に区分可能である。

(1段階) I次床とII次床の段階で、やや大振りで偏平な器形のものが目立つ。蓋については天井部と口縁部の境がなくなり、ゆるやかなカーブを描く器形となる。口縁端部は内傾する段をもつものばかりで、不明瞭なものが主体だが、やや明瞭なものも少量見られる。身は底部の平たいものがおり、口縁部高は1~1.5cmを測る。口縁部の形態は厚さが均一で、内傾するものが大半である。以上の特徴は1号窯跡I次床のものによく似ており、同じ段階として位置づけられる。

(2段階) III次床、IV次床、V次床の段階で、大振りで偏平な器形のものは減少し、径高指数蓋30、身35前後のものが多くなる。蓋については天井部が丸味を帯びるのが目立ち、天井部の平たいものが減る。口縁端部は丸形態が一定量存在するようになり、段をもつものは内傾する面状の形態化したものが目立ってくる。身は底部の平たいものが殆どなくなり、口径がやや縮小する傾向がみられる。口縁部は1段階と同様の高さをもつが、内傾後屈曲して反り、端部に向かって薄くなる器形のものが定量出現する。

(3段階) VI次床、VII次床の段階で、大振り偏平器形のものは消滅し、2段階よりもはっきりと口径が縮小する。蓋は天井部の丸い器形のものが径高指数25前後のものと径高指数35前後のものに分化し、また、新しく天井部が平たく径高指数35前後を測るもののが出現する。口縁端部は厚手で丸く微弱な段をもつものとなり、2段階のような薄手の端部はなくなる。身は底部が平たく径高指数30前後のものと底部が丸く径高指数40前後のものがあり、器高の高いものには底部の平たいものも存在する。口縁部は高さが1cm以下となり、器形は厚さが均一で強く内傾するものと、端部へ薄くなる器肉で内傾後反るものとがあり、後者が主体を占める。

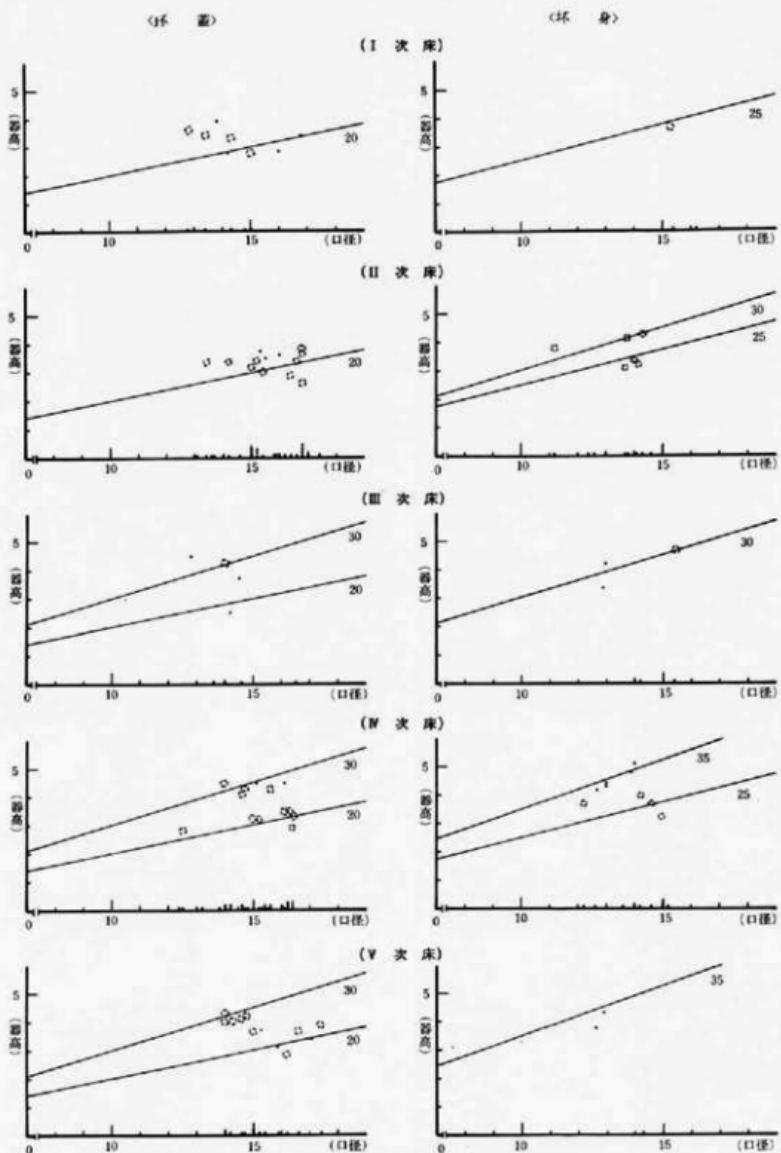
(4段階) VII次床の段階で、口径が縮小し、蓋で14cm前後、身で12cm台にまとまる。蓋は3段階のものと器形的に変化はないが、器高が高く天井部の平たいものが目立ち、天井部ヘラ削りの省略化が目立つ。身は口縁部が短く内傾するもので、端部に向かって厚さを薄くする。器形は器高の高いものが多いようで、低いものは確認できていない。

以上、蓋坏について述べたが、4段階のうち大きな変化をもつものは2段階と3段階の変化で、1と2や3と4の変化は小さい。また、調整については天井部、底部に回転ヘラ削りを施すものがⅡ次床まで見られ、ヘラ削りが消滅することはない。ただし、全体に巡るものは少なく、簡略化の傾向にあり、平坦面は回転ヘラ切り痕をそのままに残すことが一般的である。

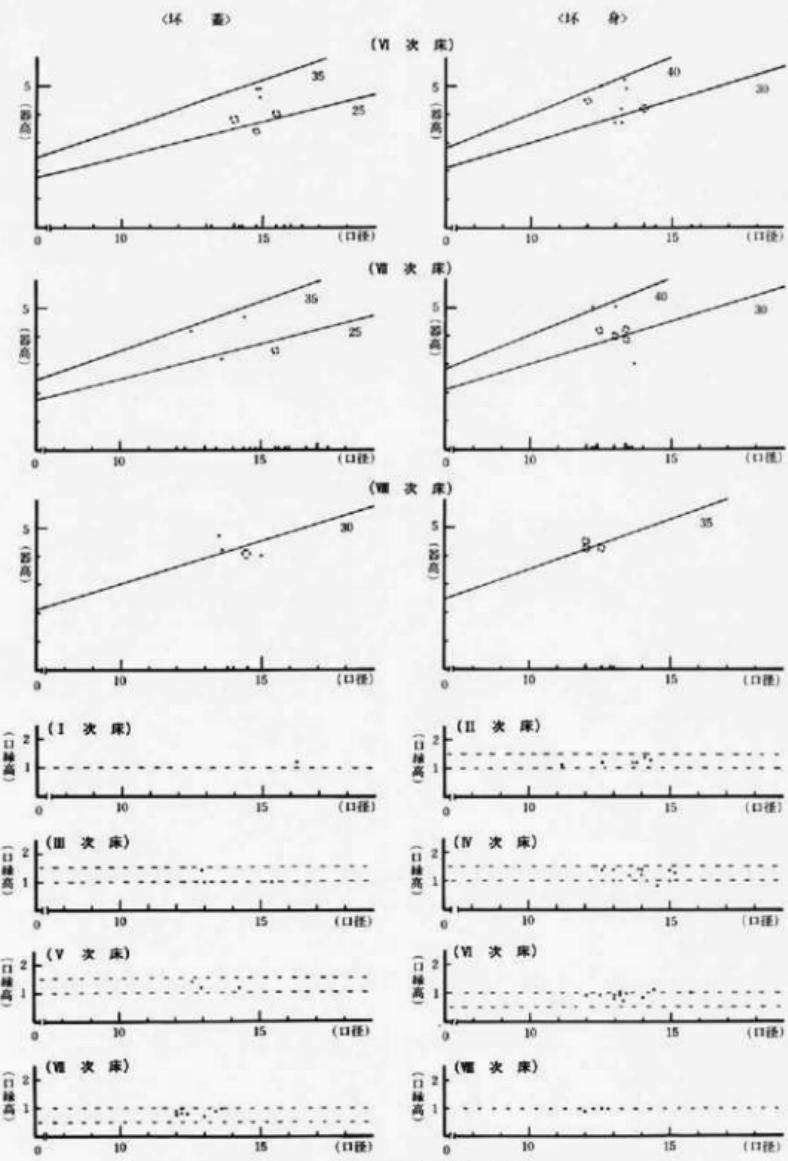
**壺** II次床で長頸壺が出現しており、以後も一定量生産されている。壺蓋は口径の大きなものから小さくなる傾向があるようで、天井部調整がカキ目を施すものから回転ヘラ削りを施すものへと変化している。II次床では口縁部の内湾する、あまり口頸部が長くならないであろう器形のものが、IV次床では脚の短くなるであろう器形のものが出土している。

**撹瓶** VI次床で完形のものが出土している。小型の製品で、調整は極めて粗雑だが、しっかりとした輪状把手が両肩についている。

**甕** 甕は胴部叩きについて述べる。甕の出土はII次床、IV次床、V次床、VII次床で多くみられ、



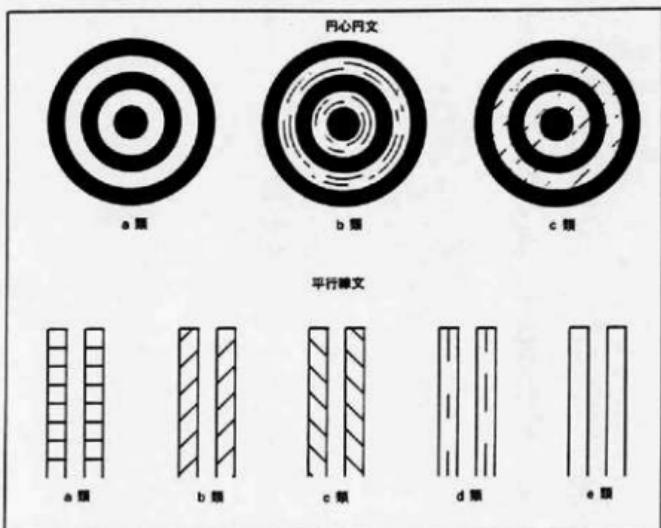
第29圖 5號窯路蓋環法量分布図(1)



第30図 5号蒸跡蓋環法量分布図(2)

それらを比較して変化を見てみたい。II次床、IV次床、V次床は1号窯跡I次床で確認された叩き文様1類、2類と同様の種類の同心円文叩きが見られ、V次床で傷の位置から原体同定できるものが見られる。1号窯跡とは異なる種類の叩き文様もあるが、主体は同種類のものとなってい。VI次床でも1号窯跡I次床の同心円文叩き1類と同種のものが出土しているが、全体での割合は低く、II次床からV次床まで確認されていない種類の文様が殆どとなっている。以上のように、1号窯跡I次床と同種文様叩きを施す段階とI次床同種文様が殆ど消滅し、新たな叩き文様が施される段階に分けられ、その転換は蓋坏で見られた2段階と3段階との変化に呼応する。

註（1）甕の胸部叩き文様については、内堀信雄氏の研究（「叩き目文の原体同定」『辰口町湯屋古窯跡』辰口町教育委員会1985）に基づいて分類した。尚、下記分類図は上記報告より転載した。



名 称	分 類 基 準	略 号	名 称	分 類 基 準	略 号
同心円文 a 種	木目のみられないもの	Da	平行線文 b 種	木目が右上がりに斜交するもの	Hb
同心円文 b 種	年輪状の木目のみられるもの	Db	平行線文 c 種	木目が左上がりに斜交するもの	Hc
同心円文 c 種	粗目状の木目のみられるもの	Dc	平行線文 d 種	木目が平行するもの	Hd
同心円文 e 種	木目が取り込みに対し直交するもの	He	平行線文 e 種	木目がみられないもの	He

- (2) 無蓋高环A類は陶邑編年（田辺昭三『須恵器大成』1981）のMT15型式やTK10型式でみられる、やや脚が長めになった1段スカシの無蓋高环を想定したい。  
 (3) 無蓋高环B類は細長い棒状の脚をもつ特殊な器形のもので、南加賀地方の窯跡（戸津六字ヶ丘5号窯跡）や古墳（植田後山明神1・3号墳）から出土しており、いずれも当期に位置づけられるものばかりである。  
 (4) 小型提瓶は法量や口頭部及び胴部の器形、調整から陶邑編年のTK43型式以降のものと類推できるが、この時期の提瓶の把手はカギ形突起やボタン状突起となっており、輪状のものは見られないのが一般的である。

## 第2項 奈良時代の遺物（2号窯跡出土遺物）

当遺跡で奈良時代に位置付けられる窯跡は2号窯跡の1基のみで、今回は窯体のみを調査している。この窯跡は床面が1枚しか確認されておらず、その床面上には多数の生焼け品が取り残されていた。遺物は床面上に取り残された生焼け完形品の蓋環が多く、有台环の上に坏蓋を乗せた状態で出土しているものが十数個体ある。器種構成は蓋環75個体（坏蓋75、有台环47）、無台环2個体、壺5個体（破片だが、胴部叩き文様の違いから個体数推定）で、この器種構成は食膳具のかなりの量を蓋環が占め、無台环はたった2個体である点で、かなり偏った比率を示しているが、窯詰め時の様相をかなり反映するものとして考えたい。また、この窯体内には焼きが強く、歪みや降灰の見られる一群が存在しており、焼成部に並べるように設置してあることから、焼台として使用されたものと考えられる。それらの内訳は、坏蓋24点、壺3点で、坏蓋はほぼ完形のもので、壺は胴部破片である。

### 1. 各器種の検討（第31～34図、写真図版15～17）

#### （1）蓋環

蓋環、有台环とも「一器種一法量」のもので、法量による分化は認められない。

坏蓋（1～54） 坏蓋は製品（1～48）と焼台（49～54）が存在するため、分けて述べる。

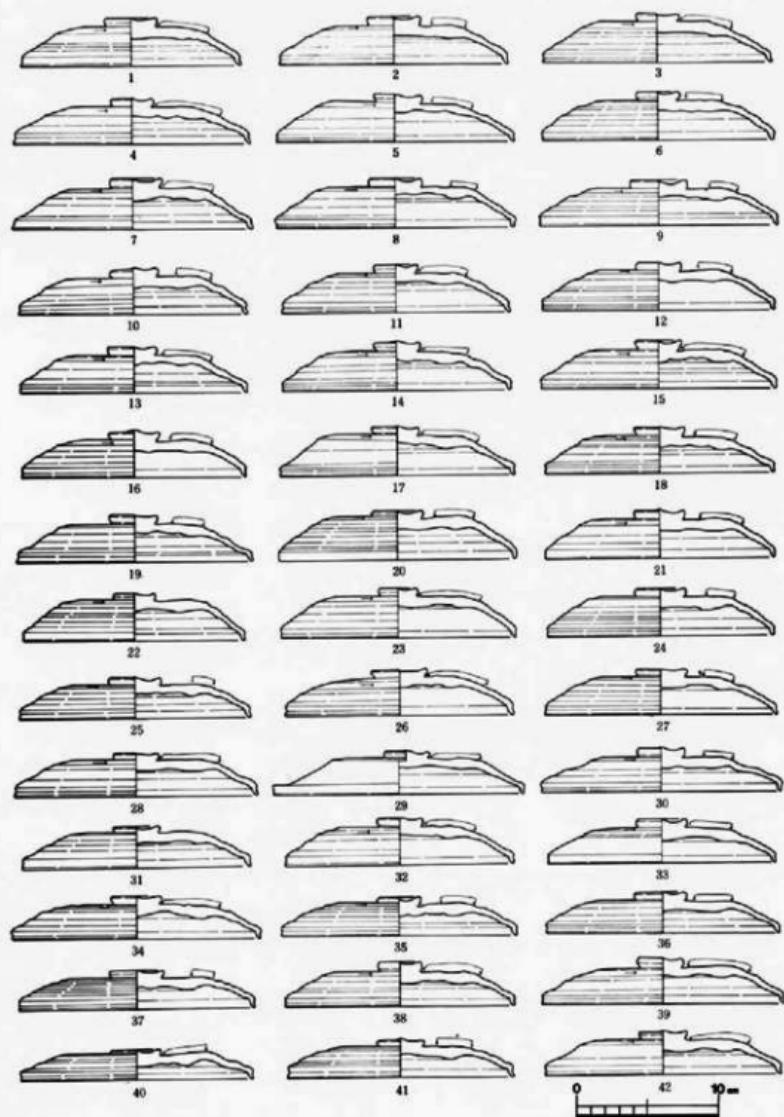
（製品）口径は15.4～17.6cmを測るもので、16～16.5cmに集中する傾向をもち、器高の高いものが目立つ。器高のやや高目のものは天井平坦部が狭く体部が長く開く器形のもの（7～21）が多く、次いで天井部に丸味をもつもの（1～6）、広い天井平坦部をもつもの（22～24）は少ない。器高のやや低めのものは天井平坦部が狭く体部が開くもの（25～36）と天井平坦部が広く体部の短いもの（37～48）が同じ程度存在する。口縁端部はやや長めに外反するものが主流で、全体の7割近くを占め、外反するがやや短いもの2割と長めに折り曲げるもの1割が存在する。つまみ形態は総て偏平な宝珠紐でつまみ径3～3.5cmのものが多い。調整は総て天井部を回転ヘラ削りしており、内面平坦部にナデつけの見られるものが多い。

（焼台）口径は16.5～17cmのものが多く、ひしゃげているために器高が低くなっている。器形や口縁端部の形態は製品のものと大差ないが、つまみが3cm程度の小さいものとなっている。

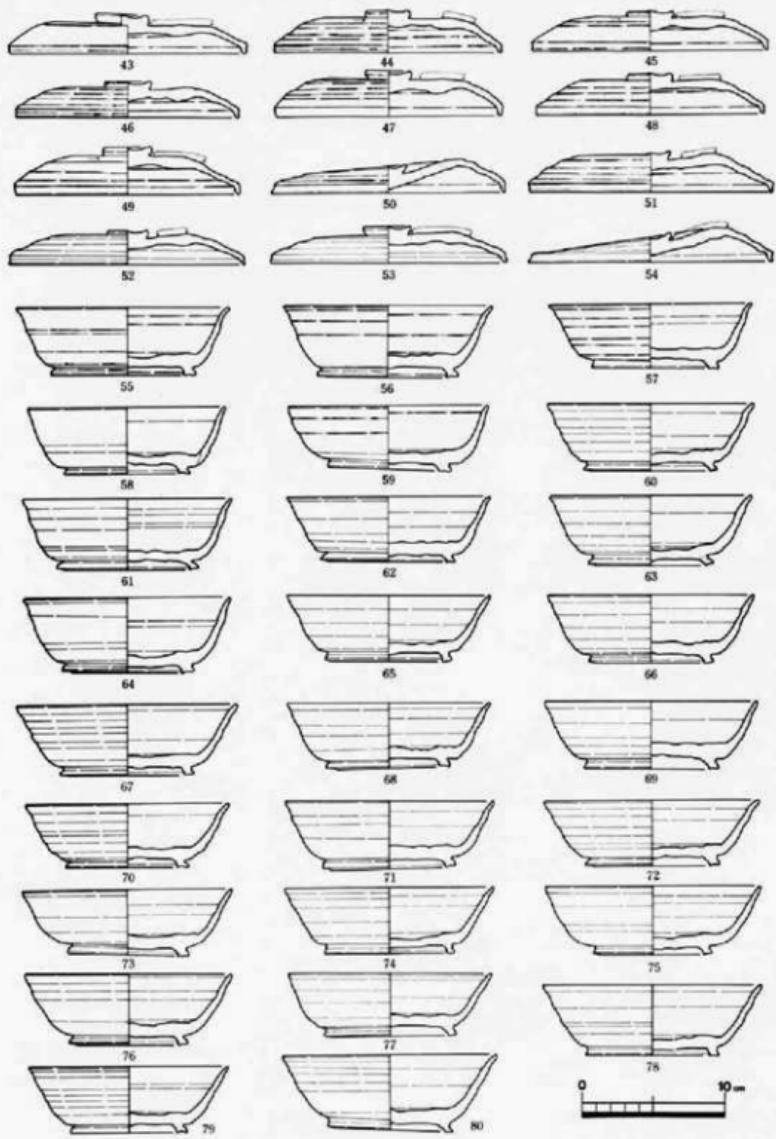
有台环（55～90） 口径14～16cmを測るもので、径高指数31を境にそれより深身のもの（55～80）とそれよりやや浅身のもの（81～89）とに分類可能である。深身のものは体部外傾度60度以上の立ち上がりの急なものが殆どで、開くものは少ない。これに対し浅身のものは外傾度65度以上に立ち上がるものはなく、開く器形のものが目立つ。体部立ち上がり箇所は丸味をもつ器形で、高台貼付位置が内側に入るものが多い。高台は短いが接地面が平坦でしっかりと踏ん張る形態のもので、厚手の太いものと細いものとが存在する。調整は底部回転ヘラ切り後にナデを施すもので、内面中央部にナデつけが施されるものも見られる。

#### （2）無台环（91）

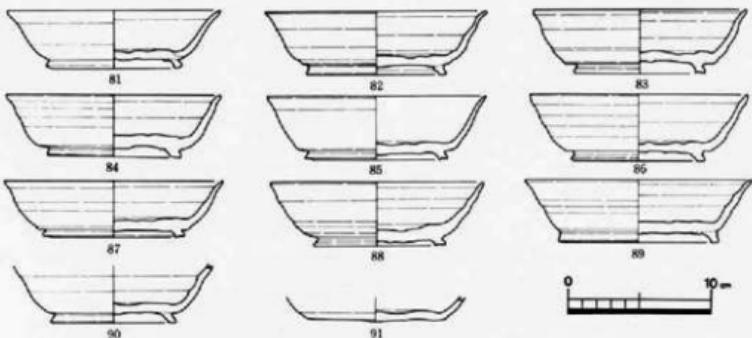
この器種で確認できるものは底部破片2個体のみで、器形全体を知るものは出土していない。



第31図 2号窯跡出土遺物 ( $S = 1/4$ )



第32図 2号窯跡出土遺物 (S = 1/4)



第33図 2号窯跡出土遺物 ( $S = 1/4$ )

図示したものは底径9.8cmのもので、やや大振りな法量を示す。

### (3) 館 (第34図)

出土したものは館の胸部破片のみであるため、ここでは叩き文様について述べる。叩き文様はいずれも外面平行線文 (H a類)、内面同心円文 (D a類) であるが、D a類の種類により2つに分類できる。1～3は中心円が径7mm程度のやや角ばった円形で、その回りの座みが幅広になっ



第34図 2号窯跡館胸部叩き文様 ( $S = 1/2$ )

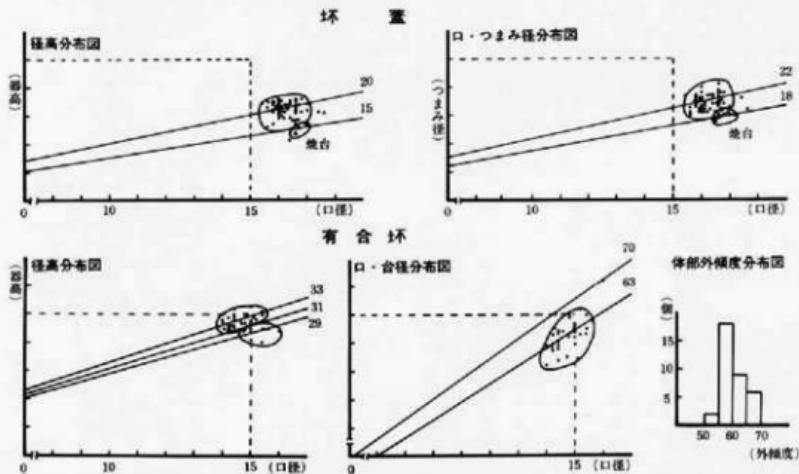
ているもの。外面は細かい目のH a類で内外面ともにカキ目調整の施されるものは確認されていない。4は中心円が径7~8mmの楕円形で、溝の細く浅いもの。外面は細かいH a類で内外面にカキ目調整の施されるものがある。前者のタイプは厚手のものと薄手のものがあり、量も多く、主体的な文様である。

## 2. 編年的検討

2号窯跡の出土遺物は、最終操業時の窯体取り残し製品と最終操業時に設置された焼台とに分けられ、一応2時期に分類できる。取り残し製品は蓋坏が、焼台では坏蓋がその大半で、他の器種は皆無に近い数量である。以下に、製品と焼台に分け、その特徴を述べるとともに、編年的な位置付けを試みてみたい。

**製品** 蓋坏の口径は坏蓋で16~16.5cm、有台坏で14~15cmに中心をもち、「一器種一法量」で捉えられるものである。坏蓋の器形は天井部に平坦面をもち器高の高いものが多いこと、口縁端部がやや長めに外反すること、つまみが径3~3.5cmの偏平宝珠紐であることなどの特徴があり、天井部にはヘラ削り、内面平坦部にはナデつけ仕上げの調整をしている。有台坏は全体として器高の高いもので、体部立ち上がり箇所の丸い、塊状的印象を受ける。その内で径高指数33前後に中心をもつ塊に近い器形のものと径高指数29前後に中心をもつ坏器形に分けられるが、この分化ははっきりとした形では見られず、その中間的なものも存在している。高台は接地面が平坦でしっかりとした踏ん張る形態を呈し、貼付位置が体部立ち上がり箇所よりも内側に入る特徴をもつ。

**焼台** 烧台の坏蓋は焼き歪みで偏平となっているため、口径がやや大振りとなっているが、口縁端部の形態や器形の特徴としては製品のものと大差なく、よく似た特徴を示している。製品と時



第35図 2号窯跡蓋坏法量分布図

期を画すものではないだろう。

以上の蓋坏に近い様相をもつ資料としては、桃の木山1号窯跡が挙げられる（第74図参照）。この窯跡はI次床とII次床があり、2時期存在するわけだが、坏蓋はI次床の薄手で長くシャープな作りの口縁端部からII次床で口縁端部形態の退化し、つまみがやや大きくなる傾向をもってくる。当窯跡のものは前述したように、I次床のものよりは口縁端部形態やつまみの大きさで、後出する傾向をもつが、全体的な印象としては丁寧なしっかりとした作りの感がある。II次床のものよりはやや古手の感じを受ける。有台坏<sup>(1)</sup>はI次床で径高指数32前後の古手のA型器形と径高指数27前後の一般的なB型器形の2形態があり、高台はしっかりと踏ん張るやや高めの形態で、体部立ち上がり箇所よりも内側に貼付けされる。II次床はI次床のB型器形が高台の形態で退化していく器形のものと径高指数32前後のC型器形の2形態が存在する。後者の形態は山笠状の杯蓋とセットをなすもので、やや特殊な器形を呈している。当窯跡のものはA型器形が確認できないことからI次床よりも確実に後出の様相であるが、高台の形態ではI次床のものと大差なく、古い様相を残している。しかし、器形ではB型ではなく、C型の器形であり、II次床のC型器形の系譜上にあると思われる。これらをまとめ、南加賀古窯跡群の編年<sup>(2)</sup>の中で対比すれば、1期の範疇に入るものであるが、その前半期とした桃の木山1号窯跡I次床段階の設定基準である飛鳥時代の様相を色濃く残す器形（有台坏A型や法量の大きいX型）はこの窯跡では欠落しており、細部形態で確実にI次床よりも後出の様相をもってくるため、前半期としては位置づけられない。II次床よりもやや古い感じは受けるが、後半期として位置づけられるものと考えたい。

註(1) 桃の木山1号窯跡については、所々の事情により報告書の刊行が遅れているが、その概要については、第三章矢田野向山1号窯報告の遺物のまとめの中で、触れているので参照されたい。

(2) 桃の木山1号窯跡の有台坏は、A・B・C・Xの4類に分類している。各器形の説明を行えば、A型器形は径高指数が32前後の深身のもので、体部立ち上がり部分のやや内側に高くしっかりとした作りの高台が貼付されている。B型器形は径高指数が27前後のやや浅身のもので、A型ほどは高くはないが、しっかりとした高台が体部立ち上がり部分のやや内側に貼付されている。C型器形は径高指数が32前後の深身のもので、口径がやや小型となり、高台が疊付き部でくぼんだり、付け根ですばったりする形態となっている。しかし、高台の貼付位置はA・Bと変わらず、端面が平坦に接地している。X型器形は口径が19cmを測る大型品で、径高指数が24前後の偏平なものである。高台は高くしっかりした作りをしており、体部立ち上がり部分のかなり内側に貼付してある。このX型器形は飛鳥IV期を特徴付ける法量であるとされているもので、飛鳥IV期の様相を色濃く残す器形と言うことができる。

(3) 南加賀古窯跡群の奈良時代の須恵器編年の中で、桃の木山1号窯跡はその最古期にあたる1期に属するもので、I次床遺物を前半期に、II次床遺物を後半期に位置づけている。詳細は第三章矢田野向山1号窯跡の遺物のまとめを参照されたい。

第2表 ニッ梨東山古窯跡土器観察表

## 4号窯跡I次床(第13図)

番号	器種	法 量	規 格	施成	調 査	備 考
1	环 壺	□14.7	1/10	良		
2	"	□12.9, 高4.4	1/4	良 好	天1/3へテ削り	
3	"	□13.4, 高4.5	1/6	"	"	
4	"	□15.1, 高4.6	2/3	"	"	側面み
5	"	□13.8, 高4.2	1/2	"	"	
6	"	□15.6	1/8	良		
7	"	□13.2, 高4.3	1/3	"	天1/3へテ削り 天中央ナゲ	
8	"	□14.4	1/8	"		
9	"	□14.2, 高3.3	1/5	良 好	天1/2へテ削り	
10	环 身	□12.4, 高4.8	1/4	"	底1/3へテ削り	側面み
11	"	□11.2, 受14.0	1/7	良	底1/3へテ削り	"
12	"	□11.2, 受14.7 □高1.8	1/10	難不良		
13	"	□14.6, 受17.2	1/12	良		
14	"	□11.0, 受14.0 □高2.0	1/4	良 好		
15	"	□11.0, 受14.7 □高2.0	1/10	"		
16	"	□11.4, 受14.7 □高1.5	1/8	"		
17	"	受16.0	"	"	底1/3へテ削り	
18	"	受14.5	1/3	"	底1/4へテ削り	
19	环	□12.1.5	1/15	良	底一部カキ目	
20	高 环	□10.0	1/10	良	底部通縫剥皮文	
21	"	□9.6, 环高2.9	"	良 好	"	
22	"	脚 7.4	"	脚 片	良	円孔スカラシ 3方
23	脚	□14.0	口 片	良 好	口縫織模波状文	
24	"	□13.2	"	不 良	"	
25	兼	□8.2, 脚11.0	1/5	良 好	脚部カキ目	3方スカラシ
26	器 台	□26.0	脚 片	良	脚部織模波状文 三角+長方形 スカラシ	
27	兼	□13.6	口 片	"		
28	"	□32.8	"	"	口縫下方カキ目	
29	"	□30.0	"	良 好	"	

## 4号窯跡II次床(第15図)

番号	器種	法 量	規 格	施成	調 査	備 考
1	环 壺	□13.4, 高4.3	1/4	良	天1/3へテ削り 内面中央削りナゲ	側面み
2	"	□15.4, 高4.2	1/5	"	天1/3へテ削り	
3	"	□15.5	1/10	"		
4	"	□17.2	1/10	難 良		
5	"	□14.3, 高4.6	3/4	良 好	天1/2へテ削り	
6	"	□13.2, 高4.8	1/6	良	"	側面み

番号	器種	法 量	規 格	施成	調 査	備 考
7	环 壺	□13.1	高5.3	1/3	良	天1/3へテ削り
8	"	□14.0	高4.8	1/2	"	天1/2へテ削り
9	"	□17.0	高3.9	1/8	"	天2/5へテ削り
10	"	□16.4	"	1/7	不 良	天1/2へテ削り
11	"	□16.0	"	1/9	良 好	
12	环 身	□11.4	高4.3 受14.4, 口高1.8	1/5	"	底1/3へテ削り 口沿付着
13	"	□12.6	高4.5 受14.8, 口高1.5	1/4	"	"
14	"	□15.2	受17.4 口高1.8	1/8	"	
15	"	□12.2	高4.8 受16.5, 口高1.5	1/2	良	底2/5へテ削り
16	"	□11.4	高4.5 受14.2, 口高2.4	1/4	"	不明
17	"	□13.2	高4.3 受15.4, 口高1.4	1/2	良 好	底1/3へテ削り "
18	"	□11.6	高4.8 受14.0, 口高1.1	1/8	良	"
19	"	□11.2	受14.2 口高1.4	1/8	良 好	
20	高 环	□10.0	环高3.4	环 片	良	底部通縫剥皮文
21	"	□10.0	"	"	"	
22	"	□9.6	环高2.9	"	良 好	"
23	"	脚 7.4	"	脚 片	良	円孔スカラシ 3方
24	脚	□14.0	口 片	良 好	口縫織模波状文	
25	兼?	□16.6	脚 片	僅 良	外表面カキ目	3方スカラシ
26	脚?	□32.0	口 片	良	脚部側面へテ削り 内面へテ削り	
27	兼	□13.2	"	良 好		
28	"	□15.2	"	"	口縫織模波状文	

## 4号窯跡III次床覆土(第17図)

番号	器種	法 量	規 格	施成	調 査	備 考
1	环 壺	□14.8	"	良 好		
2	"	□17.0	高5.0	1/4	"	天1/2へテ削り
3	"	□14.4	"	1/8	良	
4	"	□15.2	"	良 好		
5	"	□15.2	"	1/10	"	
6	"	□13.6	高4.1	1/2	"	天1/2へテ削り 外面剥皮
7	"	□14.1	"	1/7	難 良	
8	"	□15.0	"	1/8	難不良	
9	"	□14.0	高4.6	1/2	良	天2/5へテ削り 外面剥皮
10	"	□13.8	"	1/12	良 好	
11	"	□13.8	"	"	難不良	
12	"	□14.6	"	1/9	良	天2/5へテ削り
13	环 壺?	□13.6	高3.6	2/5	良 好	天平切口削し北側側面へテ削り 外面剥皮
14	环 身	□12.4	高4.4 受15.0, 口高1.7	1/5	"	底1/3へテ削り

番号	器種	法 量	残存	施成	調 査	備 考
15	环 身	□12.6, 愛15.6 □高1.5	1/8	良 好		
16	"	□11.7, 愛15.0 □高1.5	1/3	優 良	裏片有	
17	"	□11.6, 愛14.4 □高1.5	1/6	良 好		
18	"	□11.2, 愛13.4 □高1.4	1/8	良		
19	"	□11.1, 愛16.2 □高1.3	1/2	良 好		
20	"	□11.4, 愛14.3 □高1.3	1/10	"		
21	"	愛13.5	1/8	"	底1/3へう割り	
22	輪?	□26.4	1/9	"	偏歪み	
23	輪 片	類4.3	偏 片	"	輪部輪構造状況	
24	雀	□10.0	口 片	良	外面カキ目	
25	雀	□16.6	"	優 不良		
26	"	□19.2	"	良 好		
27	"	□24.6	"	"		

1号墓跡 I 次床(第19・20・22回)

1	环 身	□15.4, 高4.2	7/8	良	天1/3へう割り	面歪み
2	"	□16.6, 高4.0	1/3	"	内部中央ナックル	
3	"	□14.3, 高3.9	3/4	"	天1/3カモン状 へう割り	
4	"	□14.6	1/8	優 良	天1/3へう割り	
5	"	□14.2, 高3.6	2/3	良	天半へう割り 輪縁へう割り	
6	"	□14.1	1/4	"	天1/2へう割り	
7	"	□15.0, 高4.3	"	"	天3/2へう割り	
8	"	□16.1, 高4.0	1/2	優 良	天1/2へう割り	
9	"	□16.2, 高4.0	1/3	良	"	
10	"	□15.6	1/10	優 良		
11	"	□16.1, 高3.4	1/4	"	天1/2へう割り	
12	"	□16.8, 高3.2	1/8	良 好	天へう切りナックル	偏歪み
13	"	□17.0, 高3.4	1/4	"	天1/2へう割り	歪み
14	"	□15.8, 高3.9	4/5	"	天1/2へう割り	"
15	"	□16.6, 高3.5	1/4	優 不良	天半へう割りナックル 輪縁へう割り	"
16	"	□15.4, 高3.1	2/3	良 好	天半へう割り?	"
17	"	□14.8	1/8	優 良	偏歪み	
18	"	□14.6, 高3.2	1/3	優 不良	天半へう割り	
19	"	□15.8, 高5.0	1/4	優 良	天中央へう割り 輪縁へう割り	
20	环 身	□15.5, 高4.1 愛16.0, □高1.3	7/8	"	底1/3へう割り	
21	"	□14.2, 高4.7 愛16.0, □高1.4	"	"	内部中央ナックル	
22	"	□16.0, 愛19.0 □高1.3	1/4	良 好		
23	"	□12.0, 高3.3 愛15.8, □高1.2	3/8	良 好	底1/3へう割り 輪中央ナックル	偏歪み

番号	器種	法 量	残存	施成	調 査	備 考
24	环 身	□13.0, 愛15.5 □高1.5	1/10	優 良		
25	"	□14.0, 高3.2 愛16.4, □高1.2	2/3	"	底1/3へう割り	
26	"	□13.0, 高4.5 愛15.4, □高1.1	"	不 良	底2/3へう割り	
27	"	□14.2, 愛16.8 □高1.2	1/6	良 好	"	歪み
28	"	□13.6, 高4.2 愛15.2, □高1.4	2/3	不 良	底1/3へう割り 輪中央ナックル	
29	"	□14.2, 高4.0 愛16.4, □高1.1	1/4	優 良	"	
30	"	愛14.7	"	良 好	底1/3へう割り	
31	"	□12.8, 高4.3 愛15.4, □高1.1	1/6	"		
32	"	□13.7, 高3.7 愛16.2, □高1.2	1/3	"	底1/3へう割り	
33	"	□12.0, 高3.4 愛15.0, □高1.0	1/4	"	輪部不明	
34	高環	□14.4, 高4.9 つまみ厚4.3	"	"	天1/3へう割り	
35	"	□15.2, 高4.9 つまみ厚4.3	1/2	良	"	
36	高 环	□12.3, 高环3.9	环 片	良 好	底面へう割り 底下部通巻軸突起	
37	"	□11.0	"	良	体下部通巻軸突起	
38	"	□16.0	偏 片	"	外側カキ目 三方	三角スカン 三方
39	"	□16.8	"	"	"	下段三角 上段四方 スカン3方
40	"	□15.4	"	"	"	三脚スカン 三方
41	"	□16.6	"	良 好	"	3脚スカン
42	"	□17.6	"	"	"	4脚スカン 三方
43	"	□13.8	"	良 外側カキ目若干	スカン有り	
44	"	□14.4	"	良 好	外側カキ目後ナックル	"
45	"	□11.0	"	良	外側カキ目	
46	通	□11.8	口 片	良 好	外側輪構造状況	
47	"	□12.6	"	"	"	
48	雀	□8.4	1/2	"	天ナックル	
49	横 瓶	□13.2	口 片	良	外側強カキ目 内△-1脚	偏歪み
50	"	□13.2	胴上半	良 好	"	歪み
51	雀	□14.0, 解22.2	1/6	"	外側強カキ目 及びナックル 内ナックル	"
52	"	□14.4	口 片	良	外カキ目	
53	"	□17.0	"	良 好	外一部カキ目	内曲輪
54	"	□20.8	"	良	"	
55	"	□20.0	胴上半	良 好	外側強カキ目 内△-1脚	歪み
56	"	□18.8	胴上半	良 好	外側強カキ目 内△-1脚	歪み
57	"	□24.4	口 片	"	外側一部カキ目	
58	"	"	良	"	外側カキ目後進 統合ナックル	偏歪み

番号	器種	法 量	残 存	施 成	調 査	備 考
59	甕	口14.2	口片	良	内面頭部施切口痕	
60	"	口22.2	"	良	好	

1号墓跡Ⅲ次床覆土(第22図中段)

1	甕	口14.2	1/8	良 好	天へラ削り	
2	"	口15.5	1/6	僅不良	"	
3	"	口13.6	1/9	良	"	
4	"	口14.5	1/10	良 好	"	
5	环 身	口13.0, 高3.9 受14.6, 口高1.1	1/4	良	底面へラ切カナダ 周縁へラ削り	
6	"	口15.0, 受15.6 口高0.9	1/10	良 好		
7	高 杯	脚14.5	脚 片	"	方形スカシ	
8	"	脚16.5	"	"	外面カキ目	スカシ削り
9	"	脚11.8	"	良	"	方形スカシ 2段4万
10	"	脚12.4	"	"	外面一筋カキ目	方形スカシ

1号墓跡Ⅳ次床覆土(第22図下段)

1	甕	口15.1	3/8	僅 良	天1/2へラ削り	
2	"	口16.0, 高2.7	1/3	良 好	天1/3へラ削り	墨み
3	"	口15.8, 高4.1	2/3	良	"	
4	"	口13.9	1/8	"		
5	环 身	口14.4, 高4.1 受17.4, 口高1.5	1/4	僅 良	底2/5へラ削り	
6	高 杯	口12.7, 高17.0 脚12.4, 口高4.5	4/5	良	底面へラ削り	方形スカシ 2段3万
7	"	脚7.2	脚 完	"	"	四孔スカシ 3万
8	"	脚21.0	脚 片	良 好	外面カキ目	
9	樋 瓶	口9.6	口 片	不 良		
10	樋	口16.4	"	良	外面カキ目	
11	"	口17.0	"	"		

5号墓跡Ⅰ次床(第24図上段)

1	甕	口13.8, 高3.9	3/5	僅 良	天1/3へラ削り 天中央へラ削り痕	
2	"	口13.4, 高3.3	1/12	僅不良	天1/3へラ削り	
3	"	口16.8, 高3.4	1/3	"	天へラ切りナダ	
4	"	口14.2, 高2.8	1/2	良	天平へラ削り	鏡歪み

5号墓跡Ⅱ次床(第24図中段)

1	甕	口16.6	1/10	僅 良	天へラ削り	
2	"	口15.2	"	"		
3	"	口15.3, 高3.6	2/3	良 好	天底へラ切りナダ 周縁へラ削り	墨み
4	"	口15.5, 高3.5	4/5	良	天底へラ切りナダ 周縁へラ削り	
5	环 身	口13.7, 受16.6 口高1.2	1/6	良 好		
6	"	口14.1, 受16.7 口高1.4	1/7	"	底へラ削り	

番号	器種	法 量	残 存	施 成	調 査	備 考
7	环 身	口11.2, 受14.4 口高1.1	1/5	良 好		
8	"	口14.3, 受17.3 口高1.2	"	"		
9	脚	口16.0	口 片	不 良	ナダ	
10	樋	口12.6, 高4.4 受14.1, 口高1.1 つまみ径4.6	完	良 好	天カキ目	
11	"	口15.6, 高3.9 受10.2, 口高1.2 つまみ径4.6	"	"	"	
12	樋	口9.2	口 片	良	ナダ	

5号墓跡Ⅲ次床(第24図下段)

1	环 身	口12.8, 高4.5	2/3	良 好	天平へラ切ち上調整 周縁へラ削り	
2	"	口14.5, 高3.7	"	良	"	
3	"	口14.2, 高2.5	"	良 好	"	墨み
4	"	口14.0	1/6	僅 良		
5	环 身	口12.9, 高3.4 受15.4, 口高1.5	2/3	良 好	底面へラ切ち上調整 周縁へラ削り	墨み
6	"	口15.4, 受17.6 口高1.0	1/13	僅不良		
7	"	口15.6, 高4.2 受15.2, 口高1.1	1/8	"	底1/3へラ削り	

5号墓跡Ⅳ次床(第25図上段)

1	环 身	口16.1, 高4.5	4/5	僅不良	天1/3へラ削り 天中央へラ切り痕	墨み
2	"	口14.7	2/9	良 好	天1/3へラ削り?	
3	"	口14.6	1/4	良	"	
4	"	口15.2	1/6	僅 良	"	
5	"	口15.1, 高4.5	略 完	僅不良	天2/3へラ削り 内面中央粘土貼付後ナダ	墨み
6	"	口14.9	1/8	良 好	天1/3へラ削り?	
7	"	口15.6	"	良	"	
8	环 身	口12.7, 高4.9 受15.6, 口高1.6	1/6	"	底2/5へラ削り	
9	"	口13.9, 高4.6 受16.9, 口高1.4	略 完	不 良	底2/5へラ削り 底中央へラ削り痕	
10	"	口13.9, 高4.3 受15.4, 口高1.4	"	"	底2/5へラ削り 鏡歪み	
11	"	口14.0, 高4.1 受16.6, 口高1.4	8/6	良	底2/5へラ削り 底中央ラセン状	
12	"	口13.9, 高4.4 受15.1, 口高1.1	"	"	"	底面「」のへり記
13	樋 瓶	口4.5, 高4.4 受4.9, 口高1.6 つまみ径4.2	完	僅 良	天1/3へラ削り	
14	"	口4.9, 高4.0 受4.5, 口高1.0 つまみ径4.0	"	良	天1/3へラ削り	
15	樋	口10.4	脚 片	良 好		
16	樋	口21.1	口 片	良		

## 5号窓跡V次床(第25回下段)

番号	器種	法量	残存	焼成	調査	備考
1	环 罩	口14.6	1/5	椎 良	天へラ削り	
2	"	口15.3, 高3.7	1/4	"	天へラ切りナダ	
3	"	口17.4	1/6	椎不良	天へラ削り	
4	环 罩	口16.6	1/6	椎不良	天へラ削り	
5	"	口14.7	"	椎 良		
6	"	口14.0	1/5	椎不良		
7	"	口15.9, 高3.1	1/8	椎 良	天へラ削り	
8	"	口17.1, 高3.4	"	椎不良	"	
9	环 身	口15.6, 高3.7 受15.4, 口高1.4	1/4	良 好	底1/3へラ削り 内面中央X記号	
10	高 环	口12.9, 受15.2 口高13.4, 口高4.2 受基部8.5		环 片	"	底1/2へラ削り

## 5号窓跡VI次床(第27回上段)

1	环 罩	口17.1, 高3.7	3/5	椎 良	天へラ削り	
2	"	口14.9, 高4.9	略 完	椎不良	天へラ切りナダ 内面中央ナツケ	
3	"	口14.9, 高4.6	"	"	天1/3へラ削り	歪み
4	"	口14.8, 高4.9	"	椎 良	天へラ切りナダ	
5	环 身	口13.2, 高4.2 受15.7, 口高1.1	"	"	底へラ削り 周縁へラ削り	
6	"	口12.2, 高3.7 受13.3, 口高1.0	"	椎不良	底へラ削り 内面中央ナツケ	
7	"	口12.0, 高3.7 受12.0, 口高0.8	2/3	良 好	底へラ削り 内面中央ナツケ	底へラ記号
8	"	口12.4, 高4.9 受12.4, 口高0.8	"	椎 完	底へラ削り 内面中央ラセメント	
9	"	口12.5, 高5.0 受12.5, 口高0.9	"	椎 良	底1/2へラ削り	
10	"	口12.3, 高5.2 受12.6, 口高0.7	1/3	"	"	
11	番 罩?	口9.0, 高3.7 受11.4, 口高0.7 受12.3	略 完	椎不良	天面削へラ削り	
12	便 箱	口33.5, 高12.8 受10.4, 口高7.5	"	"	口底若干カキ日 胸板若干日目 胸板若干日目 胸板若干日目	

## 5号窓跡VII次床(第27回中段)

1	环 罩	口14.4, 高4.7	1/4	椎不良	天1/3へラ削り	
2	"	口14.5, 高4.2	3/5	椎 良	天へラ切りナダ 周縁へラ削り	歪み
3	"	口13.6, 高3.3	1/6	良	天1/2へラ削り	
4	环 身	受15.7	1/3	椎不良	底1/2へラ削り	
5	"	口12.2, 高5.6 受14.3, 口高1.1	略 完	"	底へラ切りナダ 周縁へラ削り	底へラ記号
6	"	口13.3, 受15.5 口高1.0	1/2	不 良		
7	"	口12.4, 受14.2 口高0.9	"	良 好		
8	"	口13.6, 高3.9 受15.4, 口高1.0	1/8	"	底へラ切りナダ	

番号	器種	法量	残存	焼成	調査	備考
9	すり輪	口17.6, 高14.1 底1.0	4/5	椎 良	底へラ削り 底1/半 内面ナダ	

## 5号窓跡VII次床(第27回下段)

1	环 罩	口15.0, 高4.0	1/12	良		
2	"	口13.6, 高4.2	2/5	良 好	天へラ切りナダ	
3	"	口13.5, 高4.5	"	良	天1/3へラ削り	
4	环 身	口12.6, 受15.0 口高1.0	1/8	椎不良		
5	"	受14.8	1/5	良	底へラ削りナダ 周縁へラ削り	歪み
6	"	口12.0, 受14.2 口高0.9	1/10	"		

## 2号窓跡最終床(第31回~33回)

1	环 罩	口15.4, 高3.4	1/2	椎不良	天へラ削り 内面中央ナツケ	
2	"	口16.0, 高3.4	2/3	"	"	歪み
3	"	口16.0, 高3.5	3/4	"	"	
4	"	口16.6, 高3.3	5/6	"	"	
5	"	口16.7, 高3.4	完	"	"	
6	"	口16.2, 高3.4	1/2	"	"	
7	"	口16.8, 高3.6	5/6	"	"	
8	"	口16.6, 高3.5	3/4	"	"	内面「X」のへラ記号
9	"	口16.6, 高3.2	2/3	椎 良	"	"
10	"	口16.0, 高3.3	6/7	椎不良	"	歪み
11	"	口16.0, 高3.4	3/4	不 良	"	
12	"	口16.3, 高3.6	"	椎不良	"	内面「X」のへラ記号
13	"	口15.9, 高3.3	完	"	"	
14	"	口16.0, 高3.5	2/3	"	"	
15	"	口16.6, 高3.4	1/2	"	"	
16	"	口15.8, 高3.4	3/4	"	"	
17	"	口16.4, 高3.5	5/6	椎 良	"	
18	"	口16.0, 高3.3	完	椎不良	"	歪み
19	"	口16.6, 高3.3	5/6	"	"	
20	"	口16.6, 高3.5	2/3	"	"	内面「X」のへラ記号
21	"	口16.6, 高3.5	3/4	"	"	
22	"	口15.6, 高3.3	2/3	不 良	天へラ削り	"
23	"	口16.4, 高3.5	"	"	天へラ削り 内面中央ナツケ	
24	"	口15.8, 高3.2	7/8	"	"	内面「X」のへラ記号
25	"	口16.2, 高2.9	1/2	"	"	
26	"	口16.0, 高3.3	5/6	"	"	
27	"	口16.3, 高3.2	略 完	"	"	

番号	基種	法量	現存	焼成	調査	備考
28	环	口16.0, 高3.1	3/4	焼不良 底へラ割り 内面中央ナック		
29	"	口17.6, 高3.1	4/5	不 良	"	
30	"	口16.8, 高3.1	5/6	焼不良	"	歪み
31	"	口16.0, 高2.9	1/2	焼不良	"	
32	"	口16.0, 高3.3	完	"	"	
33	"	口16.1, 高3.1	2/5	"	"	
34	"	口17.4, 高3.1	2/3	"	"	
35	"	口16.5, 高2.8	3/4	不 良	"	内面「×」のへラ記号
36	"	口16.4, 高2.9	7/8	"	"	"
37	"	口16.6, 高2.7	5/6	"	"	"
38	"	口16.0, 高3.1	2/3	焼不良	"	
39	"	口17.0, 高3.2	完	"	"	
40	"	口16.4, 高2.1	5/6	"	天へラ割り 内面「×」のへラ記号	
41	"	口15.8, 高2.7	6/7	"	天へラ割り 内面中央ナック	歪み
42	"	口16.6, 高3.1	2/3	"	"	
43	"	口16.7, 高2.8	1/2	"	"	内面「×」のへラ記号
44	"	口16.0, 高3.1	2/3	"	"	"
45	"	口16.6, 高2.8	"	不 良	"	
46	"	口15.6, 高2.6	5/6	"	天へラ割り 内面「×」のへラ記号	
47	"	口15.8, 高3.2	3/5	"	天へラ割り 内面中央ナック	"
48	"	口16.0, 高3.0	5/6	"	"	
49	"	口15.8, 高3.4	完	良	好 金属性有り	
50	"	口16.5	"	"	"	
51	"	口17.0, 高2.7	略 完	"	"	
52	"	口16.6, 高2.4	完	"	内面中央ナック	"
53	"	口16.7, 高2.6	"	"	天へラ割り 外面陥没	
54	"	口17.2	"	"	天へラ割り 内面中央ナック	"
55	有台环	口15.2, 高4.8 台10.2	5/6	焼不良 底へラ切りナック 内面中央ナック		
56	"	口14.8, 高5.1 台8.0	"	"	"	歪み
57	"	口14.2, 高4.5 台8.9	完	"	"	"
58	"	口14.0, 高4.7 台8.8	4/5	不 良	底へラ切りナック	
59	"	口14.0, 高4.5 台8.8	5/6	焼不良	"	内面中央ナック 歪み
60	"	口14.4, 高4.8 台9.4	2/3	"	"	
61	"	口14.6, 高5.0 台10.0	"	"	"	
62	"	口14.3, 高4.6 台8.5	完	焼不良	底へラ切りナック 内面中央ナック	底面に 炭化物層
63	"	口14.2, 高4.9 台8.8	3/4	"	底へラ切りナック	
64	"	口14.4, 高5.2 台9.4	5/6	"	"	

番号	基種	法量	現存	焼成	調査	備考
65	有台环	口14.4, 高4.6 台9.0	1/2	焼不良	底へラ切りナック	
66	"	口14.4, 高4.8 台8.9	"	"	底へラ切りナック 内面中央ナック	
67	"	口15.4, 高5.0 台9.5	"	"	底へラ切りナック	底面「×」 のへラ記号
68	"	口14.4, 高4.5 台8.8	完	"	"	
69	"	口15.0, 高4.8 台8.5	3/4	不 良	底へラ切りナック 内面中央ナック	
70	"	口14.2, 高4.5 台9.7	1/2	"	"	
71	"	口14.6, 高4.8 台9.4	完	"	"	
72	"	口15.0, 高4.6 台9.5	"	焼 良	口縁に指印压 痕跡「×」 のへラ記号	
73	"	口14.7, 高4.7 台8.5	3/4	焼不良	底へラ切りナック 歪み	
74	"	口14.5, 高4.7 台9.4	"	不 良	"	
75	"	口15.1, 高4.9 台9.2	7/8	"	"	
76	"	口14.4, 高5.0 台8.4	2/3	焼不良	"	内面に 炭化物層
77	"	口14.2, 高4.5 台9.4	完	"	底へラ切りナック	底面に 炭化物層
78	"	口15.4, 高5.0 台9.3	1/3	"	"	底面「×」 のへラ記号
79	"	口14.0, 高4.7 台8.1	1/2	不 良	"	
80	"	口15.0, 高5.3 台8.9	略 完	焼不良	"	底面「×」 のへラ記号
81	"	口15.0, 高4.1 台9.6	1/3	不 良	"	
82	"	口15.6, 高4.5 台9.8	"	"	"	
83	"	口15.0, 高4.5 台9.2	4/5	"	"	
84	"	口15.0, 高4.4 台9.4	完	焼不良	"	内面中央ナック 炭化物層
85	"	口15.4, 高4.5 台10.0	1/2	不 良	底へラ切りナック	
86	"	口15.2, 高4.7 台9.3	2/3	焼不良	"	
87	"	口15.4, 高4.0 台10.0	1/3	不 良	"	内面中央ナック 炭化物層
88	"	口14.8, 高4.5 台9.3	完	焼不良	"	内面に 炭化物層
89	"	口16.0, 高4.4 台11.2	2/3	"	底へラ切りナック	
90	"	口8.8	1/3	"	"	
91	無台环	口9.8	"	不 良	"	

# 第Ⅲ章 矢田野向山古窯跡

## 第1節 調査に至る経緯と調査概要

### 1. 調査に至る経緯

二ッ梨町ワ-51番地に在住の高山一男氏は、裏山で以前に果樹（葡萄）栽培を行っていたが、急斜面のためこれを止め、現在は燃糸工場を経営している。昭和60年、氏は平坦化して再度この地を利用する計画を立て、土砂採取を松本工業に依頼した。秋になり工事中に遺物が出土したため、松本工業は小松市教育委員会に連絡した。小松市教育委員会は直ちに現地踏査を行い、当該地に須恵器窯跡が存在することを確認した。灰原の一部が削平されていて緊急性を帯びていたため、地主の高山氏・工事業者の松本工業とその取り扱いについて協議を行った。その結果、農用地の構造改善事業に係る発掘調査を昭和61年度に行うことで合意し、工事は調査が終了するまで中止することになった。調査地の地籍は、小松市矢田野町65字である。

昭和61年3月31日、地主高山氏及び松本工業の両者より発掘調査の依頼を受け、4月15日に調査実施の回答を行った。同28日、松本工業より埋蔵文化財発掘届が提出された。6月10日付で石川県教育委員会より発掘調査実施についての通知を受けた。

調査は、昭和61年度国庫補助事業として小松市教育委員会が行った。

### 2. 調査概要

調査は、昭和61年6月3日より開始した。まず、調査区上方にある工事及び果樹栽培時の盛土の除去作業より行った。また、露呈している遺物をドットで取り上げる作業を開始した。同10日より窯体検出のためのトレンチを設定し、掘り下げを開始した。14日までにはほぼ落ち込みのプランを確認し、グリッド設定、掘り下げを開始する。また、西側で遺物が集中していたため追及を行った結果、本日までにテラス状となった。

窯体の調査は、土層セクション図を取るためのアゼを設けて進めた。25日になり、焚口部から燃焼部にかけて大甕片が伏せられた状態で検出された。その後、焚口部より土層の図取りを行いながら窯尻に向かって作業を進めた。又、前庭部の掘下げを並行して行った。8月9日、掘り下げを終了し清掃を行い写真撮影、11日より平面図作成を開始した。18日に終了し、床面遺物を取り上げ、断面図作成を行った。後、下の窯底を出す作業を開始した。22日になり、焚口部で最終窯壁の外側に壁を検出し、床面も一部残っていた。また、下の窯底の検出作業を本日終え、清掃・写真撮影・図取りを行った。後、断ち割りを開始した。その結果、床面の下に土器を伏せた溝を検出、その追及を行った。29日、溝の追及作業を終了し、清掃・写真撮影・図取りを行い、30日に遺物を取り上げ始めた。31日にその作業を終了し、溝の下端・断面図を作成した。

また、前後するが、27日に考古地磁気測定のための試料採取を行った。

灰原の調査は、窯体の調査と並行して行った。遺物は全点ドットで取り上げ、29日までに灰原の調査を終えた。30・31日に地形測量を行い、全ての作業を8月31日に終了した。

## 第2節 遺構

本調査では、須恵器窯跡1基（矢田野向山1号窯跡）、土器集積地1ヶ所、土坑1基が検出された（第37図）。以下、これらの遺構について述べてゆきたい。

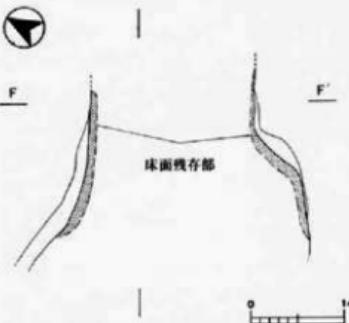
### 1. 1号窯跡

本窯跡は、大きく3回の改造が認められた。これをⅠ次窯～Ⅲ次窯（最終窯）と呼称した。主軸方位はN-59°-Eを測る。

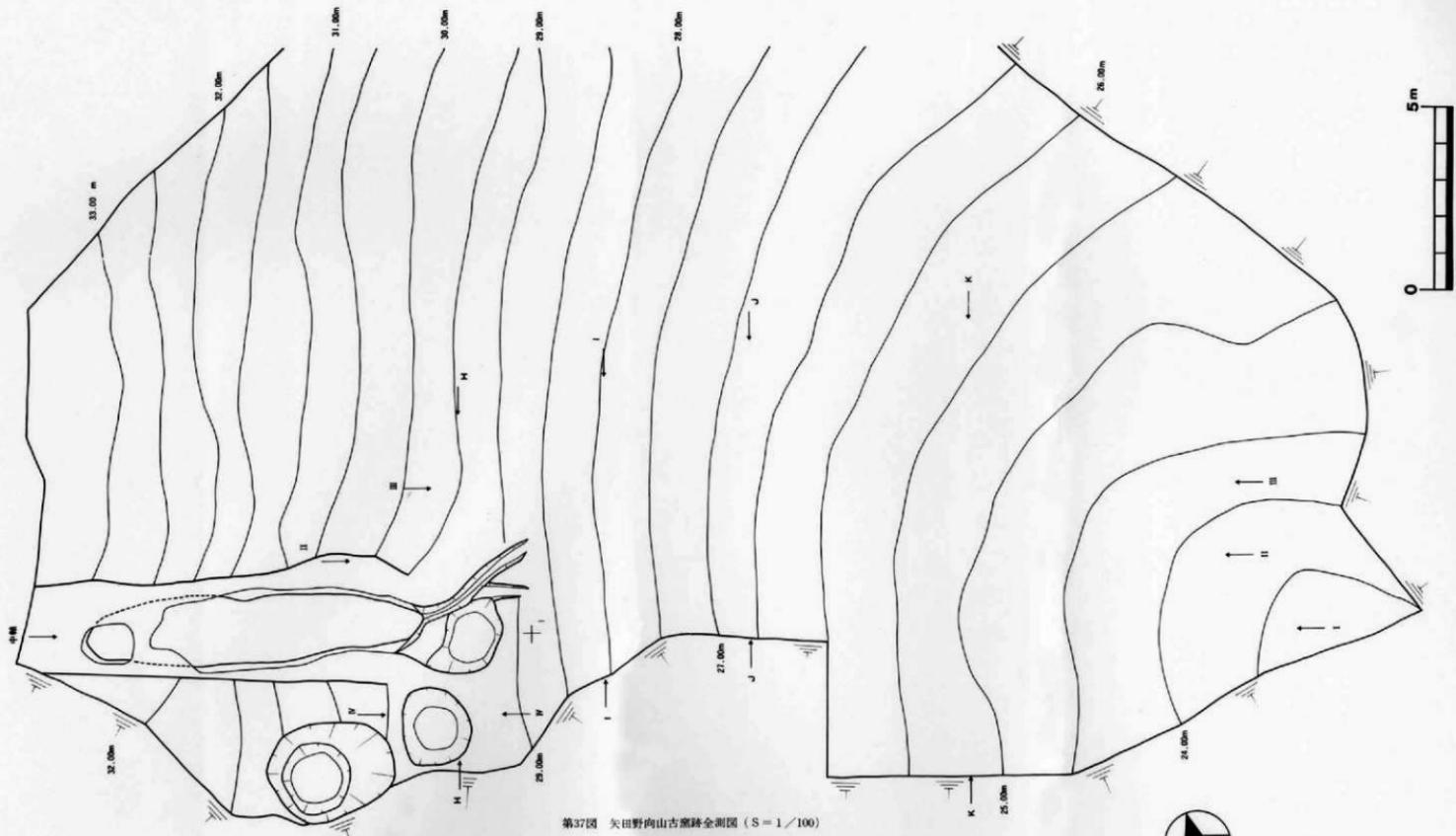
Ⅰ次窯（第36図）は、Ⅲ次窯の壁面断ち割の際断面F-F'ラインで確認されたもので、Ⅲ次窯の床面より約20～35cm上で検出されたためほとんどが残っていないが、この部分より1.4m下方まであった。残存部で判断すれば、右壁が外に開いているため燃焼部から焚口部にかけてと考えられる。幅は、F-F'ラインで1.7m、残存下方端で2.5mを測る。

Ⅱ次窯（第38図）は、窯尻より焚口の床面残存部までの全長は9.9m、幅は焚口部で1.3m、燃焼部で1.4m、焼成部最大で1.8mを測る。床面の傾斜は、焼成部下方で約10°、焼成部中央から窯尻にかけて20°～24°を測る。窯尻部奥壁は、Ⅲ次窯までとの間、ほぼ垂直になっていることよりそのまま地上に出ていたとも考えられる。前庭部には幅2.6m、長さ1.6m（床面残存端部から）を測る浅い掘り込み（土坑状）が認められた。

また、本窯構築の際、床面の下に排水溝が穿たれていた。窯尻より1.6mの地点の中央やや左より右下がりの弧状で壁に連し、壁沿いに5.8m地点まで下がり、そこよりやや内側に折れている。また、4.4m地点より分かれて左下がりになり、5.2m地点で下方に折れていて、两者共7.0m地点まで続いている。この部分より上端の長軸2.1m、短軸1.0mの略方形の土坑状となっている。この排水溝には、壺・壺蓋・甕等の破片（壺蓋では完器も含む）でタをしていた。土坑状遺構の部分では、両方の溝より合流した形で大甕片が認められた。これらの土器は、ほとんど二



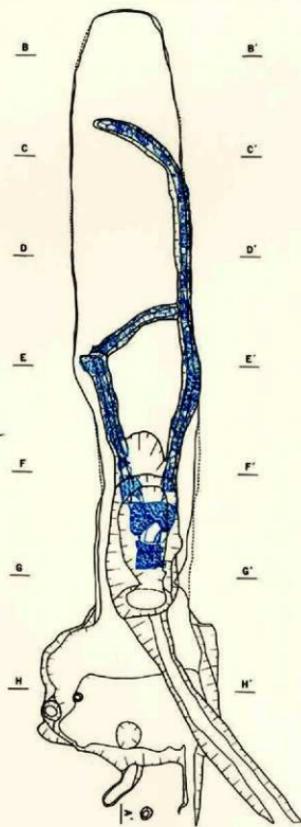
第36図 1号窯跡Ⅰ次窯平面図 (S=1/60)



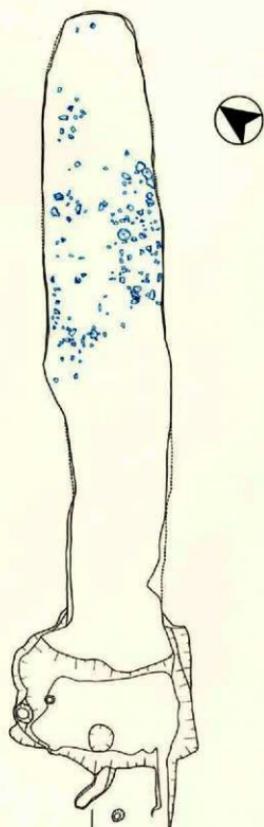
第37図 矢田野向山古窯跡全測図 (S = 1 / 100)



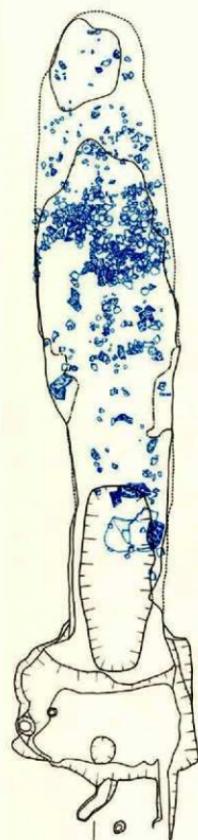
II次癌下排水溝



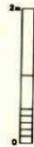
II次癌



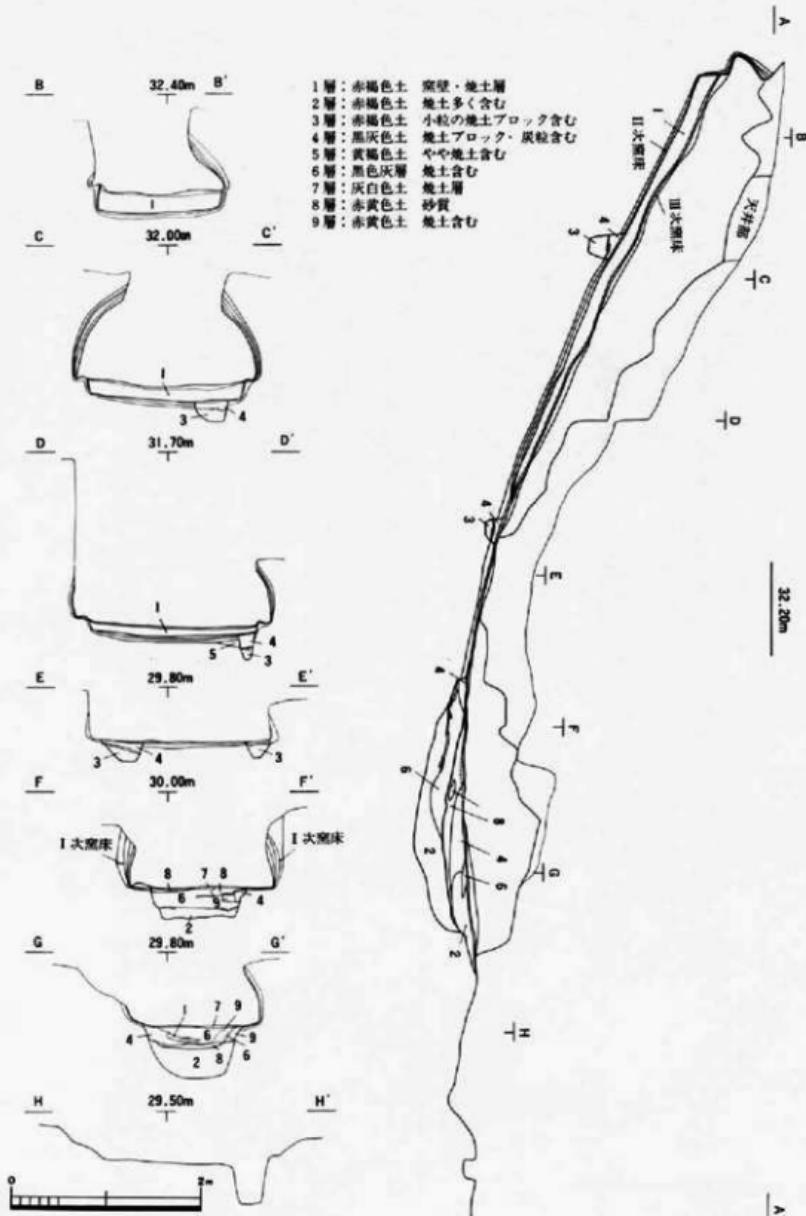
III次癌



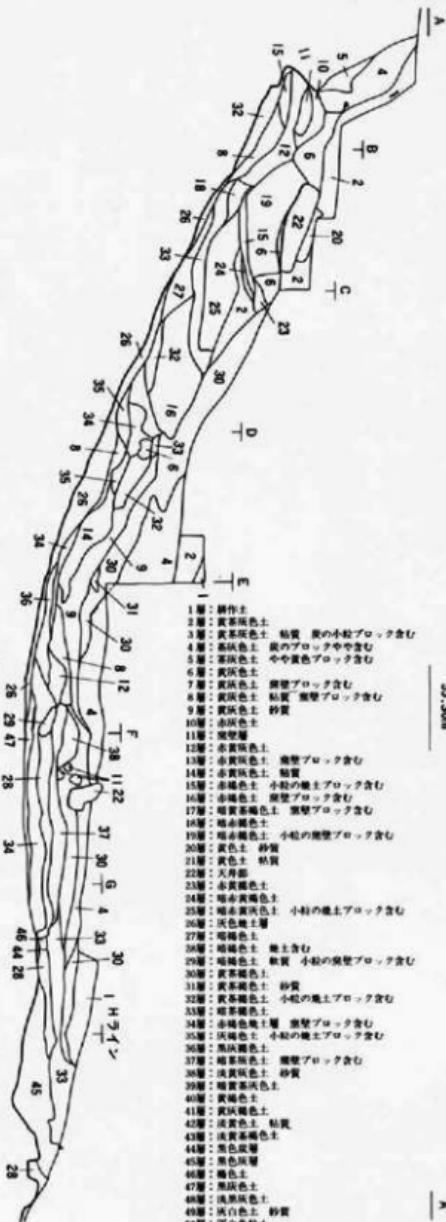
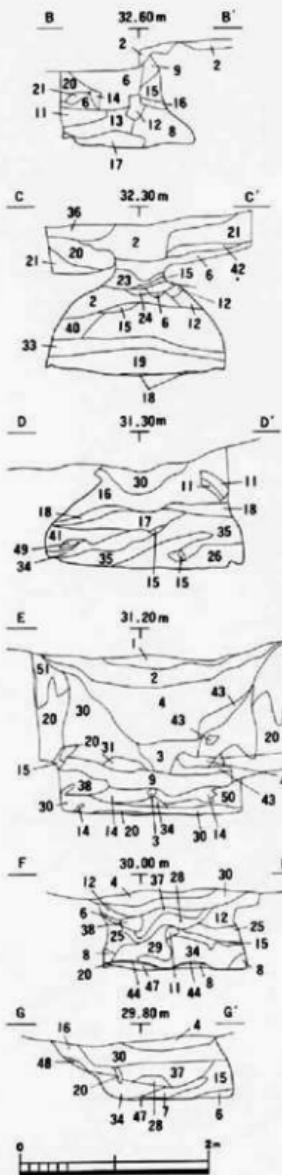
第38図 1号癌肺平面図 (S = 1/60)  
-65~66-







第39図 1号窯跡断面図 ( $S = 1/60$ )



第40図 1号窯跡窓体土層断面図 ( $S = 1/80$ )

次焼成を受けていない、また、Ⅱ次床面と溝の間には土の間層が認められ、この土は通有の床面下の還元あるいは酸化色を呈していた。

以上より、Ⅱ次窯はⅠ次窯の壁面の内側に壁を作り（狭め）、Ⅰ次窯床面を掘下げて排水溝を穿ち、これを通水性の良い土で埋めて床面としたこととなる。排水溝の土器は、溝が埋まるのを防ぐ目的と水が流れやすくする目的であったと考えられる。しかし、通有の排水溝は、窯尻より穿たれているのが多く、その方が排水の目的にかなっていると考えられるが、本例はその点で新たな知見を与えていているのではなかろうか。

尚、のことよりこの排水溝の土器は、Ⅱ次窯のものではなくⅠ次窯で焼かれた可能性をもっている。

また、この土坑状造構の下方より溝が右下がりで前底部をつきぬけて3.6m伸びている。この溝は土坑状造構の底よりややレベルは高くなっていて、全ての水を流すことはしなかったと考えられるのではなかろうか。この溝はⅡ次窯検出時点で振りあげてしまったため詳細は不明であったが、検討した結果、窯内の排水溝及び土坑状造構と同じくⅡ次窯の焼成時には埋められていたと考えられた。

Ⅲ次窯（第38図）は、Ⅱ次窯を窯尻部で20cmかさ上げし、更に窯尻を20cm奥に延ばして構築されていた。この窯尻から4.7m地点まではⅡ次窯床面をかさ上げし幅を広げていたが、この地点より焚口部まではⅡ次窯と同じであった。全長は10.1m、幅は焼成部最大で2.0mを測る。床面の傾斜は、Ⅱ次窯床面との境部分より25°で分かれそのまま昇っている。また、Ⅱ次窯より窯尻で延ばした部分は、約10cmの高くなっている段差がついている。窯尻部奥壁は内傾していて、煙道が存在していたと推測できる。更に、窯尻より1.2mから2.2mまでは天井が残存していて、この部分で床面よりの高さは90cmであった。焚口部から焼成部下方にかけて浅い舟底状ピットが検出された。長さ2.8m、幅最大1.1mのやや小判型の形態であった。この舟底状ピットは、Ⅱ次窯にも存在していたと考えられるが、この部分はⅢ次窯と同じであるため不明といわざるをえない。

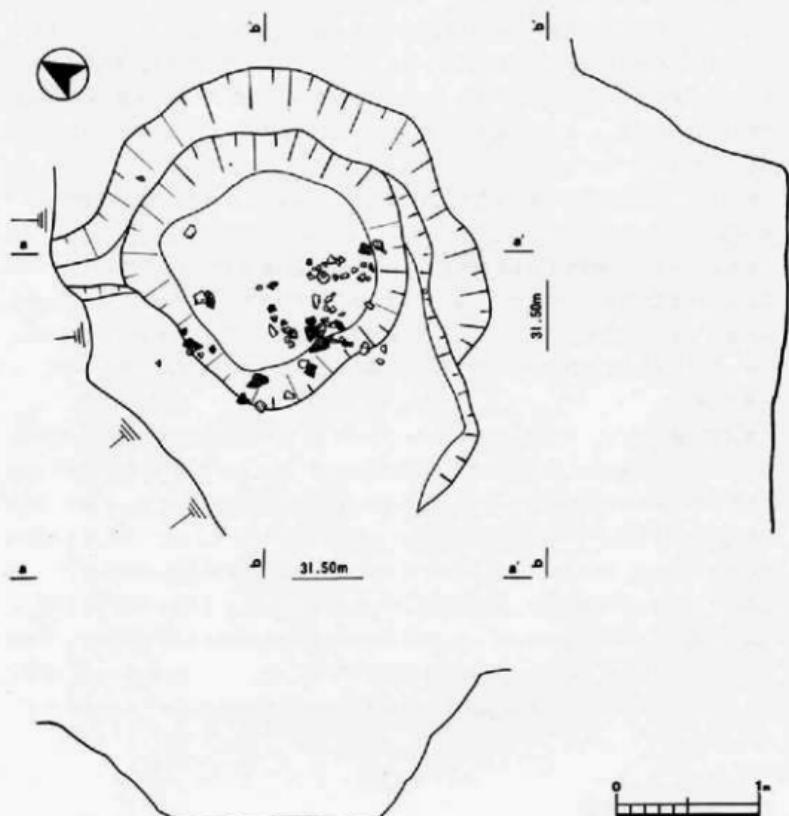
## 2. 土器集積地（第41図）

本造構は、1号窯跡に向かって左側で検出されたもので、山側を地山より約1.5mカットしてテラス状にしている。そのカット部分は半円形であり、一部欠失しているが幅は上端で約2.7m、下端で1.5mを測る。遺物は、底面及びやや直上より出土している。

本造構は、当初テラス状造構ととらえていた。遺物は相当量出土しているがほとんど破片であり、焼き歪みのものが多い。これらよりここは窯出しの際の土器を集積した場所と考えられた。つまり焼き上がった製品を一旦ここに置き、良いものだけを選び、あとは残した土器集積地（選別地）であろうと考えられた。

尚、整理の結果、本造構より出土の須恵器とⅡ次窯下の排水溝の須恵器とは接合関係にあり、

排水溝と同じくこの遺構は1次窯に伴うものと考えられた。



第41図 土器集積地実測図 ( $S = 1/40$ )

### 3. 土坑（第42図）

本遺構は、1号窯跡の左側、土器集積地のやや下方で検出された。上端で長軸2.2m、短軸1.9mを測り、略方形を呈している。山側では地山を約90cm、谷側は20cm掘り込んでいた。遺物は、底面よりは検出されず縦て埋土からの出土であった。

本遺構は、土坑としたが、山側の壁面が一部焼けていたこと、また、埋土中及び灰原の遺物の中に土師器が認められることにより、土師器窯の可能性が大きいと考える。

#### 4. 灰原（第43図～第46図）

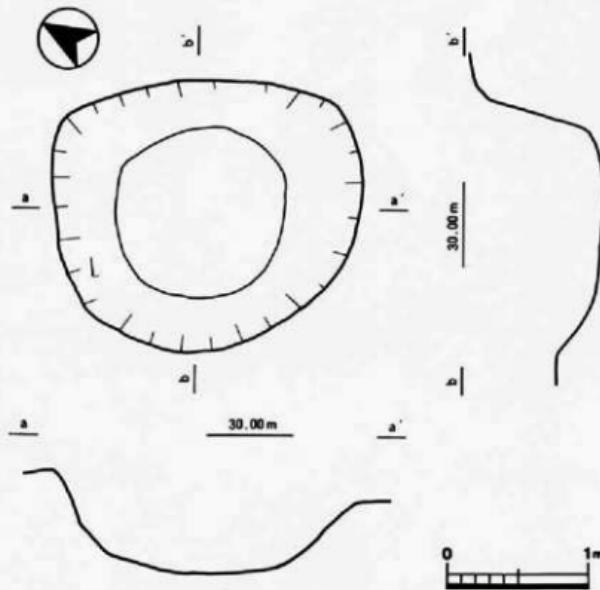
1号窯跡の灰原は、工事のため左側部分は削平されていた。窯跡中軸線を基準に、縦軸として3本の土層断面図（I～IIIラインとし、Iラインは中軸線の延長）を作成した。また、土坑部分に中心ではないが並行にIVラインを設けた。横軸は、窯跡断面図に続き、4本の土層断面図（H～Kラインとし、Hラインは土坑の端及び窯跡の前庭部を通る）を作成した。

しかし、以前の開墾・耕作及び斜面がややきついため、灰層はほとんど残存していなかった。

#### 5. 考古地磁気

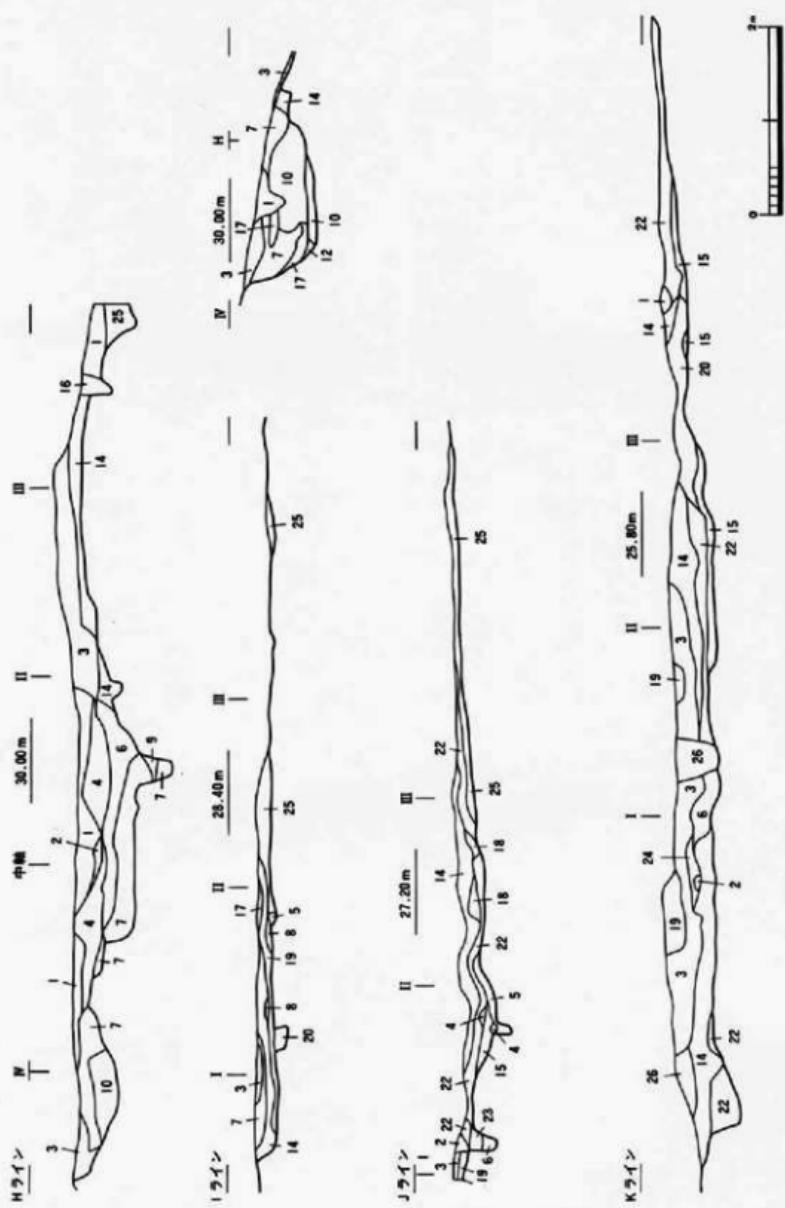
考古地磁気は、富山大学理学部教授広岡公夫氏に測定を依頼した。その測定結果は、理学部地球科学教室の広岡公夫・岡田宗・吉村勝之・井口滋存の各氏連名で報告を頂いた。

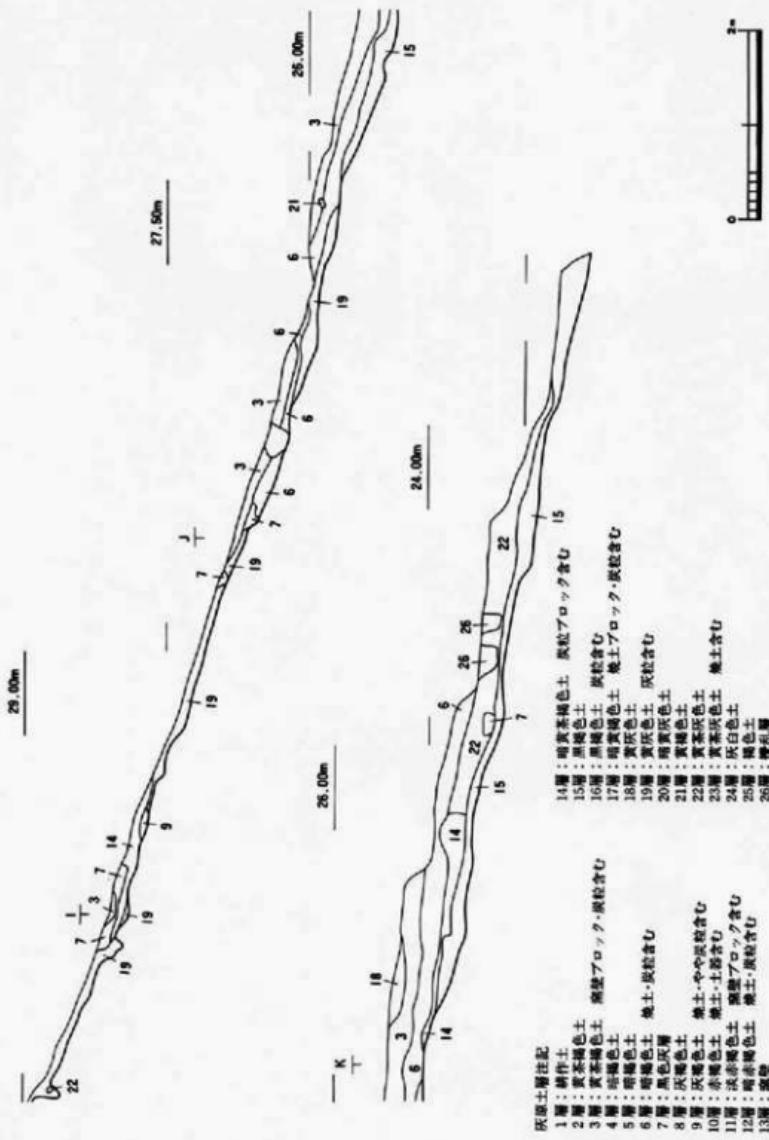
それによれば、矢田野向山1号窯跡の考古地磁気推定年代はA.D.595±5年又はA.D.740±30年であった。



第42図 土坑実測図 ( $S = 1/40$ )

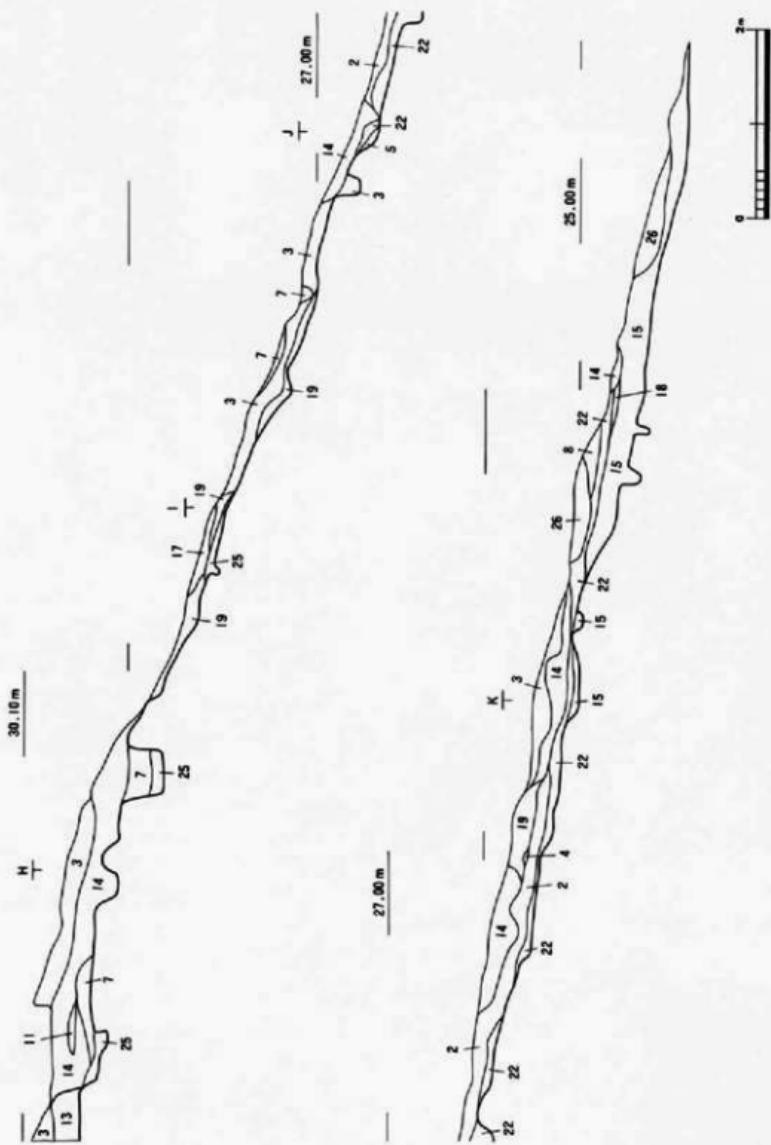
第43図 灰原土層断面図 ( $S=1/60$ )



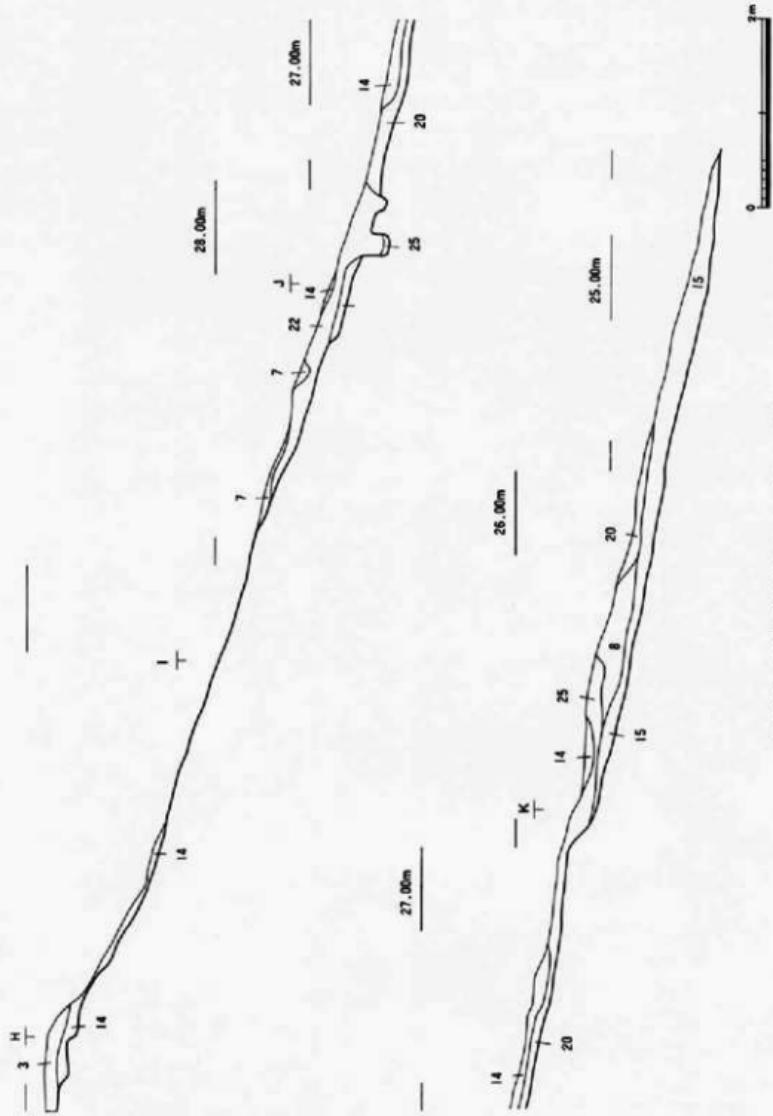


第44図 地質断面図 (S=1/60)

第45図 汚原土壌断面図 II ライソ (S=1/60)



第46図 反原土壌断面図Ⅲ ライン (S = 1/50)



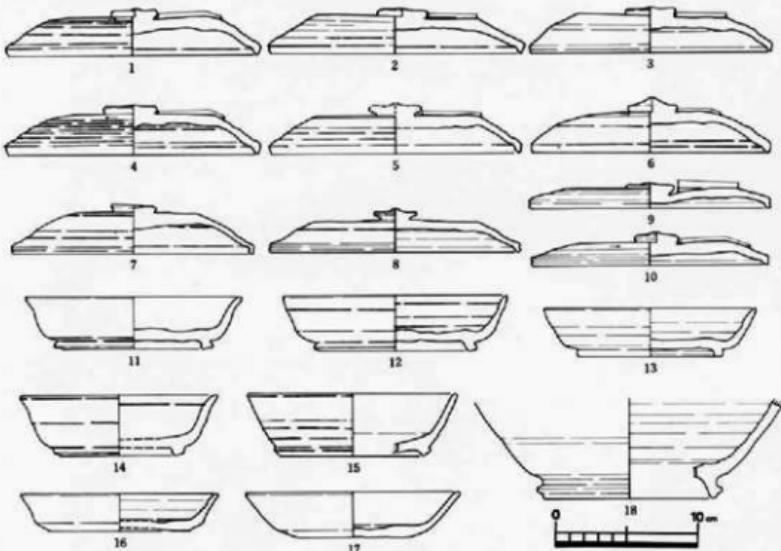
### 第3節 出土遺物

#### 第1項 各出土地の遺物検討

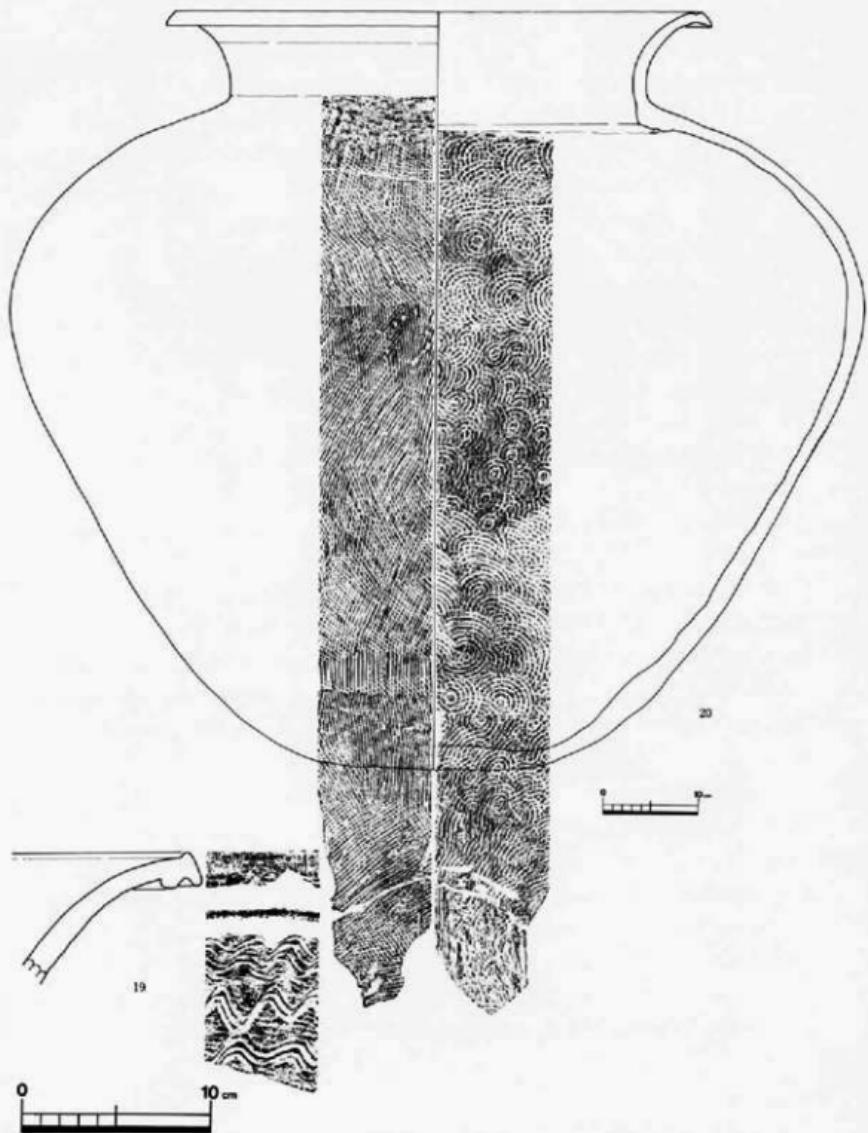
ここで報告する遺物は、矢田野向山1号窯跡及びその灰原等から出土した遺物で、僅かに土師器を含むが、大半はここで焼成された須恵器である。総数はパンケースで75箱、破片数で17,339点を数え、器種の種類も、食膳具で蓋坏（坏蓋・有台坏）、無台坏、無台皿、有台皿、塊、高坏、鉢、小形鉢、調理具ですり鉢、盤、煮沸具で長胴甕、鍋、甑、貯藏具で短頸壺（短頸壺蓋・短頸壺身）、広口壺、長頸瓶、水瓶、横瓶、甕などと豊富である。また、土師器についても無台坏、有台坏、塊、小形甕、長胴甕、鍋、甕（？）が確認でき、主体は煮沸具であるが、食膳具も少なからず出土している。これら土師器は、土坑が土師器窯跡である可能性をもつたため、大半はこれに伴うものと考えられる。以下に、各出土地の遺物の説明を行う。

#### 1. II次窯構築時の排水溝出土遺物（第47・48図、写真図版28）

ここで述べる遺物は、II次窯の床面を構築する際に掘り込まれたと思われる排水溝から出土したもので、II次窯床面製品よりも以前の遺物である。II次窯以前であることから、I次窯の製品である可能性ももつが、断定はできない。器種は、蓋坏、無台坏の食膳具、甕、横瓶、甕の貯藏具が確認されており、その大半が坏蓋と甕で構成されている。



第47図 II次窯構築時の排水溝出土遺物 (S = 1/4)



第48図 II次窯構築時排水溝出土遺物 ( $S = 1/6$ )

### (1) 蓋坏 (1~15)

**坏蓋** その器形から天井部に広い平坦面をもちやや偏平な器形のA類と、丸身をもつ山笠状の器形を呈するB類とに分けられ、さらに、A類は厚手で口縁端部が三角形状を呈するもの（1~5）と薄手で口縁端部の外反するもの（8~10）とに、そしてB類も厚手のもの（4）と薄手のもの（7）とに細分される。量的にはA類が主流で、B類は少なく、口径は16.7~17.7cmと全体的に大振りである。つまみは偏平な宝珠形を呈するものがほとんどで、6と8の頂部が盛り上がっており、天井部の調整は4でナデ調整する以外は総て回転ヘラ削りを施す。

**有台坏** 径高指数が24前後の偏平な器形のA類（11~13）と30前後の深身の器形のB類（14~15）とに分けられる。前者の器形は、口径が14.9~15.8cmのもので、高台の貼付箇所が体部立ち上がり付近よりやや内側に入っている。高台の形態は、外側に踏ん張るものと直立するものがある。後者の器形は、口径が13.9~14.8cmのもので、高台貼付箇所が立ち上がり付近にあり、体部が外傾するもの（15）と貼付箇所が立ち上がり付近より内側に入るものの（14）とがある。

### (2) 無台坏 (16~17)

口径13.9cmを測る偏平な器形の16と口径15.2cmを測り外傾する体部をもつ17とが存在する。

### (3) 壺類 (18)

台径12cmを測る壺・瓶類の胴部下半の破片。

### (4) 壺 (19~20)

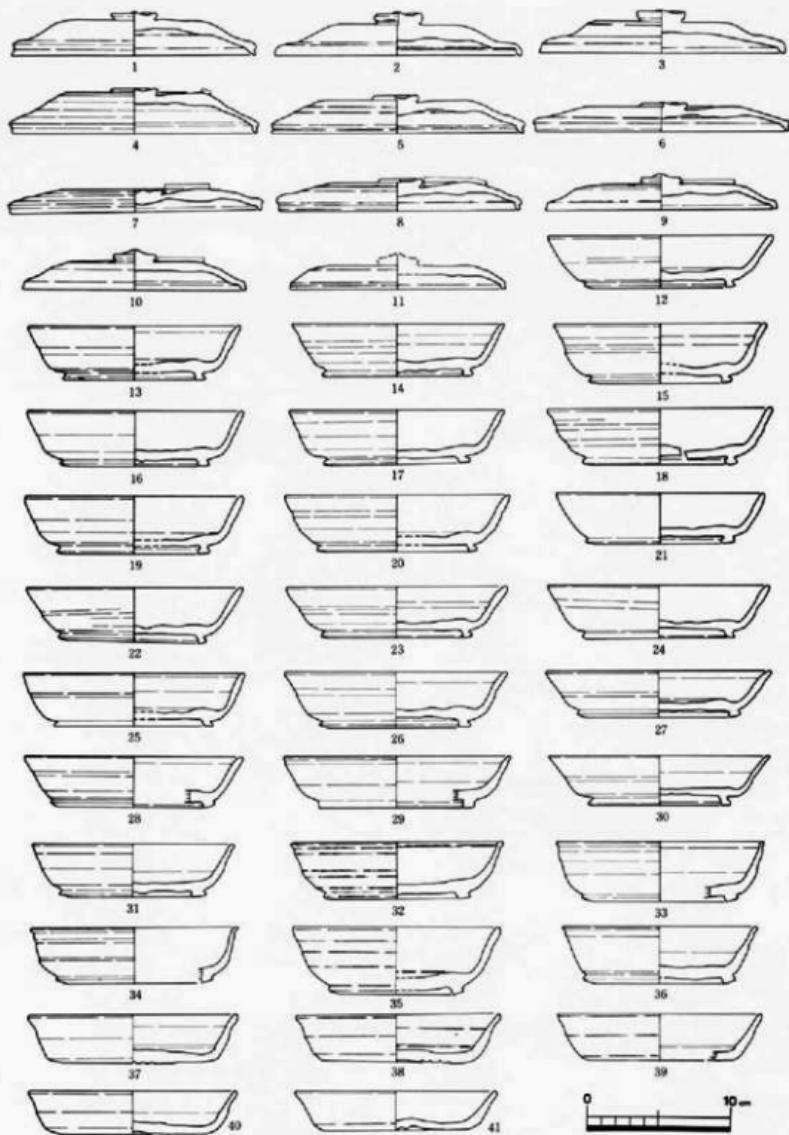
いずれも口径40cm以上の大型で、口縁部に文様をもつA類（19）と無文のB類（20）に分けられる。A類は口縁端部内外面に突帯をもつもので、太い波状文が3段に施されている。B類は内面に稜をもつもので、突帯は付いていない。口径55.8cm、胴部径90.8cm、器高80.6cmを測る完形に近いのもので、丸底の小さな底部から開いて立ち上がり、胴部上位で最大径をもつ器形を呈す。調整は胴部外面を平行線文叩き（H c類）、内面を同心円文叩き（D c類）で、内面底部を撫で付けている。

## 2. 土器集積地出土遺物（第49~50図、写真図版29~30）

ここで述べる遺物は、窯体の左側に位置する浅い土坑状の窪みから出土したもので、その出土状態から窯で焼成したもの（失敗品？）を一括して廃棄したものである可能性が高い。また、これらの遺物のいくつかは、排水溝の遺物と接合関係にあることから、その土器群との同時性を物語っている。土器集積地遺物が窯跡からの廃棄品であることと、1号窯跡の他にもう1基窯跡が存在するとは思えないことから、排水溝遺物とともにI次窯製品である可能性が極めて高いと言えよう。器種は、蓋坏、無台坏の食膳具、短頸壺、長頸瓶、横瓶、壺の貯蔵具などの須恵器のほか、赤色塗彩した無台坏、有台坏、壺、小型壺、長胴壺などの煮沸具の土師器片が少量ながら出土している。

### (1) 蓋坏 (1~36)

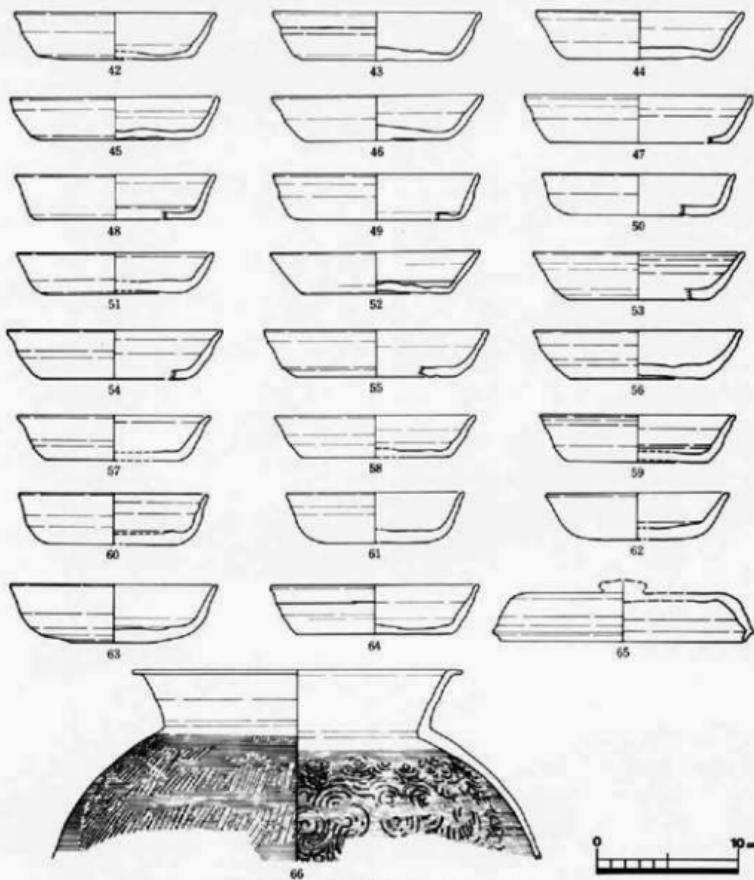
**坏蓋** 器形は総て排水溝の分類でA類としたもので、口径の大きさから16.5cm以上のやや大振り



第49図 土器集積地出土遺物 (S = 1/4)

のもの（1～8）と16cm以下のやや小振りのもの（9～11）とに分けられる。前者は排水溝の坏蓋と同様の偏平な宝珠紐をもち、口縁端部が外反する薄手のもの（4～8）と、厚手の天井部から体部中位で外翫して、折り曲げまたは三角形状の口縁端部に至る器形のもの（1～3）とが存在する。後者の法量のものは、頂部が盛り上がる偏平な宝珠紐がつき、口縁端部が短く折れ曲がる器形を呈す。天井部の調整は、調整不明のもの以外は総て回転ヘラ削りを施す。

有台坏 径高指数から24前後のやや偏平なA類（12～32）と30前後のやや深身のB類（33～36）とに分けられる。A類は口径が15～16cmのものが多く、高台貼付位置が体部立ち上がり箇所より



第50図 土器集積地出土遺物 (S = 1/4)

もやや内側に入るものが主体的で、外側に踏ん張る形態のものが多い。B類は口径14.5~15cmのものと13.5cmのやや小振りのもの（36）とが存在し、いずれも高台貼付位置が体部立ち上がり付近にあって、短く厚く外履する形態を呈す。

#### （2）無台坏（37~64）

径高指数が22前後の偏平な器形のA類（37~59）と27前後のやや深身で体部立ち上がりの丸い器形のB類（60~62）とに分けられる。A類は口径が13.5~16cmにばらつくが、14~15cmに集中する。体部は外傾度60程度に外傾するものが一般的で、薄手で底部の平たいものが多く、内面の体部下端に一段の稜をもつものが目立つ。B類は口径が12.5~13.3cmとA類よりも小振りで、やや厚手の底部から丸味をもって立ち上がる。これら須恵器の他に、無台坏の土師器がある。器形はA類の64とB類の63があり、64は底部を丁寧にナデによって、奇麗にヘラ切り痕を消去し、体部には一条の沈線が巡る。63は須恵器と変わらないが、口径が14.5cmと大振りである。

#### （3）短頸臺（65）

短頸臺の蓋と思われるもので、口径17.2cmを測る大型のものである。

#### （4）臺（66）

口径21.1cmを測る中臺で、器形は頸部から外傾して立ち上がり口縁端部で外側に突出するもので、肩の張らない丸味をもった胴部が付く。胴部の調整は外面で縱方向の平行線文叩き後カキ目、内面で同心円文叩き（D a類）後のカキ目が施される。

### 3. II次薬床面出土遺物（第51図、写真図版31）

ここから出土したものは焼成の良いものがほとんどで、出土量は少ない。器種は蓋坏、無台坏、壺、鉢の食器具、短頸臺、長頸瓶、臺の貯蔵具が確認できる。

#### （1）蓋坏（1~15）

坏蓋 偏平なA類と山笠状のB類が存在する。A類はやや厚手で口縁端部を折り曲げか外反させるもの（1~3）とやや薄手で口縁端部を強く外反させるもの（4~6）とがあり、これらよりやや小振りのもの（7）も存在する。B類は口縁端部が折り曲げか三角形状のもので、A類よりやや口径を小さくする。全体的な口径では、排水溝のものよりもやや小振りになった感がある。つまりは偏平な宝珠形のものが主流であるが、7のように頂部が盛り上がるものもある。天井部の調整は、不明のものを除けば、総て回転ヘラ削りを施す。

有台坏 径高指数24前後のA類と径高指数28程度のもののが存在する。前者は口径が14.5~16cmのもの（11~13）で、後者は口径が14.5cmのもの（14）、12cm台のやや小振りのもの（15）とがある。高台貼付位置は体部立ち上がり箇所よりもやや内側に入り、やや踏ん張る高台が付く。体部外傾度は60前後にまとまる。

#### （2）無台坏（16~22）

総て径高指数22前後のA類のもので、口径は13~14.2cmと土器集積地のものよりもやや小型化した法量を示している。器形は薄手で体部立ち上がりがしっかりしているもの（16~17）とやや

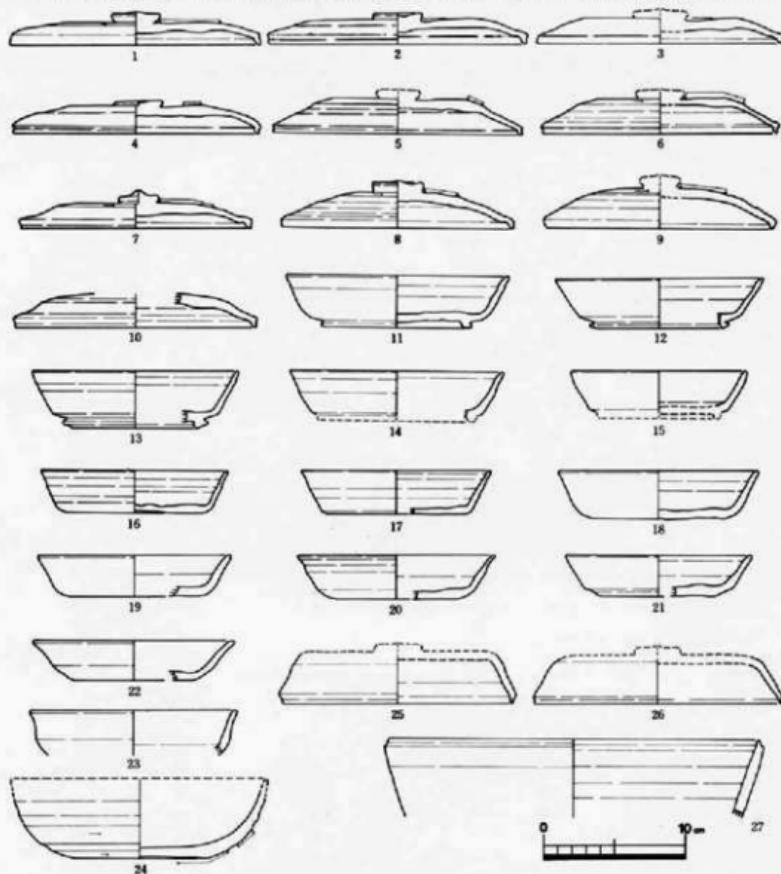
厚手で立ち上がり部が丸味をもつもの（18～22）とがある。

（3）塊（24）

底径9cmを測るやや大振りのもので、体部下半と底部をヘラ削りしている。内面の調整は丁寧なナデまたは磨き調整してある。外面には炭化した塗料状のものが付いており、器形や調整の具合から考えても、赤彩土師器が還元焼成されたものと思われる。

（4）鉢（27）

口径26cmを測るもので、口縁端部が内側に突出する形態を呈す。口縁端部の形態から短頸壺の



第51図 II次窯床面出土遺物 (S = 1/4)

壺蓋のようであるが、口径の大きさから、ここでは一応鉢として扱った。

(5) 短頸壺 (25・26)

いずれも短頸壺の蓋で、口径16.17cmの大形の法量を呈す。

4. Ⅲ次窯床出土遺物 (第52~55、写真図版32~34)

ここで述べる遺物は、Ⅲ次窯床面より出土した製品の取り残し土器で、多くが黄灰白色の生焼け品である。器種は食器具で蓋環、無台环、無台皿、有台皿、高环、調理具で盤、煮沸具で鍋、瓶、貯蔵具で短頸壺、横瓶、甕が確認されており、Ⅰ次窯（排水溝、土器集積地）の遺物をⅠ次窯のものとして考えれば、Ⅱ次窯では確認できなかった器種が多く含まれている。

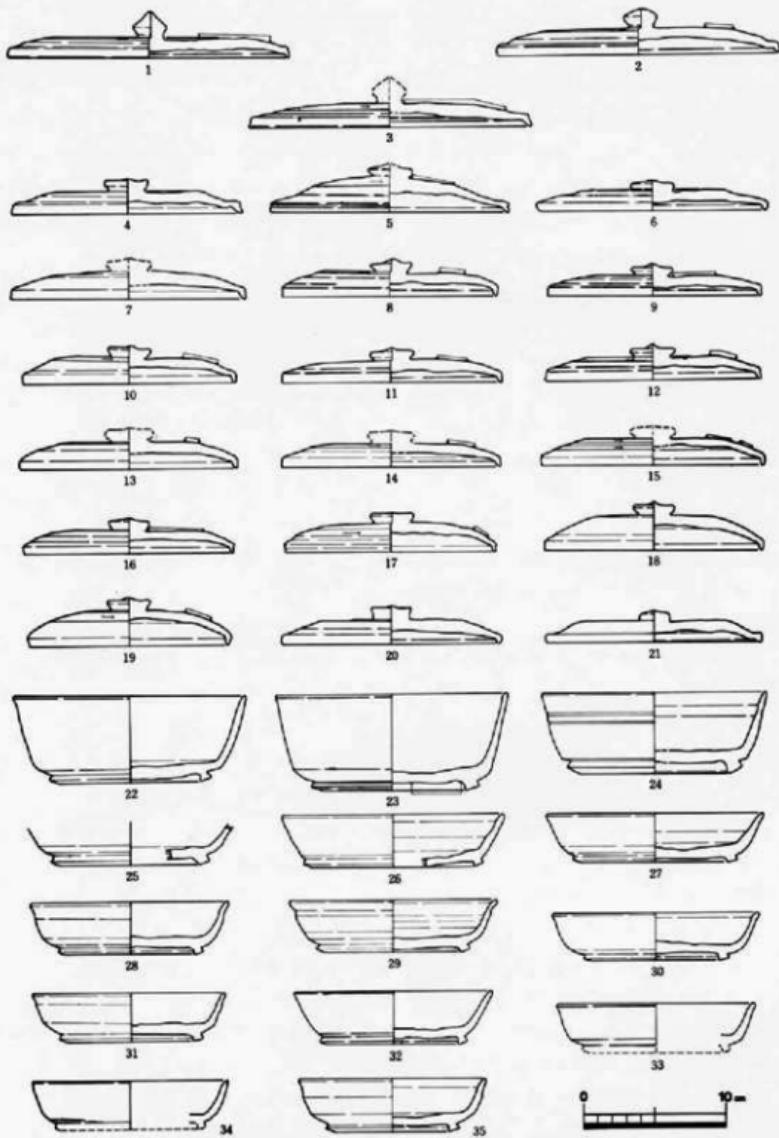
(1) 蓋環 (1~38)

坏壺 口径により20cm前後のI類、16~17cmのII類、15cm前後のIII類に分類（灰原でIV・V類確認）できる。I類（1~3）は極めた偏平な器形で折り曲げの口縁端部をもち、しっかりした宝珠紐が付いている。II類（4~7）は器肉が厚く偏平な宝珠紐がつくもので、平坦な天井部をもつもの（4・6）と天井部の丸いもの（5・7）がある。III類はつまみの形態から若干頂部の盛り上がる偏平な宝珠紐のつくもの（8~19）とそうでないもの（20~21）がある。前者のものは天井部の丸いものと偏平なものとがあるが、偏平なものが主流で、口縁端部が折り曲げ形態のものが多い。後者のものは円筒状のつまみと小さいボタン状のつまみがあり、ボタン状のものはI類の器形に似ている。調整はII類のものが天井部へラ切り後ナデである以外は回転へラ削りを施しており、ほとんどが内面の中央平坦部をナデつけている。

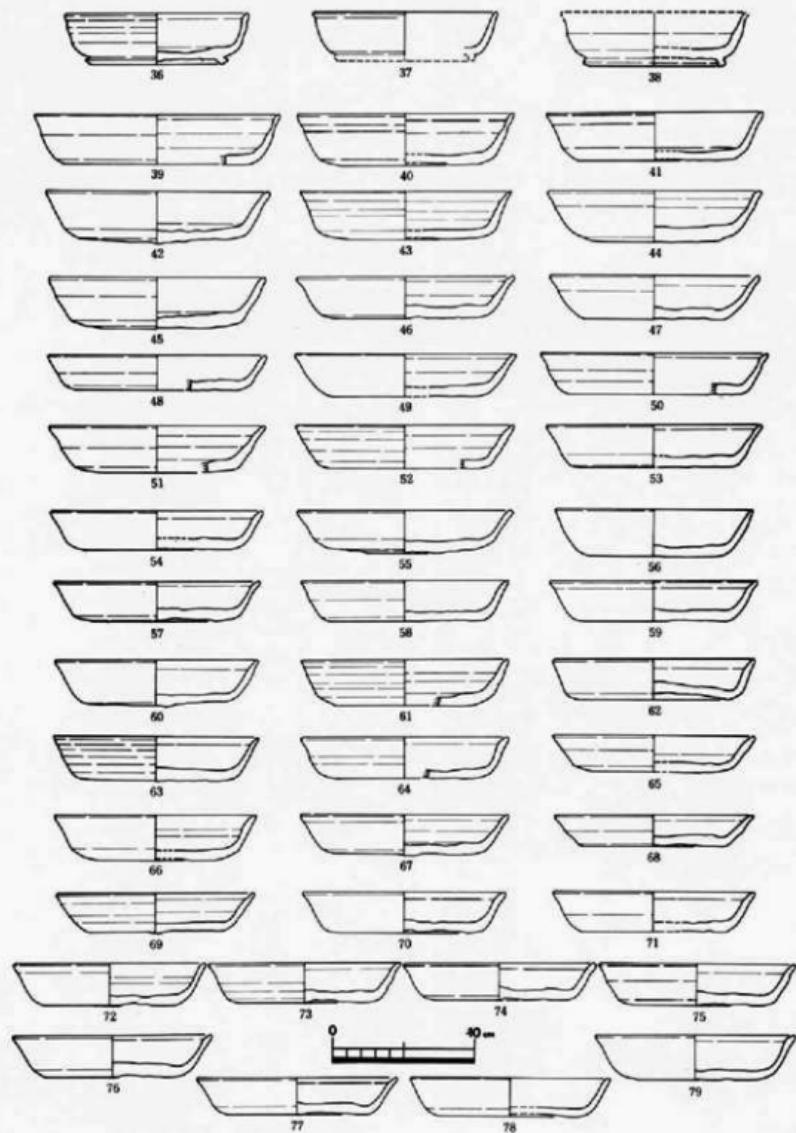
有台环 灰原、Ⅲ次窯覆土のものを含めれば、口径からIからVまで分類できる。床面出土のものではII類（15.3~16.5cm）とIII類（12.9~14.6cm）が確認されており、さらに径高指数により25前後のA類、40前後のC類（灰原、覆土で32前後のB類存在）とに分けられる。II類Cは体部立ち上がりが外傾度70以上にまっすぐ伸びる器形で、高台が太く踏ん張るしっかりしたもの（23・24）と小さく踏ん張るもの（25）とがある。底部の調整は23のみへラ削りする以外はへラ切り後のナデで、内面平坦部をナデつけてある。24のみ体部に沈線が1条施される。II類A（26・27）は高台貼付位置が立ち上がり付近にあり、短く踏ん張る高台が付く。III類A（28~38）は体部立ち上がり箇所が丸いものが多く、その箇所よりもやや内側に短く踏ん張る高台が貼付されている。調整はII類C以外は總てへラ切り後のナデ調整である。

(2) 無台环 (39~79)

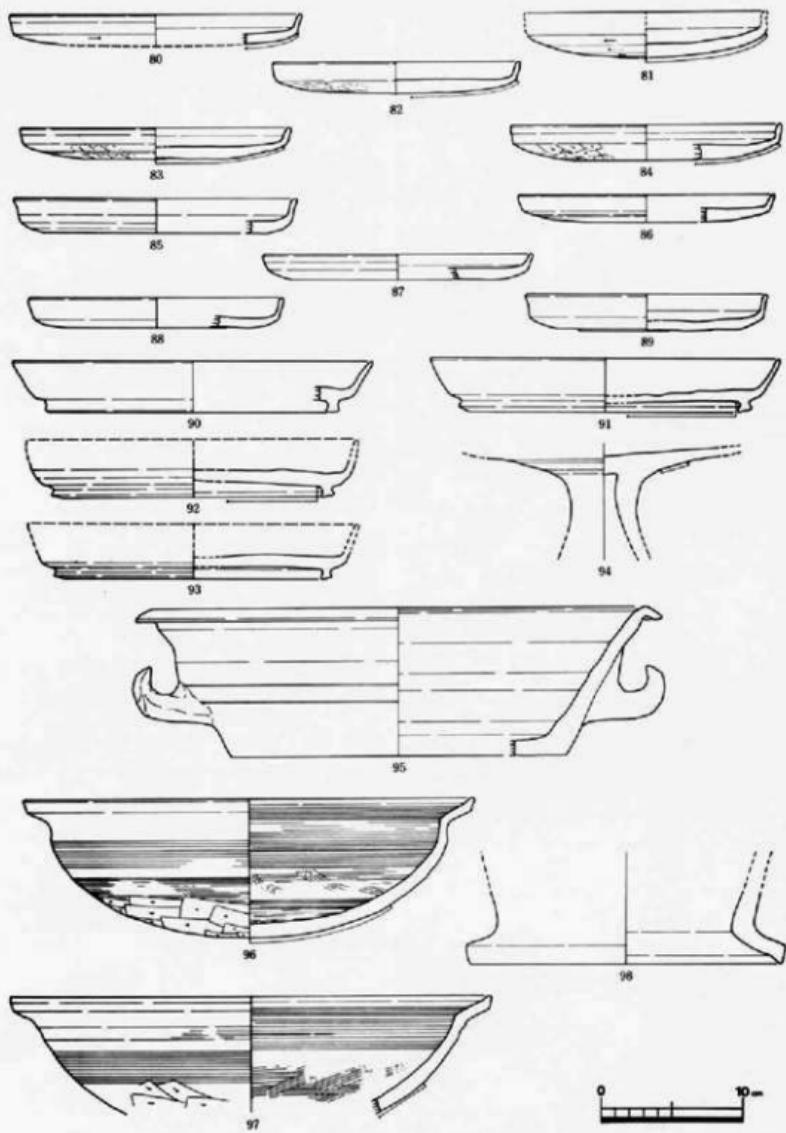
口径から17.4cmのI類<sup>(2)</sup>と13.4~16cmのII類に分けられる。I類（39）は径高指数20前後のもので、体部立ち上がりが丸味をおびる。II類は径高指数24前後のものと20前後のものとに分けられ、後者が主流である。24前後（40~45・56）のものは、底部が厚く丸みをおびるものと平底薄手のものとがあり、厚手のものが多い。20前後（46~55・57~79）のものは13.5~14.5cmに集中する傾向があり、小振りで低平なものが多い。器形はやや厚手の平底底部から丸味をもって立ち上がり、60度前後に外傾するものが一般的である。調整は底部へラ切り未調整か軽くナデるもの。



第52圖 Ⅲ次窯床面出土遺物 (S = 1/4)



第53圖 三<sub>次</sub>窯床面出土遺物 (S = 1/4)



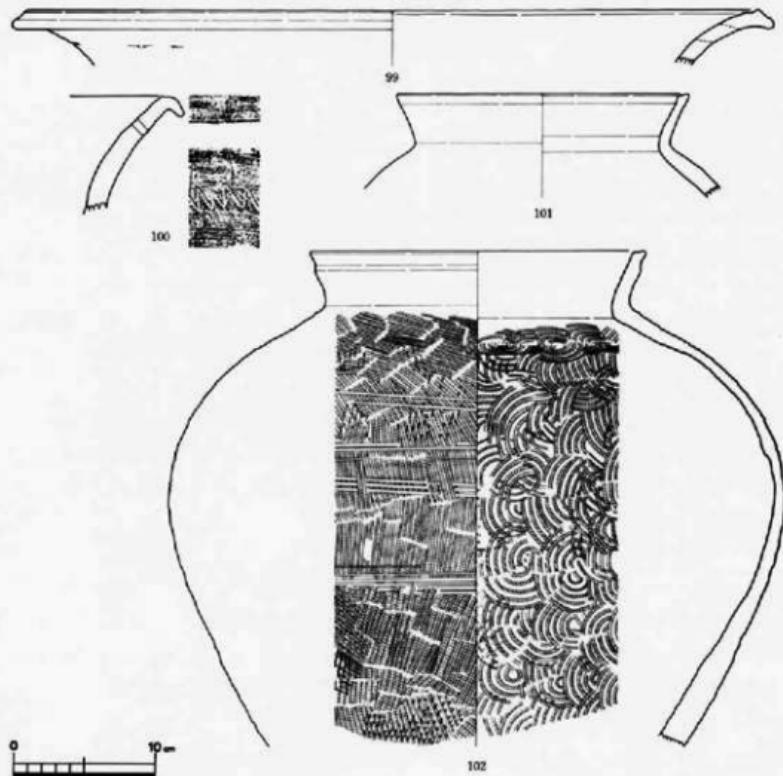
第54図 三<sup>ト</sup>次窯床面出土遺物 (S = 1/4)

(3) 無台皿 (80~89)

器形はいずれも、丸味をおびた厚手の底部に短い直立気味の体部が付くもので、底部調整からヘラ削りを施すA類とヘラ切り後ナデを施すB類に分けられる。A類は回転ヘラ削りのもの(80~81)と手持ちヘラ削りのもの(82~84)とがあり、後者の方が多いようである。B類(85~89)は整形方法の違いからか、A類のものよりも底部の平坦面が広く、平底状となっている。内面調整は絶て平坦面をナデつけて仕上げており、ロクロ目を残さない。口径は17~21cmの間でばらついて見られる。

(4) 有台皿 (90~93)

口径は22~25.4cmを測るもので、体部立ち上がり部分が比較的明瞭なA類(90・91・93)と丸味をおびるB類(92)とがある。量としてはA類が多く、一般的である。高台は太くしっかりと



第55図 三才窯床面出土遺物 (S = 1/4)

した形態で、底部に回転ヘラ削りを施す。

(5) 高坏 (94)

脚基部付近の破片で、坏部の底には回転ヘラ削りが施される。

(6) 盆 (95)

口径35cm、器高10.4cmを測るもので、器形は平底底部から外傾して立ち上がり、口縁端部で外側に垂れ下がるもので、体部中位に大形の把手が付く。調整は底面が仕上げのナデ、把手は指頭圧痕が残る。体部中位には2条の沈線が巡っている。

(7) 锅 (96・97)

口径は30～35cm程度のもので、丸底底部から丸く立ち上がり、口縁部で「く」の字に屈曲してその上端を擒み上げる器形を呈する。調整は上半をカキ目とナデで、下半を外面手持ちヘラ削り、内面刷毛目・カキ目を施す。胎土は混和材を含んでいる。

(8) 瓶 (98)

瓶の底部破片と思われるもので、底径21.8cmを測る。胎土は鍋と同じ混和材が含まれている。

(9) 壺 (99～102)

口径が50cm台の大壺と20センチの中壺に分けられる。前者(99・100)は口縁端部が下に突出する器形で、突帯は伴わない。口縁部中頃に1条の波状文が施されるもの(100)がある。後者(101・102)は比較的短めに口縁部が外傾するもので、胴部中頃からやや上に最大径をもつ。調整は外面平行線文叩き(一部カキ目)、内面同心円文叩き(Dc類)が施される。また、口縁部が欠損しているため、図示していないが、大壺の胴部半完形品がある(写真図版34-①②)。この調整方法は、外面平行線文叩き(Ha類)を施した後、肩部と底部付近に格子文叩き(長方形)が施され、内面は同心円文叩き(Da類)であるが、底部のみ刷毛目調整している。

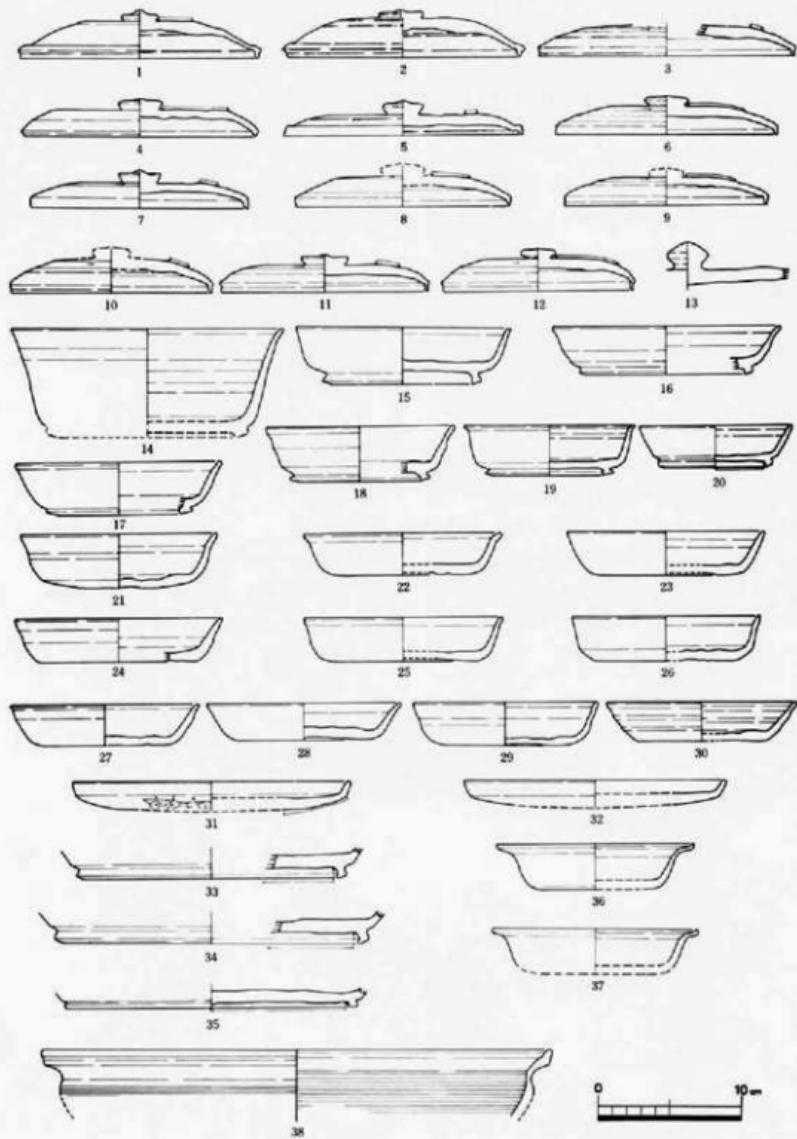
### 5. III次窯裏土出土遺物(第56・57図、写真図版35)

ここで述べる土器は一部まじりと思われるものも入っているが、III次窯床面の遺物と接合するものが多いことから、ほとんどがIII次窯の遺物として考えて差し支えないものである。器種は食膳具で蓋坏、無台坏、無台皿、有台皿、小形鉢、調理具で盤、煮沸具で鍋、貯蔵具で短頸壺、長頸瓶、横瓶、壺が確認されており、III次窯の土器と内容はほぼ同じである。

(1) 蓋坏 (1～20)

坏蓋 器形や口径の大きさから、I・II次窯に伴うと思われるもの(1・2)とIII次窯に伴うと思われるもの(3～13)とに分けられる。前者のものは、山笠状の器形で、口縁端部が外反する。後者のものは、III次窯床面の項で分類したI～III類があてはまる。つまり、3～5がII類に、6～12がIII類に、そして破片ではあるが、つまみの形態から13はI類に該当するであろう。器形・調整の特徴はIII次窯で述べたものと大差ないためここでは省く。

有台坏 坏蓋と同様、I・II次窯に伴うもの(15・16)とIII次窯に伴うもの(14・17～20)がある。後者のものは、口径19cm台、径高指数40前後のI類C(14)と口径14cm前後、径高指数25



第56図 Ⅲ次窯覆土出土遺物 (S = 1/4)

前後のⅢ類A（17・18）、口径12cm前後、径高指数30前後のⅣ類B（19）、口径10cm台、径高指数30前後のV類B（20）がある。Ⅳ類・V類の土器は器形上では他のⅢ類のものと大きな差はないが、底部の調整が、Ⅳ類では切り離し痕を丁寧にナデ消しているし、V類ではヘラ削りを施している。これらは折り返しのない壊蓋Ⅳ・V類（灰原で出土）とセットをなすものと考えられる。

（2）無台壺（21～30）

径高指数により20前後の偏平なもの（20～30）と28前後の底部が丸みを帯びた深身のもの（21）とに分けられる。口径は13～14cm程度にまとまり、比較的小振りである。

（3）無台皿（31・32）

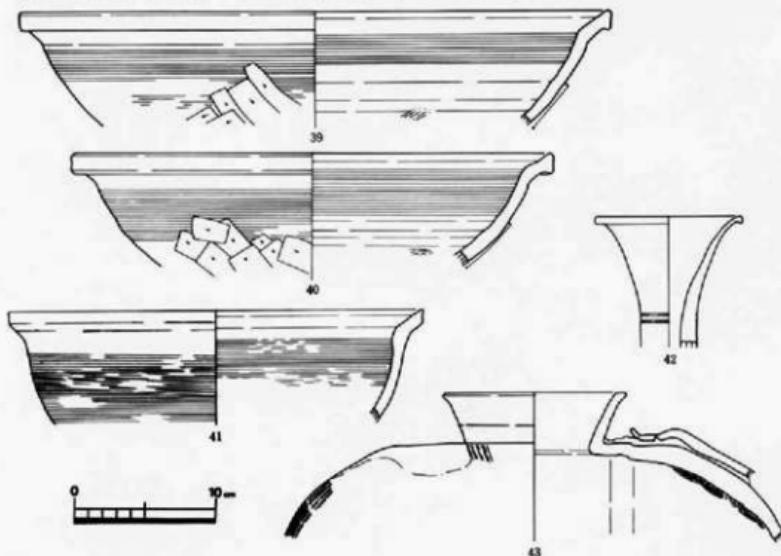
器形はⅢ次窯で述べたものと同様である。31は手持ちヘラ削りを施す。32は剥落のため不明。

（4）有台皿（33～35）

底部付近の破片。いずれも底部にヘラ削りを施す。高台は大きくしっかりしたものと小さくひしゃげたもの（35）がある。

（5）小形鉢（36・37）

平底の底部から立ち上がり、口縁部で外屈して端部で上に摘み上げる器形を呈す。胎土は煮沸具と同様の混和材を含む。胎土から煮沸具の仲間である可能性をもつが、器形は焼台に似ている。器種の判断に苦しむが、ここでは一応、小形の鉢として扱った。



第57図 Ⅲ次窯復土出土遺物 (S = 1/4)

#### (6) 鍋 (38~41)

口径が33~42cm程度で浅身の一般的な形態 (38~40) と口径が29cm程度でやや深身の形態 (41) とに分けられる。前者はⅢ次窯で述べたものと大差ないが、口縁端部を上下に突出させるものや内面底部に同心円文叩きの見られるものがある。後者のものは全体的な器形は前者のものと大差ないが、カキ目の範囲がかなり下までいっている。

#### (7) 長頸瓶 (42)

細い口頸部から徐々に開き、口縁端部で下端に突出する器形で、口頸部に2条の沈線が巡る。

#### (8) 横瓶 (43)

口径12.9cmを測り、胴部には外面平行線文叩き、内面同心円文叩き (D a類) が施される。

### 6. Ⅲ次窯舟底状ビット出土遺物 (第58図、写真図版35)

このビットはⅢ次窯の燃焼部から焚口部にかけて掘り込まれたものであり、Ⅲ次窯焼成時の灰の搔き出し等に使用された可能性が強く、出土するもの多くはⅢ次窯の製品として考えて差し支えない。しかし、Ⅱ次窯にも同じところにビットが掘られていることから、少量ながらこの時期の遺物も混入している。器種は食膳具で蓋坏、無台坏、無台皿、有台皿、高坏、調理具で盤、煮沸具で鍋、貯蔵具で短頸壺、長頸瓶、甕が確認できる。

#### (1) 蓋坏 (1~9)

坏蓋 口径・器形・調整からⅢ次窯床面の分類にあてはめれば、1はI類に、2~4はⅢ類の前者としたものに、5はⅢ類の21に該当する。

有台坏 これらはいずれも器形からⅡ次窯に伴うものと考えられる。

#### (2) 無台坏 (10~12)

無台坏は器形から分類することは困難であるが、焼成や径高指数から、10・11はⅡ次窯に、12はⅢ次窯に伴うものと考えられる。

#### (3) 無台皿 (13~16)

Ⅲ次窯に伴うものと考えられ、底部ヘラ削りの施されるA類 (14) とヘラ切り後ナデ調整のB類 (13~16) とに分けられる。

#### (4) 有台皿 (17・18)

Ⅲ次窯に伴うものと考えられ、立ち上がりの明瞭なものである。底部はヘラ削りが施され、高台はしっかりと踏ん張る器形を呈する。

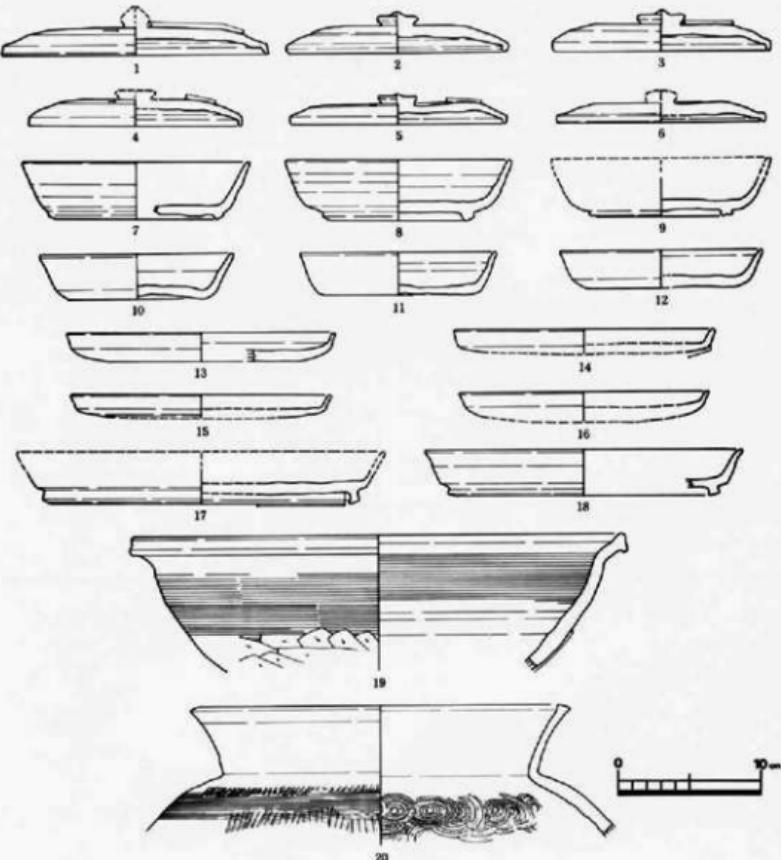
#### (5) 鍋 (19)

Ⅲ次窯に伴うものと考えられ、口径34.6cmを測る。器形・調整はⅢ次窯のものと同じである。

#### (6) 甕 (20)

口径25cmを測る中壺形態で、胴部外面には平行線文叩き後のカキ目、内面には同心円文叩き (D c類) が施される。

### 7. 灰原出土遺物 (第59~66図、写真図版36~39)

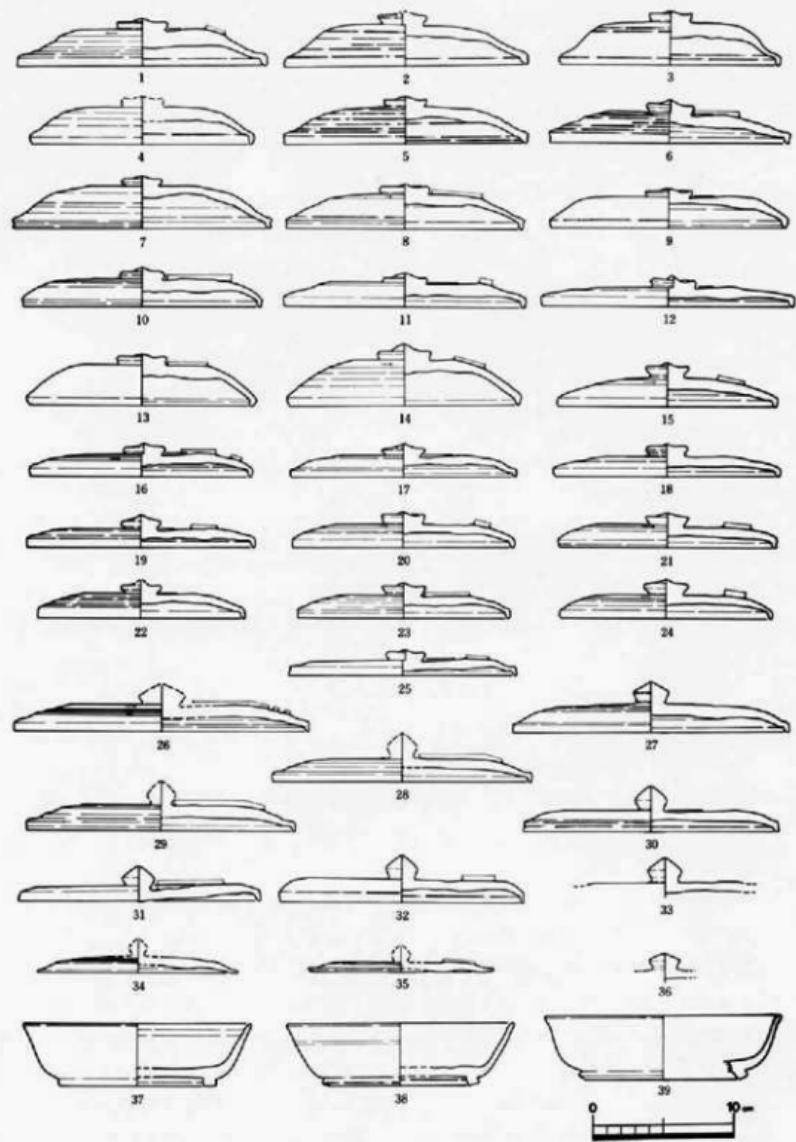


第58図 Ⅲ次窯舟底状ピット出土遺物 (S = 1/4)

この灰原は1号窯跡に伴うものであるが、灰原の層位からはI次窯～III次窯の区別は難しいものの、器形や焼成から可能な限り区分した。確認できる器種は食膳具で蓋坏、無台坏、有台皿、塊、高坏、小形鉢、調理具で鉢、盤、煮沸具で長胴甕、鍋、櫃、貯藏具で短頸壺、広口壺、その他壺類、長頸瓶、水瓶、横瓶、甕、それと窯道具として焼台が確認されている。

#### (1) 蓋坏 (1~81)

坏蓋 I・II次窯に伴うと考えられるものとしては、1~9・13・4・18が挙げられる。これらはA類とした天井部に広い平坦面をもつもの (1~6・9・18) とB類とした丸い山笠状を呈するもの (7・8・13・14) とに分けられる。A類は天井部ヘラ切りナデ調整のものが多く、厚手



第59圖 灰原出土遺物 ( $S = 1/4$ )

の作りものが多い。B類は天井部に回転ヘラ削りを伴うものが多く、つまみの大きいものが目立つ。つまみの形態は大きな偏平宝珠紐のものが主体で、頂部の盛り上がるものもある。内面の調整は総てロクロ回転ナデである。

上記以外のものが、Ⅲ次窯に伴うものと考えられ、口径からI～Vに分類できる。I類(26・27・29)は19.5cm以上のもので、しっかりとした宝珠紐が付く。II類は16～18.5cmのもので、つまみの形態から偏平な宝珠紐の付くA類(10～12・19・25)としっかりした宝珠紐の付くB類(28・30～32)とに分けられる。III類(15～17・20～24)は偏平な器形で、頂部の盛り上がった偏平宝珠紐が付されている。IV類(34)及びV類(35)は口縁部の折れ曲がらないもので、つまみの部分が欠損しているが、小さな宝珠紐がつくものと考えられる。

有台坏 I・II次窯に伴うと考えられるものとして、37～51・54・57・59・61～66が挙げられる。径高指数により24程度の偏平なA類(37～51・54・57・59)と30程度の深身のB類(61～66)とに分けられ、A類は口径15～16.7cmに、B類は口径13.9～16cmに分布する。ただしA類の土器はⅢ次窯でII類Aしたものと同じものであるため(つまり、この器形はⅢ次窯に残る器形)、Ⅲ次窯に伴うものが幾つかあるとは考えられるが、I・II次窯で主体的に生産されている器形ということで、ここに入れた。

Ⅲ次窯に伴うと考えられるものとしては、56・67～74・75～81が挙げられ、口径によりI～III類に分けられる(IV・V類は確認できなかった)。I類は径高指数31程度のB類(77・78)と39程度のC類(75・76)がある。II類は径高指数24のものをI・II次窯に入れているため、39程度のC類(79～81)のみ述べる。高台の形態はしっかりと踏ん張るもので、体部下端以下にヘラ削りを施すものや体部に2条の沈線が巡るものがある。III類(56・67～74)は口径13～14.3cmのもので、偏平な器形を呈す。

#### (2) 無台坏(82～110)

この器種は、I～Ⅲ次窯で器形に大きな差がなく、区分が難しい。ただし、Ⅲ次窯の製品は生焼けで極めて低平なものが多いことから、この2つの条件を満たし、器形も似ているものを抜き出せば、92・97・100・103・107～109がそれに該当するであろう。

#### (3) 無台Ⅲ(111～114)

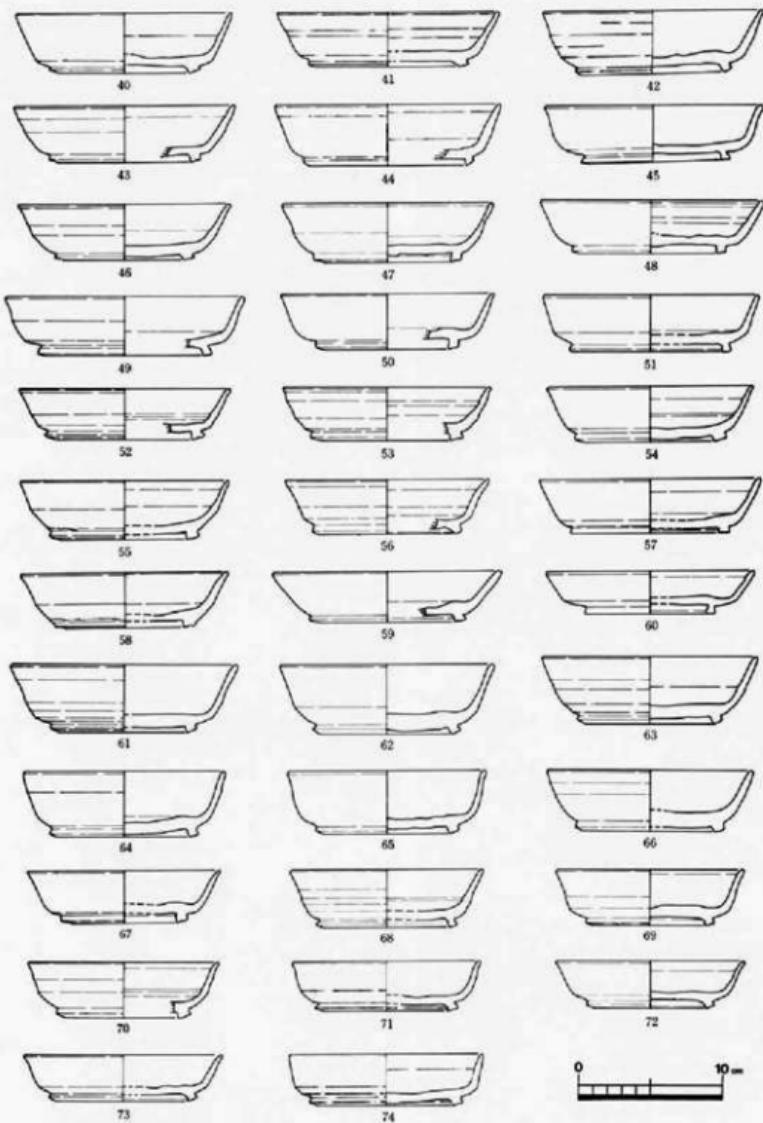
口径20cm前後のもの(111～113)と口径15cm前後のもの(114)とが存在する。前者のものはⅢ次窯で出ている一般的な法量のものであるが、後者のものは一個のみ口径が小さくなっている。類別にして考えたほうが良いかもしれない。

#### (4) 有台Ⅲ(115～118)

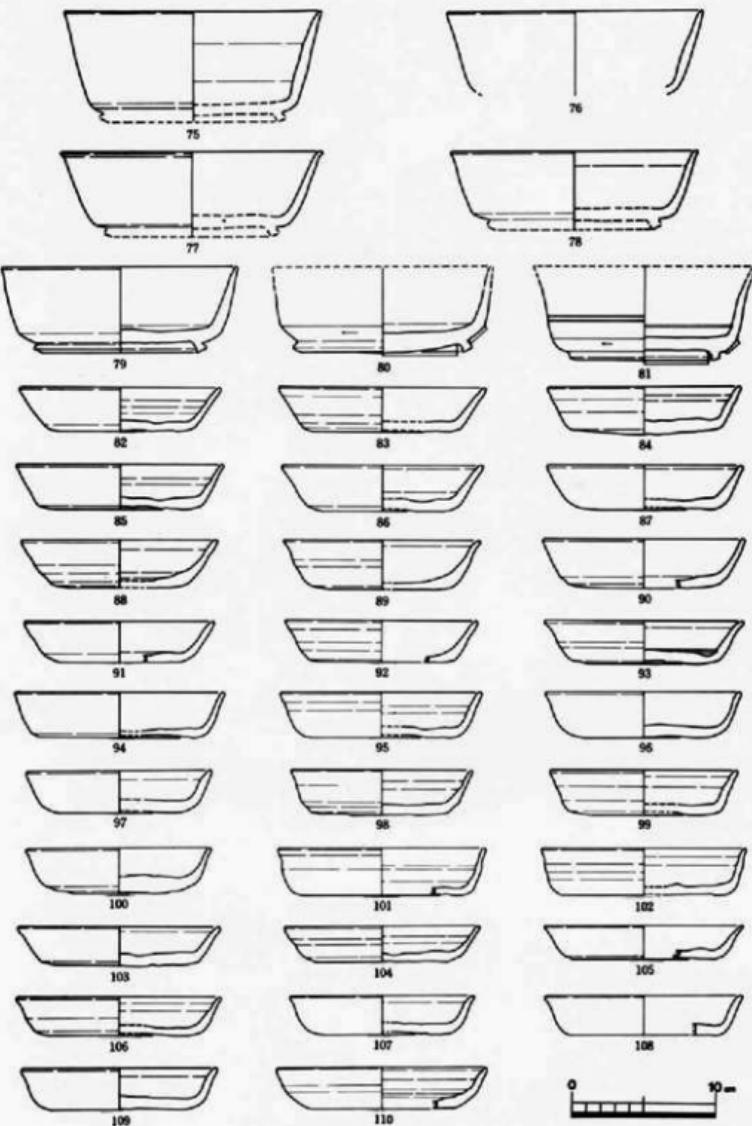
この器種はⅢ次窯に伴うもので、体部立ち上がりの器形から、比較的明瞭なA類(115～117)と丸味をもつB類(118)に分けられる。高台はしっかりとした形態で、底部調整はヘラ削り。

#### (5) 塚(119～121)

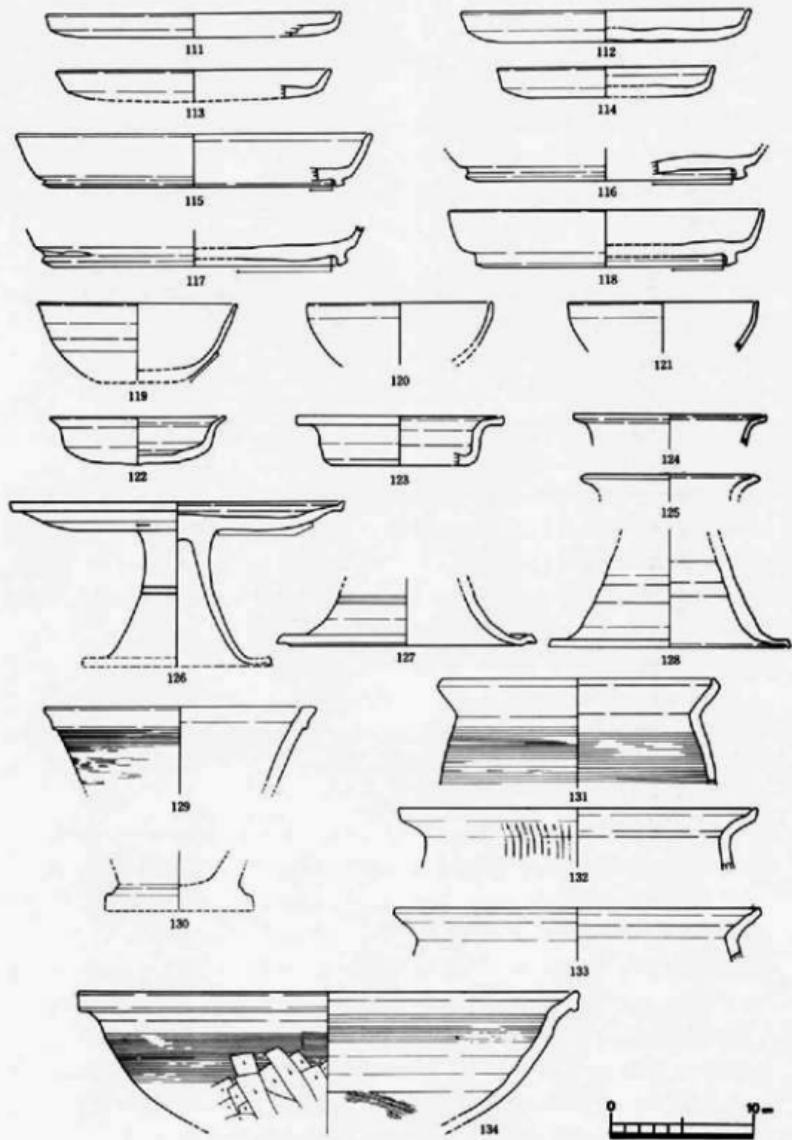
口径13～14cm程度のもので、土器集積地で出土している塚よりも小形のものである。器内は薄



第60図 灰原出土遺物 ( $S = 1/4$ )



第61図 灰原出土遺物 ( $S = 1/4$ )



第62図 灰原出土遺物 ( $S = 1/4$ )

く、口縁端部で内湾するもので、体部下半にヘラ削りが施されている。内面は丁寧なナデか磨き調整が施される。ここでは塊として扱ったが、やや小形の鉄鉢である可能性も強い。

(6) 高坏 (126~128)

蓋が逆さまになった器形の坏部をもつタイプで、口径23.6cmを測る。口縁部は端部の短く折り曲げる形態で、坏底部にはヘラ削りが施される。脚部は比較的太く、長くはない。また、この中で降灰の仕方や沈線の位置が異なるもの (127) があり、広口壺の可能性をもつ。

(7) 小形鉢 (122・124)

124はⅢ次窯覆土出土のものと器形、胎土とも同様のものである。122は底部がやや丸くなることや口縁端部で上端を擒み上げないことなど124とは器形に若干の違いがあるが、胎土が混和材を含む点で同じであることから同じ器種にいれて良いものと考える。

(8) すり鉢 (129・130)

体部上半の破片と底部破片であるが、同一個体と思われる。口径は19.2cmを測るもので、複合口縁をもち、体部にカキ目調整が施される。

(9) 長胴壺 (131~133)

131は須恵器であるが、132・133は土師器である。131は頸部で「く」の字に屈曲し、口縁端部で内側に突出させる器形を呈し、全体的に厚手でシャープさがない。調整は胴部上半をカキ目、胴部下半は破片から推察して外面平行線文叩き、内面同心円文 (Da類) 叩きが施される。132・133は頸部で「く」の字に屈曲するもので、口径25cm台と須恵器のものよりも大振りである。132は口頸部に縱方向の粗い刷毛調整が残る。

(10) 瓢 (134~138)

口径が大きく浅身の形態 (134~137) と口径が20cm台と小さく深身の形態 (138) に分けられる。前者はⅢ次窯で出ているものと大きな差はないが、やや深身になるものもある。後者は体部下半にヘラ削りが施されている。胎土はいずれも混和材を含む。

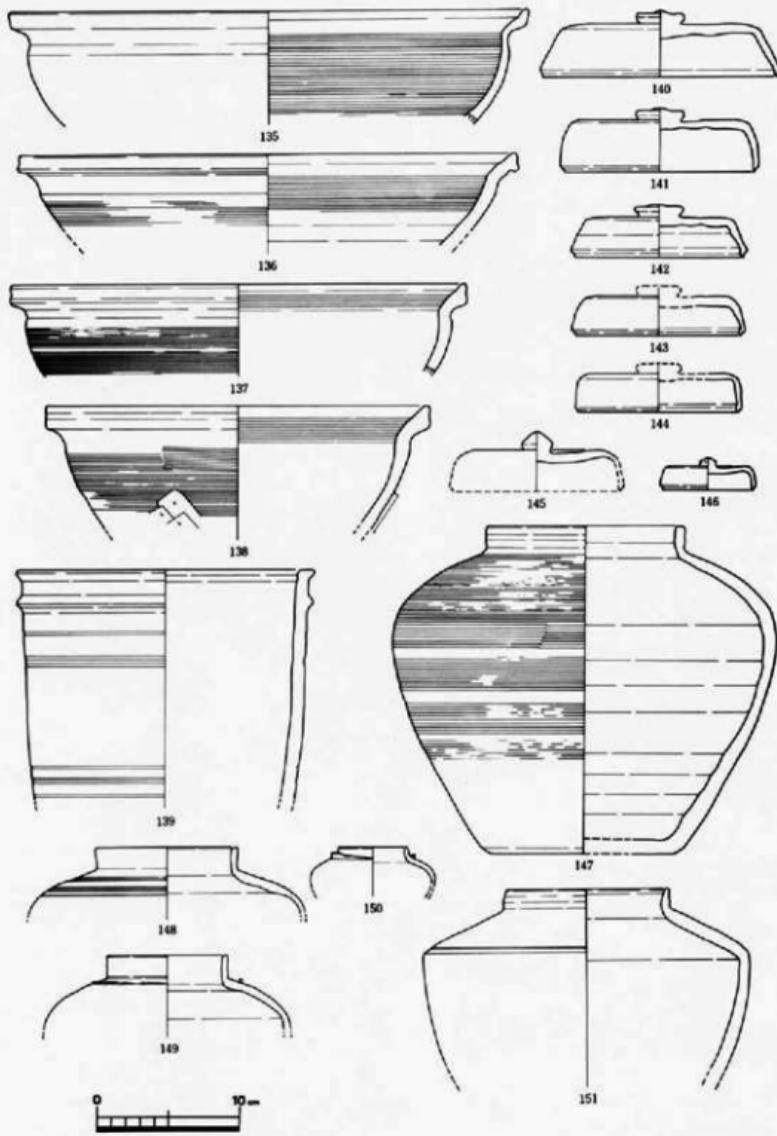
(11) 瓢 (139)

口径21cmを測るもので、体部はほぼ真っすぐに立ち上がり、口縁端部とその下で外側に2段の突堤が巡る。体部外面には数条の沈線が巡り、調整は内外面ともナデであるが、図化していないものに体部の下方で刷毛目がみられる。胎土は混和材を含む。

(12) 短頸壺 (140~151)

**短頸壺蓋** 口径は6.3cmのミニチュアのものを除けば、11.4~16.3cmを測るもので、つまみは偏平な宝珠紐としっかりした宝珠紐 (145) のものがあり、後者はⅢ次窯で存在する坏蓋の宝珠紐に共通する。天井はヘラ切り後ナデ調整。

**短頸壺身** 口径は4.8cmのミニチュア製品を除けば、8.5~14cmを測る。器形は胴上部に最大径をもち、口縁部の短く直立するものであるが、肩の丸く張るもの (147~150) と角張るもの (151) がある。底部は148のような平底のものもあるが、高台の付くものが一般的であろう。



第63圖 廢原出土遺物 ( $S = 1/4$ )



第64図 灰原出土遺物 ( $S = 1/4$ )

### (13) 広口壺 (169)

口縁部を欠損するが、推定で口径17cm、口頸部長7cm、胴部長9cmの法量を測るもので、胴上部で肩が角張り、口縁部の外反する器形を呈す。全体的にどっしりとした安定感のある器形で、平底の底部には高台が付く。

### (14) その他の壺類 (152・153)

口縁部が短いことで、短頸壺に似ているが、短頸壺よりも長目に外傾する器形でやや趣を異にしているため、その他として扱った。器形は胴上部上方が角張るもので、やや大形で頸部のすばまる152と小形で頸部のあまりすばまらない153がある。

### (15) 長頸瓶 (154~167)

口頸部の器形から、頸部から筒状に長く伸び口縁部で外反する154~156・158（A類）と口頸部の中頸から徐々に外反していくやや短めの157・161（B類）とに分けられる。A類には肩が鋭角に屈曲し、底部に向かってすばまる器形の胴部が付くが、B類は口頸部のみの破片であるため、胴部器形は不明。B類のものが後出する器形と思われるが、胴部不明のため、断定はできない。

また、これら一般的な法量のもの以外に、ミニチュアの製品（165~167）がある。

### (16) 水瓶 (168)

胴部上半以上を欠損しているが、胴部から底部にかけて球形を呈することや法量が小さいこと、内面調整が丁寧なナデ仕上げであること等から長頸瓶とは異なっており、水瓶として考えた。

### (17) 横瓶 (170~173)

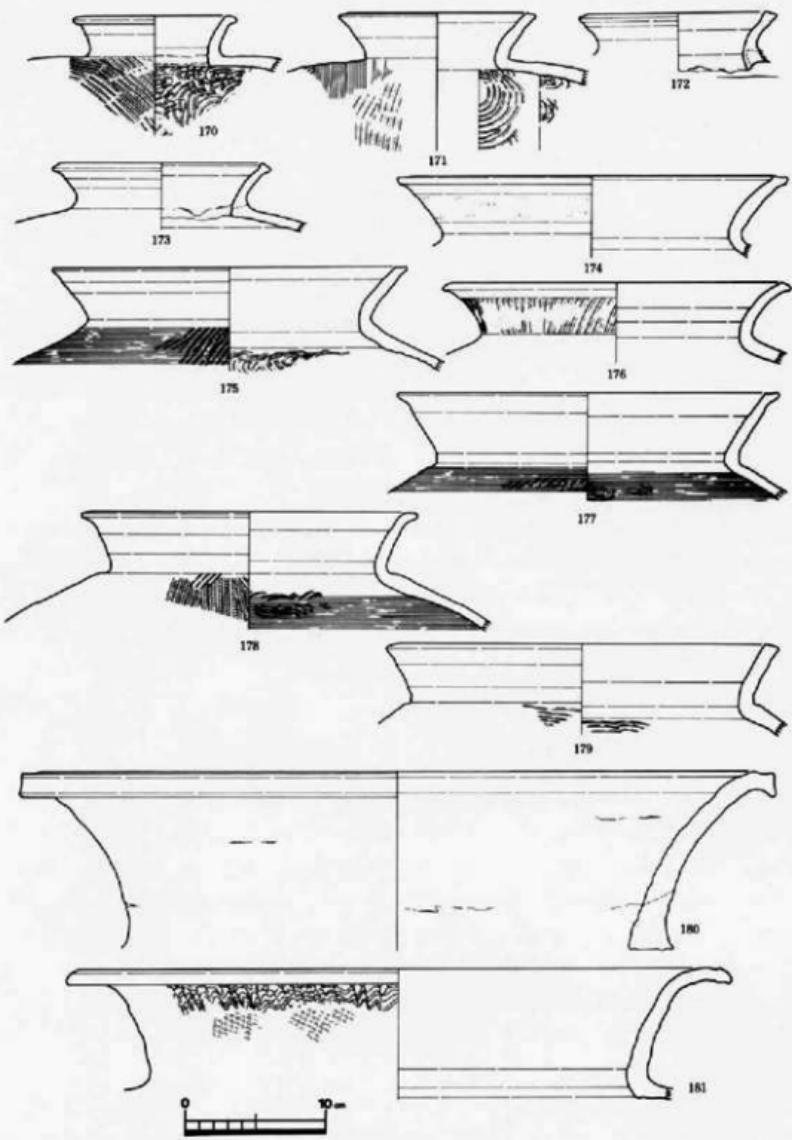
口径10~14cm程度を測り、短く外傾する口縁部を呈す。胴部は叩き後ナデ調整するものが多く、外面平行線文叩き（H a類が主体）、内面同心文叩き（D a類が主、D c類は少量確認できるだけ）が施される。

### (18) 壺 (174~192)

口径から40cm以上の大壺と20cm台の中壺に分けられる。大壺は口縁部に文様をもつA類と無文のB類とがある。A類の文様は櫛描き波状文が主であるが、1段のもの（181）、2段のもの（185~188）、それに2段の沈線文が伴うもの（183・189~192）とがあり、波状形の連続刺突文を施すもの（184）もある。口縁部形態は大きく外反するもので、内外面（片面）に突帯をもち端部の丸いものが多い。B類はA類と似た口縁部形態であるが、突帯をもつものが少なく、端部の平坦なもの（180）がある。中壺（174~179）は口縁部文様をもつものがなく、頸部で屈曲して外傾する器形のもので、口縁端部で内外面に突出する他は突帯を構成する等の装飾的な要素をもたない。口縁部はナデ調整が基本であるが、外面に縦の平行線文叩き（+カキ目）、内面同心円文叩き（+カキ目）が施される。胴部の調整は外面平行線文叩き（+カキ目）、内面同心円文叩き（+カキ目）が施される。

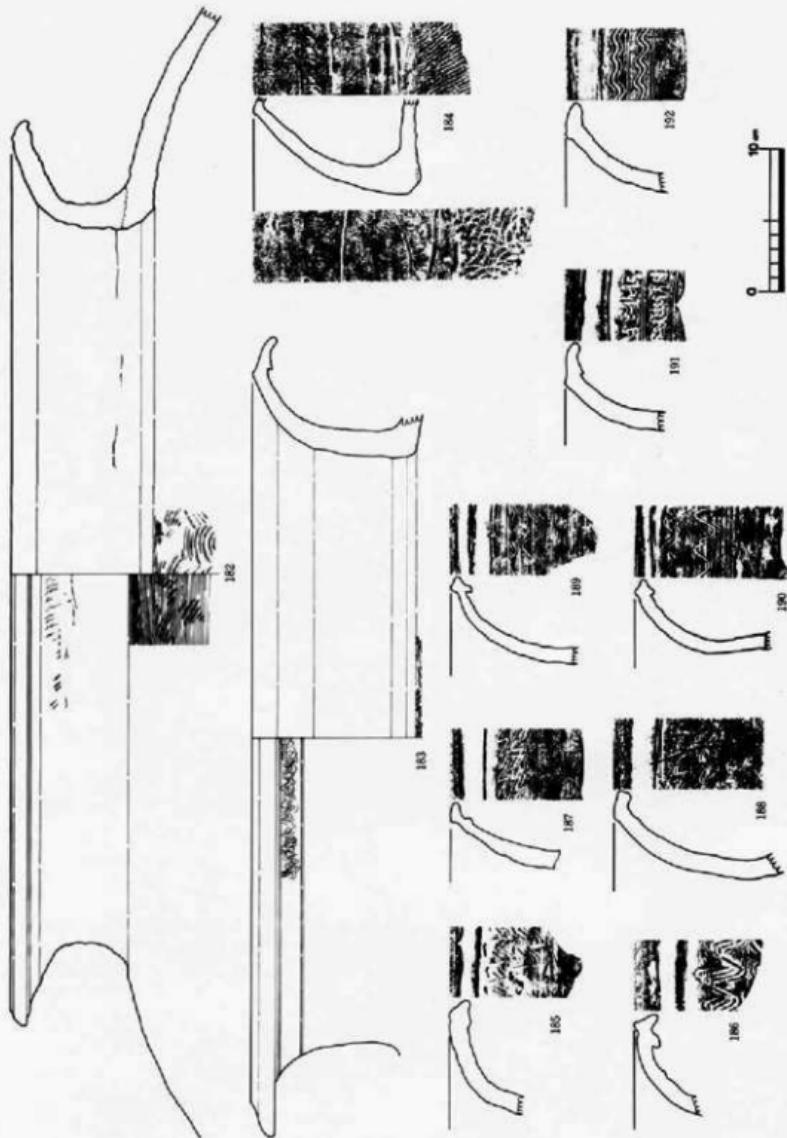
### (19) 焼台 (123・125)

器形は平底の底部から口縁部で外屈し、上端部を摘み上げるもので、口径、器形で小形鉢に類似している。しかし、小形鉢よりも厚手で、胎土が混和材を含まないことで、焼台として扱った。



第65図 灰原出土遺物 (S = 1/4)

第66圖 废原出土遺物 (S=1/4)



第3表 矢田野向山古窯跡土器観察表

## II 次窯構築時排水溝(第47~48図)

番号	器種	法 量	残存 状況	焼成 度	調 査	備 考
1	环 壶	口17.6、高3.3	完 良 好	天へう割り		
2	"	口17.7、高3.2	略 完 傷 痕	"	側面み	
3	"	口17.6、高3.2	完 良	"	"	
4	"	口17.7、高3.5	" 傷 良	"	"	
5	"	口17.6	1/3 傷 不良	"		
6	"	口16.7、高3.9	完 良 好	"	直み	
7	"	口17.1、高3.5	2/3 "	天へう割りナデ	外面部陥	
8	"	口17.6、高3.1	1/4 "	不 明	"	
9	"	口17.6、高1.7	1/3 "	天へう割り	側面み	
10	"	口16.7、高2.3	2/3 "	"	外面部陥 直み	
11	有台环 壺	口15.7、高3.7 台11.2	1/4 "	直へう割りナデ		
12	"	口15.8、高3.9 台11.7	2/5 "	"		
13	"	口14.9、高3.4 台10.2	1/2 "	内面部陥 直み		
14	"	口13.9、高4.2 台9.2	1/4 "	不 明	内面部陥	
15	"	口14.8、高4.4 台11.1	1/5 傷不良	直へう割りナデ		
16	無台环 壺	口13.9、高2.6	1/3 良 好	"	外面部	
17	"	口15.2、高3.2	1/3 良	"		
18	壺	台12.0	底 片	良 好	剥下へう割り	
19	壺	口 片	"	波状文3段		
20	"	口15.8、高6.6 台9.6	略 完 傷 不良	外面部、内D部		

## 土 器 集 積 地(第49~50図)

1	环 壶	口17.1、高3.1	略 完 良 好	不 明	外面部
2	"	口17.3、高3.1	完	"	"
3	"	口17.2、高3.6	"	"	"
4	"	口17.2、高3.2	1/2 "	天側縫へう割り	"
5	"	口17.7、高2.7	完	不 明	"
6	"	口17.7、高2.1	2/3 "	"	外面部 直み
7	"	口17.7、高1.6	3/4 "	天へう割り	外面部 直み
8	"	口16.8、高2.3	1/2 "	"	外面部 直み
9	"	口16.1、高2.5	1/4 "	"	
10	"	口15.7、高2.8	1/2 "	"	直み
11	"	口15.0	1/4 "	不 明	外面部 直み
12	有台环 壺	口15.6、高3.7 台10.6	略 完	"	直へう割りナデ 外面部 直み
13	"	口14.9、高3.8 台10.0	1/3 良	直	直面部注痕
14	"	口14.9、高3.7 台10.2	略 完 良 好	直へう割りナデ	
15	"	口14.8、高4.2 台10.1	1/3 "	"	外面部

番号	器種	法 量	残存 状況	焼成 度	調 査	備 考
16	有台环	口15.7、高3.9 台10.5	1/3 良 好	底へう切りナデ		
17	"	口15.2、高3.8 台10.3	略 完	"	底中央スコット板 底面部注痕	
18	"	口15.6、高4.0 台10.8	完	"		
19	"	口15.4、高4.1 台10.6	1/3 良	底へう切りナデ	外一部陥	
20	"	口15.8、高4.0 台11.2	"	良	"	
21	"	口14.6、高3.6 台10.4	略 完 良 好	"	底中央スコット板 内面部中央ナゾリ	
22	"	口15.2、高3.8 台10.3	5/6 "	底へう切りナデ	外一部陥 直み	
23	"	口15.6、高3.6 台10.6	2/3 "	"	底中央スコット板 外面部	
24	"	口15.4、高3.7 台10.5	6/7 "	底へう切りナデ	外一部陥	
25	"	口15.6、高3.8 台11.2	1/3 "	"	外面部	
26	"	口15.5、高3.9 台10.5	略 完 良	"	内面部中央ナゾリ 底中央スコット板	側面み
27	"	口15.8、高3.3 台11.4	1/2 並	底へう切りナデ	弱正面	
28	"	口15.4、高3.6 台11.5	1/3 良 好	"	外一部陥	
29	"	口16.0、高3.6 台10.8	1/6 傷不良	"		
30	"	口15.4、高3.5 台9.9	1/2 良 好	底へう切り未調整	内面部リング 伏士断面	
31	"	口14.2、高3.7 台10.2	1/3 "	"		
32	"	口14.8、高4.0 台12.2	1/2 良	"		
33	"	口14.5、高4.2 台11.0	1/4 並	"		
34	"	口14.6、高4.0 台11.1	1/3 良 好	"	外一部陥	
35	"	口14.6、高4.8 台9.5	1/5 良	底へう切りナデ	"	
36	"	口13.8、高4.1 台10.7	1/4 "	"		
37	無台环 壺	口14.7、高3.6	1/3 "	"		
38	"	口14.4、高3.4	2/3 並	底へう切り未調整	側面み	
39	"	口14.3、高3.3	1/3 傷 良	底へう切りナデ	"	
40	"	口14.6、高3.1	1/2 "	"		
41	"	口14.2、高2.8	1/2 良	底へう切り未調整	口縁に陥	
42	"	口14.2、高3.3	1/3 傷 良	底へう切りナデ		
43	"	口14.6、高3.4	完 良 好	底へう切りナデ	口縁に陥	
44	"	口14.6、高3.4	1/2 良	底へう切りナデ	底面「-」のへきれい	
45	"	口14.5、高3.0	2/3 傷 良	"	底面「×」のへきれい	
46	"	口14.9、高3.2	" 良 好	"	内面部「-」のへきれい	
47	"	口16.0、高3.4	1/3 良			
48	"	口14.2、高3.1	1/3 "	底へう切りナデ		
49	"	口14.6、高3.2	1/6 傷 良	"		

番号	基準	法 量	残 存	焼 成	調 整	備 考
50	無台環	□13.6, 高2.9	1/3	良 好	底へラ切りナダ	
51	"	□14.0, 高2.9	4/5	良 好	"	底面「ー」のへう記号
52	"	□14.7, 高2.9	"	"	"	
53	"	□14.9, 高3.3	1/3	良	"	
54	"	□15.2, 高3.5	"	"		
55	"	□15.8, 高3.3	"	"	底へラ切り未調整	
56	"	□14.4, 高3.4	2/3	良 好	底へラ切りナダ	外面部
57	"	□13.6, 高3.2	1/4	良	"	
58	"	□14.2, 高3.0	1/3	良 好	"	
59	"	□13.6, 高3.3	1/4	良	"	
60	"	□13.3, 高3.6	1/3	良 好	"	
61	"	□12.6, 高3.6	"	良	"	
62	"	□12.8, 高3.3	1/4	良 好	"	
63	(付録)	□14.6, 高1.1	5/6	良	底ナダ(切り取り内面)	
64	(付録)	□14.8, 高2.5	"	"	底ナダナダ(切り取面)	
65	箱底面	□17.2	2/3	良 好	不明	外面部
66	■	□21.1	胴上半	"	外 Ha + カキ	内 Ha + カキ

## II 次高床面(第51図)

1	环 ■	□17.6, 高2.4	2/3	良 好	天へラ割り	内外脚底 歪み
2	"	□18.2, 高2.3	略 完	"	不 明	
3	"	□17.3	1/4	"	"	内外脚 歪み
4	"	□17.3, 高2.3	略 完	"	天側縫へラ割り	内外脚 歪み
5	"	□17.5	1/3	"	"	"
6	"	□16.5	1/5	"	天へラ割り	内面部
7	"	□16.2, 高2.7	完	"	内中央ナダツケ	外面部
8	"	□16.3, 高3.3	1/4	"	天へラ割り	
9	"	□15.9	1/5	"	"	
10	"	□17.0	1/10	"	不 明	内外脚
11	有台环	□15.8, 高3.7 台10.6	1/3	"	底へラ切り未調整	内外一部脚
12	"	□14.6, 高3.5 台9.8	1/4	"	"	
13	"	□14.5, 高4.0 台10.2	1/3	並	"	
14	"	□15.6	1/5	良 好		内面部
15	"	□12.3	1/5	"		
16	無台环	□13.2, 高3.0	1/3	"	底へラ切りナダ	内外脚 歪み
17	"	□13.4, 高3.1	1/6	"	"	内外脚
18	"	□14.1, 高3.4	1/2	"	"	外面部
19	"	□13.6, 高2.9	1/5	僅不良	"	

番号	基準	法 量	残 存	焼 成	調 整	備 考
20	無台环	□14.0, 高3.1	1/5	良 好	底へラ切りナダ	外面部
21	"	□13.1, 高2.9	1/4	良 好	"	内外脚
22	"	□14.2, 高2.8	1/6	"	"	歪み
23	"	□14.6	1/6	"	"	内外脚
24	底?	□9.0	1/5	"	底へラ割り 内面丁寧ナダ	
25	箱底面	□16.2	1/4	良		
26	"	□17.3	1/7	良 好		内面部 歪み
27	鉢?	□26.0	1/8	"		内外脚

## III 次高床面(第52~55図)

1	环 ■	□19.8, 高3.3	2/3	僅不良	天へラ割り 内中央ナダツケ	
2	"	□19.9, 高3.2	"	不 良	"	
3	"	□20.0	1/6	僅不良	天へラ割り	偏歪み
4	"	□16.3, 高2.4	完	良 好	内中央ナダツケ	外面部
5	"	□16.9, 高3.5	2/3	僅 良	天へラ割り	
6	"	□16.0, 高2.1	1/2	僅不良	天へラ切りナダ 内平坦ナダツケ	歪み
7	"	□16.5	1/4	並	"	偏歪み
8	"	□15.2, 高2.7	3/4	良	天へラ割り 内中央ナダツケ	
9	"	□15.0, 高2.3	完	良 好	"	
10	"	□15.0, 高2.7	3/4	僅不良	"	
11	"	□15.5, 高2.5	完	良	"	歪み
12	"	□15.1, 高2.5	"	"	"	"
13	"	□15.4	2/5	並	"	
14	"	□15.5	1/3	良	天へラ割り	
15	"	□15.6	"	僅不良	"	
16	"	□14.8, 高2.5	完	良 好	天へラ割り 内中央ナダツケ	
17	"	□14.9, 高2.8	略 完	並	天へラ割り 内平坦ナダツケ	
18	"	□15.4, 高3.4	2/5	僅不良	天へラ切りナダ 内平坦ナダツケ	偏歪み
19	"	□14.0, 高3.4	1/2	"	天へラ割り 内平坦ナダツケ	
20	"	□15.4, 高3.6	1/4	良	天へラ切りナダ 内平坦ナダツケ	
21	"	□15.1, 高2.2	3/4	不 良	天へラ切りナダ	
22	有台环	□15.6, 高6.1 台11.4	完	良	底へラ切りナダ 内平坦ナダツケ	
23	"	□16.5, 高6.8 台11.9	5/6	"	底へラ割り	内面「ー」 のへう記号
24	"	□15.9, 高6.8 台12.3	1/3	僅不良	底へラ切りナダ 内平坦ナダツケ	外面部 2面光面
25	"	台11.2	底 片	良 好	底へラ切りナダ	
26	"	□15.6, 高3.7 台12.6	1/3	僅 良	"	歪み
27	"	□15.3, 高3.4 台11.6	"	僅不良	"	
28	"	□14.0, 高3.7 台10.2	4/5	良 好	"	

番号	種類	法量	残存	検査	調査	備考
29	有台环	□14.6. 高3.7 台10.2	1/3	不良	底へラ切りナダ	
30	"	□14.6. 高3.4 台10.3	1/5	良	"	
31	"	□13.6. 高3.4 台10.2	略 完	"	"	
32	"	□14.0. 高3.7 台10.4	1/2	良 好	"	
33	"	□14.0	1/5	優 良		
34	"	□13.8	1/5	良		
35	"	□13.2. 高3.8 台9.2	2/5	優 良	底へラ切りナダ	
36	"	□12.9. 高3.6 台10.0	1/3	良 好	底へラ切り未調査	
37	"	□13.0	1/5	良		
38	"	台10.0	1/4	不良	底へラ切りナダ	
39	無台环	□17.4. 高3.5	1/4	良 好	"	調査み
40	"	□15.2. 高3.6	1/3	不良	"	
41	"	□15.2. 高3.4	1/4	良 好	"	
42	"	□15.8. 高3.7	2/3	不良	底へラ切り未調査	
43	"	□14.9. 高3.4	1/2	優 良	底へラ切りナダ	
44	"	□15.0. 高3.6	1/3	良	"	
45	"	□15.2. 高3.6	2/5	"	"	
46	"	□15.3. 高2.9	1/2	不良	底へラ切り未調査	
47	"	□14.8. 高3.1	2/5	優不良	"	
48	"	□15.4. 高2.5	1/3	"	底へラ切りナダ	
49	"	□15.6. 高3.0	"	"	"	
50	"	□15.0. 高2.9	1/4	不良	"	
51	"	□15.2. 高3.2	1/3	優不良	"	
52	"	□15.4. 高3.1	1/5	"	"	
53	"	□15.2. 高3.0	1/4	不良	"	
54	"	□15.0. 高2.7	1/4	並	"	
55	"	□15.2. 高3.0	1/3	"	"	
56	"	□13.8. 高3.4	1/2	"	底へラ切りナダ廻し	調査み
57	"	□14.6. 高2.8	"	優 良	底へラ切り未調査	
58	"	□14.6. 高2.9	1/3	不良	底へラ切りナダ	
59	"	□14.6. 高2.9	1/2	並	"	
60	"	□14.3. 高3.2	略 完	"	"	
61	"	□14.5. 高3.2	1/4	良	"	
62	"	□14.3. 高2.9	1/2	並	底へラ切り未調査 調査み	
63	"	□14.4. 高3.1	"	"	底へラ切りナダ	
64	"	□14.6. 高3.1	2/5	優不良	"	
65	"	□14.2. 高2.6	1/3	良	"	

番号	種類	法量	残存	検査	調査	備考
66	無台环	□14.2. 高3.2	1/2	不良	底へラ切りナダ	
67	"	□14.6. 高2.8	略 完	優不良	"	
68	"	□14.0. 高2.2	1/4	良	"	
69	"	□14.0. 高2.7	"	優 良	底へラ切り未調査	
70	"	□14.2. 高2.9	略 完	不良	"	調査み
71	"	□14.2. 高2.9	1/4	"	"	
72	"	□13.5. 高2.9	1/2	優不良	"	
73	"	□13.6. 高2.8	"	"	"	
74	"	□13.4. 高2.6	"	不良	底へラ切りナダ	
75	"	□13.4. 高2.9	2/5	優 良	底へラ切り未調査	
76	"	□14.0. 高2.9	"	不良	底へラ切りナダ	
77	"	□14.2. 高2.6	"	良	"	調査み
78	"	□14.0. 高2.7	1/4	優 良	"	
79	"	□14.0. 高3.1	1/3	不良	"	
80	無台環	□20.6. 高2.1	1/15	"	底へラ削り	
81	"	"	1/3	優不良	"	
82	"	□17.4. 高2.2	1/5	"	底手地ちラ削り 内厚削ナシツケ	
83	"	□19.1. 高2.2	1/4	良 好	"	調査み
84	"	□19.0. 高2.5	1/5	良	"	
85	"	□19.9. 高2.5	1/10	不良	底へラ切りナダ	
86	"	□18.0. 高1.8	1/6	良 好	不明	全表面 調査み
87	"	□19.0. 高1.8	"	良	底へラ切りナダ	
88	"	□18.0. 高2.2	1/5	不良	"	
89	"	□17.0. 高2.5	1/3	"	"	
90	有台環	□25.4. 高3.6 台10.6	1/10	良 好		
91	"	□24.6. 高3.8 台20.6	1/3	"	底へラ削り	
92	"	台20.0	1/6	"		
93	"	台19.6	1/10	"		
94	高 环	"	1/5	"	环底底へラ削り	内外脚底
95	盤	□35.0. 高10.4 底23.6	1/4	良	底仕上げナダ 体底2系比照	把手2つ
96	鍋	□31.8. 高9.8 底20.0	4/5	良 好	外カネ目ナダ 手柄へラ削 内カネ目ナダ +ハケ目ナダ	調査み
97	"	□34.0	1/10	優不良	"	
98	瓢	瓢径21.8	底 片	良 好		内各點 差別剖
99	瓢	□31.4	口 片	"		調査み
100	"	"	"	"	外表面状況	補修孔?
101	"	□32.3	□1.7	"		

品名	品種	法	量	残存	被成	調	整	備考
102	葉	E23.5, 開43.4	1/3	良 好	外側Hc+カキ目 内面De			

### 三 次 黑 横 土 (第 56 - 57 図)

1	环 葵	E16.8, 高3.5	2/3	良	天ヘラ削り			
2	"	E16.4, 高3.3	"	"	天ヘラ切りナデ			
3	"	E18.0	1/3	良 好	天ヘラ削り	留査み		
4	"	E16.3, 高2.7	"	僅不良	"			
5	"	E16.9, 高2.4	"	不 良	"			
6	"	E15.6	"	良	"			
7	"	E15.3, 高2.7	1/4	僅不良	"			
8	"	E15.1	1/3	良	天ヘラ削り 内平坦ナデッケ			
9	"	E14.3	"	"	"			
10	"	E14.1	1/4	僅 良	"			
11	"	E14.6, 高2.6	1/8	良	"			
12	"	E12.3	1/5	良 好	"			
13	"			天 片	"	内外物		
14	有台环	E19.1	1/10	"		外曲陥状		
15	"	E15.2, 高4.1 台11.2	4/5	"	底ヘラ切りナデ			
16	"	E15.0, 高3.4 台12.2	1/6	良				
17	"	E14.4, 高3.7 台10.6	1/8	良 好				
18	"	E15.5, 高3.9 台0.9	"	"		外曲陥		
19	"	E12.1, 高3.6 台0.5	2/3	"	底入空なナデ	外曲陥		
20	"	E10.7, 高3.0 台7.9	"	"	底ヘラ削り	底面陥		
21	無台環	E13.8, 高3.8	"	良	底ヘラ切りナデ			
22	"	E14.0, 高2.9	1/3	良 好	底ヘラ切り未調整	外曲陥		
23	"	E13.8, 高3.1	"	僅 良	底ヘラ切りナデ			
24	"	E14.5, 高3.0	1/4	良 好	"			
25	"	E14.0, 高3.1	2/5	良	"			
26	"	E13.2, 高3.1	1/5	良 好	"			
27	"	E13.2, 高2.9	1/3	不 良	底ヘラ切り未調整			
28	"	E13.7, 高2.6	"	良	底ヘラ切りナデ			
29	"	E13.0, 高3.0	1/4	良 好	"			
30	"	E13.4, 高2.8	"	"	"	内外陥状		
31	無台環	E19.5, 高2.0	1/8	僅不良	底手持ヘラ削り			
32	"	E18.3	1/10	"	不明			
33	有台環	台19.1	1/8	良	底ヘラ削り			
34	"	台22.2	1/5	良 好	"	外曲陥		
35	"	台20.6	1/4	"	"	内外陥状		

品名	品種	法	量	残存	被成	調	整	備考
36	小形林	E13.8, 高3.2	"	僅 良				混和材合
37	小形林	E14.4	1/6	僅 良				"
38	編	E36.0	口 片	良 好	内内カキ目+ナダ	"		
39	"	E41.8	1/10	"	外ナダ+カキ目 内カキ+ナダ+ナ +ナゲ	"		
40	"	E33.8	1/6	良	外ナダ+カキ目 内カキ+ナダ+ナ +ナゲ	"		
41	"	E32.3	1/20	"	内内カキ目+ナダ	"		
42	長細板	E10.2	口 細	良 好	底面2条北端			
43	編 編	E32.9	網上半	"	外 Hc+カキ目 内 Da+ナダ	外底面黒化		

### 三 次 黑 尖 底 状 ピット (第 58 図)

1	环 葵	E18.7	1/4	良	天ヘラ削り 内平坦ナデッケ			
2	"	E15.2, 高2.9	3/5	"	天ヘラ切りナデ			
3	"	E15.2, 高3.3	略 完	僅不良	天ヘラ削り 内平坦ナデッケ			
4	"	E15.0	1/4	良	"			
5	"	E15.2, 高2.1	3/5	良 好	"			
6	"	E14.7	1/3	僅不良	天ヘラ切りナデ			
7	有台环	E15.0, 高4.0 台12.3	1/4	良 好	底ヘラ切りナデ			
8	"	E15.8, 高4.3 台19.7	1/3	"	"			
9	"	台10.0	1/3	良	底面紙形圧痕			
10	無台环	E13.7, 高3.2	"	良 好	底ヘラ切りナデ			
11	"	E13.9, 高3.0	"	"	底ヘラ切り未調整			
12	"	E14.2, 高2.7	"	良	"			
13	無台環	E18.9, 高3.0	1/5	不 良	内平坦ナデッケ	"		
14	"	E18.4	1/10	僅不良	底手持ヘラ削り			
15	"	E18.4, 高1.6	"	"	不明			
16	"	E17.6	1/15	僅 良	底 ナ	ナ デ		
17	有台環	台22.4	1/8	"	底ヘラ削り 内平坦ナデッケ			
18	"	E22.4, 高3.3 台19.2	1/10	不 良	底 不 明			
19	編	E33.4	1/6	良	外ナダ+カキ目 +手持ヘラ削り 内ナダ+カキ目	混和材合		
20	葉	E26.0, 網22.2	1/8	良 好	外 Hc+カキ目 内 De			

1	环 葵	E17.4, 高3.3	2/5	僅不良	天頭縫ヘラ削り	留査み		
2	"	E17.0, 高3.8	4/5	不 良	天ヘラ切りナデ			
3	"	E15.3, 高3.7	1/3	良 好	内中央ナデッケ	口縫物		
4	"	E15.4	"	"	天ヘラ切りナデ	内外開灰		

番号	器種	法 量	残 存	焼 成	調 査	備 考
79	有合環	□16.5, 高6.0 台12.1	2/5	不 良	底へラ切りナダ	
80	"	台12.6	1/3	不 良	底へラ切りナダ 内平坦ナダツケ	
81	"	台10.6	2/3	様不良	" 内凸出部	
82	無合環	□14.2, 高3.1	-	良	底へラ切りナダ 内中央ナダツケ	
83	"	□14.6, 高3.1	1/4	不 良	底へラ切りナダ	
84	"	□13.6, 高3.3	3/5	良 好	"	
85	"	□14.6, 高3.2	2/3	-	底へラ切り未調査	外面部
86	"	□14.2, 高3.2	1/4	様不良	底へラ切りナダ	
87	"	□13.8, 高3.2	1/2	良 好	不 明	外面部
88	"	□13.8, 高3.4	1/4	-	底へラ切りナダ	
89	"	□13.9, 高3.5	-	良	"	
90	"	□14.2, 高3.5	-	良 好	"	
91	"	□13.4, 高2.9	1/3	-	-	内外面部
92	"	□13.5, 高2.9	1/4	良	"	
93	"	□14.0, 高3.0	1/3	良	"	
94	"	□14.8, 高3.2	1/4	良 好	"	
95	"	□14.2, 高3.2	-	良	"	
96	"	□13.7, 高3.2	3/5	-	"	
97	"	□13.0, 高2.9	1/4	不 良	"	
98	"	□12.9, 高3.2	1/2	良 好	底へラ切り未調査	
99	"	□13.2, 高3.1	1/3	様不良	底へラ切りナダ	
100	"	□13.0, 高3.2	2/5	良	"	
101	"	□14.6, 高3.3	1/4	-	"	
102	"	□14.3, 高3.3	1/3	良 好	" 底面スコ状板 内中央ナダツケ	外面部
103	"	□14.2, 高2.9	1/2	不 良	底へラ切り未調査	
104	"	□13.8, 高2.6	2/5	良 好	底へラ切りナダ	
105	"	□14.0, 高2.4	1/4	-	"	内面部
106	"	□14.4, 高2.7	-	-	"	
107	"	□13.0, 高2.7	-	良	底へラ切り未調査	
108	"	□13.8, 高2.8	1/5	不 良	底へラ切りナダ	
109	"	□13.8, 高3.0	2/5	-	底へラ切り未調査	
110	"	□14.6, 高2.9	1/4	良	底へラ切りナダ	
111	無合環	□20.8, 高1.7	1/10	良 好	不 明	内外輪
112	"	□20.3, 高1.2	1/5	不 良	底へラ切り未調査	
113	"	□19.4	1/10	良 好	不 明	外面部
114	"	□18.2, 高2.1	1/15	不 良	不 明	
115	有台盤	□25.1, 高3.7 台21.3	1/10	不 良	底へラ割り	
116	有台盤	台19.8	1/12	良 好	底へラ割り	外面部
117	"	台21.6	1/5	良	底へラ割り 内平坦ナダツケ	
118	"	□22.0, 高4.0 台18.3	1/3	良 好	"	
119	盤	□14.0	1/10	-	底へラ割り 内丁寧ナダツケ	内外輪底
120	"	□13.0	-	-	内丁寧ナダツケ	"
121	"	□13.4	1/12	-	-	
122	小形鉢	□12.3, 高3.3	略 完	-	底へラ割り 内和材合	
123	洗 台	□14.5, 高3.5	1/3	-		内外一部 輪付器
124	小形鉢	□11.6	1/10	-	-	底和材合
125	洗 台	□11.8	1/5	良		
126	高 环	□23.6	1/3	不 良	底下へラ割り 内中位 2条浅縫	
127	"	盤18.2	脚 片 良 好	-	脚下位に 2条浅縫	
128	"	盤17.0	-	-		
129	すり鉢	□19.2	体上平 横 良 体外カキ目			
130	"	底10.5	底 片 横不良			
131	長脚盤	□19.2	脚上平 良 好 腹内カキ目			底和材合
132	" (土器)	□25.3	口 片 横不良	-	外壁側刷毛目	"
133	"	□25.6	-	良 好	-	
134	盤	□35.4	1/10	-	内ナダ+カキ目 +手縫ちへラ割り 内ナダ+カキ目 +網目	"
135	"	□36.7	1/6	-	孔ナガのみ 内ナダ+カキ目	垂み
136	"	□34.8	1/10	-	孔ナダ+カキ目 内ナダ+カキ目	底和材合 内面部
137	"	□32.2	1/15	-	"	"
138	"	□27.0	1/10	-	内ナダ+カキ目 +手縫ちへラ割り 内ナダ+カキ目	底和材合
139	"	□21.0	体上平	-	体外数多旋渦 内面部	"
140	短脚盤	□16.3, 高4.7	2/5	良	天へラ切りナダ 脚歪み	
141	"	□13.1, 高4.5	1/5	良 好	-	外面部
142	"	□11.8, 高3.7	1/3	-	天へラ切りナダ	
143	"	□11.4	1/4	良	-	
144	"	□11.4	-	良 好	-	外一部始
145	"	-	-	-	-	"
146	"	□6.3, 高2.3	1/3	-	-	外面部
147	短脚盤	□13.9, 高23.1 脚23.1, 高27.0	1/5	-	脚外カキ目	
148	"	□10.0, 脚18.4	脚上平	-	脚上外3条1段底	
149	"	□8.5, 脚17.4	-	-	口輪付 蓋重拵片	

番号	基種	法	量	残存	焼成	調査	備考
5	环	口17.1, 高3.3	4/5	良 好	天へラ切りナデ 外表面 歪み		
6	-	口16.8, 高3.0	1/3	優 良	天へラ削り		
7	-	口16.1, 高3.7	-	良 好	天へラ切りナデ 歪み		
8	-	口16.6, 高3.2	1/3	良	天へラ削り		
9	-	口16.5	3/5	良 好	丁寧なナデ 内外面		
10	-	口16.7, 高2.7	1/3	不 良	天へラ削り 内平坦ナック		
11	-	口16.8, 高2.4	1/5	良 好	"	歪み	
12	-	口17.7, 高2.2	2/3	"	"	強歪み	
13	-	口15.7, 高3.6	1/4	"	天へラ削り		
14	-	口16.1, 高3.3	"	優 良	"		
15	-	口15.3, 高3.1	1/2	良	"		
16	-	口16.8, 高3.0	4/5	優不良	" 内平坦ナック		
17	-	口15.8, 高2.3	2/5	良	天へラ切りナデ 内平坦ナック		
18	-	口15.7, 高3.3	"	良 好	"	内外面	
19	-	口16.0, 高2.3	2/3	"	天へラ削り 内平坦ナック	歪み	
20	-	口15.6, 高2.5	2/5	良	"		
21	-	口15.3, 高2.4	"	優 良	"		
22	-	口14.6, 高2.7	1/3	良	天へラ切りナデ 内平坦ナック		
23	-	口14.9, 高2.5	3/4	良 好	天へラ削り 内平坦ナック		
24	-	口14.8, 高2.8	1/3	良	"		
25	-	口16.1, 高1.8	1/2	"	天へラ削り	歪み	
26	-	口20.7	1/5	良 好	"		
27	-	口19.4, 高3.6	1/3	"	天へラ削り 内中央ナック		
28	-	口18.2	"	優 良	天へラ削り 内平坦ナック		
29	-	口18.8	2/3	"	"		
30	-	口17.9, 高3.2	1/6	優不良	天へラ切りナデ 内平坦ナック		
31	-	口17.2, 高2.5	完	良 好	天へラ削り		
32	-	口17.1, 高3.3	2/3	優不良	"		
33	-	鉛 片	良	天へラ切りナデ			
34	-	口14.0	1/3	"	"	天に沈黙	
35	-	口13.0	1/5	"	天へラ削り 内中央ナック		
36	-	鉛 片	並				
37	有台环	口16.0, 高4.4 台11.0	1/4	良 好	天へラ切りナデ	内外面	
38	-	口16.0, 高4.4 台11.0	1/3	"	"	"	
39	-	口16.5, 高4.5 台11.8	"	良			
40	-	口16.0, 高4.2 台10.9	2/5	良 好	天へラ切りナデ	内外面 歪み	
41	-	口16.5, 高3.8 台11.1	"	"	"		

番号	基種	法	量	残存	焼成	調査	備考
42	有台环	口15.5, 高4.4 台10.9	-	優不良	天へラ切りナデ		
43	-	口15.5, 高4.0 台10.6	1/5	良 好	"	外表面	
44	-	口15.8, 高4.3 台12.0	1/4	不 良	"		
45	-	口15.3, 高4.0 台10.4	4/5	良 好	"		
46	-	口15.0, 高3.9 台9.8	1/2	-	内中央ナック	外表面	
47	-	口14.8, 高4.2 台10.3	1/3	良	天へラ切りナデ		
48	-	口15.7, 高3.8 台10.9	5/6	良 好	天へラ切りナデ消し		
49	-	口16.8, 高4.1 台12.2	1/4	良			
50	-	口15.0, 高3.9 台10.0	1/3	良 好	天へラ切りナデ		
51	-	口15.1, 高4.0 台11.3	-	-	-	外表面	
52	-	口14.8, 高3.6 台11.2	1/5	-	"		
53	-	口14.6, 高3.7 台10.7	1/3	良			
54	-	口14.4, 高3.9 台10.7	1/2	-	天へラ切りナデ 内中央ナック		
55	-	口14.6, 高4.2 台10.4	1/3	良 好	天へラ切りナデ		
56	-	口14.3, 高3.8 台10.4	1/5	-	"		
57	-	口15.5, 高3.8 台11.0	1/3	良	"		
58	-	口14.6, 高3.8 台9.8	3/5	良 好	"		
59	-	口16.0, 高3.5 台11.0	1/3	-	底面スコロ状 歪み		
60	-	口14.6, 高3.0 台9.1	-	-	天へラ切りナデ		
61	-	口16.0, 高4.8 台10.2	2/5	-	"		
62	-	口15.2, 高4.9 台10.4	1/3	-	天へラ切りナデ消し		
63	-	口15.1, 高4.5 台10.4	2/5	-	天へラ切りナデ		
64	-	口14.1, 高4.6 台10.4	1/3	-	"		
65	-	口13.9, 高4.5 台10.0	1/2	-	"		
66	-	口14.4, 高4.3 台10.4	1/4	-	内中央ナック		
67	-	口13.5, 高3.7 台9.8	1/6	-	"		
68	-	口13.5, 高4.1 台9.8	1/4	-	"		
69	-	口13.1, 高4.0 台9.0	-	良	天へラ切りナデ		
70	-	口13.4, 高3.9 台9.4	1/5	-	"		
71	-	口13.2, 高3.5 台10.0	-	-	"		
72	-	口13.2, 高3.5 台9.9	2/5	優 良	"		
73	-	口13.9, 高3.2 台10.4	1/3	-	"		
74	-	口13.6, 高3.6 台10.7	2/3	優不良	"		
75	-	口18.1	1/6	優 良			
76	-	口18.0	-	良 好			
77	-	口18.4	1/8	良			
78	-	口17.4	"	"			

番号	基種	法量	残存	構成	調査	備考
150	短頭骨	□4.8, 頭8.8	胴上半	良好		口輪付近 茎葉被片
151	"	□11.4, 頭23.0	1/3	"	脇部1条波線	内面薄灰
152	後 頸	□12.3, 頭22.0	胴上半	"		外面部
153	"	□10.8, 頭14.6	4/5	"	脇部1条波線	内面薄灰
154	長頭骨	□11.5, 頭24.3 △11.4, 頭10.8 △5.5 □12.7, 頭11.5	略 完	"	底ナデツケ 口輪3条波線 頭中位1条波線 体下1条波線	外側一部 輪付帯 体下1条波線
155	"	□11.8, △8.3 △9.6, □15.2	胴上半	"	頭中位2条波線 頭前1条波線	一部薄灰
156	"	△6.1	輪付近	"	口輪2条波線 頭中位2条波線 内面下ヘラナテ	
157	"	△5.4	"	"	頭中位2条波線	内面部物
158	"	□10.8	口輪片	"	頭中位1条波線	内面部 體内に物
159	"	□9.2	口 片	"		
160	"	□10.6	"	"		
161	"	□13.3, △6.3 △12.6	口輪片	"		内面部物
162	"	△11.8, 頭18.0 △11.5	胴 部	"	底ナデツケ 体下ヘラナテ 頭上1条波線 頭前1条波線	
163	"	△9.6, 頭17.8 △10.8	"	"	底ナデツケ 脇部1条波線	外面部 内面波物
164	"	△5.8, 頭16.9	輪付近	"	頭上2条波線 頭前1条波線 頭中位4日	外面部物
165	"	□4.0, 頭3.0 △10.1, △6.1	口輪片 輪付近	"		外面部物
166	"	△11.4, △7.0	輪付近	"	頭下→底へ剥り	
167	"	△9.6, △6.6	胴下半	"	底へ剥りナテ	内面部物
168	水瓶?	△8.0	"	"	剥~底ナテ 内底ナデツケ	
169	広口瓶	△9.0, 頭10.2 △12.0, 頭10.3	1/3	"	底ナデツケ	外面部物
170	後 頸	□12.7	1/5	"	頭外化粧+2日 頭内 Da 頭 頭内 Da 頭	内面部物
171	"	□10.2	1/4	良 肝		
172	"	□12.7	口 片	"		
173	"	□14.2	口輪片	"	輪内外ナテ	
174	蟹	□25.6	"	"	口輪外平行縦 形各幾ナテ 輪内ナテ	
175	"	□23.5	"	"	頭外 Ha 頭? +カキ目 頭内 Da 頭	外面部
176	"	□23.2	"	"	口輪外平行縦 形各幾ナテ 輪内ナテ	輪底ナテ
177	"	□26.8	"	"	頭外 Da 頭+2日 頭内 Da 頭+2日	内面部物
178	"	□22.2	"	"	頭外 Da 頭+2日 頭内 Da 頭	外面部
179	"	□25.8	"	"	頭外 Ha 頭 頭内 Da 頭	

## 第2項 矢田野向山1号窯跡の土器様相

当窯跡から出土した遺物は、大きく3つに分けることができる。つまり、Ⅱ次窯排水溝と土器集積地で構成されるⅡ次窯以前の土器群（I次窯）、Ⅱ次窯床面の土器群（Ⅱ次窯）、Ⅲ次窯床面及び覆土、舟底状ピット、灰原の一部で構成される土器群（Ⅲ次窯）で、以下にその土器様相について述べる。

### 1. I次窯の様相

#### （器種構成）

食膳具は蓋坏と無台坏で、貯蔵具は短頸壺、長頸壺、横瓶、甕で構成され、奈良時代初頭からの器種構成と共通している。食膳具では、無台坏の量が多く、破片数・口縁計測値とともに7割近い数値を占めている。奈良時代初頭の食膳具は蓋坏が圧倒的に主流であったものが、この時期には数量が並ぶか逆転する状況が見られ、以後坏類の主流となる無台坏がこの時期頃から役割を大きくしていったものと考えられる。また、貯蔵具では甕が生産の主流ではあるが、壺類では短頸壺の占める割合が高く、長頸瓶や横瓶の占める割合が低下してきている。

#### （器種の特徴）

食膳具については、蓋坏が器種の明確な法量分化は確認されておらず、「一器種一法量」として捉えられるものである。口径は坏蓋で17cm台、有台坏で16cm台に中心をもつものが多く、大振りの製品が目立つ。形態はA類とした偏平な器形のものが主で、B類とした山笠状の蓋や深身の有台坏は数が少ないものの、一定量見られる。器形の特徴としては坏蓋の口縁端部が厚手の三角形状か外反することや大きい偏平宝珠鉢を付すことなどが挙げられる。坏蓋の天井部の回転ヘラ削りはほぼ全ての製品に施されている。

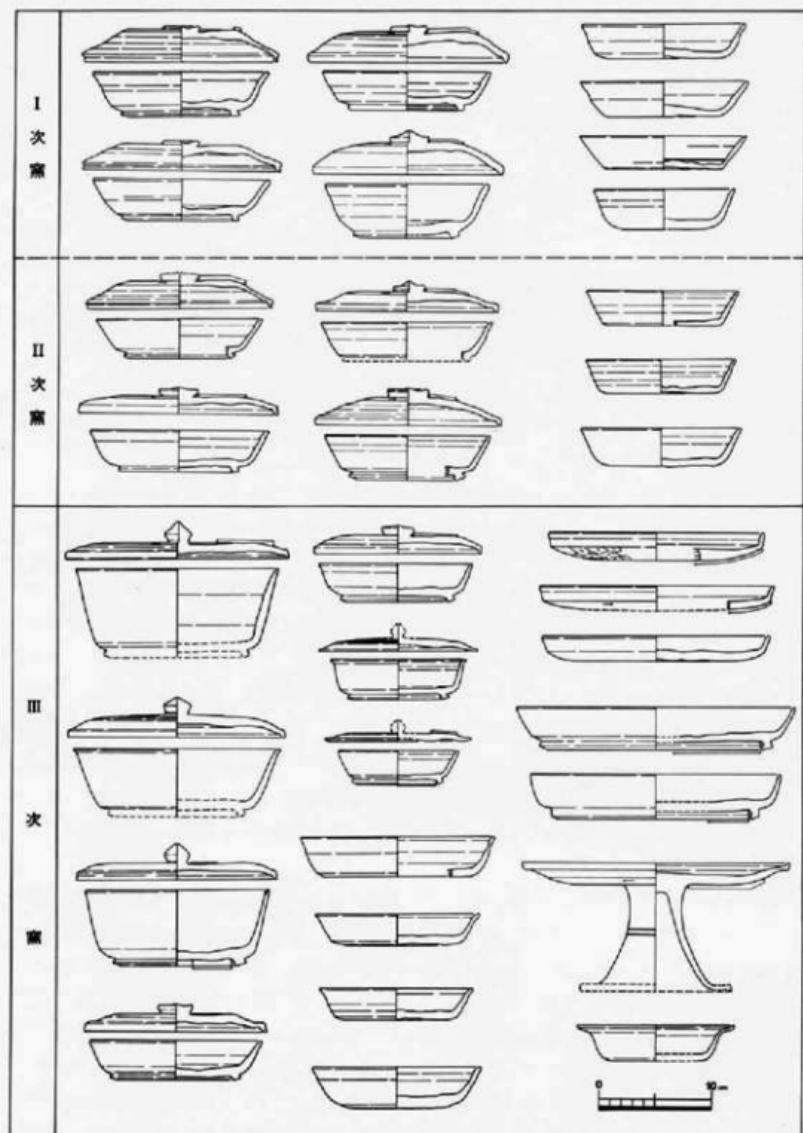
無台坏も一法量として捉えられるもので、口径14cm台に中心をもつ。形態は有台坏同様A類とB類があり、A類が主流となっている。

貯蔵具は良好な資料を得ていないが、灰原出土のものを含めて考えてみたい。長頸瓶は、奈良時代の前半に主体的に生産された器種であることから、灰原出土の多くはこの時期に伴うものと考えたい。その中でも古手の器形を呈するA類とした口頸部の筒状に伸びるもののが当期に該当する器形であると思われる。

甕は大甕と中甕が存在するが、個体数としては中甕が勝っていたと考えられる。大甕は口縁部A類とB類が見られ、この時期にはA類とした波状文をもつ内外面実帶の装飾性の強い製品が高い割合を占めていたと考える。また、胴部叩きについて見ると、第73図のように外面平行線文のH a類、内面同心円文のD a類が多く見られ、D a類の占有率では全体の88%にも達する。Ⅲ次窯で主流となるD c類は僅か12%程度であるが、一定量見られることが特徴として挙げられよう。

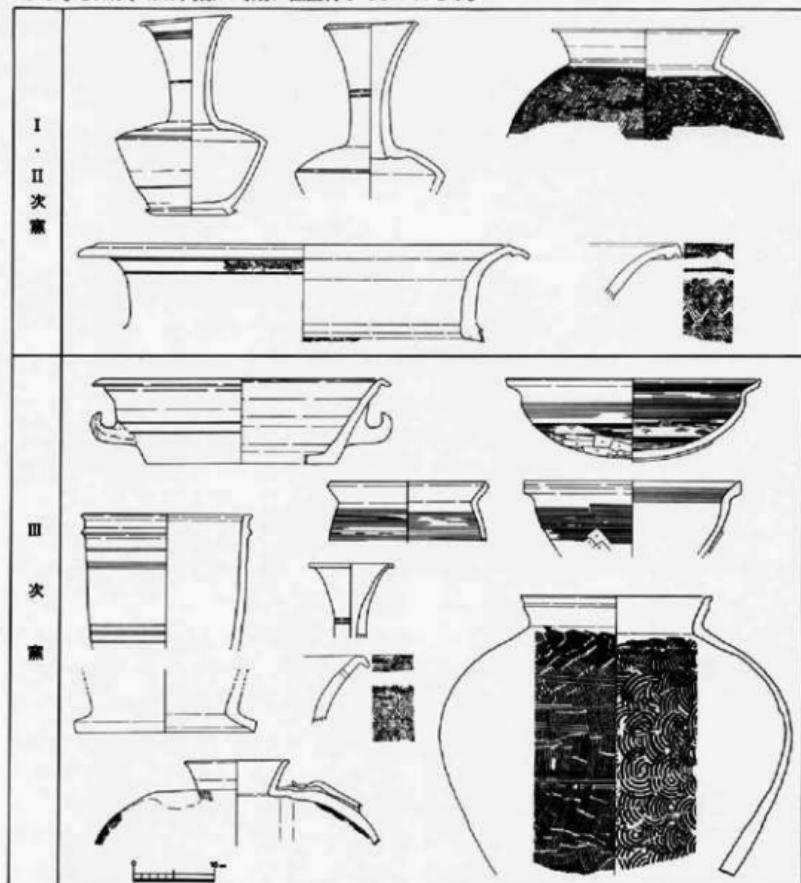
#### （編年的位置付け）

以上の特徴に類似するものとしては、戸津28号窯跡Ⅲ次床や戸津24号窯跡Ⅲ次床の土器を挙げることができる。いずれの土器も坏蓋の口縁端部が外反する特徴をもっており、かなり偏平な宝



第67図 矢田野向山1号窯跡縦年図(1)(S=1/5)

珠紐を付している。有台坏は高台の貼付位置が体部立ち上がり箇所よりも内側に入るものが多く、体部立ち上がりが、急になってくる。これらの点は類似点として挙げられるが、無台坏の口径ではいずれの窯跡もI次窯のものより小振りである点、有台坏の径高指数が戸津28号窯跡で27、戸津24号窯跡で26とI次窯の24前後に比べてやや高い点でI次窯がやや後出の傾向をもつ。だが、I次窯で一定量見られる蓋坏B類は戸津28号窯跡の段階で減少・消滅の傾向にあるといった古い時期の様相も引きずっている点や体部外傾度が戸津24号窯跡のものと近似することなどを総合させて考えれば、ほぼ同様の時期に位置付けてよいだろう。



第68図 矢田野向山1号窯跡縦年図(2)(S=1/7)

## 2. II次窯の様相

### (器種構成)

器種構成はI次窯の内容とほぼ同じである。食膳具は蓋坏と無台坏が主体で、それに鉢状の器形のものや土師器と思われる焼が1個づつ出土している。蓋坏と無台坏の割合はほぼ半々で構成され、I次窯のように無台坏が群を抜くという状況はみられない。貯藏具についてもI次窯と同様、短頸壺、長頸瓶、甕で構成され、短頸壺が目立つようである。

### (器種の特徴及び編年的位置付け)

II次窯は出土量が少なく、土器様相を特徴付けるまでには至らないが、この中で、I次窯とは若干異なる点がある。それは、坏蓋の口径が17cm前後にやや小振りになること、有台坏に深身のB類がなくなることや口径12cm台のものが存在すること、無台坏のB類がなくなり、A類の口径も13cm台と小振りになったこと等である。これらは確かに後出の要素を含んでいるが、次の段階への過渡的な様相として設定できるものとは言いがたく、全体としてはI次窯の範疇として捉えられるものとしたい。

## 3. III次窯の様相

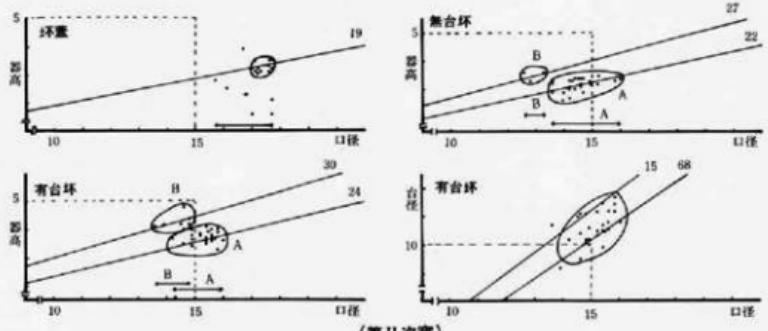
### (器種構成)

III次窯の器種構成の大きな特徴としては、新たな器種としてI次窯にはみられなかった無台皿、有台皿、高坏、盤、長胴甕、鍋、瓶が加わることである。食膳具の内容としては皿類が新たに加わるもの、比率は5~6%と低く、有台皿においては1%未満で、器種として定着している段階とは言いにくい。蓋坏と無台坏の比率は無台坏が蓋坏の倍近い量まで増加し、食膳具の第一器種としての位置を確保している。煮沸具は鍋が最も多く、9割近い量を占め、長胴甕の占める割合は極めて少ない。貯藏具はI次窯と構成内容に大きな差はない<sup>(4)</sup>、短頸壺3割、長頸瓶2割、甕5割程度で構成される。

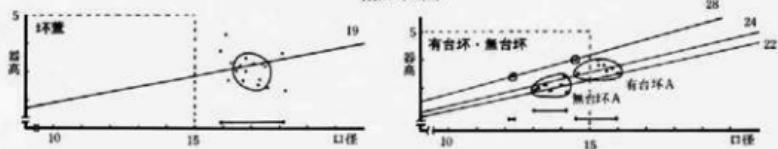
### (器種の特徴)

食膳具では蓋坏が5つに法量分化することが挙げられ、さらにI類が径高指数40程度のI類Cと32程度のI類Bに、II類が40程度のII類Cと24程度のII類Aに分けられる。それぞれの比率はI類が8%、II類Cが8%、II類Aが6%、III類が75%、IV・V類が3%で、この時期に出現するI類、II類C、IV・V類は合わせて2割程度の量を占め、既に定着の様相を見せている。B・C類の器形は体部の立ち上がりが外傾度70以上に分布し、高台は太く外展するものが目立つ。底部調整はヘラ削りするものが3割程度確認でき、それには体部に沈線の巡るものが多いようである。これに伴う坏蓋は宝珠形のつまみが付くもので、坏蓋には沈線の巡るもののが存在しないが、金属器指向型の現れであると評価できる。IV・V類の器形は傾高指数30以下の浅身のものであるが、底部調整がヘラ切り痕を消去する点、坏蓋が宝珠形のつまみをもち、折り返しなしの口縁端部を呈す点は、B・C類と同様の性格付けができると考える。A類のII・III類については、II類がI・II次窯から続く法量・器形であるのに対し、III類は口径が14cmに中心をもつもので、一回り小さ

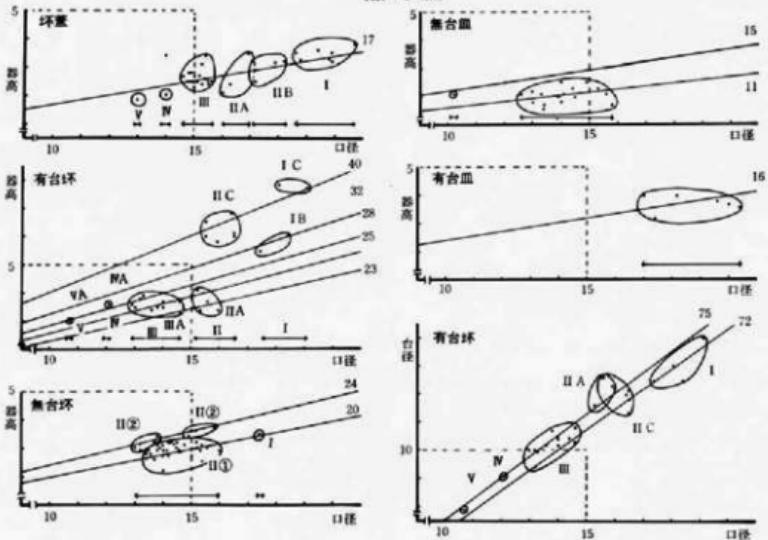
(第Ⅰ次発)



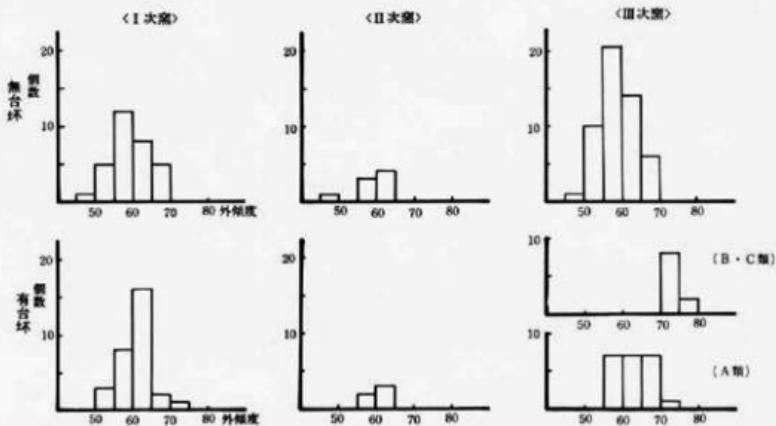
(第Ⅱ次発)



(第Ⅲ次発)



第69図 矢田野向山1号窯跡須恵器食膳具法量分布図



第70図 矢田野向山1号窯須恵器外周度分布図

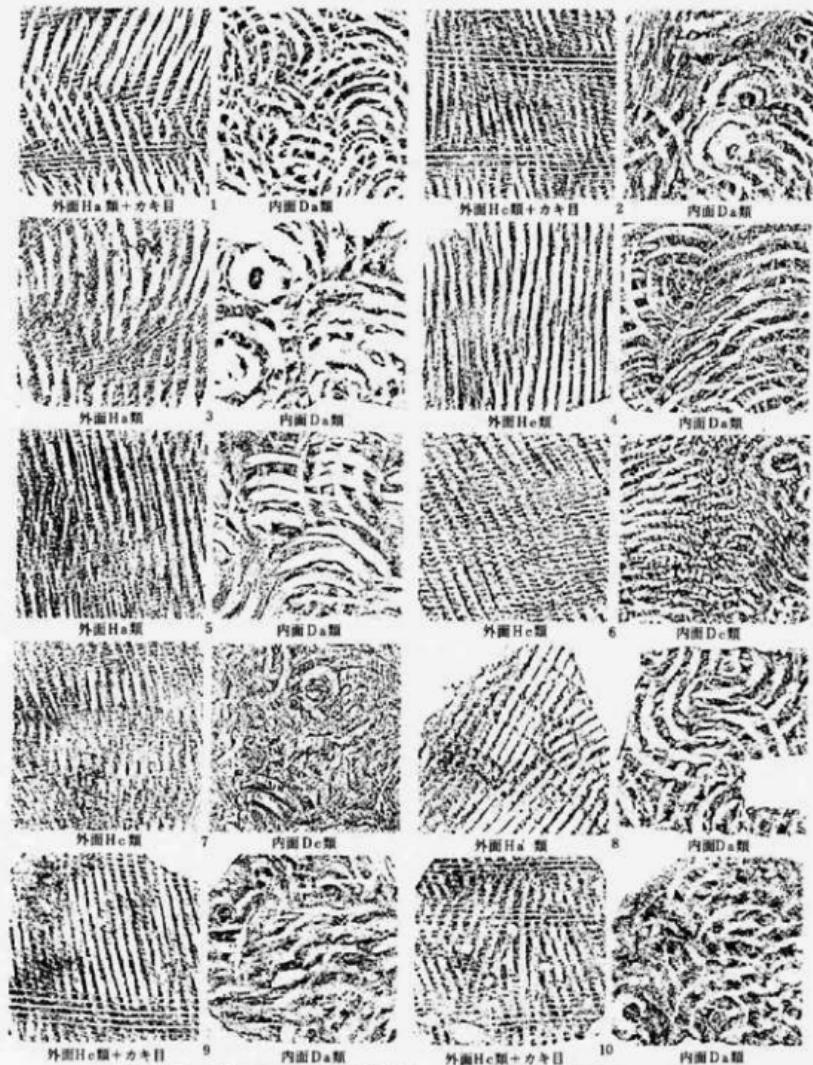
くなっている。器形はⅡ類、Ⅲ類とも大きな変化ではなく、同種形態のものが、時間的な推移の中で、法量を縮小して行ったものと見ることができる。坏蓋はつまみがⅠ次窯の偏平なものからやや頂部の盛り上がったものへと変化し、内面調整が平坦部をナデつけて仕上げるといった特徴をもっている。

無台皿は口径17cm台の大振りのものもあるが、主体は14cmに中心をもつ、径高指数20程度のかなり偏平な器形のものである。Ⅰ次窯でB類とした深身のものは確認できないが、径高指数24前後の底部の厚いもののが存在する。

皿類は無台が17~21cm、有台が22~26cmと大形の口径で、無台皿は厚手の底部に短く直立気味の体部が付く器形である。底部調整はヘラ削りが6割程度、ナデ調整が4割程度で、ヘラ削りは手持ちが主流であり、回転のものは少ない。有台皿は、立ち上がりの明瞭なA類と丸いB類があるが、A類の方がやや大振りである。高台はしっかりとした長めのものが多く、底部調整は総て回転ヘラ削りを施す。

煮沸具は胎土に混和材を含むもので、土師器煮沸具の胎土と同じである。器種は鍋が主体で、長胴甕は僅かしか確認されていない。鍋の器形は全体的に厚手で口縁端部を上下または上に突出させるもので、口径に比べて器高の低いものが主流であるが、口径が小さめで器高の高いものが少數ながら存在している。調整は上半をカキ目とナデで、下半を内面カキ目と刷毛目、外面ヘラ削りで仕上げている。長胴甕は厚手で、口縁端部の上端を突出させる器形を呈し、鍋に似た特徴をもつ。

貯蔵具は器形に変化の見られる長頸瓶と甕について述べる。長頸瓶は頸部から徐々に外反するB類のものが覆土から出土しており、灰原にもB類のものが若干存在することから、この時期の

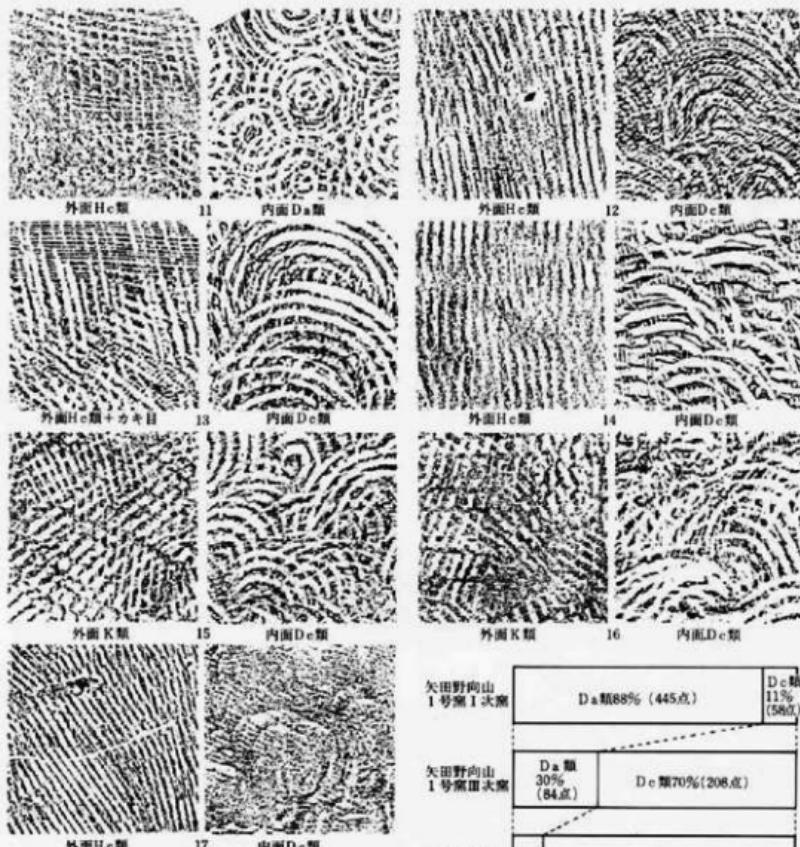


H<sub>a</sub>類—平行縦文で木目が彫り込みに対し直行するもの  
 H<sub>b</sub>類—平行縦文で木目が右上がりに斜行するもの  
 H<sub>c</sub>類—平行縦文で木目が左上がりに斜行するもの  
 H<sub>e</sub>類—平行縦文で木目が見られないもの

D<sub>a</sub>類—同心円文で木目の見られないもの  
 D<sub>c</sub>類—同心円文で桟目状の木目が見られるもの  
 K類—格子文のもの

第71図 須恵器製胸部叩き文様(1) (1~7はI次席、8~10はII次席、S=1/2)

長頸瓶は、I次窯で主流であったA類からB類へと変化していく段階にあると考えられる。壺は大甕と中甕に分けられ、6対4程度の割合で構成される。大甕はA類とした口縁部文様をもつものも2割程度存在するが、主流はB類とした無文のものであり、口縁端部の形態も内外面に突帯をもつような装飾的要素をもつものが少なくなっている。肩部叩き文様については、外面がHc類、内面がDc類のものが主流で、まれに外面に格子状（長方形）のものや内面にDa類が



第72図 須恵器壺肩部叩き文様(2)  
(11~17はⅢ次窯, S = 1/2)

矢野向山 1号窯 I次窯	Da類 88% (445点)	Dc類 11% (58点)
矢野向山 1号窯 II次窯	Da類 30% (84点)	Dc類 70% (208点)
二ツ梨横川 1号窯	Da類 11%	Dc類 89%

第73図 内面叩き文様の構成比率

器種	出土地	Ⅰ 次 窓		Ⅱ 次 窓		口縫計測値		破片数		口縫計測値		破片数		口縫計測値		全 体		
		破片数	口縫計測値	破片数	口縫計測値	破片数	口縫計測値	破片数	口縫計測値	破片数	口縫計測値	破片数	口縫計測値	破片数	口縫計測値	破片数	口縫計測値	
蓋	壊	693(43.8)	1.145(28.4)	121(46.4)	283(48.0)	813(33.7)	1.240(32.0)	4,197(54.7)	3,343(44.6)	5,824(48.6)	6,011(37.6)							
	(壊 蓋)	(360)	(1.145)	(69)	(283)	(382)	(1.240)	(1,851)	(3,343)	(2,662)	(6,011)							
	(有台)	(333)	( )	(52)	(144)	(926)	( )	(2,346)	(2,547)	(3,162)	(4,455)							
無	台	891(56.2)	2.887(71.6)	138(52.8)	307(51.7)	1,446(59.9)	2,448(63.1)	3,347(43.6)	4,036(53.9)	5,822(48.6)	9,678(60.5)							
無	台							126( 5.2)	142( 3.7)	35( 0.5)	35( 0.5)	161( 1.4)	177( 1.1)					
有	台							20( 0.8)	33( 0.9)	38( 0.5)	7( 0.1)	58( 0.5)	40( 0.2)					
残										17( 0.2)	30( 0.4)	18( 0.1)	30( 0.2)					
高	小									1( 0.1)	28( 0.4)	6( 0.1)	6( 0.1)					
形	鉢									6( 0.3)	12( 0.3)	11( 0.1)	29( 0.4)	17( 0.1)	41( 0.2)	1( 0.1)	2( 0.2)	
食器具總計		1,584(68.6)	4,032(97.3)	261(81.5)	592(97.7)	2,412(75.8)	3,875(96.3)	7,673(63.8)	7,486(87.4)	11,930(66.8)	15,985(92.2)							
すり鉢										3(20.0)	3(33.0)	3(15.8)	3(15.0)					
調理用器具										4(100)	11(100)	12(60.0)	6(67.0)	16(84.2)	17(65.0)			
長 開	蓋									4( 0.1)	11( 0.3)	15( 0.1)	9( 0.1)	19( 0.1)	20( 0.1)			
短 開	蓋									1( 1.4)	20(11.6)	6( 5.8)	21( 8.5)	6( 3.9)				
煮沸具總計										70(94.5)	49(100)	125(72.7)	82(79.3)	196(79.3)	131(86.2)			
短 開 蓋										3( 4.1)	27(15.7)	15(14.6)	30(12.2)	15( 9.9)				
(短頭蓋身)	(13)	63(55.7)	4( 6.7)	14( 100)	9( 1.3)	29(32.0)	49( 1.2)	172( 1.4)	103( 1.2)	246( 1.4)	152( 0.9)							
(短頭蓋身)	(19)	( 9)	( 2)	( 7)	( 8)	(29)	( 44)	(123)	(162)	( 67)	(168)							
広 口 蓋		(63)	( 2)	(14)	( 1)	( 3)	( 3)	(231)	( 62)	(233)	(242)							
長 頭 瓶										10( 1.4)	18(20.0)	328( 7.9)	160(16.6)	354( 6.3)	186(15.7)			
木 瓶										8( 1.2)	2( 0.1)	322( 7.7)	180(18.6)	21( 0.1)				
横 瓶										16( 2.3)	159( 3.8)	331( 5.8)	178( 3.1)	180(15.2)				
器物不明者										648(33.8)	43(48.0)	463(48.0)	4,440(78.6)	548(46.4)				
野燒具總計		676(83.3)	42(37.3)	52(68.3)	59(18.5)	14( 2.3)	691(21.7)	90( 2.2)	4,175(34.7)	955(11.3)	5,650(31.7)	1,182( 6.8)						
器種 総計		725(31.4)	113( 2.7)	320(23.9)	606( 1.8)	3,181(17.8)	4,025(23.2)	12,035(67.4)	8,563(49.4)	17,845	17,339							

口縫計測値は宇野勝太氏の「口縫部計測法」によって得られた数値で、○/◎/△を示す。また、数字の右に示した( )書きは%を示す。

第4表 出土地別器種構成表

見られる。内面の同心円文叩きの比率は、Dc類が89%、Da類が11%で、I次窯の比率と全く逆転している。

以上の特徴をまとめてみると、第1としては、この時期に多くの新器種が現れることである。それらは、新しい形態の蓋坏（器高の高い有台坏+宝珠形つまみの坏蓋と小形有台坏+宝珠形つまみをもつ口縁折り返しなしの坏蓋）、皿類、逆蓋状の高坏、盤、長胴甕、鍋などであるが、器形にバラエティーがない事、法量にバラつきがあるてまだ定型化していないこと、構成比率がまだ低めであることなどの点から、出現期の様相を呈する。第2に、主体となる器種は奈良時代初頭から続くもので、器形的に暫時変化している様相が認められるものの、前代からの様相を色濃く残している点である。以上の2点がⅢ次窯の特徴と言えるが、奈良時代初頭からの從来の食器から次の時代の食器へと変化する過渡期的様相を呈していると言える。

#### (編年的位置付け)

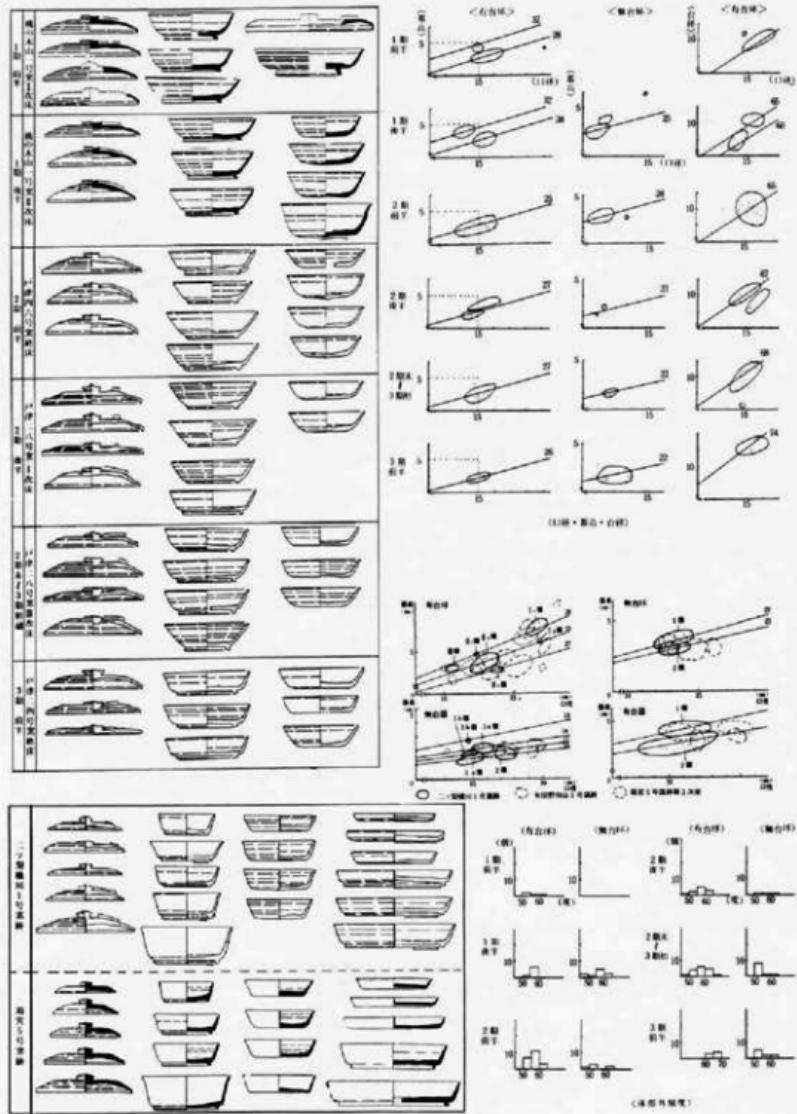
Ⅲ次窯の特徴の第1点とした新器種の含まれる窯跡としては、二ッ梨横川1号窯跡<sup>[10]</sup>が挙げられる。この土器群は新器種の占める量が増え、器形的にも定型化の段階にある土器群として捉えられ、Ⅲ次窯のものよりも確実にI型式後の様相を呈している。またⅢ次窯は窯の層位関係から、I次窯よりも新しいことは確実で、從来の器種の器形上の変化でも口径の縮小化や偏平化、調整等で確実に後出の様相を呈している。つまり、南加賀古窯跡群の中で編年付けた場合は、I次窯と二ッ梨横川1号窯跡の間にに入る土器群であることは確かであり、奈良時代初頭からの様相と奈良時代後半の様相をつなげる過渡的な様相として位置づけられるだろう。

#### 第3項 まとめ

以上、矢田野向山1号窯跡をI～Ⅲ次窯に分け、その概要を述べてきたが、文中でも記したとおり、I次窯とII次窯はほぼ同型式内に入るものの、I・II次窯とⅢ次窯とで2型式に分けられる。筆者は以前、南加賀古窯跡群の奈良時代初頭～中頃の須恵器編年について述べたことがあるが、矢田野向山1号窯跡はちょうどその中の画期点にあたり、今回の報告によって若干修正が生じたため、ここでその概略を述べておきたい。

1期 飛鳥時代の蓋坏の代表的形態であった有返蓋+無台坏・有台坏が消滅し、無返蓋+有台坏と蓋をもたない無台坏の食膳具セットが成立する段階である。坏蓋は天井部の平坦なもので、口縁端部が長くシャープな作りをしている。有台坏は径高指數27前後の浅身のものが主体で、長目でしっかりとした高台が付く。また、量としては少ないが、飛鳥時代の様相を残す径高指數32前後の深身で高台の長いものや、口径19cm台の大形の製品も見られる。無台坏は径高指數28前後の深身のものが主で、食膳具の中でもしめる量は極めて少ない。器形や法量の中に飛鳥時代の様相を残すことを特徴とするが、その要素の多い土器群を前半期に、少ない土器群を後半期に位置付ける。

2期 飛鳥時代の様相を払拭する段階で、器形に在地色をもなながら、「一器種一法量」の蓋坏が完成される段階である。時期は前後に分けられ、前半は、天井部の丸い坏蓋+体部が外傾し、



第74図 奈良時代前半の南加賀古窯跡群須恵器編年

短く外展する高台の付く有台坏のセットが出現し、主流である段階である。後半は、天井部の平坦な偏平器形の蓋坏+体部の直立気味に立ち上がる偏平器形の有台坏が出現し、前半期で主流であった器形とともに一定量存在する。当期でも無台坏の量は少ないが、1期の深身のものに加えて、径高指数22・23の偏平な器形なものが出現していく。前半期で見られた器形は、1期後半において一般的な器形とともに生産している尾張美濃地方の影響を受けた蓋坏の系譜を引くものと思われ、尾張美濃地方の色彩を受け入れ、在地的に融合したものを作り出していることが、この時期の特色として考えることができ、「一器種一法量」の原則を頑なに守りながらも、他地域の影響を受け、南加賀独特のものを形作って行ったものと考えたい。

3期 従来の器形の蓋坏は2期後半で出現した偏平器形のものにはほぼ統一されるとともに、それに加え4期に主体となる新器種が出現する段階である。蓋坏は従来の器形で径高指数が24~26に一層偏平となり、体部外傾度も65前後に中心をもつようになる。また、後半期には従来の口径のものから、一回り小振りとなった製品に中心を移す。無台坏では口径をやや大きくしながら、偏平化が一層強調され、その生産量も蓋坏を凌ぐくらいまで増加させている。これら従来器形の蓋坏に加え、宝珠形つまみを有する蓋坏とセットをなす深身の坏身が現れ、5法量に分化される。また、皿類や高坏なども加わり、食膳具の種類が豊富となる。しかし、新器種の占める割合はこの段階では低く、1割強程度の比率である。新器種のほとんど見られない段階を前に、新器種が器種構成の一端を担う段階を後半に位置付ける。

4期 3期まで存在していた、従来器形の蓋坏が減少し、それによって3期後半で出現した新器種の蓋坏、皿類が増加し、主流となるもので、食膳具はもとより、煮沸具・貯藏具においても大きく転換していく段階である。蓋坏は3法量に整理・統合され、全体的な口径の縮小化が見られる。器形は宝珠形つまみをもつ蓋坏のセットが増加するとともに定型化していく。偏平宝珠紐をもつ蓋坏の一群はこ

1 期	前半	桃の木山1号窯跡I次床
	後半	桃の木山1号窯跡II次床
2 期	前半	戸津46号窯跡最終床
	後半	戸津28号窯跡I次床 戸津28号窯跡II次床
3 期	前半	戸津24号窯跡III次床、矢田野向山1号窯跡I・II次床
	後半	矢田野向山1号窯跡III次床
4 期	前半	二ッ梨横川1号窯跡灰原
	後半	箱宮5号窯跡最終床

第5表 奈良時代初頭～中頃の南加賀古窯跡群編年表

の時期にも主流であるが、有台坏の径高指数が30前後になり、3期の蓋坏の流れから脱している。無台坏は口径が縮小し、偏平な器形のものに加え、径高指数27前後の深身器形が出現する。皿類は全体的に口径が縮小し、器形に様々な種類がみられるようになる。また、煮沸具の増加と定型化、貯藏具の器種構成の変化と器形の変化、そして、次の代に続く新しい器種（双耳瓶・小型壺）

の出現等北陸的須恵器様式の形成期として評価できるものである。3期の様相を残す度合いにより、前半期と後半期に分けることができる。

以上1～4期の様相を述べてきたが、4期より以降は南加賀古窯跡群に良好な資料が得られておらず、概観を述べるまでは至っていない。この4期で成立した土器様相を初源として、以後器形を変化させながら、縮小化・簡略化していったものと考える。そういう意味で、奈良時代の土器様相を考えるうえで、3期と4期の画期は大きなもので、南加賀の須恵器様相のうえではここを境に前半と後半に分けられるものと考える。

### 追記1 矢田野向山1号窯跡の評価について

今回の整理において、矢田野向山1号窯跡の須恵器がはっきりと2時期に分けられることができ、古い段階には新しい器種や法量のものが全く含まれていないという結果がでた。これは「二ッ梨横川1号窯跡」の報告の中で述べた矢田野向山1号窯跡の様相について若干訂正するものであるが、また、その報告の中で註書きした矢田野向山1号窯跡の評価については、この報告の刊行後多くの方から御指導、御批判を受け、若干の訂正が必要となつたため、その内容を以下に述べることとしたい。

以前、筆者は矢田野向山1号窯跡の段階について、当窯跡の特徴が二ッ梨横川1号窯跡段階への過渡的様相であることから、田嶋氏ら(田嶋明人1987「古代土器の編年輪設定」「藤原遺跡」石川県立埋蔵文化財センター、北野博司1988「用途からみた食器具の組成とその変遷」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』(報告編)石川考古学研究会、北陸古代土器研究会、花塚信雄・木立雅朗1986「小松市・二ッ梨窯跡採集の須恵器について」『石川考古学研究会会誌』第29号)がその時期の特徴とした土器組成の2面性について批判したことがある。矢田野向山1号窯跡は本文でも述べたように、2時期存在するわけだが、I次窯からII次窯の変化は、II次窯で断たに導入される器種を除けば、奈良時代初期からの形態変化の流れで捉えられるもので、II次窯の段階を奈良時代前半の須恵器の終焉的様相とし、後半への転換点とすることができる。II次窯に導入される新器種について見ると、器種構成比や器形などの特徴からそれらの器種の導入期の様相を呈しているが、新器種の系譜上にあると思われる畿内の宮都的器種とは法量分化の仕方や器形において直接的な結び付きは認められず、在地色をその器形の中にかなり含んでいる。このような点から、この新器種の出現は二ッ梨横川1号窯跡への過渡期であるからこそ出現したものであり、畿内の宮都的食器具様式をそのまま採用したことによって生じた須恵器組成と言いたい。この見解はこの時期の2面性を否定するものではなく、つまり、以前矢田野向山1号窯跡の性格付けとして、加賀市藤原遺跡や富山県小杉流通業務団地内遺跡群N016号遺跡1・2号窯跡と同等と考えていたことに問題があったのだろう。藤原遺跡を例にそれを対比するならば、藤原遺跡の4号土坑、7号土坑、11号土坑いずれを見ても、深身の蓋壺や皿類など矢田野向山1号窯跡II次窯と同様新しい器種をその組成の中に含んでいるものの、そこから共伴する偏平器形(從米器形)の蓋壺は矢田野向山1号窯跡I次窯と共通する点を見いだすことができ、II次窯の偏平蓋壺よりも古手の様相を示している。そして、新器種は器形や細部の調整、作りがII次窯のものとは異なっており、精製品である感を受け、土師器などをも含め藤原遺跡の土器群は一般農業の土器組成とは言いがたく、上層階級の食器組成を示していると言える。それに対し、矢田野向山1号窯跡のそれは一般的な組成のものと評価すべきもので、一緒に扱うことが間違っていたと思われる。

つまり、以上をまとめれば、この3期とした様相としては、その前半に畿内の宮都的食器構成の影響を受けた土器様式が当地域に導入され、一部の階級において新しい器種や法量分化が採用されるものの、それは一般的な食器構成とは言いがたく、田嶋氏らの提示する階層による食器構成の差が顕在化する段階として特徴付けられる。しかし、後半期には前半期にもたらされた食器構成の影響によって、一般的な器種組成の中にもそのような要素を取り入れられ、新器種等の出現など4期に成立する奈良時代後半の須恵器の祖型が形成されていったと評価したい。後半期の組成にも前半期のような組成の階層差は存在するとは思われるが、一般階級の食器構成の中に上層階級の要素が取り入れられることによって、前半期ほどの明確な階層差は失われて行ったものと推察したい。

## 追記2 薫詰め方法について（写真図版40）

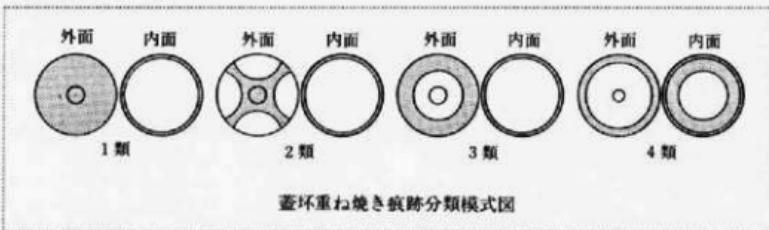
本文では触れられなかった薰詰め方法について、特に蓋環の重ね焼きに關し、若干述べておきたい。蓋環の重ね焼き方法は环蓋の色調により類推することができ、以下の4類に分類可能である。

1類は外面全体または外面全体と内面口縁部が焼きの良い色調を呈するもので、蓋と身を使用状態で重ねたものを類推できるが、以下の2類と3類どちらの方法で重ねられたかは判断できない。

2類は外面に何カ所か丸く焼きの悪い色調部分がみられるもので、内面全体も焼きの悪い色調となっている。これは1類と同様、蓋と身を使用状態に重ね、そのセットを交互に積み重ねる方法と思われる。

3類は外面中央に身の高台程度の大きさに焼きの悪い色調部分がみられるもので、内面全体も焼きの悪い色調となっている。これも1類と同様、蓋と身を使用状態に重ねたものだが、そのセットを交互に積み重ねず、柱状に積み重ねる方法と思われる。

4類は外面の口縁部付近を除く部分が焼きの悪い色調を呈するもので、内面の中央部分（身の高台程度の大きさ）も焼きの悪い色調を呈す。これは蓋を逆さにして身と組み合せたものをセットとして、それをそのまま柱状に積み重ねる方法と思われる。



蓋環重ね焼き痕跡分類模式図

これら4類を1次窯（Ⅱ次窯排水溝と土器集積地及び灰原の一部）と2次窯（Ⅲ次窯床面及びⅢ次窯覆土、舟底状ビット、灰原の一部）の出土遺物に当て嵌めれば、1次窯は1類が70%、2類が10%、3類が20%で、4類は確認できていない。1類のものは2・3類のどちらかの方法に帰属するものと考えられるが、いずれにしても、1次窯の蓋環は總て蓋と身を使用状態で重ねたものを1セットとする古墳時代から続く方法で積み重ねている。2次窯のものは偏平紐がつくものと宝珠紐で折り返し口縁部のもの、宝珠紐で口縁部に折り返しをもたないものとに分けて、その量比を述べる。偏平紐のものは1類が74%、2類が2%、3類が24%で、2類と3類の量比に違いはあるものの、基本的には1次窯と同じ方法で積み重ねている。宝珠紐で折り返し口縁部をもつものは1類が60%、3類が20%、4類が20%とこの器形にのみ4類が認められるが、その数量は決して多くなく、依然として從来の積み重ね方法が主流である。宝珠紐で口縁部に折り返しをもたないものは數量的には少ないので、總て1類で、4類は確認できない。以上の結果をまとめれば、新たに出現する4類方法は2次窯の新しい器形にのみ見られ、1次窯ではもちろんのこと、2次窯でも偏平器形においては4類方法を確認することはできず、偏平器形が從来の重ね焼き方法によっていると言ふことができる。これは4類方法が新しく導入された器形に伴って当地域にもたらされたものと評価できるが、新器形の中でも4類方法は主体的な方法とは言えず、次の二ッツ梨横川1号窯跡の段階にならっても4類方法が1割程度（この量比は全体での数値であるため、偏平紐のものを除けば、やや数値は高くなると思われる）しか認められない。しかし、二ッツ梨横川1号窯跡の段階では偏平紐のものにおいても4類方法が確認できており、そういう意味では新しい方法が浸透しつつあると評価できるかも知れない。新しい重ね焼き方法は矢田野向山1号窯跡の段階でもたらされた新しい器形の中に伴って、導入されたと思われるが、從来の重ね焼き方法から転換するのはもう少し後のこと、奈良時代後半になってからのことと思われる。

### 註

- (1) 土器集積地の下方には壁面に火を受けた痕跡のある土坑が存在し、土器窯である可能性をもっている。土器集積地と土坑の出土遺物が明確に区別できないため、はっきりとは言えないが、この土器集積地から出土する土器窯の多くは土坑に伴う遺物と考えては間違いないと思われる。また、灰原中に土器窯が少なか

- らず認められており、それらもこの土坑に伴う可能性がある。
- (2) この無台环は口縁部がやや歪んでおり、この口径よりも実際は小型である可能性が高い。
- (3) 同様の胎土で似た器形のものは二ッ梨横川1号窯跡で出土している。二ッ梨横川1号窯跡（小松市教育委員会『二ッ梨横川1号窯跡』1989）では小型甕として扱ったものだが、口縁部器形がこの時期の煮沸具と似た特徴をもっており、やや当窯跡のものとは異なる。しかし、法量や全体的な器形は似ており、同一器種として考えられるものである。この器種の用途としては食器以外にも焼合としての可能性ももっているが、わざわざ粘土に混和材を入れる必要性や二ッ梨横川1号窯跡のものは器形的にやや焼合としては考えられないことから、甕とするのが最も妥当と思われる。
- (4) この時期の土器器塊に比べ、器肉が薄い点や口縁部が内湾する特徴をもっていること、調整が丁寧であることなど、鉄鋸の特徴に似ていると北野博司氏より指摘を受けた。
- (5) 北野氏より御教示を受けた。
- (6) 烧台については当窯跡とはほぼ同時期に位置付される小杉流通事業団地内遺跡群N 016遺跡1・2号窯跡（富山県教育委員会『小杉流通業務団地内遺跡群第2次緊急発掘調査概要』1980、富山県教育委員会『小杉流通業務団地内遺跡群第6次緊急発掘調査概要』1984）や当窯跡より1段階後に位置づけられる浅川3号窯跡（金沢市教育委員会『金沢市末窯跡群』1989）において出土している。小杉流群N 016遺跡のものは平底に近い底部から直立または内湾して立ち上がり口縁端部で薄くつまみ上げる器形で、端部がやや脱くなっている。この器形はまったく当窯跡のものとは異なる器形であり、系譜の違いが指摘できる。これに対し、浅川3号窯跡のものは当窯跡のものと口径の大きさに違いがあるものの、同形態と言え、同じ系譜上にあると言える。
- (7) 戸津24・28号窯跡は、南加賀古窯跡群の北側、戸津町から二ッ梨町に抜ける戸津の「オオダニ」の一支谷に存在する戸津古窯跡群の中に存在する窯跡で、昭和57年度に調査されている（小松市教育委員会『戸津』1983）。24・28号窯跡いずれも床が3枚確認されており、最終床の土器が当期に類似している。
- (8) 1次窯と2次窯の量比としては大きな差はないものの、1次窯から2次窯へと長頸瓶の形態が変化するのに呼応して、その生産量も減少すると推察する。
- (9) この変化は1次窯の段階から始まり、次の二ッ梨横川1号窯跡の段階で明確になるもので、当窯跡の1次窯から2次窯までの中でははっきりとした転換はおこなわれず、その過渡的段階にあるものと思われる。
- (10) (3) 文献と同じ。
- (11) 奈良時代初頭から矢田野山1号窯跡の段階までは北陸古代土器研究会の発表資料（『南加賀古窯跡群における8世紀前葉の須恵器』第32回北陸古代土器研究会発表資料）の中で、それ以後は『二ッ梨横川1号窯跡』の報告の中でそれぞれ発表している。
- (12) 器形の面としては、环蓋の口縁端部が薄く長いこと、环身の高台が長くしっかりとしており、内側に貼付位置があること、無台环が深身であることなどが挙げられ、法量としては口径18~20cmの北野氏が環B Iとしたもの（北野氏は4様式—飛鳥IV期併行—の特徴として、環B Iが一定量生産されることを挙げている。北野博司氏1988「用途からみた食器具の組成とその変化」「シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題」（報告編）石川考古学研究会・北陸古代土器研究会）が存在することを特徴として挙げている。
- (13) 1期後半に位置づけられる桃の木山1号窯跡II次床からは天井部が山笠状を呈す环蓋が一定量出土しており、尾張美濃地方からの直接的な影響はなくとも、その系譜上にあるものと考えられる。2期前半で一般的な器形はこの山笠状器形の変化したものと評価でき、1期後半で移入された环蓋器形が在地工人の中で地域的に還元された結果生まれた器形であると思われる。詳細は北陸古代土器研究会発表資料「南加賀古窯跡群における8世紀前葉の須恵器」を参照されたい。

# 第IV章 考 察

## — 南加賀古窯跡群成立期の様相 —

### 1. はじめに

これまでの北陸地方の古墳時代の須恵器編年は、昭和46年に田嶋明人氏が発表された加賀市法皇山横穴古墳群での精緻な分析による須恵器編年（田嶋1971）を軸にして行われてきたと言える。その後発表された山田邦和氏の越前と加賀の資料を使っての須恵器編年（山田1985）、吉岡康暢氏の辰口町西山古墳群の資料を使っての須恵器編年（吉岡1987）等があるが、いずれも田嶋氏の編年に則った形での編年案と言えよう。これらは、北陸の須恵器編年の基礎となる業績として評価は高いが、古墳時代終末期以降の須恵器を対象とするもので、その出現期の様相が不明瞭となっていた。しかし近年、今回報告する二ッ梨東山古窯跡や戸津六字ヶ丘古窯跡、那谷金比羅山古窯跡の発掘調査、そして、近間強氏の精緻な分布調査によって、これ以前の須恵器の様相がかなり明らかにされつつあり、依然として、南加賀古窯跡群の出現時期についてはやや不明瞭な点を残すものの、窯跡資料から南加賀古窯跡群の出現期の須恵器編年を考えうる段階にきたと言える。今回報告を前にして、田嶋氏（田嶋1988）や筆者（望月・福島1988）がその編年軸を発表したことがあるが、今回は具体的な資料をもとに、南加賀古窯跡群の出現期の須恵器編年と窯跡の動きについて、考察してみたいと思う。

### 2. 型式分類

型式分類は時間的型式変化の追える蓋環を軸として、その他、比較的出土量の多い高环についても行った。対象とした窯跡資料は今回報告の二ッ梨東山1・4・5号窯跡（FT・HY1・4・5）、昭和44年に北陸大谷高校地歴クラブが調査を行った二ッ梨10号窯跡<sup>(1)</sup>（二ッ梨峠山窯跡－FT・TG10）、昭和47年に大型寺高校舞土研究会が調査を行った分校3号窯跡<sup>(2)</sup>（BG3）、昭和62年に市教委が調査した戸津六字ヶ丘2号窯跡（TZ・RG2）で、各操業床面を明示した。

蓋環は蓋と身に分け、蓋で4分類、身で6分類した。

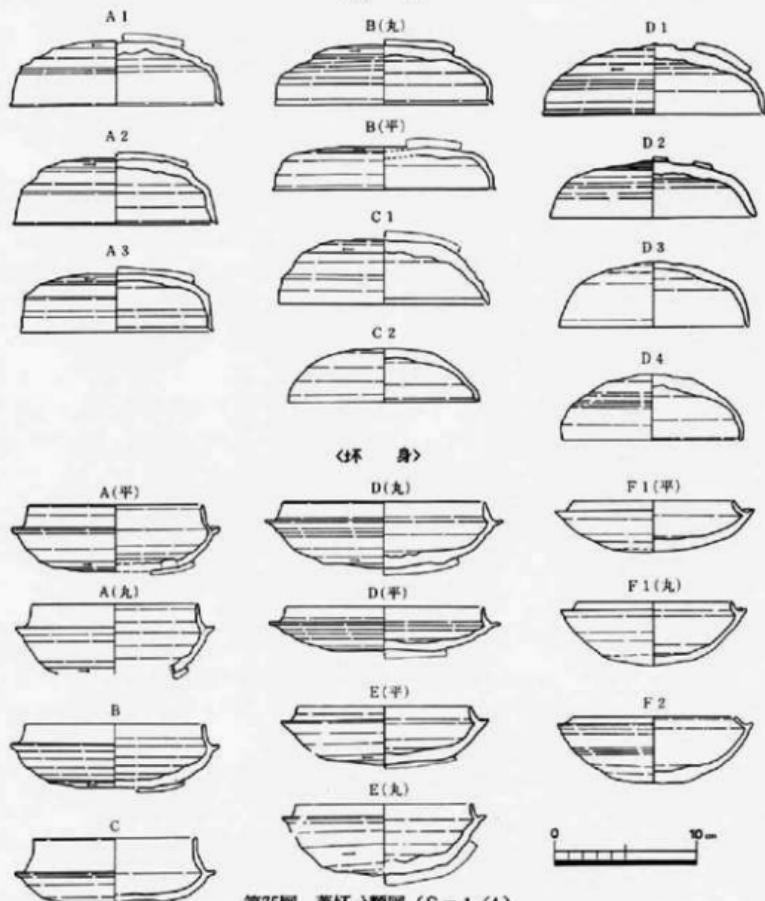
**蓋A類** 天井部と口縁部との間に明瞭な境をもつもので、口縁端部は内傾する段をもつ。天井部の調整は1/2～1/3の範囲に丁寧な回転ヘラ削りが施される。口径は12～17cm程度で、13～15cmに多く分布する。A類は天井部と口縁部の境の表現によってさらに3分類できる。A1類は境に深く太い沈線の入るもので、口縁端部の段が明瞭である。A2類は境に浅く細い沈線が入るもので、口縁端部の段が明瞭なものが多い。A3類は沈線は入らず、稜線で表現するもので、口縁端部の段が内傾する面状になっているものが目立つ。

**蓋B類** 天井部と口縁部の境が不明瞭で、ゆるく屈曲する程度となっている。口縁端部は内傾す

る段をもち、やや不明瞭となったものや内傾する面状となったものが主体を占める。天井部調整は回転ヘラ削りを施すものの、天井部の平坦部に回転ヘラ切り痕を残すものが目立ち、削り自体もかなり難くなっている。口径は12~18cmを測り、15~16cm前後に多く分布する。全体的に器高は低めであるが、天井部からゆるやかにカーブして口縁部に至る比較的器高の高い器形のものと広く平坦な天井部から口縁部に至る偏平な器形のものがある。

**蓋C類** やや平たく狭い天井部から丸味をもって口縁部に至る器形で、口縁端部に内傾する面状の段をもつ。器高は高く丸いものと、低く偏平なものがある。口径の大きさにより、2分類でき

〈**坏 蓋**〉



第75図 蓋坏分類図 ( $S = 1/4$ )

る。C 1類は14~15cm前後のもので、天井部には雑な回転ヘラ削りを施すものが多いが、ヘラ削りの施さないものも一定量存在する。C 2類は13~14cmのもので、天井部の回転ヘラ削りは殆ど施さない。

**蓋D類** 天井部から口縁部までゆるやかにカーブする丸味をもつ器形で、口縁端部は丸く仕上げており、段はもたない。器高は高く丸いものと低くやや偏平なものがある。口径の大きさにより、4分類できる。D 1類は14~16cm前後のもので、口縁部の器肉が薄い。天井部の調整は1/2~1/3程度に回転ヘラ削りが施されている。D 2類は14cm前後のもので、全体的に器肉が厚く、作りが雑である。天井部の調整は回転ヘラ削りを施すが、範囲が1/3以下となっている。D 3類は13~14cm前後のもので、口縁部の器肉が薄く、天井部の回転ヘラ削りは施さない。D 4類は12~13cm前後のもので、口縁部の器肉がかなり薄くなり、天井部の回転ヘラ削りは施さない。

**身A類** 口縁部が垂直気味に立ち上がり、口縁端部で浅い沈線状の内傾する段をもつ器形で、底部は丸く深いものとやや平たいものがある。口径は11~12cm前後で、口縁部高が1.5~2cmを測る。底部の調整は丁寧な回転ヘラ削りが1/3程度に施される。

**身B類** 口縁部がやや垂直気味に立ち上がり、口縁端部で丸く仕上げる器形で、底部はやや丸い。口径は12cm前後のものが多く、口縁部高1.5cm前後に分布する。底部調整はA類と同様である。

**身C類** 口縁部が内傾後直立する器形で、2cm以上程度に高く立ち上がる。底部は浅く偏平な器形で、回転ヘラ削りが施される。

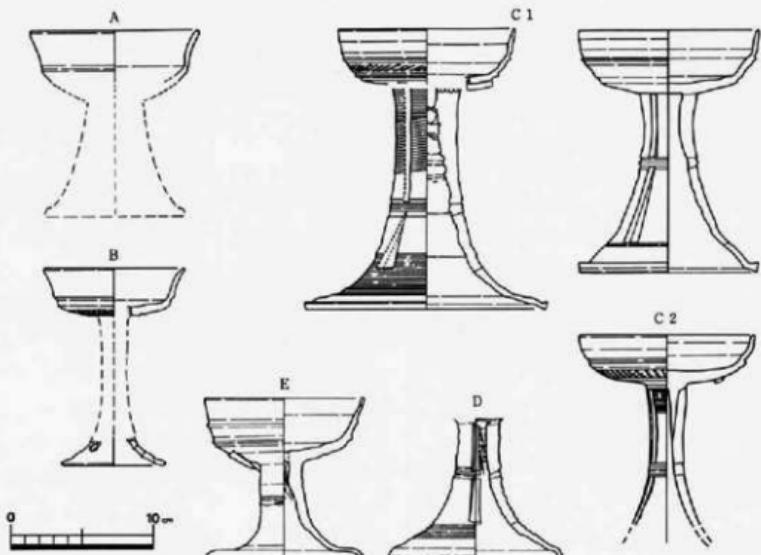
**身D類** 口縁部がやや内傾気味に反って立ち上がり、器肉が口縁端部に向かって薄くなるものが目立つ。口径は13~15cm前後に多く分布し、口縁部高が1~1.5cmに分布する。底部は全体的に浅い傾向にあるが、比較的深く丸味をもつものと広い平坦面をもち偏平なもののが存在する。底部調整は回転ヘラ削りを施すものであるが、調整は雑で平坦面に回転ヘラ切り痕を残すものがある。

**身E類** 口縁部は内傾して立ち上がり、口縁端部で薄く綺麗に仕上げるものと丸く仕上げるものがある。口径は12~13cmに多く、口縁部高は1~1.3cmに多く分布する。底部は深く丸い器形のものとやや浅く平坦面をもつものの2つの器形が存在する。底部調整はD類と同様の回転ヘラ削りを施すが、底部の深く丸いものは1/2以上に回転ヘラ削りの及ぶものが多い。

**身F類** 口縁部が強く内傾するもので、受部が小さく短くなっている。口縁端部は丸く仕上げており、口縁部高は0.5~1cm程度となっている。底部器形はE類と同様に、深く丸い器形とやや浅く平坦面をもつ器形のものがあり、底部調整は回転ヘラ削りの施すものではなく、回転ヘラ切り後のナデである。口径の大きさにより、2分類できる。F 1類は11.5~12cm前後のものである。F 2類は11~11.5cm前後のもので、I類よりもやや受部が小さくなり、口縁部の内傾が強まっている。

高环は無蓋高环のものを対象として4分類した。

**無蓋高环A類** 环部は文様をもたないもので、下方で沈線状の稜をもった後、口縁部で外反する。脚部は長方形のスカシを1段もち、脚高がやや長くなっている。



第76図 無蓋高环分類図 ( $S = 1/4$ )

実跡 器種	FT・HY4			FT-HY1			FT・HY5			FT-TG10			BG3		TZ・RG2		
	I次床	II次床	III次床	I次床	IV次床	VI次床	終床?	II次床	III次床	II次床	III次床	II次床	III次床	II次床	III次床	I次床	II次床
环	A1	*															
环	A2	*															
环	A3		*														
环	B				*	*											
环	C1						*										
环	C2											*					
环	D1																
环	D2																
环	D3																
环	D4																
身	A	*															
身	B	*	*	*													
身	C																
身	D																
身	E																
身	F1																
身	F2																
無蓋高环	A	*	?														
無蓋高环	B																
無蓋高环	C1																
無蓋高环	C2																
無蓋高环	D																

第77図 各窓跡ごとの蓋环・高环の変遷

**無蓋高坏B類** 坏部は平坦な底部から外傾して立ち上がる器形のもので、口径10cm前後と小型である。底部には櫛状工具により連続刺突文が施される。脚部は細長い棒状の脚から裾で広がる器形のもので、円孔スカシが3方に穿たれている。

**無蓋高坏C類** 坏部は口径12cm台程度の坏蓋を逆さまにしたような器形で、体部下半に刷毛状または櫛状の連続刺突文が施される。脚部は長脚で2段にスカシをもつものであるが、器形から2分類できる。C1類は基部がやや太く筒状に伸びた後裾部に向かって外反して広がるもので、スカシは3方に長方形のものが穿たれるが、下段のみ三角形のスカシを穿つものが一定量存在する。C2類は細い基部から棒状に伸びた後裾部に向かって外反する器形で、スカシは3方か2方に長方形のものが穿たれており、上段のスカシはスカシ孔が貫通していないものが多い。また、坏部の器形に関しても、C1類のやや深身であったものからC2類の浅身のものへと変化している。

**無蓋高坏D類** 坏部は坏蓋を逆さまにしたような器形で、体部に稜線が巡る程度の装飾性の弱いものである。脚部は基部から棒状に伸びた後裾部で強く外反して広がるもので、2段2方の長方形スカシが穿たれている。

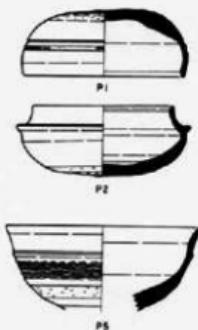
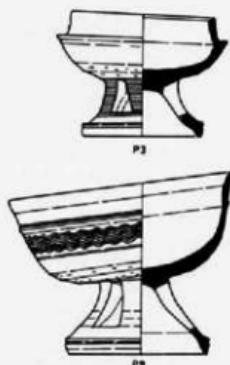
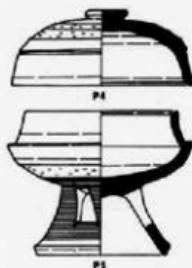
**無蓋高坏E類** 坏部はD類とほぼ同様の器形であるが、やや器高が高くなる。脚部はやや短くなり、裾部で外反する器形で、スカシをもたないものである。

### 3. 編年区分

以上の蓋坏と無蓋高坏の分類に従って、各窯跡ごとに類型の消長を記したもののが第77図である。これによれば、6期に区分することができるが、窯跡は確認されていないものの、これ以前の消費遺跡から南加賀古窯跡群産と思われる須恵器が出土しており、1型式当窯跡群の出現時期がさかのぼる可能性がある。よって、ここでは南加賀古窯跡群の古墳時代をI～VI期に分けて、述べてみたい。

#### (1) I期

当期に属する窯跡は確認されていないが、消費遺跡出土の須恵器の中に胎土觀察から南加賀古窯跡群産の可能性をもつものが確認されており、当期の窯跡が存在する可能性がある。南加賀古窯跡群の胎土の特徴としては、白色微砂粒を多く含むこと、白色の大粒粒子を疎だが、確実に含むこと、焼きの良いものには黒色の噴き出し状のものが多く確認できること、生焼けのものには角閃石等の鉱物が確認されることといったことが挙げられる。<sup>(1)</sup> 以上の特徴をもつ須恵器を南加賀古窯跡群産として想定しているが、寺井町和田山23号墳や辰口町下開発茶臼山5・14号墳などの出土遺物の中に一部確認できる。<sup>(2)</sup> 第78図に挙げた茶臼山5号墳と14号墳の周溝内出土の須恵器を例に、その特徴を述べる。5号墳のものは有蓋高坏と無蓋高坏で、どちらも短脚の1段スカシをもつタイプである。有蓋高坏は蓋が口縁端部で内傾する弱い段をもち、縁は貼り付け状の鋭いものではなく、鈍いもので一部沈線状となっている。身は口縁端部がやや面状となっているが、内傾する段状のものもあり、脚端部がやや丸味を帯び、高くなっている。器肉は厚く、全体的にシャー



下開免茶臼山5号墳

下開免茶臼山14号墳

第78図 I期の須恵器 ( $S = 1/4$ , 許6文献より転載)

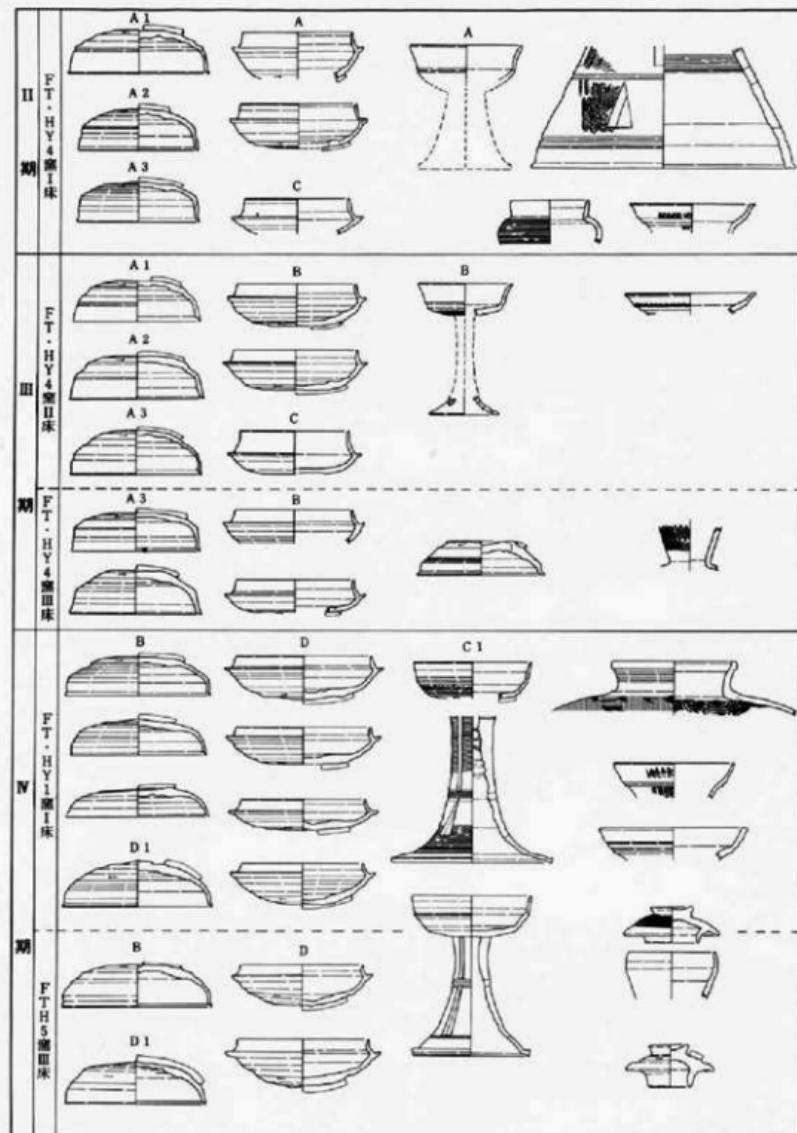
アさを欠いている。無蓋高环は大型の环部をもつもので、环部中位には柳描き波状文をもつ。前者に比べ作りが良く、器肉も薄手である。14号墳は蓋环と無蓋高环で、蓋环は蓋で口縁端部に内傾する弱い段をもち、稜は沈線状となっている。身は口縁端部が内傾する段をもつもので、口縁部が長いものの、内反器形となっている。調整は蓋・身とともに削り範囲がやや狭く $1/3$ 程度となっている。無蓋高环は环部がやや小型化する。14号墳のものは5号墳よりも確実に後出するもので、稜や口縁端部の形態ではII期の様相に近い傾向をもつが、蓋环の口径が小型でやや深身であり、器形の全体印象としてII期よりもI期の様相に近いものであるため、これに入れた。

最初でも述べたように、当期に位置付けられる窯跡は確認できていないが、二ッ梨殿様池窯跡で当期に位置付けられる須恵器が少量採集されており（近間1988）、存在の可能性をもつ。

## (2) II期

二ッ梨東山4号窯跡I次床を基準資料とする。环蓋はA1～A3類があり、主体はA2類で、全体の過半数を占める。ついでA1類が3割程度、A3類が1割強となっている。环身はA・B・C類が存在し、A類が主体で半数近くを占める。やや特殊な器形としてC類が少量存在するが、この器形は他のA・B類と系譜を異にするものと考えられる。以上の蓋环は總体的に口径の小さなものが多く、器高・口縁部高も高めに分布する傾向をもつ。無蓋高环はA・B類が確認できるが、いずれも破片で出土量は少ない。その他の器種としては、鉢、腹、器台、短頸壺、甕がある。腹は口縁部で「く」の字状に屈曲した後内湾気味に立ち上がる器形で、口頸部のあまり長くないものと思われる。

以上の窯跡の他には、現在のところ窯跡の存在は確認されていない、消費遺跡の中でも依然として南加賀古窯跡群産の占める量は主体的ではない。



第79図 南加賀古墳群時代須恵器編年図(1) (S = 1/6)

### (3) III期

二ッ梨東山4号窯跡II次床を基準資料とする。坏蓋はA2・A3類が主体で、A1類はほんの少量確認されるだけである。口縁端部はII期のものよりもやや段が弱くなり、天井部がやや丸くなる傾向をもつ。坏身はB・C類で、A類は確認できていない。C類はII期と同様少量確認できる程度である。以上の蓋坏は総体的に口径がII期よりもやや大きくなり、器高・口縁部高も若干低下する。無蓋高坏はB類が確認できるだけであるが、消費地においてはこの時期の蓋杯に共伴して少量ながらA類が確認できており、この時期までは存在すると思われる。その他の器種としては、鉢、碗、器台、壺、瓶、甕が確認でき、II期のものと内容に大きな差は見られないが、壺の中には長頸と思われる破片が出土しており、この時期に出現する可能性をもっている。甕は口縁部が外反するものが見られ、口頸部が長くなる傾向が見られる。

当期に属する他の窯跡としては、戸津六字ヶ丘5号窯跡、二ッ梨殿様池窯跡、二ッ梨東山4号窯跡III次床があげられる。戸津六字ヶ丘5号窯跡と二ッ梨殿様池窯跡は灰原採集資料であるが、ほぼ同様の器種構成を示しており、二ッ梨殿様池窯跡から須恵質の埴輪が多數出土している。また、二ッ梨東山4号窯跡III次床は床の前後関係からII次床に後続するものであるが、坏蓋においてA2類に替わってA3類が主流になる以外は、II次床からの目立った変化はなく、やや後出するも、同時期に位置付けてよいものである。当期から消費地における南加賀古窯跡群産の占める割合が増加し、その大半を占める。

### (4) IV期

二ッ梨東山1号窯跡I次床を基準資料とする。蓋坏は坏蓋B類と坏身D類が殆どで、僅かに坏蓋D1類が存在している。総体的に口径は大きく、II期からIII期へと大型化の道を歩んできたものがピークを迎える。器高は低いものが目立ち、口径の大型化とともに偏平な器形となる。また、調整は粗雑となってヘラ削りの施さないものも若干存在する。無蓋高坏はC1類で、大型の法量を呈す。その他の器種としては甕、短頸壺、横瓶、甕が確認できるが、III期までは存在していた器台はこの時期ほぼ消滅していくと思われる。また、同時期に位置づけられる二ッ梨東山5号窯跡II次床からは長頸壺の口縁部と壺蓋が出土しており、この時期には確実に長頸壺が伴ってくる。長頸壺は蓋を伴うもので、口頸部が比較的短く太い器形である。この時期の甕は口縁部の外屈が弱まり、頸基部の細くなる器形になるものと思われ、口縁部の櫛描き波状文が施されない無文のものも見られるようになる。

当期に属する他の窯跡としては、二ッ梨東山5号窯跡I～V次床があげられる。どの床面から出土する蓋坏も坏蓋B類、坏身D類が主体で、若干量の坏蓋D1類が含まれる程度である。第II章の二ッ梨東山5号窯跡の須恵器様相でも述べたとおり、I・II次床とIII～V次床とに分けられ、前半は二ッ梨東山1号窯跡I次床と同時期に、後半はややそれよりも後出するものと思われる。

### (5) V期

二ッ梨（紳山）10号窯跡と二ッ梨東山5号窯跡VI次床を基準資料とする。坏蓋は口縁端部に内

傾する面状の段をもつC 1類とIV期で少量見られた口縁端部の丸いD 1類の流れと考えられる、粗雑・小型化したD 2類が存在し、また、IV期の主流形態であったB類が僅少であるが見られる。全体的な器形としては天井部と口縁部の境が一層緩やかになり、丸い印象を受ける。坏身はE類が主流で、底部の深く丸いものや平たいものなど、器形がバラエティーに富む。また、若干量ではあるが、D類的なものも見られる。以上の蓋坏は総体的にIV期よりも口径が小さくなり、口縁部が一層低く内傾する。

当期の蓋坏は二ッ梨（峰山）10号窯跡と二ッ梨東山5号窯跡で異なる器形を呈する傾向があり、また、同時期に位置付られる二ッ梨豆岡山1号窯跡もこれら2つの窯跡とは異なった様相をもつ。口径や口縁部高は大きな差がないことから同時期として位置付けているが、器形においては同じ系譜とは思えないような、特殊な器形を呈す一群が存在している。このような器形の多様化が見られることも当期の特徴としてあげられるだろう。無蓋高坏はC 2類で、IV期のC 1類よりも坏部が低平となり、脚部が細長くなる。その他の器種としては、鉢、すり鉢、長颈壺、提瓶、甕が確認できる。長颈壺は小型の脚が付くもので、壺蓋のつまみがIV期よりも小型化していく。

当期に属する窯跡としては、前述の二ッ梨豆岡山1号窯跡の他、二ッ梨東山1号窯跡Ⅲ次床、二ッ梨東山5号窯跡Ⅶ・Ⅷ次床があげられ、二ッ梨東山1号窯跡Ⅲ次床は二ッ梨（峰山）10号窯跡の系譜上に、二ッ梨東山5号窯跡Ⅶ・Ⅷ次床は同窯跡Ⅵ次床の系譜上にあると思われる。

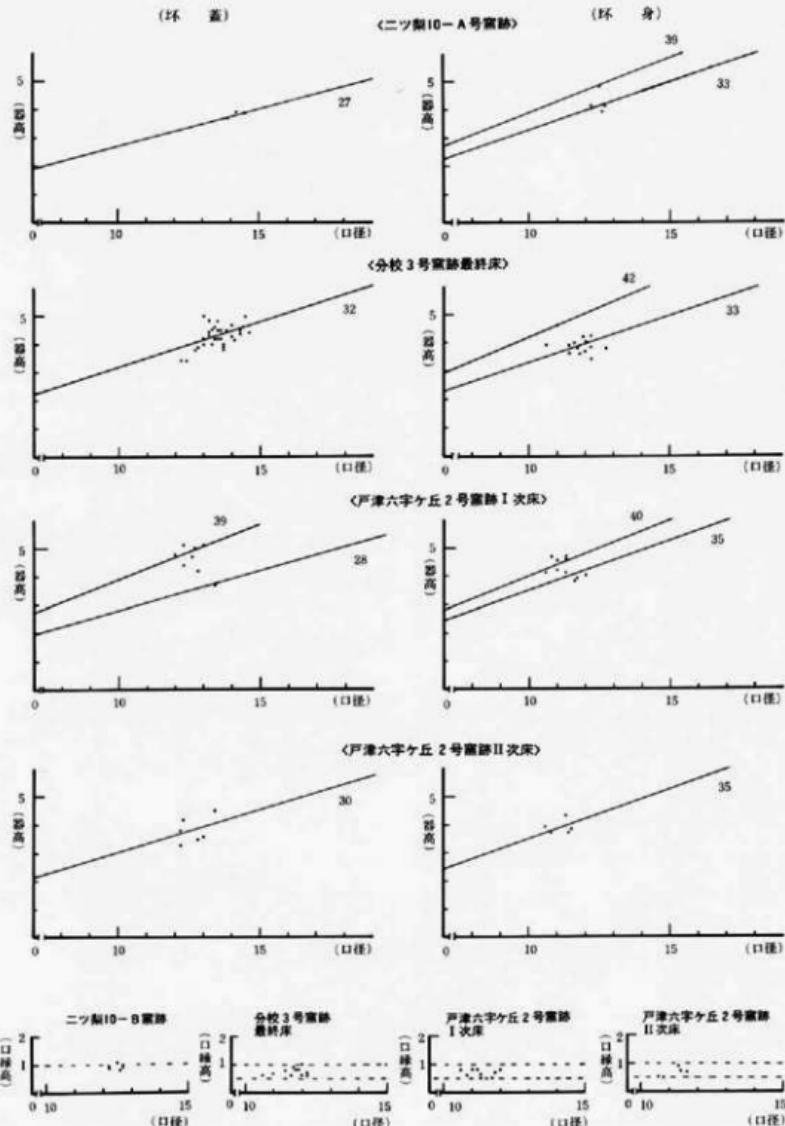
#### (6) VI期

分校3号窯跡Ⅱ次床を基準資料とする。蓋坏の第1の特徴としては天井部・底部の回転ヘラ削り調整が省略され、やや例外的なものを除けば、ほぼ回転ヘラ切り後のナデか刷毛状工具による撫で付けに統一される。坏蓋はIV期のC 1類及びD 2類がやや小型化したC 2類・D 3類で、全体的に丸味を帯びる器形に変化している。坏身はF 1類で、V期のE類よりも小型化し、口縁部立ち上がりが一層内傾して、内傾後屈曲して立ち上がるものは存在しなくなる。無蓋高坏はⅡ次床には確認できていないが、Ⅰ次床から出土している。Ⅰ次床は床の前後関係からⅡ次床よりもやや前出の様相をもつが、ほぼ同時期の範疇として位置づけられるもので、C 2類とD 3類的なものが確認されている。他の器種としては甕や長颈壺等の存在が予想される。

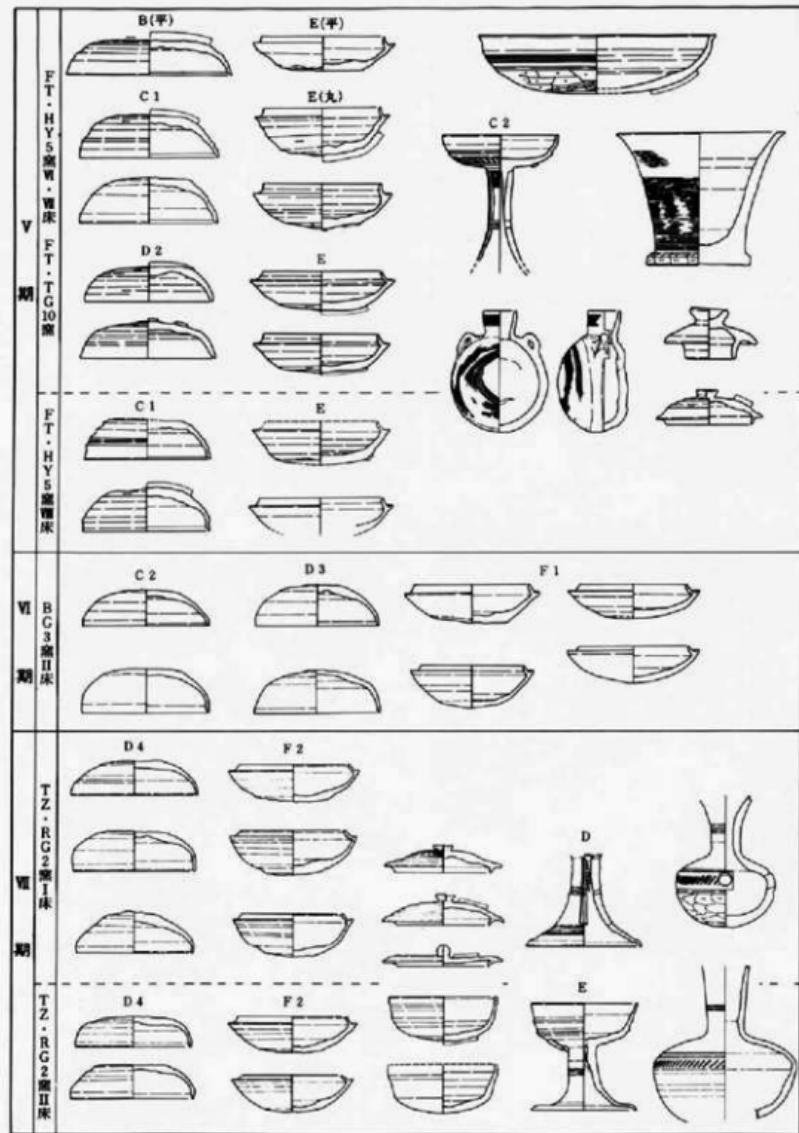
当期に属する窯跡としては、分校窯跡の他の窯跡の多く、松山窯跡の多く、南加賀古窯跡群須恵49号窯跡（二ッ梨峰山窯跡）、那谷金比羅山1・4号窯跡があげられる。詳細な報告がされて



第80図 二ッ梨豆岡山1号窯跡上から  
3枚目床面出土須恵器 ( $S = 1/4$ )



第81図 須患者蓋法量分布図（上段：口径・器高、下段：口径・口縫高）



第82圖 南加賀古窯跡群古墳時代須恵器編年図(2) (S = 1/6)

いないため、その内容については不明瞭な点が多いが、器形において、かなりの多様性がみられる予想できる。

#### (7) VII期

戸津六字ヶ丘2号窯跡I・II次床を基準資料とする。坏蓋はD4類で、VI期のD3類から口径が小型化し、口縁部を薄く仕上げている。坏身はF2類で、F1類よりも口縁部が内傾し、蓋と同様口縁部が薄く仕上げられている。調整はVI期のものと同様、回転ヘラ削りを施すものではなく、切り離し後のナデ調整が施される。また、II次床からは蓋・身とも口縁端部をするどく仕上げているものがあり、これがやや後出する様相であるかもしれない。無蓋高坏はこの時期からスカシをもたないE類が出現する。これ以前でも少量ながらスカシをもたないものは存在していると思われるが、一定量存在するのは当期からである。しかし、脚部に2段2方のスカシをもつD類も依然として一定量存在し、量的にはまだD類が主流である可能性が高い。他の器種としては、頸部の極めて細く外反する口縁部の頸や口頸部の細長く伸びる長頸壺等が出土している。また、I・II次床のどちらに伴うものか不明であるが、灰原から宝珠形のつまみをもつ内面かえりの蓋が一定量出土している。これに伴う身としては、塊器形のものと坏器形のものがある。前者は金属器模倣の器種と思われるもので、底部に削りを伴い、口縁端部が内側に突出している。後者はいわゆる坏Gで、やや丸味を帯びた底部から立ち上がり、口縁部でやや内湾する。底部の調整は回転ヘラ切り後のナデを施す。塊と坏で蓋が異なるとは思われるが、はっきりとは判別できない。ただし、蓋には天井部にカキ目を伴うものとそうでないもの（主にヘラ削り）とがあり、前者が精製品の感じを受けるため、金属器模倣の塊に伴う可能性が高い。

当期に属する窯跡としては、那谷金比羅山6・7-1・11号窯跡<sup>(32)</sup>、林タカヤマ窯跡<sup>(33)</sup>、林オオカミダニ窯跡<sup>(34)</sup>、そして松山・分校窯跡のいくつかはこの時期に属する可能性をもつ。いずれも報告がまだなので、内容は不明瞭だが、那谷金比羅山6・11号窯跡、林オオカミダニ窯跡からは内面かえりの坏蓋が出土している。

以上、I～VII期に編年区分し、その概要について述べてきたわけだが、この中の画期を求めるすれば、III期とIV期の間にVI期とVII期の間に求めることができ、それぞれ、I～III期を1段階に、IV～VI期を2段階に、VII期以降を3段階として設定したい。また、この編年試案を北陸地方を対象とした既存の須恵器編年と対比させれば、以下のとおりとなる。

	田嶋案(1971)	田嶋案(1988)	吉岡案(1987)	山田案(1985)
I期		4様式I		
II期		4様式II		
III期		4様式II		
IV期	I型式	4様式II		
V期		4様式III	I期	II後期
VI期	II型式	古代I,(古)	II期	III初期前半
VII期	III型式	古代I,(断)	III期	III初期後半

#### 4. 他地域との編年対比と当地域の特徴

ここでは3で編年区分してきたⅠ期～Ⅷ期を古墳時代の須恵器編年の基本と言える畿内の陶邑編年（田辺1981）に対比して、その併行関係を捉えるとともに畿内陶邑窯との須恵器様相の差から南加賀古窯跡群の須恵器の特徴を述べてみたいと思う。

Ⅰ期については、有蓋高环の脚が短脚の1段スカシであることや口径の大きさ等からTK47型式に対比できると思われるが、このⅠ期にはTK47型式でも古手のものは確認できず、脚部のやや長くなる新しい傾向をもつものが目立つ。また、この時期は、口縁端部にシャープさを欠き作りの難になっているものと、口縁端部が内傾する段をもちシャープな作りのものとが存在する。この両者の器形は前後関係にあると考えるよりも、異なるレベルの技術によって作り出されたものと考え、時期的には隔たりのないものと考えたい。

Ⅱ期については、蓋坏の特徴として身の口縁端部に弱いが段をもつものが見られ、主流となっており、口径がやや小型で、深い器形のものが一定量存在する。このような特徴はMT15型式に近い様相として考えられるが、蓋の後が沈線による表現となっており、身の口縁端部を丸く仕上げるもののが若干存在するといったTK10型式に近い様相も含んでいる。全体としてはMT15型式の色彩の濃いものと言えることからMT15型式とするが、その中でも後出の様相を含んでいる。

Ⅲ期については、Ⅱ期でみられた坏身の口縁端部の段はほぼ消滅する段階で、坏蓋の沈線による稜の表現も弱くなる。口径に関してもⅡ期より確実に大型化の傾向にあり、深身器形がなくなってくる。坏身の口縁端部の段の消滅や坏蓋の後の沈線化は畿内陶邑窯ではTK10型式にあり、口径や口縁部高の数値もほぼ当期のものと合致する。高环についてはTK10型式では無蓋高环A類が一般的な器形と思われるが、当窯跡では無蓋高环はあまり存在せず、B類が盛行する。この器形は陶邑窯のMT15型式やTK10型式で坏部で似た器形のものが確認されるものの、脚部はかなり異なっており、独特の器形を呈す。このように畿内陶邑窯にかならずしも合致するものではないが、ほぼTK10型式の特徴をもっていると考え、当期に比定して間違いないものと考える。

Ⅳ期については、Ⅲ期で見られた坏蓋の口縁部と天井部の境はなくなり、坏身は口縁部立ち上がりがやや内傾し低下して、全体的に口径が大きく偏平な作りのものが目立ってくる。調整についてもⅢ期と比べてかなり粗雑となり、回転ヘラ切り痕を残すものが目につく。このような特徴はTK10型式とTK43型式の中間、つまり中村編年（中村1978）でのⅡ型式3段階に比定できる。また、無蓋高环は脚部の長い2段スカシのC1類が出現し、田辺氏が「長脚1段から2段への過渡期には、短期間長方形と三角形とを上下に組み合わせたものなどが現れる。」（田辺1981）と指摘するようにこの時期のスカシには下段が三角形のものが多くみられる。以上の点からは中村編年Ⅱ型式3段階に比定して間違いないものなのだが、畿内陶邑窯では次のTK43型式に一般的とされるものが登場している。それは口縁端部に段をもたない坏蓋C類と蓋をもつ長頸壺の存在である。坏蓋C類はその中でも古い形態のC1類であるが、割合としては1割程度であるものの、一定量存在している。長頸壺はⅢ期にもその脚部である可能性をもつものも確認されており、こ

の時期には確実な生産を行っていると言える。長頸壺という新しい器種の出現をメルクマールにして考えれば、TK43型式に下るものとなってしまうが、蓋坏や無蓋高坏はその前の中村編年Ⅱ型式3段階の特徴そのものと言うことができ、この時期をやや幅をもたせることによって処理したい。つまり、中村編年Ⅱ型式3段階からTK43型式の一部を含める時期をあてる。

V期はIV期で大型・偏平を特徴としてきた蓋坏が口径の縮小化、口縁部立ち上がり高の低下等小型化への道を歩み始める段階で、各窯跡によって器形の差異が生じる段階でもある。この時期の調整はIV期と同様、粗雑ではあるが、確実に回転ヘラ削りを施す。無蓋高坏はIV期のC1類から脚がより細長くなるC2類で、坏部の文様は依然として施され、スカシは3方のものが主流である。以上の特徴はTK43型式に位置付けられる特徴であるが、高坏のスカシに切れ目状に形骸化したものが確認されることや長頸壺の壺蓋の口径がかなり小型化していることなどTK209型式に下る様相のものも確認でき、TK43型式の中だけに収まる様相ではない。TK43型式後半からTK209型式の前半程度に考えておきたい。

VI期はV期の蓋坏の小型化が一層進行し、口縁部の立ち上がりも内傾して低下する。そして、この段階からV期にも少量見られた、回転ヘラ削り調整の省略が一般化するようになる。蓋坏の削り調整の省略は畿内陶邑窯では中村編年のⅡ型式5段階つまりTK209型式から認められるようで、その状況は「蓋には……天井部上面は回転ヘラ切り未調整のものが一部見られるようになっている。坏身は……回転ヘラ切り未調整のものが多くみられるようである。」(中村1978)となっている。しかし、削り調整を省略するもので統一されるのは、次のTK217型式からである。このTK217型式の蓋坏は田辺氏がその標式とするTK217号窯跡と中村氏がその標式とする資料とでは異なる特徴を示している。前者の蓋坏は口径が10cm以上のもので、口縁部は受部よりも高くなっている。後者の蓋坏は口径10cm以下のもので、口縁部と受部の高さがほぼ同じ程度にまで、口縁部が低くなってしまい、蓋坏の最終末的な様相をもっている。当窯跡のものは前者のものに近いが、それでも口径は陶邑窯の方が小型で器高が低平となっている。以上のような畿内の様相はそのまま当地域に当てはまるものではなく、削り調整の省略を重要視するか器形や口径を重要視するかによって位置付けが異なってくる。しかし、V期の下限をTK209型式の前半程度に考えていることから、VI期はそれに継続する段階として位置付け、その下限をTK217型式の中に一部入る程度と考えたい。

VII期はVI期の蓋坏が一層小型化し、口縁部が内傾する特徴をもつが、口縁部は受部より上に出るもので、最終末の様相は呈していない。無蓋高坏はスカシのないE類が出現し、スカシのものは減少の傾向にある。無蓋高坏の長脚タイプのものにスカシが消滅する段階はTK217型式からのもので、その後長脚のものがなくなる傾向にあることを考えれば、TK217型式に比定できる。また、当期は宝珠形つまみの坏蓋をもつ坏Gが出現する時期と考えられ、陶邑窯でTK217型式から出現することとも一致する。しかし、南加賀古窯跡群で出現するこのタイプの坏蓋はかえりが大きいものの、つまみは偏平なボタン状で口径も10cm前後とやや大きめで、数量も極

めて少ない。これに対し、TK217型式での环G蓋はしっかりとした宝珠形のもので、器高も高く、口径も10cm以内のものが主流のようである。このような様相の違いは当窯跡群のものがやや後出する可能性をもっているが、この時期の环G蓋は地域によって違いがあるようで、地域差として捉えられるものかもしれない。以上から、畿内の様相とそのまま対比できるものではないかも知れないが、当期の上限はTK217型式の中にあることはまず間違いなく、その下限についてもTK217型式がやや幅をもたせて考える傾向にあることから、その型式の中で収まるものと考えたい。

以上、陶邑窯との対比から、その併行関係を述べてきたが、その差異から南加賀古窯跡群の特徴を述べてみたいと思う。まず、I期であるが、この時期には作りが雑で器内の厚いいかにも稚拙な技術によって作られたようなものと、作りが丁寧で熟練した技術によって作られたようなものとが存在する。これは須恵器技術の導入がこの時期に行われたことを物語るものであり、新しい技術の導入がもたらした特徴と言えよう。II・III期においては、I期のような技術の差は認められず、やや地域色的なものをもち始める。环身の口縁端部が内傾する段をもつものから丸く仕上げるものへと変化していく状況は陶邑のものと大きな違いではなく、ほぼ期を同じくして変化しているものと考えられるが、口径の大きさやや深身である点では比較的古い様相を残す傾向をもち、無蓋高環では1段スカシから2段スカシへの変化の段階で、独特の器形（無蓋高環B類）を作り出している。また、この時期には畿内の器形のものとは異なる口縁部の長い环身C類が一定量存在し、尾張猿投窯からの影響があったと予想したい。

生産が安定してくるIV期以降になると、蓋環や高環に古い様相を残す傾向が顕在化する。蓋環については环蓋の口縁端部が丸く仕上げるものがIV期から出現してくるものの、微弱ながらも段をもつものがVI期まで残り、丸く仕上げるのに統一されるのはVII期になってからである。环身の口縁部高についても比較的高いものが目立ち、口縁部の強く内傾するものはVII期以降に出現してくる。全体の法量としては口径が縮小していく状況は陶邑のものと大差ないとと思われるが、V～VII期と器高の高いものが目立つ。しかし、調整の簡略化は早い傾向にあり、IV期には調整の簡略化が目立ち始め、VI期には削り調整を施さないものにはば統一される。無蓋高環はIV期からいわゆる長脚2段スカシが出現してくるが、3方向に穿つものがVI期まで残り、2方向に穿つものはあまり一般化しない。

以上の古い様相を残す傾向は、製品の中で主要な位置を占める蓋環や高環に見られるのであるが、これに対し生産量の少ない貯蔵形態の器種においては、新しい器種や器形を比較的早く受け入れる傾向をもつ。それは鶴の器形変化や長頸壺の出現時期、また、VII期に出現する宝珠形のつまみをもつ环G器種で、これら新しい器種・器形などの出現においては畿内と大きな時間的格差をもっていないと思われる。

## 5. 南加賀古窯跡群成立の窯跡分布と窯の動き

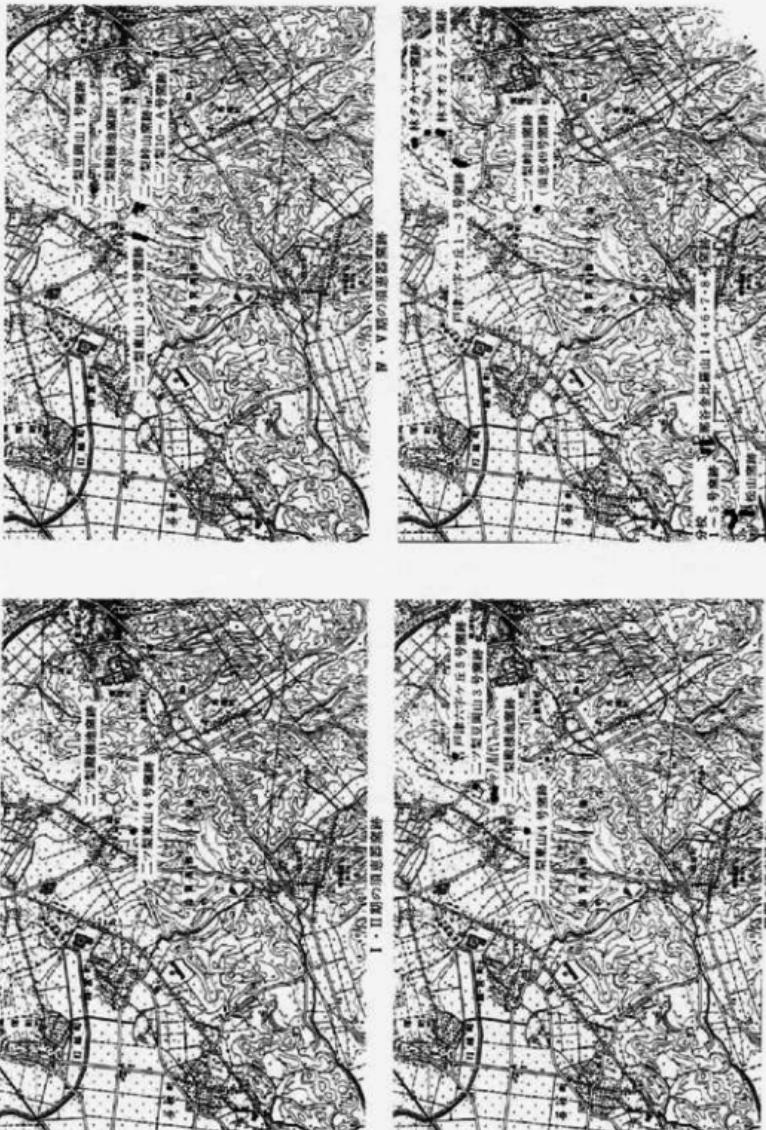
この章で取り上げた古墳時代の窯跡は、戸津町から二ツ梨町にかけての平野を望む丘陵斜面つまり南加賀古窯跡群の存在する低丘陵の北西端、二ツ梨オオダニを挟んだ両側の丘陵斜面、那谷町から松山町にかけての動橋川流域丘陵斜面つまり南加賀古窯跡群の存在する低丘陵の南東端の大きく分けて3ヶ所に分布する。この窯跡を時期別に出現期（I・II期）、安定期①（III期）、安定期②（IV・V期）、発展期（VI・VII期）の4期に分けて各期の窯跡の分布と動きについて述べてみたい。

（出現期）この時期の窯跡は二ツ梨東山4号窯跡（1次床）が確認されるのみであるが、二ツ梨殿様池窯跡においてI期と思われる須恵器が採集されており（近間強1988）、当期の窯跡が存在する可能性をもっている。以上の2基の窯跡は二ツ梨オオダニの入り口部分周辺の地域に分布し、この地域で須恵器生産を開始されたとみてほぼ間違いない。生産規模は消費地での当期の南加賀古窯跡群産須恵器がまだ少ない状況にあることを考えれば、小規模であることは確実で、流通圏もあまり広くないと思われる。

（安定期①）当期の窯跡は出現期に存在した二ツ梨東山4号窯跡と二ツ梨殿様池窯跡（3基？）の他、二ツ梨豆岡山3号窯跡、戸津六字ヶ丘5号窯跡の約6基が存在し、出現期に存在した二ツ梨オオダニ周辺から戸津オオダニの入り口部分の範囲で分布する。当期は出現期に比べて窯跡数が増加し、分布する範囲も二ツ梨オオダニの入り口部分から戸津オオダニの入り口部分まで規模をやや拡大する。しかし、この拡大は大きなものではなく、基本的には出現期の分布地域と変化はない。当期は出現期で先駆的に生産を開始した地域において、その生産が安定し、規模を拡大して行った段階として捉えられるもので、生産の充実期であり、発展期ではない。また、当期は消費地において、須恵器が増加する時期もあり、これまでの搬入品が主体を占めていた状況からほぼ在地産に統一される状況へと変化している段階で、流通圏も拡大している。

（安定期②）当期の窯跡は二ツ梨東山窯跡（1・3・5号窯跡）、二ツ梨峠山窯跡（二ツ梨10号窯跡など3基？）、二ツ梨豆岡山1号窯跡、二ツ梨殿様池窯跡（この時期の須恵器が採集されているようであるが、詳細は不明）が存在する。窯の基數や分布範囲はこの前の時期と変化していないが、その中心が二ツ梨東山窯跡とそこからオオダニを挟んだ向こう側に存在する二ツ梨峠山窯跡の区域にあり、比較的集中した生産を行っている。

（発展期）当期は出現期から安定期と窯場の中心であった二ツ梨オオダニ周辺の地域から那谷町・松山町周辺の南加賀古窯跡群南東端の地域と林町・戸津町周辺の南加賀古窯跡群北西端の地域に窯場が分散・拡大する。二ツ梨オオダニの区域は二ツ梨峠山窯跡で1基（須恵49号窯跡）確認されるだけで、安定期から規模をかなり縮小している。これに対し、窯跡群の南東端と北西端の区域は開始と同時に精力的な生産を行っているようである。南東端の区域は那谷金比羅山窯跡（1・4・6・7・8号窯跡）と分校窯跡（3号窯跡の他4基確認されている）、松山窯跡（3基確認されているが、詳細は不明。ほぼ分校窯跡と同様の時期と思われる）が存在し、この時期以降、近隣の横穴古墳群が消滅する7世紀末頃まで活発な生産を行っている。北西端の区域は南東端区



第83図 古墳時代遺物器窓分布図 (S=1/5,000)

域ほど窯跡の基数が多くないが、林タカヤマ窯跡で3基、林オオカミダニ窯跡で2基、戸津六字ヶ丘窯跡で3基の窯跡が存在し、以後林周辺では衰退するが、戸津六字ヶ丘窯跡では8世紀初頭までここを基盤とした生産が行われ、以後主体を戸津オオダニ周辺の区域に移していく。

以上、古墳時代の窯跡の分布とその動きについて、各期をとおして見てきたが、この窯の動きから見た画期は明らかに発展期の段階で、それまでの須恵器生産組織を再編させるかのような動きを示している。その背景には当窯跡群南東端に位置する那谷・分校・松山の窯跡グループの南側に存在する法皇山横穴古墳群や栄谷丸山横穴群の築造があると思われ、窯の出現から消滅そして隆盛期と両者ともほぼ同様の在り方を示している。<sup>(35)</sup>当窯跡群の窯場の移動がこの2つの横穴群のみに起因するとは考えられないが、少なくとも南のグループの窯跡はそのような政治的な要因によって移動されたと予想できる。

## 6. まとめ

これまで、須恵器の編年と畿内との対比、窯の動態について述べてきたが、3の編年区分のところで述べた編年の画期と各段階の内容について、ここでもう一度まとめておこうと思う。

南加賀古窯跡群の古墳時代をその出現から7期に区分し、その中でⅢ期からⅣ期への変化とⅥ期からⅦ期への変化を画期として設定しているが、南加賀古窯跡群の出現も土器組成の中で見れば、一つの画期として設定できる。南加賀古窯跡群出現の画期とⅥ期からⅦ期への古代土器組成へと変化していく画期を大きな画期として設定し、その中間のⅢ期からⅣ期への画期は小画期として設定する。また、ここでは古墳時代の編年として、Ⅷ期を含めて行ったが、Ⅷ期は古代の土器組成がここから出発するという点で、今回の須恵器編年に属すべきものではないかもしれないが、主要器種は依然として古墳時代の組成であり、その転換期としてⅦ期も含めて行った。また、Ⅷ期の画期は古墳時代と古代の画期という面でも大きな画期と言えるものである。

南加賀古窯跡群の出現は、多くの人が指摘するように、TK47型式併行のⅠ期にあることはほぼ間違いないよう、この時期は土器師においても画期として捉えられており、古墳時代の土器全体を大きく転換させる画期の意味は大きい。このように、地方において土器様相を一変させる在地窯の成立については、当然在地首長層の中央への働きかけと強い結び付きによって招来せられたものと考えられるが、その経営・管理にあたってもそれに近隣する江沼盆地・三湖台地域の首長層が大きく関与していたことはほぼ間違いないことだろう。在地首長層が窯業生産を招来し、掌握することがどれだけの利点があったか推測する術はないが、河村氏（河村1983）が「領域内諸階層は、その入手において首長権への依存を強めざる得ないであろう」と指摘するように、古墳祭祀に不可欠の要素であった須恵器の供給を掌握することが、諸階層に対する首長層の優位性と、他地域の首長層間の友好関係を表す物資として使われたのではないだろうが、いずれにしても、在地の窯業生産活動は政治的な手段として使われたことは間違いないことであろう。在地での窯業生産の開始には、先進地からの工人集団の移入がなければ成立不可能なことであるが、

その工人集団の系譜としては吉岡氏の指摘するように畿内が有力視されている。吉岡氏はその候補地として尾張と畿内を挙げ、「埴輪製作技法との関連から尾張とする状況判断も成り立ちますが、Ⅱ期以降尾張の須恵器生産がきわめて地域性の強い器種と古い要素を残存させつつ展開しているのに対し、北陸の場合、古墳祭式専用の地域的器種が製作されたといえ、一貫して畿内に準じて推移した」(吉岡1984)としている。当地域における出現期の須恵器を見ると、畿内の器形に準じているとするのが妥当であり、器形や調整においてかなりの特徴をもつ尾張にその系譜を求めるのは無理がある。そして、この時期を前後して他地域から供給される須恵器は陶邑產と思われるものがかなりの量を占めているようで、その点からも系譜を畿内に求めるのが自然と言えよう。吉岡氏が尾張との関連を指摘する埴輪の製作技法<sup>(9)</sup>を無視することはできないが、須恵器生産についてだけを見れば、「陶邑產=畿内政権と在地首長の個別的な政治提携の強化を抵子として移植された」(吉岡1984)とする吉岡氏の見解が最も適切な表現と言えるだろう。

しかし、このように畿内との結び付きで成立した当窯跡群もⅢ期の生産が安定していく段階ではそれまでの畿内器形の中に、尾張からの影響と思われる器形が出現する。このような現象は在地窯開始期の畿内工人による須恵器生産が一段落ついて、工人の世代交替等による在地工人による生産が始まるこを意味し、ある意味での地域色をもつ始める段階と言える。だが、地域色がはっきりと見られるのは、この次のⅣ期からであり、Ⅲ期までの須恵器は畿内に準ずる器形を基本としている。製品の特徴としては調整や焼成具合も良く、良品を目指す傾向が見られ、法量や細部の特徴で畿内に準じた傾向を示している。また、このⅢ期までは三湖台古墳群において頻繁に古墳が築造される時期であり、これ以後は追葬はあっても新たに築造される古墳はなくなる。そして、それと同時に在地首長層の権力の象徴であった前方後円墳も消滅していく。つまり、Ⅲ期とⅣ期は古墳築造ということにおいても大きな画期として位置付けられるのである。

Ⅲ期とⅣ期の画期は前述の政治的な要因もさることながら、須恵器においても転換する時期である。それはⅣ期の須恵器に端的に現れることであるが、この時期の蓋環は口径が大きく、器形が低平となり、調整もⅢ期に比べて、かなり粗雑となる。これ以後は口径の縮小、調整の粗略化の道を歩んで行くわけだが、器形から見ても地域色が顕在化する時期にあたる。また、この時期は脚の大きい無蓋高環C類や長頸壺など新しい器種の出現する時期であり、祭器として発達する反面、食器としての役割ももつ始めると考える。

このようなⅣ期の様相はそのままⅥ期まで同じ流れで変化していくが、次のⅦ期に大きく転換する。このⅧ期の転換はこの前のⅥ期にすでに兆候が見られるよう、Ⅵ期を前後する時に江沼地域では新しい埋葬形態である横穴古墳が出現し、その出現とともに窯場が大きく移動している。Ⅵ期は埋葬形態や窯の移動で大きく変化する時期ではあるが、しかし、Ⅵ期の須恵器はⅣ期からの流れで捉えられるもので、須恵器の画期としては環Gの出現するⅦ期をその転換点とした<sup>(10)</sup>。また、Ⅷ期には高環のスカシの消滅や低化、長頸壺の定型化など他の器種でも変化する時期で、その要因としては、この時期を前後して出現する仏器的な器種（金属器模倣形態）が大きく

拘っていたと思われる。つまり、VII期は畿内で「金属器指向型」(西1982)として起こった様式変化が当地域にもたらされた段階として評価でき、これ以後の古代の須恵器を形成する祖型が出現する段階として、VI期とVII期の間を古墳時代須恵器と古代須恵器の画期として位置付けたい。

以上、南加賀古窯跡群の古墳時代の編年とその画期の内容について述べたが、この在地窯成立という問題は土器編年だけでなく、政治的にも大きな意味をもっており、今後に残される課題が多い。しかも、今回の編年が窯跡資料に限定していることから、蓋環と無蓋高环を中心とする編年となり、窯によって確認されない器種があったり、器種構成の量比にやや信憑性を欠いているといった各期の内容に不十分な点が残っている。このような状況から、編年の画期についても筆者自身や流動的な点を残しており、今後の発掘調査や資料の整理によって補填または訂正されて行くものと思われる。今回の編年案が不十分な点は筆者自身認めるところであり、この編年案が古墳時代の編年研究においてたたき台となれば幸いと思っている。

最後に、この考察を作成するにあたり、田嶋明人氏、北野博司氏、木立雅朗氏、櫻田誠氏より有意義な御指導、御助力を賜わった。記して、感謝の意を述べたい。

#### 註

- (1) 一般にニッケル10号窯跡と呼ばれているものは、南加賀古窯跡群須恵4号窯址のこと、この窯跡にはA・Bの2つの窯跡が重複しており、ここで取り扱うものは下のB窯跡にあたる(北陸大谷高校地歴クラブ『紀要』第5号1970)。また、ニッケル峠山窯跡という名称は近間強氏の分布調査報告(近間1988)に準じた。
- (2) 分校3号窯跡は2枚の床が確認されており、ここではⅡ次床の遺物を引用した(大型寺高校郷土研究会「分校窯址発掘調査報告」「郷土」11号1972)。
- (3) 戸津六字ヶ丘2号窯跡の資料は「戸津六字ヶ丘古窯跡発掘調査概要報告書」(小松市教育委員会1987)より引用した。
- (4) 南加賀古窯跡群の胎土は全体としては本文に挙げた4点を特徴としているが、微砂粒や白色の大粒粒子の量、鉱物の有無など製品によって偏りがあり、また地域や時代によっても若干異なる傾向をもつ。
- (5) 和田山25号墳周溝からは有蓋高环が45個体出土しているようであるが、そのうち当窯跡群と類推できるものは2~3割程度で、全体からの占める割合は低い。器形は口縁端部にシャープな段をもち、蓋の縁が脱くなっている。脚は端部の脱いもので、全体的に精巧な作りのものが目立つ。また、これ以外にも漆町遺跡ヘゴジマ地区などで当期に属する当窯跡群須恵器が確認されているようである(田嶋明人氏より御教示)。
- (6) 西野秀和「辰口町下開発茶臼山古墳群」1982辰口町教育委員会
- (7) 当窯跡から採集された須恵器は口径が小さく、器高の高いものも存在するが、口縁端部や縁の形態は当期に属する特徴をもっており、無蓋高环B類も出土している(『市内遺跡群詳細分布調査報告書Ⅱ』1989小松市教育委員会)。
- (8) 田嶋明人氏によれば、消費遺跡の須恵器の中に在地窯の製品が出現するのはTK47型式併行期からとされているが、主体を占めるようになる時期はMT15型式~TK10型式とされている(三県シンポジウム東国における古式須恵器をめぐる諸問題での発表資料)。
- (9) この窯跡は小松市教育委員会が発掘調査したもので、4枚の床が確認されている。
- (10) 蓋は丸い天井部から壇で屈曲し、やや外反する口縁部へ移行するもので、口縁端部は内傾する段が沈線が数条あるものもある。身は丸い底部から受部でやや長めに突出し、強く内反する口縁部へと移行する。これらの器形は極めて特殊なもので、東海地方にその系譜を想定できるかもしれない。
- (11) 当期に位置付けられる郡谷金比羅山1号窯跡からはC2類とD類が出土しているが、無蓋高环に伴う

- 脚部は殆ど2方向スカシのもので、D類が主体である（福島正実氏より御教示を受けた）。
- (12) 分校窓跡には3号窓跡の他に4基窓跡が存在しており、加賀市教育委員会の報告（加賀市教育委員会『加賀市分校古窓跡群調査概報』1972）によれば、5基とも1様式内におさまるものとされており、6世紀後半から7世紀前半の時期をあてている。VI～VII期程度の窓跡が存在しているものと考える。
- (13) 松山窓跡は1号窓跡が確認されているが、他にも3基程度の存在の可能性が報告されている（石川県教育委員会『石川県遺跡地図』1982）。1号窓跡は古墳時代後期の須恵器が採集されており、分校窓跡とほぼ同時期の推定が予想される。
- (14) 北陸大谷高校地盤クラブ『紀要』第5号1970。
- (15) 那谷金比羅山窓跡群は古墳時代後期の須恵器窓跡12基で構成される窓跡群で、昭和57～59年に調査を実施された遺跡である。その中で1・4号窓跡は最も古い時期に位置し、6世紀第3～4四半期に比定されている（福島1985）。
- (16) 当期に属する那谷金比羅山6号窓跡からはスカシをもつ高环が主体的に出土しているよう、スカシなしのものが一般化するのは次の時期からのようである（望月・福島1988、詳細については福島氏より御教示を受けた）。
- (17) 金属器模倣タイプの典型的な例としては、この時期の中でも古い様相をもつ那谷金比羅山6号窓跡が挙げられ、ここから出る蓋は乳頭状のつまみをもち天井部にカキ目を施す丁寧な作りを特徴とし、身は体部に沈線の入るような深い塊器形を呈している（望月・福島1988、福島正実氏より御教示）。この6号窓跡のものと戸津六字ヶ丘2号窓跡のものを比較すれば、天井部にカキ目を施すものが若干あるものの、つまみの形態や調整でかなり異なる様相を呈している。戸津六字ヶ丘2号窓跡の方が後出する様相とするのが妥当であろう。
- このように、宝珠形のつまみをもつ蓋には金属器模倣の塊器形と環G器形があるわけだが、前者の器形は他の仏具的な器種とともに当期以前に既に出現しているものと考えられており（北野氏より御教示）、この初期あたりを盛期として以後は衰退の傾向にある。これに対し、後者の器形は畿内における環Gの出現自体が金属器模倣器形から派生したものと考えられていることから、前者器形のものよりも後出す要素をもっており、当地域に環Gが導入され、出現するのは当期にあると考えられる。
- (18) これらの窓跡は那谷金比羅山窓跡群の報告（福島1985）で第Ⅱ期とされたもので、6号窓跡～11号窓跡の前後関係が指摘されている。6号窓跡（望月・福島1988）は蓋環の口径が当期の基準資料とした戸津六字ヶ丘2号窓跡のものよりも大きく、高环もやや古い形態のものが主体で、E類は確認されていない。そのような点からこの6号窓跡はVI期とVII期との中间的な様相をもつが、那谷金比羅山1号窓跡をVI期に位置付けている点から確実に後出する様相ということで、VII期に含めた。
- (19) 林タカヤ窓跡は近間氏の分布調査報告（近間1988）における名称であるが、市教育委員会の分布調査によって確認されたものである（宮下幸夫氏より御教示）。この窓跡はまだ発掘調査が行われていないが、試掘調査の出土遺物から当期前後の窓跡であると考えられる。
- (20) 林オオカミダニ窓跡も前掲報告による名称であるが、石川県埋蔵文化財保存協会によって発掘調査が完了している。名称については未定のようであるため、ここではオオカミダニを使用した。窓跡は2基確認されており、いずれの窓跡灰原からも環Gが出土しているようである（久田正弘氏より御教示）。
- (21) 田辺昭三氏は「須恵器大成」の中で、TK10型式とTK43型式の間に型式は設けていないが、その中間としてMT85号窓跡の資料を挙げており、これが中村編年におけるII型式3段階に匹敵すると予想される。
- (22) 中村治氏はII型式3段階の時期に長い脚を伴う長頸壺が出現すると指摘している（中村1978）、一般的とされるのは次の4段階（TK43型式）からのように、この4段階の器形はやや太めの窓基部からやや外傾気味に立ち上がる口頭部で、脚部は2段スカシをもつ長いものとなっている。また、この時期の口径は9cm前後と大きく、つまみをもった蓋が伴う。
- (23) 中村氏はこの時期の資料として、TGII-II、TG32、TG64、TG17、TG30-II、TG88号窓の中の多くのものをあてている。（中村1978）
- (24) 山田邦和氏は飛鳥・白鳳時代の須恵器研究（山田1988）の中で、「宝珠形つまみが出現していないくとも、長頸瓶・盤・皿が出現していたり、環Gの身底部や蓋天井部の回転ケズリ調整が省略されていたりする

場合、その須恵器は畿内編年のⅢ期に併存する時期の製品と見てよい。」として、「地方窯において回転ヘラ切り不調整の坏豆を主体とする須恵器があったとすると、それは畿内のTK209型式以前には遅りえない」としている。この説に立てば、VI期はTK217型式以降ということになるわけであるが、VII期で出現する宝珠形つまみの坏豆は古い形態のものと評価でき、当地域ではIV期からすでに回転ヘラ削りを省略する傾向がみられるところから、削り調整の省略のみからTK217型式成立の指標とすることは危険であり、多くの要素から陶邑編年との併行関係を考えたい。

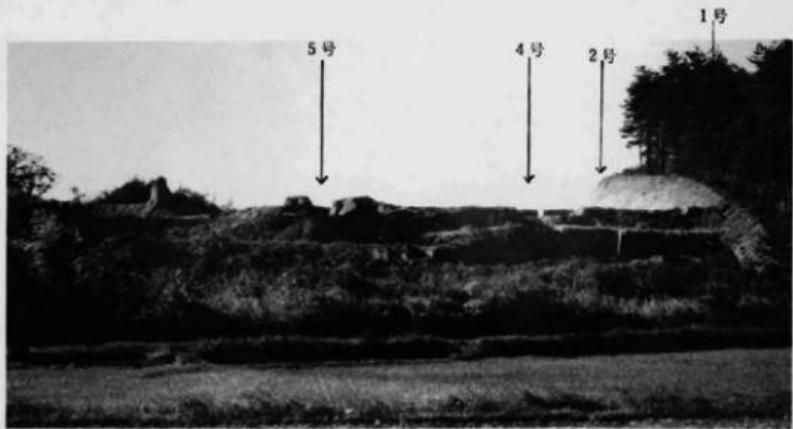
- (25) TK217型式については、その指標となるTK217号窯跡自体がやや時期幅をもたせて考える必要性がある（田嶋氏より御教示を受けた）ようで、また、山田氏の試みた型式編年（山田1988）においてもTK217型式は前後2時期に細分してあることから、型式の内容としてやや幅をもたせて考えることが妥当のようである。
- (26) 地方窯開始期の製品の特徴として、田辺氏は「器形の種類、形態、製作技法が陶邑窯の製品とほとんど変わらないこと、生焼けなどの不安定な製品の多いこと」を挙げ、製品の不安定な原因については「地方で最初に構築される窯の構造的な不安定さに起因する」とし、陶邑製品との類似については、「生産地の地方拠点が工人の移動を伴うことを考えれば当然の結果」としている（田辺1981）。地方窯の開始においては中央からの工人移入があったことは予想されることではあるが、その生産活動には当然地元の土器作りの工人も参画していたと予想され、その製品の中には指導者の熟練した技術を遺傳させる製品と指導のもとに製作を行ったやや稚拙な製品とがあったものと考えられる。I期の須恵器はまさにそのような在り方を示しているものと評価できるのではないかだろうか。
- (27) 坏豆C類のような口縁部の著しく長い器形のものは尾張猿投窯において確認できるものであるが、その時期は東山111号窯跡（TK216型式併行）から東山11号窯跡（TK47型式～MT15型式前半併行）までの段階（斎藤1989）で、当窯跡群のII期よりも若干先行し、やや口縁端部で異なった特徴をもっている。しかし、この器形に類似するものは隣接する地域からは確認できず、今のところ、尾張猿投窯の影響下にあるものと考えておきたい。
- (28) 法皇山横穴古墳群の出現はV期には確実で、窯の移動するVI期よりも一時期前になる。しかし、V期にあたる横穴は少なく、VI期から主体的に築造されるようである。（田嶋1971）。栄谷丸山横穴群については詳細が不明だが、法皇山とほぼ同様の在り方を示すと予想される。
- (29) 南加賀古窯跡群の出現時期については消費遺跡の観点から、吉岡氏（吉岡1984）、田嶋氏（田嶋1987）、河村氏（河村1983）がそれぞれ述べられているが、各氏ともTK47型式併行に求められることではほぼ一致を見ている。
- (30) 田嶋氏の南加賀地域を対象とした古墳時代の土器編年（田嶋1987）によれば、I期は3様式と4様式の画期にあたり、4様式以降須恵器の普及の影響を受けて、土器供給器の技法や器形が大きく変化している（田嶋氏より御教示）。
- (31) 在地窯における埴輪の生産は、須恵器の生産と同時に開始されたとする見方が最も有力で、これは御幸塚古墳出土の埴輪の中に須恵器のものが存在していることに起因するわけだが、埴輪焼成窯の確認できる例としては二ッ型殿様池古窯跡のみで、共存する須恵器からIII期に比定される。これらの埴輪製作技法は、御幸塚古墳の埴輪、そして二ッ型殿様池古窯跡から供給されたと思われる矢田野エジリ古墳出土の埴輪、いずれも調整方法に若干の違いがあるものの、尾張地方の系譜を引くものと思われ、畿内の系譜では考えられないとされている。しかし、二ッ型殿様池古窯跡で併焼される須恵器は畿内の系譜上にあるもので、須恵器は畿内、埴輪は尾張という二つの系譜が混在している。このようなことは吉岡氏も指摘していること（吉岡1984）であるが、須恵器と埴輪ではその技術の導入段階で、移入経路が異なっていたために、二つの系譜が存在したものと現段階では考えておきたい（埴輪の製作技法については座間謙氏より御教示を受けた）。
- (32) 稲田氏は箱型粘土模の考察（稲田1989）の中で江沼地域の古墳について述べられ、古墳築造の画期を「造墓に対する觀念の変化は、前方後円墳の消滅とともに一的に捉えられるべきかもしれない。従って、実質的な画期は、6世紀中葉頃に求める必要がある」とし、さらに「二子塚孤山古墳を頂点とした階層的構成を示す古墳群が、同様のパターンで三湖台地区を舞台に展開するのは、MT15型式期であり、ま

た、その終焉を迎えるのも該期直後であった可能性が強い。この急激な変貌は、政治的・社会的状況の変化を抜きにしては考えがたい」として、その画期の大さを強調している。以上の画期は当窯跡群のIII期とIV期の画期に匹敵し、この時期にみられる須恵器の粗大化等の変化は、このような古墳祭祀の変化を契機として起こったと予想され、それまで主要であった祭器としての用途が徐々に薄れ始めて行くことによって生じた変化であると思われる。

3) 田嶋・北野両氏は分校3号窯跡と戸津六字ヶ丘2号窯跡を一つの型式として扱い(田嶋氏は分校3号窯跡を古段階、戸津六字ヶ丘2号窯跡を新段階としている)、ここから古代土器が展開していると捉え、古代I期または古代土器食膳具1様式としている(田嶋1988、北野1988)。その理由として、分校3号窯跡の段階に既に仏器の器種が盛んに生産されることから、古代前半期における食膳具の各器種の原型の多くはここに存在するということを挙げている。しかし、筆者の理解では分校3号窯跡の段階は基本的にはそれ以前の流れで評価するのが妥当と思われ、仏器の器種の導入はあっても、それが日用食器の中に反映されるのは戸津六字ヶ丘2号窯跡の段階からであり、VII期こそが古代型の須恵器が出現する時期として、古代との画期として扱った。

#### 引用文献

- 樺田 誠 1989 「考察—所謂箱型粘土器についてー」『後山無常堂古墳・後山明神3号古墳』小松市教育委員会
- 河村好光 1983 「須恵器在地窓の成立をめぐって」『北陸の考古学』石川考古学研究会
- 北野博司 1988 「用途からみた食膳具の組成とその変化」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』報告編 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
- 斎藤孝正 1989 「古墳時代の猿投室」『第6回東海埋蔵文化財研究会斯夫山古墳とその時代』東海埋蔵文化財研究会
- 田嶋明人 1971 「須恵器編年」『法皇山横穴古墳群』加賀市教育委員会
- 1987 「在地窓の成立と土器器」『第8回三県シンポジウム東国における古式須恵器をめぐる諸問題』北陸考古学研究会・群馬県考古学研究所・千曲川水系古代文化研究所
- 1988 「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』報告編 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
- 田辺昭三 1981 「須恵器大成」角川書店
- 近間 強 1988 「小松丘陵窯跡群分布調査報告」『石川考古学研究会会誌』第31号 石川考古学研究会
- 中村 浩 1977 「考察—出土遺物の分類と編年ー」『陶邑』Ⅱ 大阪府教育委員会
- 1978 「和泉陶邑出土遺物の時期編年」『陶邑』Ⅲ 大阪府教育委員会
- 西 弘海 1982 「土器様式の成立とその背景」『考古学論考—小林行雄先生古希記念論文集—』
- 福島正実 1985 「郡谷金比羅山窯跡群」『昭和59年度県営は場整備事業・県営公害防除特別土地改良事業関係埋蔵文化調査概要』石川県立埋蔵文化財センター
- 望月精司・福島正実 1988 「南加賀古窯跡群の概要」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』資料編 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
- 山田邦和 1985 「北陸の須恵器編年試案」『福井市宿布古墳群』福井県教育委員会・財団法人古代学協会
- 1988 「飛鳥・白鳳時代須恵器研究の展望」『古代文化』第40巻第6号 財団法人古代学協会
- 吉岡康暢 1984 「北陸地方」『日本陶磁の源流』柏書房株式会社
- 1987 「西山古墳群」「辰口町史」第Ⅱ巻 辰口町役場



調査後遠景



1号窯跡最終床(IV次床)



同左(上方より)



1号窯跡 Ⅲ次床



同左 Ⅰ次床



同上調査風景



同上（上方より）



2号窑跡全景



同左奥壁部分



同上 遺物出土状況



同上（上方より）



同上近景



2号窯跡環蓋出土状況



同左環蓋下状況



3号窯跡



4号窯跡最終床(Ⅲ次床)



4号窯跡Ⅱ次床



同左Ⅰ次床

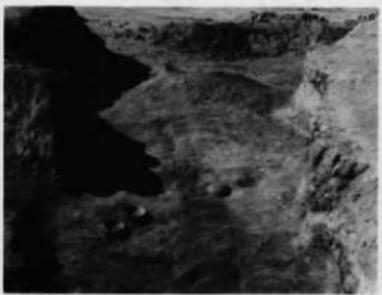
写真図版 5  
二ツ梨東山古窯跡



5号窯跡最終床 (VIII次床)



同左 VI次床修復



同上 VI次床



同上 III次床



同上 II次床



同上 I次床



13-2



13-4



13-5



13-7



13-10



13-11



13-14



13-25

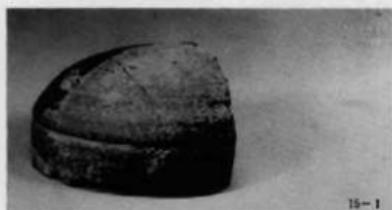


13-26



13-29

二ッ梨東山4号窯跡I次床出土遺物



15-1



15-5



15-7



15-8



15-13



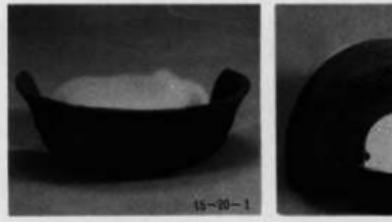
15-15



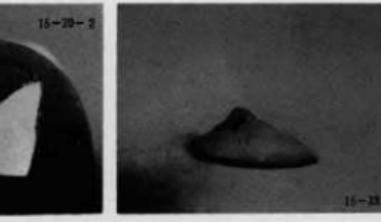
15-16



15-17



15-20-1

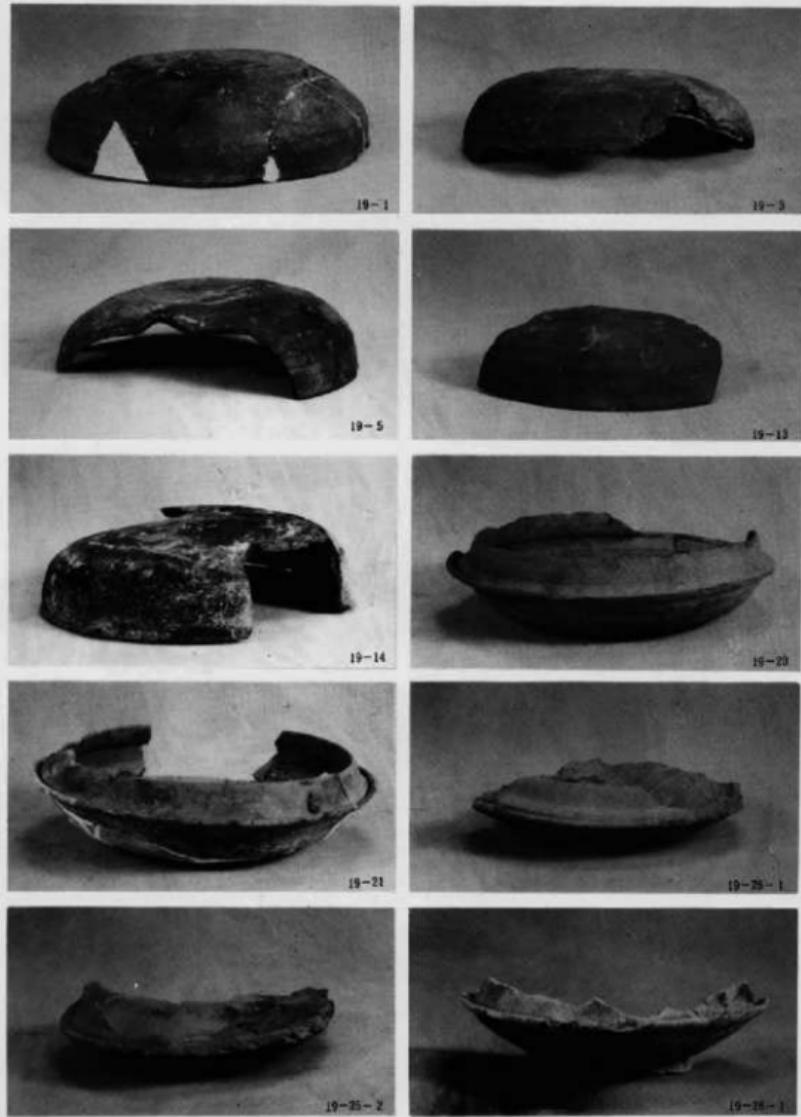


15-20-2

15-23



二ッ梨東山4号窯跡Ⅲ次床・Ⅲ次床出土遺物



二ツ梨東山1号窯跡I次床出土遺物



19-26-2



19-28



19-29



19-35



20-36



20-38



20-39



20-45



20-47



20-48

二ヶ梨東山1号窯跡I次床出土遺物



20-50



20-51



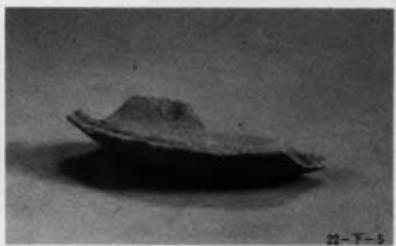
20-56-1



20-56-2



22-下-3



22-下-5



22-下-6

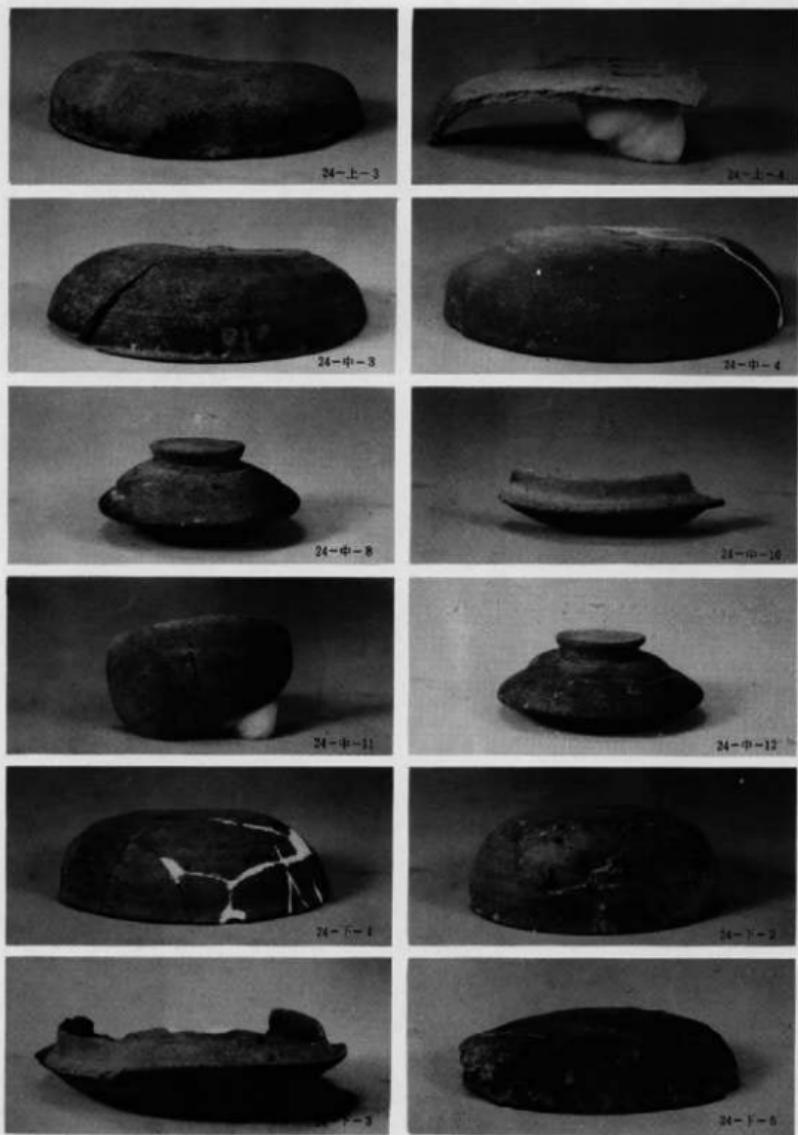


22-下-7



22-下-9

二ッ梨東山 1 号窯跡 I 次床・IV 次床出土遺物



二ッ梨東山5号窯跡I次床・II次床・III次床出土遺物



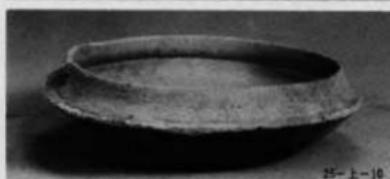
25-上-1



25-上-5



25-上-9



25-上-10



25-上-11



25-上-12



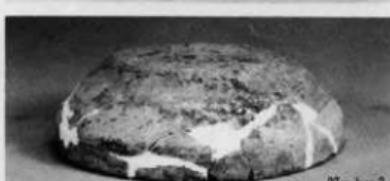
25-上-13



25-上-14



27-上-1



27-上-2

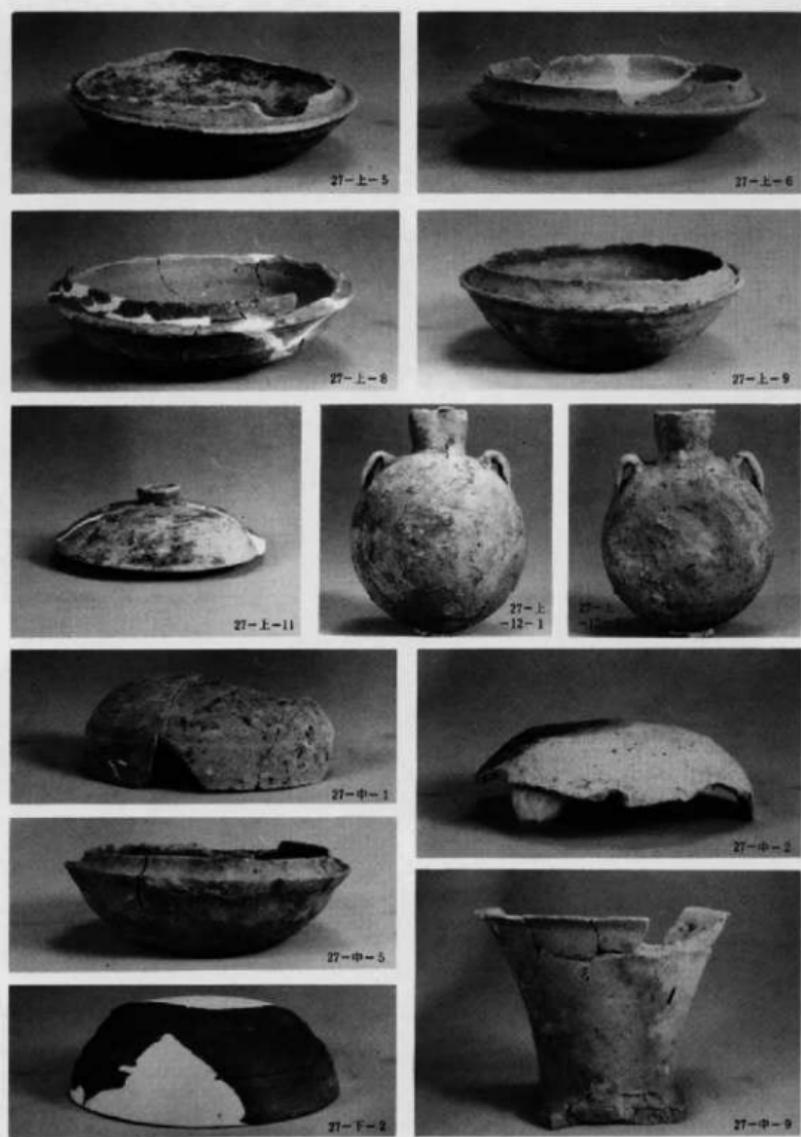


27-上-3



27-上-4

二ッ梨東山5号窯跡IV次床・VI次床出土遺物



二ッ梨東山 5号窯跡 VI次床・VII次床・VIII次床出土遺物



31-3



31-4



31-5



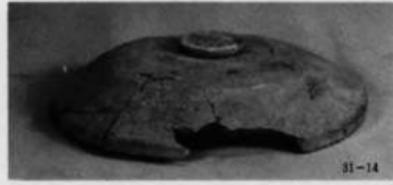
31-6



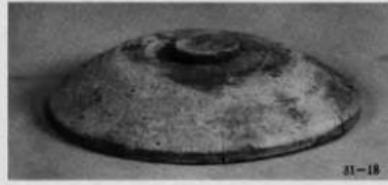
31-10



31-11



31-14



31-18



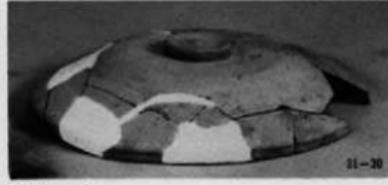
31-19



31-21

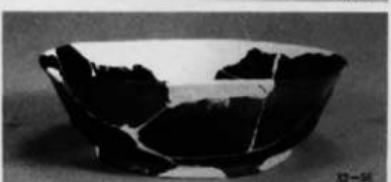
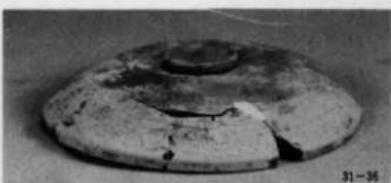


31-22



31-28

二ッ梨東山2号窯跡出土遺物



二ッ梨東山2号窯跡出土遺物



二ッ梨東山 2 号窯跡出土遺物



調査前の状況



調査開始作業風景



焼成部断面



焼成部上方断面



調査風景



窯体調査風景



III 次窯全景



同左前庭部



同左上奥壁部分



同上（上方より）



同上燃焼部付近大甕片出土状況



Ⅲ 次窯・灰原遠景、左横は土器集積地



同右上（上方より）



Ⅲ 次窯遺物取り上げ後全景



同上前庭部



Ⅱ 次室全景



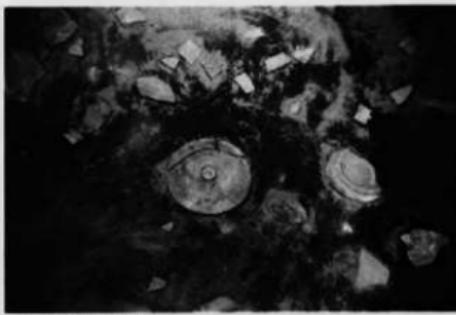
同左上（上方より）



同上奥壁部分近景



同上奥壁部分近景



同上遺物出土状況



Ⅱ 次窯床下排水溝全景



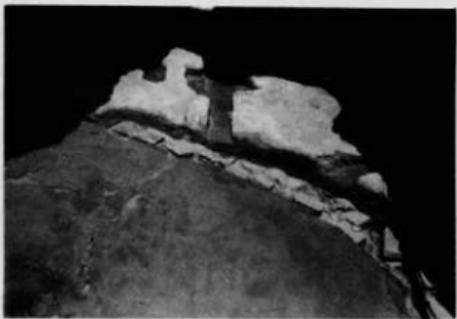
同左前庭部



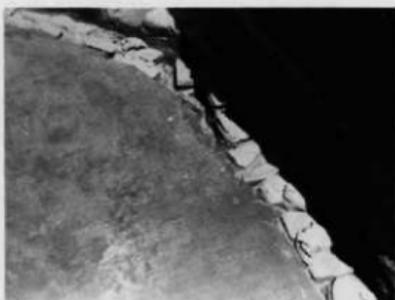
同左上溝



排水溝近景



排水溝（始り部分）



排水溝（部分）



排水溝（部分）



排水溝分歧（部分）



同左（上方より）



排水溝（部分）



排水溝（部分）



排水溝合流部（横より）



排水溝遺物取り上げ後



排水溝合流部（上方より）



同上（上方より）



排水溝（始り部分）



排水溝下方（上方より）



排水溝分岐（上方より）



前庭部溝（上方より）



前庭部溝



考古地磁気測定試料採取



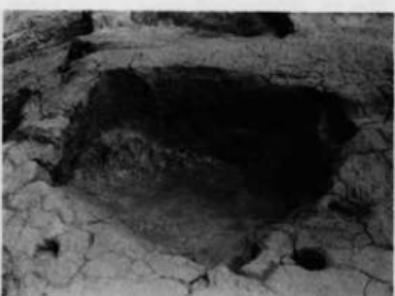
土器集積地遺物出土状況



土器集積地



土坑遠景（上方は土器集積地、右は1号窯跡）



土堆



灰原遺物出土状況



灰原遺物出土状況



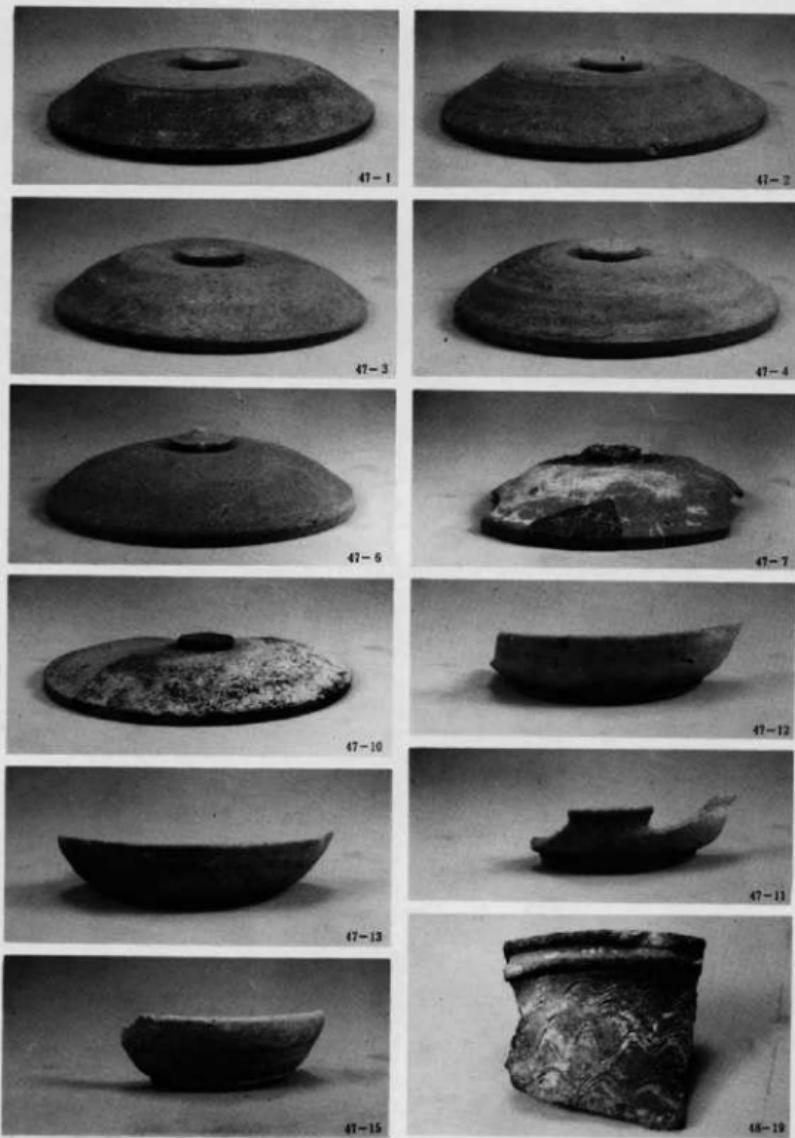
灰原遺物出土状況



調査後全景



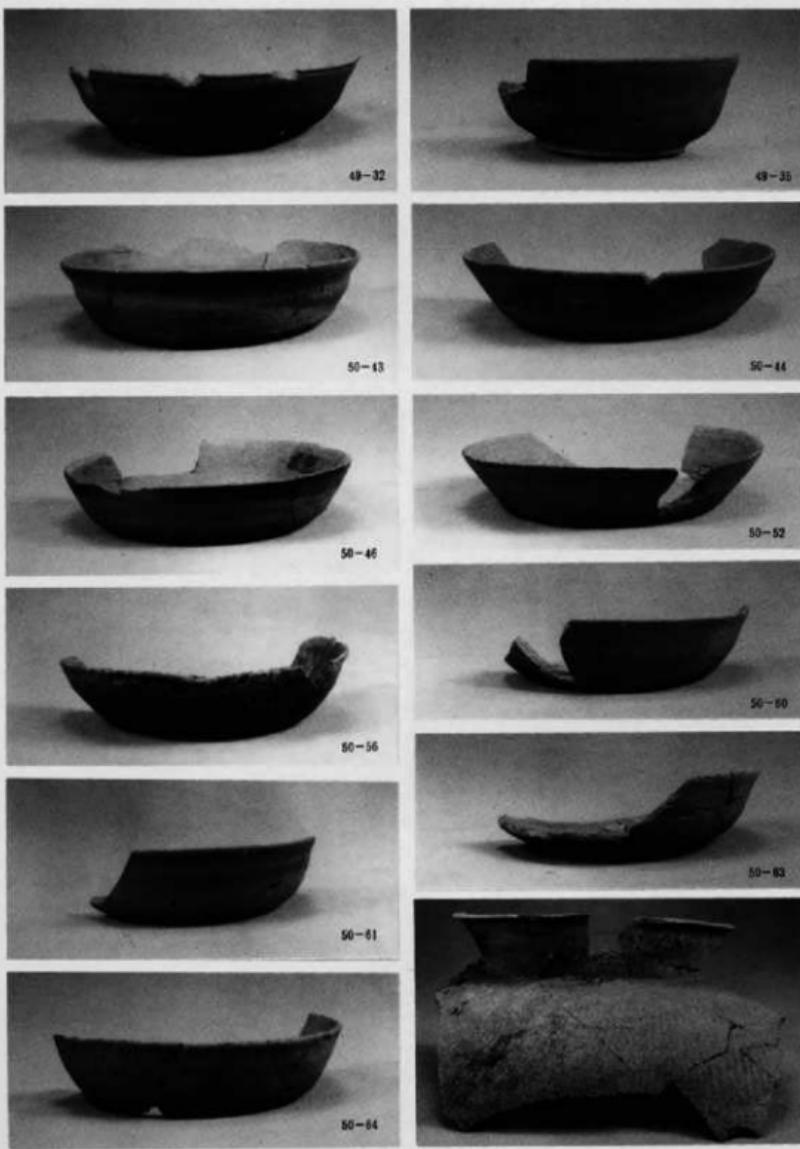
調査後（上方より）



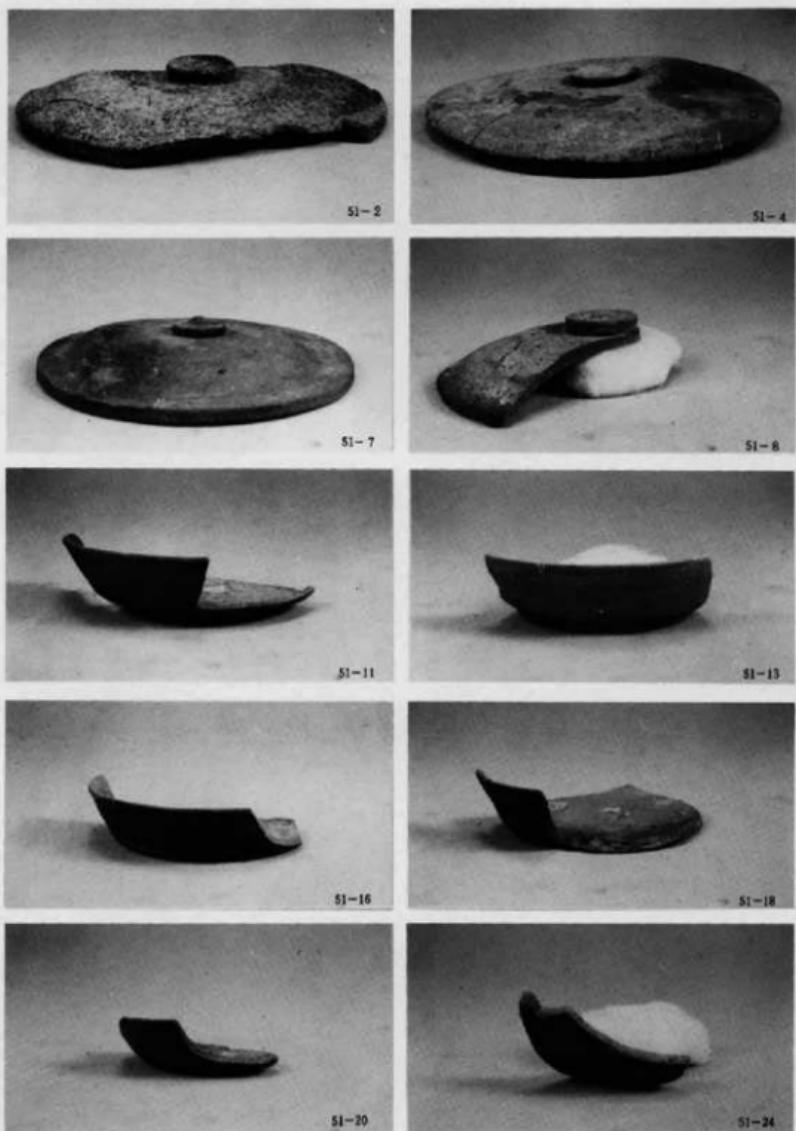
矢田野向山 1 号窯跡 II 次窯 排水溝出土遺物



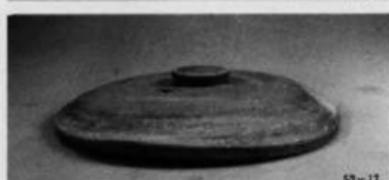
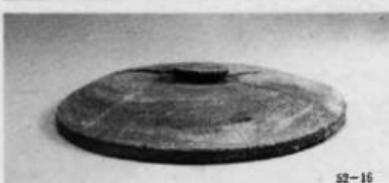
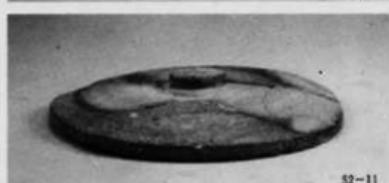
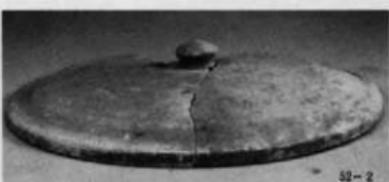
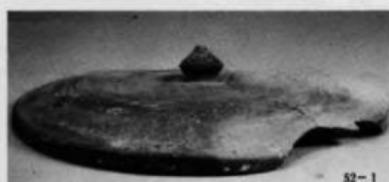
矢田野向山 1 号窯跡土器集積地出土遺物



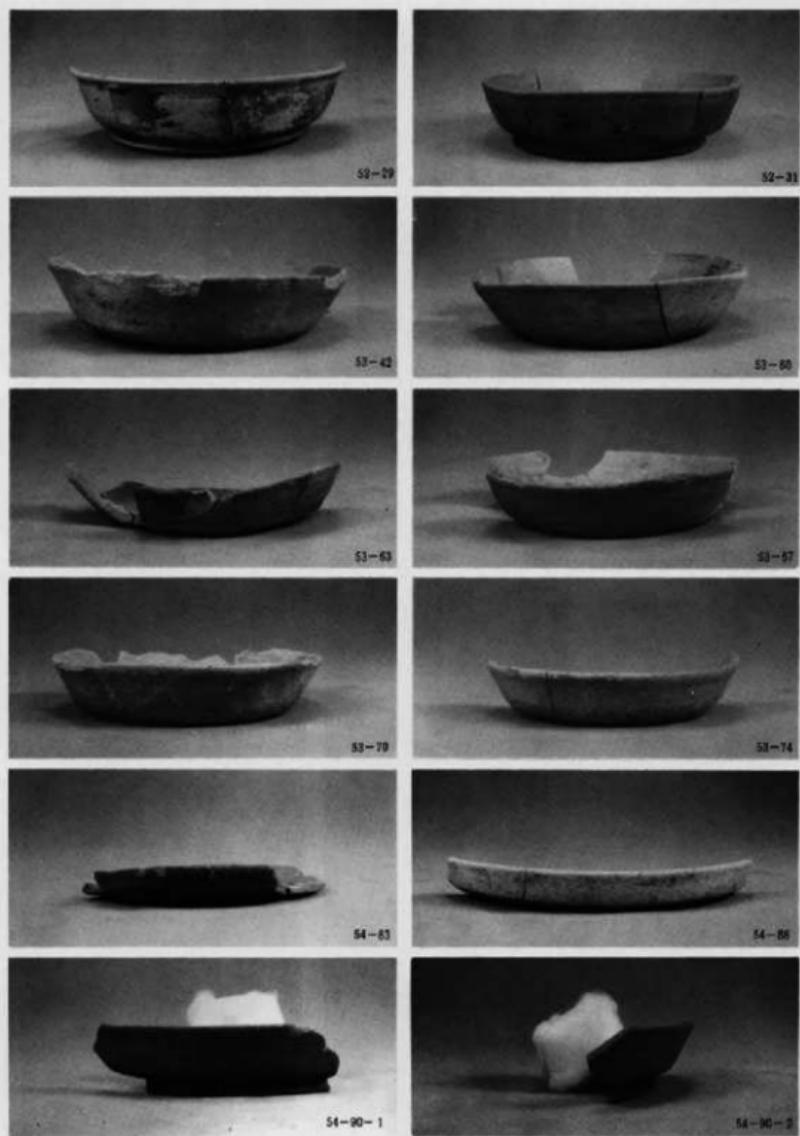
矢田野向山1号窯跡 土器集積地出土土器



矢田野向山 1 号窯跡 II 次窯床面出土遺物



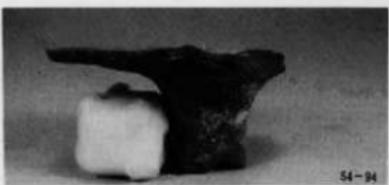
矢田野向山1号窯跡 Ⅲ次窯床面出土遺物



矢田野向山 1号窯 Ⅲ次窯床面出土遺物



54-91



54-94



54-95



54-96



54-98



55-100



55-102-1



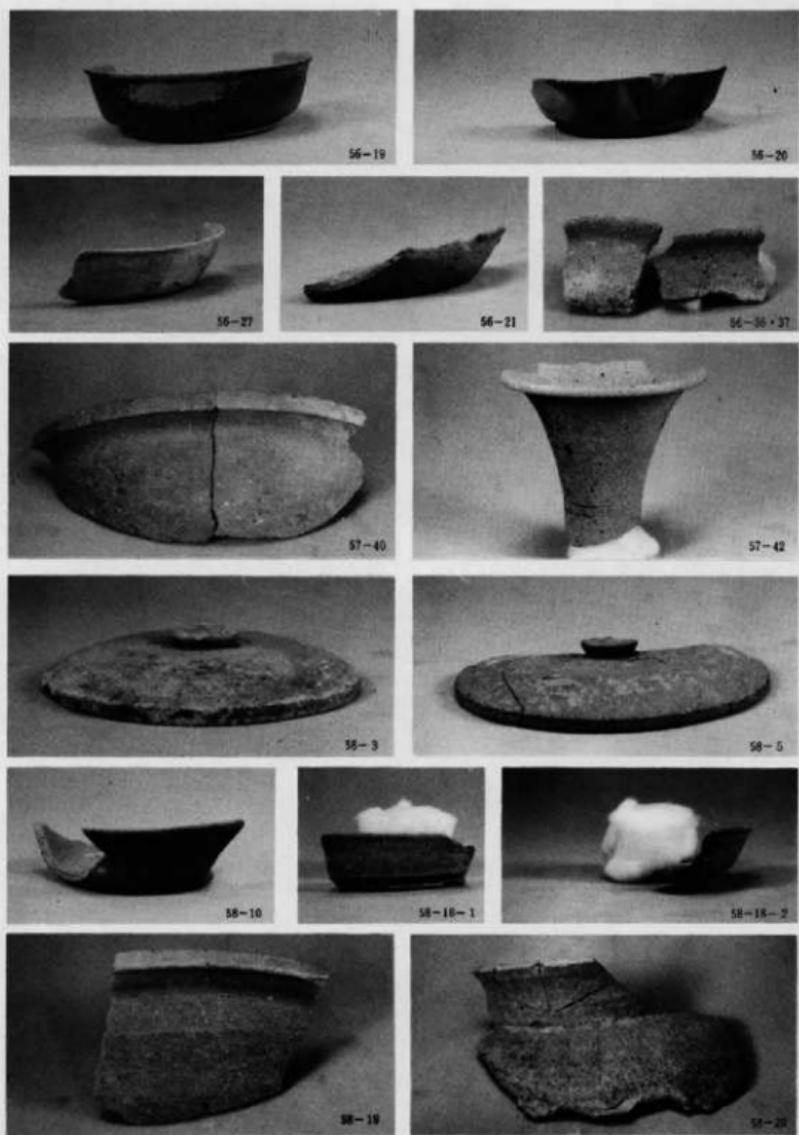
55-102-2



①



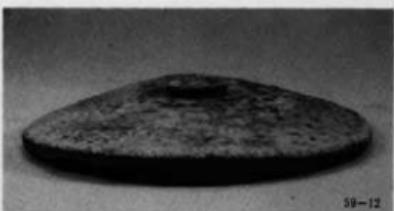
矢田野向山1号窯跡 Ⅲ次室床面出土遺物



矢田野向山1号窯跡Ⅲ 次窯覆土・舟底状ピット出土遺物



59-7



59-12



59-21



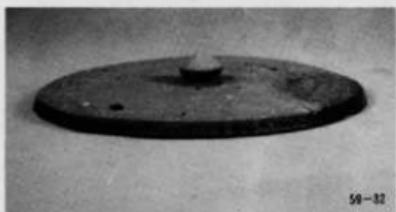
59-23



59-27



59-31



59-32



59-34

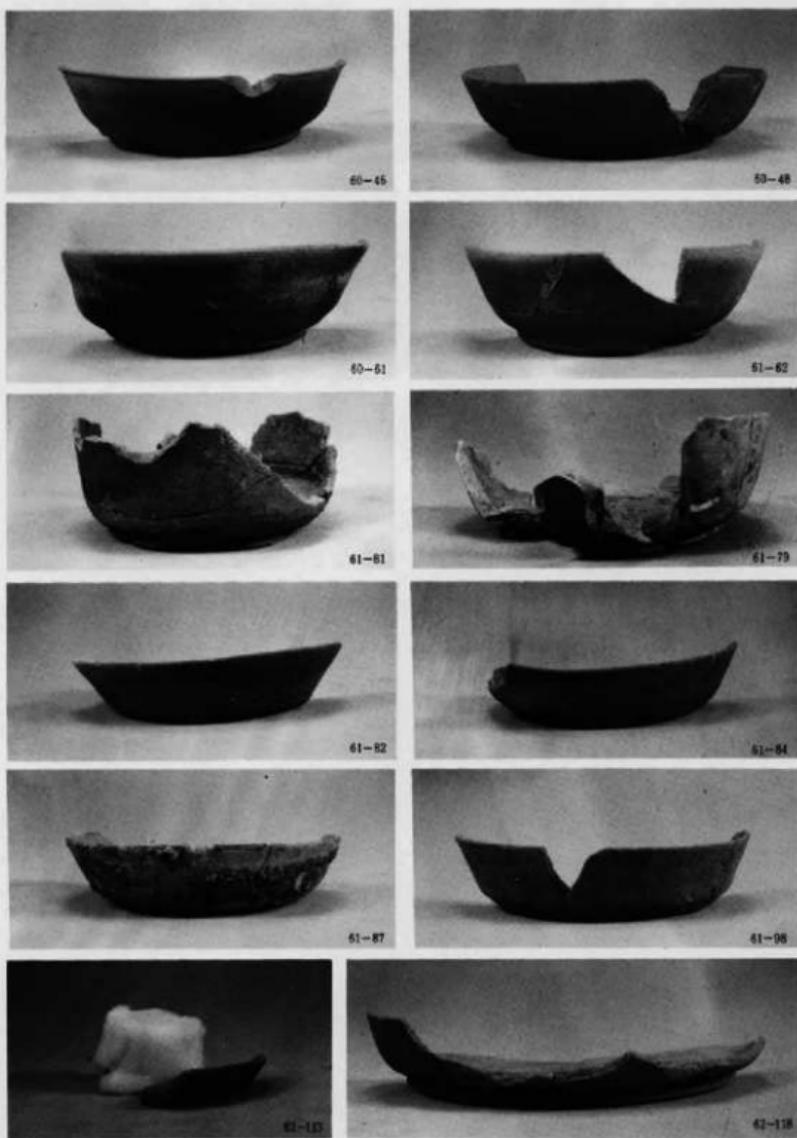


60-42

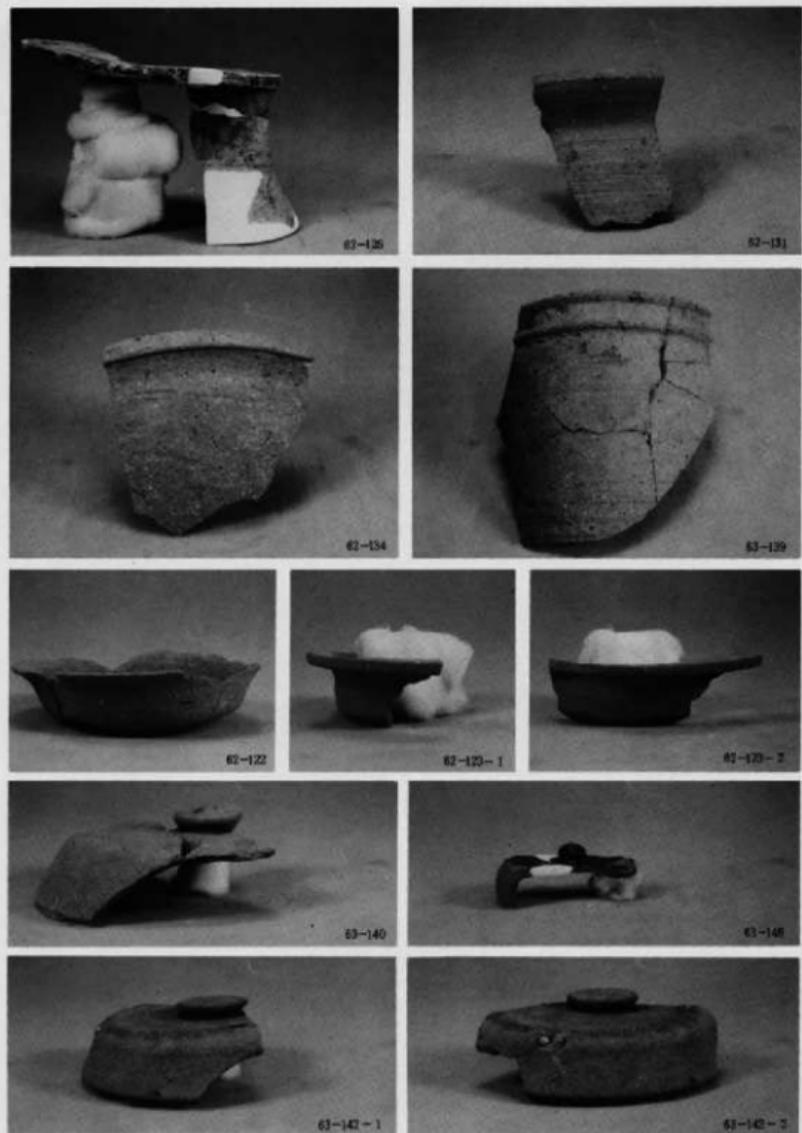


60-44

矢田野向山1号窯跡灰原出土遺物



矢田野向山1号古墓跡出土遺物



矢田野向山1号窯跡灰原出土遺物



63-147



63-149



63-151



64-153



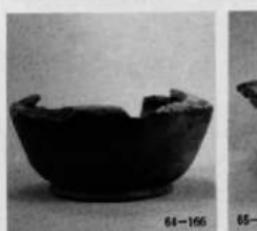
64-154



64-155



64-161



64-166

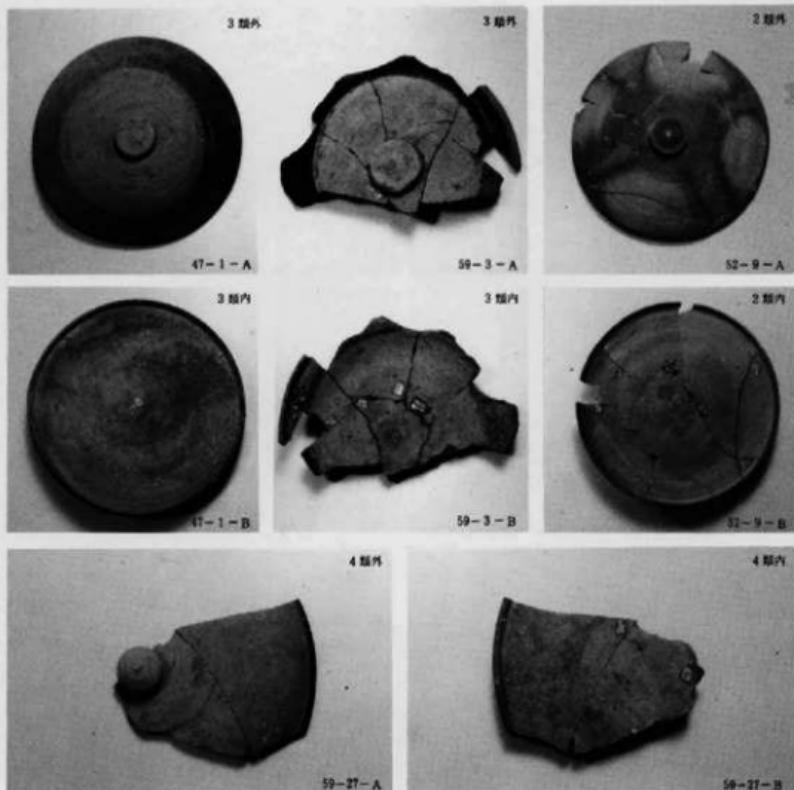


65-171



66-183

矢田野向山1号窯跡灰原出土遺物



須恵器蓋環重ね焼痕



須恵器無台环ヘラ記号

矢田野向山1号窯跡出土須恵器重ね焼痕・ヘラ記号

二ッ梨東山古窯跡・矢田野向山古窯跡

二ッ梨東山古窯跡・矢田野向山古窯跡発掘調査報告書

発行日 平成2年3月31日

編集 小松市教育委員会  
発行者 石川県小松市小馬出町91番地

印刷者 株式会社 情報の城 東



